

---

# 東方流魂記

赤い人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方流魂記

### 【Nコード】

N17290

### 【作者名】

赤い人

### 【あらすじ】

Fate世界でイリヤの兄に転生していた男が東方の世界に転生して、なんの呪いか毎回男の娘な容姿で世界を巡る。

作者の気のままに書かれているので、まっとうな構成ではないので注意。

：PV100万、ユニーク10万、評価2200ptありがとうございます！  
ごぞいます！

## 第一章 洩矢の神 (前書き)

機能を扱いきれてないので、スルーや反応が悪いなどがあります。その時は生ぬるい目で見て下さい。できる限り反応は返します。<< ほぼ把握したので、たぶん大丈夫です。

## 第一章 洩矢の神

黒き杯。

あまりに広い洞窟の虚空に、それは禍々しく浮かんでいる。

天の杯。

それは黒き杯の名で、聖杯の名すらも冠する万能の器である。

僕はそれを眺め、歩きだす。

天のドレスの裾をつかみ、不安定な足場に躓かぬように気を付ける。

杯の元までの短い距離で、今までを走馬灯のように振り返る。

聖杯戦争。

僕が今、幕を閉ざそうとしている儀式の名である。

それは七人の魔術師<sup>マスター</sup>が七騎の英霊<sup>サーヴァント</sup>を召喚し、殺し合いの果てに聖杯を得る魔術儀式である。

実際は、七騎の英霊の魂　　霊長の守護者とも言える高純度のそれを、聖杯に無色の魔力として蓄える儀式だ。

アインスフィール・フォン・アインツベルン。

今回の聖杯の名前であり 僕の名前である。

僕の体は人間ではない、フラスコの小人とも呼ばれるホムンクルスである。

もつとも、人間とその間に生まれたハーフとも言える存在だが、聖杯としての機能に衰えは無い。

ただ、その魂は生まれたときからあり得ない記憶を持っていた。

厳密には全く違うが、分かりやすく言えば転生という物を体験していた。

しかも、その記憶にこの聖杯戦争の事がゲームとして存在しているのだから驚きだ。

最も、アインスフィールという存在はいなかったので、並行世界の出来事を知っているだけであったが。

だがそれでも、その知識は僕の道を照らし、四苦八苦しながらも目的通りの道を選べた。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

僕の命よりも大切な妹の名前である。

この世界の僕の命は、彼女を守るためにあるとしか言いようが無い、僕自信がそれを選んでいく。

スフィールの名が示すように、イリヤも聖杯である。

最も、僕が聖杯になると志願したことで予備という扱いであったが。

代わりの役目が僕の守護、聖杯戦争に参加するマスターとしての役割を当てられたが。

聖杯の役割は確実な死であり、マスターならば危険だが生き残ることもできる、しかもイリヤを守っているのはかの大英雄ヘラクレスであった。

唯の魔力の器である小聖杯を起動させるだけならば死にはしないが、いずれ次の聖杯戦争が起こる。

故に天のドレスを着て、大聖杯を閉じる必要が出てくる。

大聖杯の完成はアインツベルンの悲願なのだが、僕にとってはイリヤの方が大事である。

もっとも、そのアインツベルンは消滅して居るんだが。

ここも転生した事で生まれた利益だ。

何も知らなければ、道具として家に良いように教育されていただろうが、知っていたがゆえにそれを流す事が出来た。

連中も道具に反逆されるとは思っていなかったのだろう、イリヤ達を先に空港に送った時に容易く滅ぼされてくれた。

魔術師の罠は僕が内から壊し、それに気付いた時には遅く、ヘラ

クレスによる圧倒的な殲滅が魔術師の名家を途絶えさせた。

ヘラクレスは僕がイリヤの為に協力を要請したら、簡単に頷いてくれた。

「来ないな……」

さつきから長々回想しているのに、待ち人来たらず。

最後の目的、第三魔法でイリヤを真つ当に生きさせようが出来ない。

イリヤ本人が来ないと、器を与えられないからね。

仕方ないので、僕的能力について考える。

今の僕、アインの魂が保持する能力は『魂を複写する程度の能力』である。

これは魂同士の接触でその情報を読み取り複写して、自分の力として還元する能力である。

一般人として生まれていれば意味のなかった能力であるが、アインとしては最高の能力であった。

まずは転生もどきが出来た事、ついでに前世の魂の能力も手に入れた。

これが良かった理由は、先に示した通りだ。

次に僕は聖杯であった事、ここでの聖杯は英霊の魂を入れる器である。

故にその力を取り込み、魂の力が足りなくて満足に使えなかった前世の能力も使用できたし、英霊の力も扱える。

前世の能力は『時間を操る程度の能力』僕が東方的に能力を紹介した理由の一つである。

アインと前世、二つ分の魂の力を持ったことで能力を自覚できたのは幸いだっただ。

もつとも、アインにとって最高の能力にも欠点がある。

聖杯として第三魔法に挑戦する以上、中身に触れるわけだが・・・  
・・・その中身がやばいのだ。

第三回聖杯戦争で家のバカ共が『この世の全ての悪』ことアンリマユを呼んでしまったがゆえに、聖杯が汚染されている。

つまりは僕の魂も汚染されかねないということだ。

一応、能力を自覚しているから取り込む魂を選べるけど、確実に言えないのが怖い。

次に、英霊の力の取り込みは、元からのままの体と魂に差が出来てしまい体にえらい負担をかけている。

「じぶっ・・・」



という訳で早く来てくれみんな。

吐血した物を機能停止寸前のセラとリズが拭いてくれるのを横目に、大空洞の入り口を眺めていると……

「おにいちゃん！」

「アイン！」

「「アインスフィール！」」

おおう、ぎりぎり間に合ってくれましたよ。

「みんな来てくれたんだね」

「お兄ちゃん、なんで天のドレスなんか着てるの！？ もう全部  
終ったんでしょ！？」

あーあ、泣かせちゃったか。

覚悟はしていたけど、一番きついな。

「第三魔法を使うためだよ」

「第三魔法ですって！？ まさか聖杯は……」

さすが凜、聖杯の本来の目的をすぐに理解したみたいだね。

「そんなものの為にイリヤを置いていくのかよ！」

「ああ、そつだよ。僕が僕のエゴの為にイリヤを置いて行くんだ」

問いに対する僕の答えに、士郎は顔を怒りに染める。

「そついうこと……イリヤを生かすためね」

「どういふことだよ、遠坂！」

「ああ、気付いちゃったか。まあいいや、遅かれ早かれ知ることになるし」

ついでに士郎に楔を打ち込んでおくか。

「僕たちはホムンクルス、それも聖杯という機能を与えられたものだ」

「……だから、長くは生きられない。でも、お兄ちゃんがない生なんて！」

ああ、ほんと兄冥利に尽きるよ。

「衛宮 士郎。僕の人生をかけた願いだ……イリヤを頼む」

「そんなの……!？」

僕が吐血したのに絶句する士郎。

そろそろやばいので、最後の目的を果たそう。

ちょうどよく、士郎も駆け寄ってくれた。

触れられる前に、能力を発動する……………士郎が黄金になっ  
ちやうからね。

「ルールブレイカー破戒すべき全ての符」

時を止め、ルールブレイカーを取り出し、メディアの経験を以つて士郎からセイバーとの契約を奪う。

セイバーは僕の覚悟を理解してくれていたから空気になっていたのだ、けっして決して言葉を入れるタイミングが分からなかった訳ではない。

メタは良しとして、士郎から離れて能力を解除する。

『え!?!』

瞬間移動した僕に驚く皆。

「セイバー、聖杯戦争はこれで終わりだ。だから、ついてきても  
らうよ」

「分かりました……………マスター」

瞬間移動した僕よりも、マスター権が移動していた事に驚いていたセイバーが、混乱を抑えて僕の言葉に従う。

皆には悪いが、セイバーには死んでもらう。

強すぎる力は災いを呼ぶ。

第三魔法は凜が誤魔化してくれるだろうが、サーヴァントなんてものは過剰な力故によけいなものを呼ぶ。

セイバー目的に、イリヤが巻き込まれるかもしれないのは恐ろしい。

セイバーという戦力をなくすリスクと比べると、比重はそっちによつてしまふ。

そも、聖杯のバックアップのないサーヴァントが戦力になりそうにもないのもある。

「令呪にて命ず、セイバーよ自害せよ」

「土郎、あなたがマスターで良かった。凜、土郎の手綱をしつかり握っておいてください。イリヤスフィール、辛いかもしれませんが生きなさい。そして さようなら」

「『セイバー!?!』」

残りの令呪全てを使用した魔力で、回復力を抑えてセイバーが自害した。

次の瞬間、俺の中にセイバーが入ってきて負荷が増す。

遺言も言えないため、僕の死と先の願いを以って土郎への楔とする。

第三魔法を使用し、イリヤとリズ、セラに体を与え、最後に大聖杯を閉じる。

「おにいーーーーーちゃーーーーーん!!!!!!」

イリヤの叫びをと共に、僕の意識は途絶えた。

「懐かしい夢を見たなあ」

前の僕の最後、今でも同じ事をやれと言われたらやれるほど愛した妹との別れ。

もう少し感傷に浸りたいところだけど、仕事があるのでそう言う訳にもいかない。

アインスフィール・フォン・アインツベルン改め、名字なしの詩音（16）は農民ライフを楽しんでいます。

16年も農民やってると、さすがに現代人も慣れます。

しかも、現代知識で簡単な農業革命をやっているのです、他の村より楽に暮らしています。

村では奇抜ながらも凄い発想をする奴と呼ばれています。

ついでに今世では『五行を操る程度の能力』を得ました。

能力を使ってチート農業です。

あくまでも自然なレベルですけど。

ちなみに容姿は服装以外はまんま東方の東風谷 早苗です、アインの時はイリヤと同じでした。

「今日も一杯働くぞー！」

能力で造った鉄の鍬を持って、畑に乗り出した。

畑を耕したりなんだりしていると、見知らぬ人間が村長の家に入るのが見えた。

あの恰好からして、洩矢の使いかな。

洩矢 洩矢神、ここら一帯の神を統括する神だ。

大方、今年の御祭りの事だろう、今年も成功すればいいんだけど。

現代と違って神のいる世界だから、僕の小細工も神の一手で簡単に覆ってしまう。

逆に神の力があれば、さらなる豊穡が約束されるとも言える。

と、村長の家から誰かこっちに来てるな。

「おーい、詩音！ 作業を止めてすぐに来い！」

「いま、行きます！」

鍬を消し、急いで駆ける。

何故僕が呼ばれたのかは分からないけど、行けば分かるだろう。

「詩音です、失礼します」

「入れ」

中には村長と、洩矢の使いが座っていた。

神の使いが一介の農民を呼びつけるとは何事なのだろうか？

「詩音、単刀直入に言おう……洩矢神様に謁見せよ」

「……は？」

本当にどうということだろう、一介の農民が神に謁見しろとは。

「まあ、この反応も仕方のない事じゃな。ただな、すまんが私らも事情が分からんのだ」

「ええ、洩矢神様が我々に去年の祭りの祭りの主導となった村の、女のような男を連れて謁見させよと神託を下されたのです。なにぶん急なことで我々も慌てています」

「はあ……」

まあ、洩矢神の機嫌を損ねるわけにも行けないし、さっさと行くか 女のような男は流したくないけど流す。

「事情は良く解らないですけど、とりあえず僕が行けばいいんですね」

「ええ、そう言ってくれると助かります。すぐに出てもらいたいのですが」

特に用事は無いし、畑を村長に頼んで行けばいいか。

「分かりました。村長、畑をお願いします」

「あ、ああ、任せておけ」

「では、行きましょう」

心配するような村人の視線を背に受け、洩矢の使いの先導の元に僕は洩矢神社へ向かった。

僕は今、洩矢神社の境内に居ます。

洩矢の使いの方々の視線が痛いです。

いや、本堂に入る事になるとは驚きですよ。

「入れ」

あれ……おかしいな、本堂の中からは神の声とは思えな



い、少女特有の透き通った声が聞こえたんだが。

「……………入れと言っている」

「は、はい！」

洩矢の人たちが、ジェスチャーでさっさと入れと言っているのに入る。

中には大きな目玉つばいのが付いた帽子をかぶった、少女というより幼女と言った方がいいような女の子がいた。

「……………え？」

「どうした、さっさと座れ」

その姿に唖然とするも、次の命令に従いすぐに座ってひれ伏す。

確かに姿は女の子だが、感じる神性は去年の祭りの時に感じた洩矢神のものだったからだ。

まあ、姿を見たときには理解して居ただけだ。

その姿は、最初の生の時に見た事のあるゲームのキャラだった。

洩矢 諏訪子      東方と呼ばれるゲーム、その中で洩矢神であった少女だ。

正直、前世が前世なのですぐに納得できた。

いやはや、まさか東方の世界だったとは思わなかった。

妖怪とかいる時点でその可能性を考えておくべきだったね。

洩矢神に動きを感じたので、すぐに考えを切る。

「いきなりの呼び出しで驚いているだろうが、まずは表を上げ、我が問いに答えよ……貴様は何者だ？」

「……………どういうことでしょうか？」

洩矢神の眼を見て問い返す、質問の意図が分からない。

「まさか、気が付いていないのか？ ならば質問を変えよう。貴様が纏う神性は何だ」

神性？

どういうこと     ああ、あれか。

前世で取り込んだ英霊。その中には神性を持つものがいたから、それが出ているのか。

自身の能力を数値化すると、大体B+ぐらいかな。

神性を持ってない魂を加えても、それだけの強さを持っているはず。

「あーこれは、なんと云ったらいいんでしょうか」

「言葉にできないか……ならばさらに質問を変えよう。  
我に刃向かう気はあるのか」

洩矢神による威圧が増す。

正直に言うと、村の皆には悪いけど僕は

「……………僕に危害を加えるならば、一戦も辞さないでしょ」

「……………ほう？」

さらに威圧が増して、次の瞬間には僕と洩矢神……………いや、  
諏訪子は武器を互いの首に突き付けていた。

諏訪子は鉄の輪を、僕はゲイボルクを。

第三魔法の応用で、魂の力を体に強く反映させている。

クーフリーンの力を表出した今の僕は、赤い瞳に青い髪を持って  
いるだろう。

「……………ぶ、く、あっはっはっは!!」

「……………試しましたね？」

突如大笑いした諏訪子に僕は魔槍を消す。

「いや、まさか神に逆らうとは思わなくてね。しかも、勝てる可能性も五分とか思わなかったよ」

「基本自分本位なんですよ、僕は。勝率としてはもう少し僕が高いかもしれませんね、切り札は全然切つてませんから」

ギルガメッシュの力なら、力のある神とは言えど小さな島国の多くの一柱である諏訪子に負ける気はしない。

そもそも神性縛りである天の鎖や、あらゆる物の原点が眠る王の財宝、最高の切り札である乖離剣エアがある。

ほかの英霊の力でも、互角ぐらいには行けるだろう。

「一対一ならそうかもね。でも忘れてないかい、私は崇り神を統括しているんだよ？」

「それでもです。僕は対軍も可能ですから、急場で集められる崇り神なら倒せます」

もつとも、土地に対する災いとかそういうのには弱いけどね。

「はつきり言うね。うん、気に言った。今日は賓客待遇で持て成してあげるよ」

「それは、ありがとうございます」

そこで、諏訪子はふと思ったように言った。

「もしかして、本当の姿見えてる？」

「何をいまさら。そうでなければ首に武器は向けませんよ」

なんだ？ いきなり、にやにやし出したぞ。

「つまりはいたいけな女の子に武器を向けたんだ」

「あー、それについては謝る」

さすがに神とはいえ、女の子に武器を向けたのは悪かった。

「あはは、不思議だねあんた。脅されたのにそんなこと気にするなんて」

「女の子は、基本的に護られるべき対象なんですー」

時には必要ないほど強い子がいるけど、それでも護られるべき対象である。

「うん、いいところがけだね……えつと、名前は？」

「ああ、詩音だよ」

そういえば、名前を言ってなかったな。

諏訪子の名前を言わんように気をつけないと。

「私は諏訪子だよ。洩矢の諏訪子とは私の事だよ！」

「わー、面白い神様だ。そこに痺れる憧れる？」

ノリが悪かったせいでじと目で見られました。

その後、諏訪子との対談は無事終了。

二人きりの時、諏訪子を名前で呼ぶ事を許されました。

それで終われば良い友達だったんですけど、数年後には……

「諏訪子ー、起きろメシだよー」

「うーん、後もう一日」

なぜか一緒に暮しています。

というか、名目は神の巫女です。

男なのに巫女とはこれいかに？

「今日は山菜のてんぷらなんだけどなー」

「何してるの詩音。早く食べないと冷めちゃうよ」

まったく、いつも通りの切り替えの速さだ。

夫婦の様で夫婦じゃない、兄妹の様で兄妹じゃない、親友の様で親友じゃない。

なんともあいまいな関係なんだけれど、これはこれで充実した生

活だから良しでしょうか。

「詩音」、は「やーくー！」

「はいはい、分かったよ」

数年前と変わらない空を横目に、僕ははしゃぐ諏訪子の後ろについて行った。

第一章 洩矢の神 (後書き)

お目汚しすいません。今後も生ぬるい目で見えて頂けると幸いです。



## 第二章 戦争と死と生 (前書き)

ストックはなしで行こう。

出せるときに出さないと、ズルズルいきそうだ。

## 第二章 戦争と死と生

「起きろー！ー！」

「うふっ！？」

晴れやかな朝、僕は幼女に乘られて潰された蛙のような声を上げるのだった。

「だから早苗、いつも飛び乗るなど言ってるだろうっ？」

「だって、そうじゃないと起きないじゃん」

「あはは、最初の頃は早起きだったんだけどね」

僕、諏訪子、早苗で食卓を囲んで談笑する。

いつの間にか増えてるのは気にしないでくれ、単なる娘だから。

「いつの間にか逆転しちゃったんだよねえ」

「それは諏訪子が僕の仕事をとるからでしょ」

あれから数十年の時が経って、今は僕も周りから神様扱いになります。

早苗は数年前に諏訪子と……いたした結果です。

いや嬉しいんだけどね、僕と瓜二つなんだよ。

ただ、悲しい事に諏訪子は神ゆえに、僕は能力の影響で長生きする。けれども、早苗は神との混血であつても人間で、能力も長生きできるようなものではない。

いずれは必ず別れが来るのだ、僕は前世で妹を置いて行つたけど、おいて行かれる側としては堪つたもんじゃないと理解できた。

「詩音」

優しく語りかけるような諏訪子の声に、僕は思考の海から浮上する。

諏訪子が首を横に振る……まいったな、お見通しか。

「御父さんどうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。少しぼおつとしてただけ」

その返事に、からからと早苗が笑う。

早苗の笑顔に癒されながら、僕と諏訪子は微笑みあつた。

この幸せがいつか失われるとしても、それまではこの笑顔を守り続けよう……そう考えた二年後の事であつた。

「御父さん、邪魔です。そこ掃除するのでどいてください」

「ほいほい」

まさに、休日の御父さんの様な扱いを受ける僕。

というか、諏訪子と僕は家事を全て取られました。

早苗曰く

「御母さんと御父さんは神様なんだから、そういうのは私がやるの！」

とのことです。

ただ、最近神としての仕事が増えているので助かっています。

八坂 加奈子。

建御名方神とも呼ばれる風神である。

最近、彼女の勢力がこの地に近づき始めている。

僕と諏訪子の予想では、そろそろ戦端が開かれかねない。

「で、状況はどんな感じかな諏訪子？」

「うん、民の避難誘導は進んでるよ。ただ、あいつの勢力の発展

度合いからするとギリギリかな」

神になって思うが、人よりも因果な職業だよ。

僕のような例外を除いて、神はありとあらゆる意味で信仰に縛られる。

持つ力の強弱のような即物的なものから、存在としてのあり方という根幹まで縛られてしまうのだ。

「各地の土着神の召集の方は？」

「そっちは万全。すぐにでも呼び出せるよ」

洩矢神たる諏訪子の手足とも呼べる土着信仰の神々、それと諏訪子と僕の二人が今回の戦力だ。

ただ、一つ気がかりな事が僕にはあった。

最初の生に見た事のある『東方』という作品では、諏訪子は八坂に負けたとあったはずなのだ。

『東方』の詳細を僕は知らなかったので、不安ばかりが募る。

「ねえ、やっぱり僕が……」

「駄目、これは私がやらなきゃいけない事なんだよ。私の国を侵す敵は、何者も私の手で倒さなければならぬんだ。心配してくれるのは嬉しいんだけどね」

諏訪子が後ろで見られていられる程度の敵ならば、僕が片づけることもできるんだけど、今回は総力戦だから頭同士がぶつからなければならぬ。

これは面子といったものから、信仰にも関わってくる。

「……分かったよ、僕が他の連中を抑えきって見せる。だから勝つてよ」

「任せておきなよ！」

どんと薄い胸を叩き、元気いっぱいと言つ諏訪子。

その姿は僕に安心をもたらしてくれた。

数日後。

遂に八坂の軍勢が、諏訪子の領域へと入ってきた。

民の避難は完了し、諏訪子の勢力圏の神々は召集済み。

諏訪子は鉄の輪を用意し、僕はエミヤの戦闘経験から戦術理論を引き出し訓練した。

いつでも総力戦に臨む事が出来る体制であった僕らは、軍勢を向け加奈子の軍と対峙した。

「洩矢神よ、我が軍門に降るがいい！」

「断る！ 建御名方神よ、即刻我が領域から失せよ！」

諏訪子と八坂が宣戦布告を行う。

「良からう！ なれば己等の力で我等を抑えて見せよ！」

「行くぞ、洩矢の神々よ！」

二柱の言葉とともに、互いの軍勢が動き出した。

僕もギルガメッシュの力を前面に出し、黄金の髪と深紅の瞳を得る。

「ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝！」

王の財宝の全力展開により、宝具の雨が敵の軍勢へ降り注ぐ。

受けるのは弱めとはいえ神、運よくランクの低い宝具だけ喰らって抜けた神もでる。

「キシヤー！...！」

「う、うわあああ！？」

だが宝具でさらに弱った神など、こちらの神々のいい餌になった。

「エンキドゥ  
天の鎖よ！」

王の財宝によるキルゾーンを避け、側面から回り込んできた連中には天の鎖が飛び捕獲する。

天の鎖から逃れるには、ヘラクレスのように自身の神の才以上の力が必要となる。

見渡せば鎖を軋ませることもできぬ連中ばかり、それをやはりこちらの神々が喰らう。

だが、戦況は芳しくない……諏訪子が危ないのである。

だけど、僕はここを離れるわけにはいかない。

行けば戦線が崩壊する、諏訪子が死にそうならばそれは捨てるけど、諏訪子が奮闘している以上はここを守るしかない。

意識を少しだけ逸らし、諏訪子たちの戦いを見る。

大きな注連縄を背負った八坂が、藤の枝で諏訪子を指し示すと、御柱が諏訪子へと飛ぶ。

諏訪子はそれを鉄の輪で受け流すが、鉄の輪が砕け散ってしまう。

諏訪子が新しい鉄の輪を取り出すが、それはみるみる内に赤錆びていく。

さすがは軍神とでも言うべきか、諏訪子対策は完璧らしい。

諏訪子はミシヤクジを呼び出し攻撃に移ろうとするが、やはり武器破壊を喰らうのは厳しいものがある。



僕の方も、跡詰めの神々が諏訪子の方にとられるので、いくらかこちらにも被害が出始めた。

「せいやー!!」

「つく!!」

僕の元まで来た神を、財宝から引き抜いた剣で切り捨てる。

今ので一瞬弾幕が薄れて、何柱かがまた抜けてくる。

仕方が無いので、ギルガメッシュからアルトリアに変更。

弾幕が弱くなってしまいが、さっさとこいつらを切り捨てて立て直す。

そう思った瞬間、諏訪子に鉄の輪が砕かれ、さらに御柱が迫った  
諏訪子が見えた。

「約束エクスされた

真名解放の邪魔にならないように魔力放出でザコを吹き飛ばし

勝利カリバーの剣!!」

聖剣の輝きを解き放つ!

「なあ!?!」

「え!?!」

聖剣の一撃は容易く御柱を消し飛ばし、諏訪子と八坂を隔てる壁となる。

諏訪子の無事を見届けた僕は、低級神どもに貫かれていた。

「し、詩音!?!」

「……………諏訪子、じゅめん」

また、大事な子を残して、僕は逝った。

「あー、これがいわゆる三途の川か」

どうやら、今回はまだ同じ世界にいる事が出来るみたいだ。

世界内で魂と呼ばれるものと、僕の力の元である魂は別物である。

僕の魂はあらゆる世界で流動する根源的なもので、世界内の魂はそれを包み世界に認識させるものだ。

この辺りは、僕が認識していないで魂が勝手に知っていたもので、多分、我を持ったままその領域通るから知っているんだろう。

「おや、御客さんかい」

思考を止めて声に振り替えると、小舟に腰掛けた女がいた。

「ほら、料金を御出し」

「ああ、これが」

いつの間にか手にあつた六文銭を、船頭に渡す。

「はいよ、一名様ご案内」

長かった、本当に長かった。

まだまだ、僕は閻魔さまがさつさと判決出して裁判が終わるもの  
だと思つていたんだけど、十王による十回の審議、元人とはいえ神  
がここにきている事での騒ぎ、その他もろもろでとんでもなく時間  
がかかった。

で、結果としては、神としての責務は全うしていたため、人とし  
ての罪と帳消しで通常の輪廻に回すとのこと。

僕の持つ神性については、原因が不明の為スルー。

ただ、数百年はその調査に付き合ってもらつたとのこと。

その期間は、善行として以後の輪廻転生時に換算するとのこと。

このあいだ僕は、業務の手伝いをして時間を潰していた。

数百年もやっているのと、職務にはついてないのにその職の連中に頼られたりするのだから困ったものだ。

実際、勧誘も受けたけれどそれらは断り、転生への時間を数えて行った。

そして、転生の時。

「詩音さん、お仕事一緒にやりましょう?」

「いやいや、こっちの仕事をだな……」

などなど、多くの方々が引きとめてくれるが、僕は丁重に断って行った。

皆、僕の意味が固いのは分かっていたので簡単に引き下がり、最後には別れの言葉を言ってくれた。

「では、皆さんさようなら!」

さまざまな声を背に、僕は転生を果たした。

「十夜様! お願いします!」

「恨むなよ、これが妖怪と人のあるべき姿なのだから」

部下の術者たちが引き連れてきた妖怪達目がけ、札を飛ばす。

水気の妖怪は岩塊に包まれ、火気の妖怪は大水に襲われる。

『五行を操る程度の能力』

前回の生と同じ能力である。

どうやらこの世界内での転生では、新しい能力はつかないようだ。

五行相剋。水気は土気に吸われ、火気は水気に消される。

自らを構成する気を吸われて、妖怪たちは消滅した。

「さすが、十夜様。中級妖怪をいともたやすく」

「いや、あれは下級だよ。お前たちの精進が足りないだけだ」

というか、能力持ちじゃない連中に負けるなよ。

ぼろぼろの術者たちを見ながら、家の今後を憂う。

あの後、討伐依頼者に報告をし、報酬をもらって我が家に帰ってきた。

十夜じゅうや 詩音しおん

これが今の僕の名前、詩音が同じなのは誰かが気を利かせたらしい。

調査で、転生しても記憶を引き継ぐだろうと判明していたからだろう。

現在は16歳、天才退魔師として名を馳せている。

容姿は黒髪黒目の八雲 紫と言ったところ。女顔はいつまでも変わらない、泣いた。

生まれ変わってから、諏訪子のその後を探って無事であると理解したが、諏訪子にはまだ会っていない。

死んでから気が付いたのだけど、ヘラクレスならゴットハンドで蘇生出来たんだよね。

宝具の呼び出しはともかく、真名解放はその魂を前面に押し出さないといけない。

だから、ヘラクレスにすれば良かったんだけどね。

エクスカリバーじゃなくて、弓のニンライプスで御柱も砕けただろうし。

ザコを無視することもできただろうし。

ギルガメッシュの慢心うっかりも引き継いでいたみたいだ・・・  
・・・次からは自重しよう。

で、会ってない訳だけど……かなり気まずいんだよねバカみたいな失敗してるし。

いつかは会いに行かなくちゃいけないとは分かっているんだけど、どうにも一歩が踏み出せないのだ。

「本当にどうしたのか……」

「どうかしたのですか？」

ふと、隣を見ると顧客の娘がいた。

藤原 妹紅。

僕の顧客である藤原 不平等の娘さんで、現在八歳。『東方』のキャラクターでもある。

まだ髪と瞳は黒い、『東方』でアルビノだったのはストレスのせいらしい……ストレスでアルビノになるのかは分からないけどね。

「いや、なんでもないよ。それよりもどうしたの妹紅ちゃん？」

「お父様についてきたんです。また、どこかで妖怪が出てきたみたいで」

偉い貴族というのは黒い感情を向けられやすい、そのため妖怪などが寄ってきやすいから、そう言う話には過敏なのである。

「じゃあ、待たせるわけにはいかないな。妹紅ちゃんはいつもの

ところに居ると良いよ、御茶を用意させておくから」

「あ、ありがとうございます」

迎えに出てきた使用人に、妹紅ちゃんに御茶を用意するように言付けして藤原様のいる所へ向かう。

ふと、どこからか視線を感じた気がして周りを見渡したけど、なにもなかった。

「今回はきつい仕事になるかもね」

なにもない……いや、なにもなくなった空間を見てから、僕は再び歩き出した。

「お久しぶりです藤原様。お元気そうだなによりです」

「おお、詩音殿もお元気そうだなにより。聞きましたぞ、またも手柄をあげられたとか」

大貴族にしてはフランクに答えたのが、藤原 不比等様である。

僕の大手顧客で、どうもよく気に入られているようで、仕事の幹旋もしてくれる。

「いえ、それほどのものでもありませんよ。さすがに新人たちでは話になりませんでした」



「はっはっは！ 詩音殿と比べるのは可哀想でしょう」

たしかに、本気でやれば上級神とも戦えるからね。

しばらくは世間話に花を咲かせていたけど、そろそろ本題を切りだす。

「それで、今回はどのような御用件で？」

「ああ、これといった確証があるわけでないのだが、近頃何者かに見られているような気がしてな」

やっぱりそうか。

「先ほど、僕も何者かに覗き見られました。おそらく人ではないでしょう」

「む、詩音殿がそういうのならば、私の気のせいでは無いようですな」

さて、どうしたものか。

しばらくは、藤原様に付いた方がいいかもしれない。

「藤原様、今回は原因が探れるまで、僕が付いた方がいいかもしれません」

「それは心強い。ぜひ頼みます」

ならば、すぐに準備をしよう。

使用人を呼び、衣類などを用意させて、僕も仕事道具を一式まとめる。

表に僕の分の牛車を用意させて、妹紅ちゃんのところへ向かう。

「お待たせしました藤原様、用意が終わりました」

「うむ、行くのでしょうか。妹紅、しばらく詩音殿を屋敷に招くから、世話をするんだ」

「わかりました、お父様」

基本僕は藤原様に付いているけど離れる時もあるため、勝手にわからない僕に妹紅ちゃんを付けてくれるのだろう。

「では、行くのでしょうか」

正体がわからない人ならざる者、何事もなく終ればいいのだけ  
ど。

## 第二章 戦争と死と生 (後書き)

コロコロ話が変わるので読みづらいかもしれませんが、それも特徴だととらえて頂けると幸いです。

## 設定 (前書き)

いろいろと厨設定。

この話では能力は増えないと思う……………たぶん。

## 設定

### 主人公

名前 詩音<sup>しおん</sup>

容姿 胸がなく、肩にかかる程度の髪の早苗。

服装は早苗のスカート袴にしたもの。

この時点での所持能力 『時間を操る程度の能力』

『魂を複写する程度の能力』

『第五次聖杯戦争における、真アサシ

ン以外の英霊の力』

『第三魔法 魂の物質化』

『五行を操る程度の能力』

名前 アインスフィール・フォン・アインツベルン

容姿 肩にかかる程度の髪のイリヤ。

服装はイリヤのスカートがスラックスになった程度。

死亡時の所持能力

『時間を操る程度の能力』

『魂を複写する程度の能力』

外の英霊の力』

『第五次聖杯戦争における、真アサシン以

『第三魔法 魂の物質化』

名前

十夜じゅうや 詩音しおん

容姿

身長が低くて胸が無い、肩に髪がかかる程度の紫。

服装はその時々で違う。

今回の能力

『時間を操る程度の能力』

『魂を複写する程度の能力』

『第五次聖杯戦争における、真アサシン以外の英

霊の力』

『第三魔法 魂の物質化』

『五行を操る程度の能力』

能力

『魂を複写する程度の能力』

接触した魂から、その魂のあらゆる物を複写する、またはその魂に複写できる。

なお、人格の複写は最初の人格以外は行っていない。

主人公はこれによって疑似的な転生を行っている。

元の魂をメインとして、そのほかの能力をランク落ちで継承できる。

副産物として、魂の操作が得意になる。

『時間を操る程度の能力』

そのまんま咲夜さんの能力。

ただ、能力元の魂を表出させないと、無制限時間停止は出来ない。

せいぜいは一分程度（十分多いが）。

『第五次聖杯戦争における、真アサシン以外の英霊の力』

アルトリア、エミヤ、クーフーリン、メディア、佐々木小次郎、ヘラクレス、メドゥーサ、ギルガメッシュの能力、宝具を使用できる。

なぜかクラススキルの行使も可能。

ただ、能力元の魂を表出させないと、真名の解放はできなく、能力等もランクが落ちる。

エミヤの固有結界は、人格部分を複写していないので現在は使用できない。

けれども、投影魔術等はしっかりと行使できるため、いずれは自身の力として使えるであると考えられる。

### 『第三魔法 魂の物質化』

魂を精神体だけで存在できるようにする魔法。

これの応用で、魂の力を体に強く反映させる事が出来る。

それを魂を表出するなど表現している。

そのさい、その魂の身体的特徴が現れる場合がある。

### 『五行を操る程度の能力』

木、火、土、金、水の五種の元素を操る能力。

五行相生 木火土金水ループの順で、力を精製、増幅させ

る。



五行相剋

木土水火金ループの順で、力を減少させる。

五行比和

同じ力を重ねると、正負に関わらず増幅する。

五行相侮

五行相剋で力が足りてないために、力を減少さ

せられない。

五行相乘

五行相剋が度を過ぎて、力を減少させすぎる。

## 設定 (後書き)

アインについてはオマケ程度に見て下さい。

### 第三章 境界の夢 (前書き)

今回は独自設定や、独自考察が光っています。  
適当に許容してやってください。

### 第三章 境界の夢

「詩音様、お背中お流しします」

風呂場に妹紅ちゃんが入ってきた……どうしてこうなっ  
た？

「それは、詩音様の御世話をするように言われたからです」

「心読まないですよ」

まあ、良く考えれば子供だしいいか。

言っておくけど、僕は断じて光源氏とは違うから。

諏訪子に手を出しはしたけど、そう言う趣味じゃないからね。

不思議そうに首を傾げる妹紅ちゃんに背を向ける。

「じゃあ、お願いするよ。強めに頼むね」

「は、はい！」

まあ、親戚の兄のように可愛がってたから、慕ってこんな事をし  
てくれているのだらうけど。

「わあ、詩音様って遅いんですね。お父様とは違う」

「僕は鍛えるのも仕事だからね、藤原様は筋肉の付きにくい仕事だから仕方ないよ」

見た目に反して、僕は筋肉質だ。

もつとも、女性っぽさも兼ね揃えているのは何故だと問いたいけど。

まさか、魂にそうなるように仕組まれてないよね？

すごく不吉な事を考えていると、湯が背を流れて行った。

「終わりました！」

「うん、ありがとう」

礼を言って頭をなでる、くすぐったそうに身をよじる妹紅ちゃんは保護欲をそそる。

「ほら、妹紅ちゃんも流してあげるよ」

「い、いいです！ 私は詩音様の御世話の為に来ただけですから」

そんな残念そうに言っても説得力は無いよと思いつつ、強引に背を流し始める。

「うっ、おねがいします」

「ふふ、まかされたよ」

その子供特有の柔らかい肌に傷をつけないように、絶妙の力加減で背を洗ってあげる。

娘も良かったけど、妹というのもいいなと思う僕である。

娘と言えば………はあ、いい加減覚悟決めないのかな。

家の連中を鍛えて、ある程度出来るようになったら旅に出よう。

そして、諏訪子に会って………会ってどうしようか。

「詩音様、どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ、少し考え事してただけ」

いつの間にか止まっていた手を動かし、最後に湯で流してあげる。

僕は先に湯船に入り、妹紅ちゃんは自分の体を洗う。

湯を掬って顔にかける。

今は諏訪子の事でなく、あの怪異のことを考えるべきだ。

この家に来てからまずやった事は結界を張ることであり、ただの低級妖怪なら近くに寄る事も出来ない。

ただ、中級の実力者や上級が出てくればどこまで通用するか分からない。

能力持ちだと、意外な方面から突破されるかもしれない。

いまだ、安心して居られる状況ではないのだ。

藤原様から離れている今は、アルトリアの直感や、佐々木小次郎の心眼（偽）、僕が通常状態の為ランクが落ちるが十分な効力を持つそれらを活用し、屋敷を探り続けている。

結局、何事もなく妹紅ちゃんと風呂からあがるのであった。

「詩音殿、様子はどうですか？」

「今のところは何も。藤原様はなにか感じましたか？」

藤原様は瞠目し、首を横に振る。

「そうですね……相手も慎重になっているようですね」

来た。

僕のセンサーに違和感がかかった。

誰にも気づかれないように、意識だけをその場所へ向ける。

そこに感じるのは空間の狭間……いや、隙間だ。

ここで相手の正体を察する、一人一種のスキマ妖怪

八雲 紫。

藤原様を神隠しするのか……いや、それならとうの昔にしているだろう。

なら、観察？ 何のために？

八雲は幻想郷の創始者となるはず、幻想郷は妖怪と人間が共存する世界。

人間の権力者たる藤原様を観察、今後の参考にでもしようとしているのか？

駄目だな、僕があれこれ考えてもそうだと断定できる決め手が無い。

ならどうする？

相手が何を考えているかわからない……なら、相手に聞けばいい。

僕の知る八雲なら、おそらく会話になると思う。

「その人ならざるもの。いい加減覗き見している理由を話してくれないかい？」

「詩音殿!？」

驚く藤原氏を置き去りにしつつ、いつでも戦えるように意識を持つていく。



き、式、参……。

「驚いて反応が遅れてしまいましたわ。今回は隠蔽にかなり気を使ったんですけど、自信をなくしそうですわ」

「いや、見事なものだったよ。一流の者でも気付くのは難しいだろうね」

振り向くと、思った通りの姿がそこにあつた。

髪色と瞳の色と服装以外僕と瓜二つの美女。

折りたたんだ扇子を美しい輪郭に当てる姿は、酷く妖艶である。

「聞きたいのだけど、どうして藤原様を覗いていたんだ？」

「藤原様を食べるためですわ」

クーフリーンを前面に、ゲイボルクを取り出して紫に突きつける。

すぐに真名解放可能なように、魔力を集めるのも忘れない。

「……冗談よ？」

「僕はそういう冗談を好かない」

さすがにゲイボルクを突きつけられると、かのスキマ妖怪も顔を引き攣らせた。

ただ、このままでいても話せないだろうから、槍を突きつけた状態から引く。

「恐ろしいものね、それは人が扱うような代物ではないでしょう」

「それには同意するよ」

宝具なんてものは人には過ぎた代物ではある。

本来ならそうそう気易く使う代物でもないんだけど、境界を操る妖怪相手ならば用心に越したことは無いからね。

「もう一度聞くけど、何の目的で僕たちを覗いていたんだい？」

「……人間観察よ。農民、街人、職人、権力者、退魔師。あらゆる身分の人間を観察をしていたの」

どうやら僕の推理も捨てたものではなかったみたいだ。

「それで、その目的は何？」

「話してもいいけれども、笑わないでくれるかしら？」

冗談めかして言っているけれど、その目は笑っていない。

それを笑う事は決して許さない、さもなければ刺し違えるとすら感じる。

「そんな目で見られたら、笑う事なんてできないと思うよ」

「そうだな、詩音殿はともかく私には無理だ。先に私の死体しか見えんわ」

「ならば話しましょう、私の夢を」

僕は素直に思った事を言い、藤原様は冗談めかして言う。

けれども僕たちは真剣な目をしていたと思う。

権力者なんていう、人間の黒い部分が良く見える場所に居る僕らは、こんな真剣に夢と言いつける存在を無碍にはできなかった。

それを見てとったからこそ、スキマ妖怪は僕らに語ろうと思ったんだろう。

「私の夢は理想郷の創造。幻想と人間が共存する世界を創り、維持する事」

「それは、どういうことかな？」

今の言葉だけでは、その夢の形を捕えることはできない。

幻想と人間の共存、その言葉はいか様にもとれるから。

「……………今のままでは、いずれ幻想の物たちは現実には淘汰され消えゆくでしょう」

「確かに、幻想の者は良くも悪くも人に依って存在しているからね。人間が発展して行けば、いずれ神々すら必要とされなくなるね」

元現代人としては容易く理解できる話だ。

藤原殿はさすがについてこれないのか、難しそうな顔で唸っている。

「だからこそ、私は幻想とそれを維持できる人間との共存を考えたわ。そして、人間の発展を抑える方法も」

「人間の発展は戦争……いや、必要によって生まれる。ならば、その必要をなくせばいい」

人の多様性は競争性を生み、それは発展を加速させる。

「そして、人間は怠惰な生き物だから、満ち足りているのならば発展はさらに鈍くなるか止まる」

「そう。そして、外界との交流を絶つたうえで必要なものを供給すれば、人は古き風習に固まるでしょう」

さすがは妖怪の賢者と言われるだけはある。

現代の知識を持っていたから付いていけたけど、現時点でここまです読み切るとはとてつもない頭脳だ。

「後は隔離外から不足分の食料を送り込むなどして、それを維持すれば人間と幻想が共存する世界が生まれるね」

「人間と幻想の関わりを、あるていど明文化した法が必要になるでしょうけどね」

僕としては好ましい世界ではある。

必要だから妖怪などを滅したりするけど、好き好んでやっている訳ではないからね。

それは飼い殺しとも言える世界だけど、外からの評価なんて中で暮らす存在には関係のない事だ。

「うーむ、話が壮大すぎて付いていけなかったな」

「あはは、そうでしょうね。この時代の存在で、僕やそのは異端ですから」

「そのとは失礼ね。私には八雲 紫という名があるのよ」

異端である事は認めるんだね。

「失礼したね、八雲」

「紫でいいわ。ここまで話を理解してくれたのはあなたが初めてよ」

「ふはは、さすがは詩音殿。人間だけでなく妖怪にも好かれるとは」

神様とも暮らしてましたから。

そんな事はさすがに言えないので、適当にはぐらかした。

紫が獲物を見るような目で見ていた気がするが、気のせいだろう。

「それにしても紫はこの世界が好きなんだね」

「ええ、だからこそその姿を残したいと思えるのですから」

にっこりと、優しい微笑みを浮かべる紫。

紫が所々で見せていた笑顔は胡散臭さを感じる笑みだったが、今の笑みは心から出た自然な笑みだったと思う。

「僕はいつか旅に出るつもりなんだけど、僕もその理想郷作りに協力させてくれない？」

「喜んで。あなたが協力してくれるのなら、私の夢も早く叶いそうだわ」

どうも本心から言ってるような言葉に、僕が老化で死にそうにはないと思われているのかもと思う。

「詩音殿が出て行ってしまつのか………うーむ、以後安心して生活できんかもしれんなあ」

「あはは、すぐにじゃないですよ。家の新人連中に任せられるくらいになってからかな」

大体、集団で中級妖怪と戦えるようにしてからかな。

そうすれば、後はじいさんたちがなんとかしてくれると思うし。

「そろそろ、私は御暇させてもらいますわ」

「ふむ、もう覗かないでくれたまえ」

「何かあったら、僕を頼ってくるの良い。出来る限り動くから」

紫は立ち上がって、扇子を持った腕を一振りする。

すると、その軌道に沿って空間が切れ、何とも言えない空間が現れた。

目の中からみているのだけど………うわ、目があった。

「それでは、また会う日まで」

「じゃあ、また」

「さすがに私は遠慮しときたいがな」

別れの挨拶と共に、紫はスキマに消えた。

「そうそう、これは笑わなくてくれたお礼よ」

「………は？」

いきなり耳元で声が出て、頬に柔らかいものが当たる。

「紫!？」

「またあいましょうね、今度は二人きりで」

今度こそ紫はいなくなった。

「うーむ、妹紅に強力な敵が現れたな」

「……………何言ってるんですか」

頬にキスぐらいなら、諏訪子も怒らないよね？

「……………むむっ!？」

「どうかしたのかい？」

「神奈子、ちょっと勝負しよう」

「ちょ……………一体どうしたんだい？」

「なんか無性に腹が立っただけ！」

「私が何をしたー!？」

怒ってる、多分怒ってるよ!？

背筋に電流が走ったよ……………ランク落ちしているとはいえ、アルトリアの直感伊達じゃない。



これは後で知った事だが、諏訪大社で諏訪子が大暴れ＋それに触発された土着神も大暴れと言った事があつたらしい。

皆さんすいませんでした。

「じゃあ、僕はこれで」

「良くやってくれた。褒美はまた後日に」

あのあと若干取り乱したけど落ちついて、今は入口で見送りを受けています。

「妹紅ちゃんもまたね」

「詩音様、もう帰っちゃうなんて残念です」

ああ、子供はほんと和むなあ。

「あはは、また今度家においで。おいしい御茶と菓子を用意しておくから」

「あ、嬉しいです詩音様」

軽く妹紅ちゃんを撫でてあげてから、僕は牛車に乗って帰宅した。

それから数年が経った。

ときどきやってくる紫に誘惑され、そのたびに背筋に電流が走ったのは泣ける。

幸い諏訪子暴走の報は聞かずに済んだけど、最近八坂が胃薬を所望していると業界ではもっぱらの噂だった。

八坂が侵略して来なければこんなことにはならなかったので、そのくらいは享受してもらおうと思う。

そして、最近都で話題になっている人物がいる。

かぐや姫。

光り輝く竹から生まれ、瞬く間に絶世の美女になったらしい。

僕はその正体を知っている。

蓬萊山 輝夜。

確か月の姫か、お嬢様だったはず。

本当に美女ではあるけど（美少女か？）、地上人より穢れが少ないからより魅力的に見えるんだっと思ったと思う。

穢れとは死とかそういう生命事象を指したはず。

と、大した知識は持っていないのだけど、こんな事を思い返している訳は

「あー、暇」

目の前でグータラしてる本人がいるからです。

「ねえ、何か面白い事やってよ」

「じゃあ、こんなのでどうです?」

無茶ぶりに応えて、奇術を披露する………咲夜さん式じゃないよ。

「や、やるわね」

「輝夜が無理ばかり言うから、練習したんだ」

さすがに、一流レベルのは無理だけど、小手先レベルなら出来る。

そうそう、何故輝夜と親しげに話しているかというと、藤原様のせいなのだこれが。

二年くらい前に、藤原様に連れられて輝夜に謁見することになったんだ。

そこで藤原様が、僕を輝夜につけるように言ったのだ。

妖怪やその他の災難からしっかり守ってくれるだろうと、僕の手柄を交えて雄弁に。

藤原様が輝夜に惚れているのは知っていたので、何故そんな事を

したのかと聞いたら

「好きな相手に息災であってほしいと思うからこそ、強力な恋敵を増やしても詩音殿を付けたんだ」

僕が女だったら、惚れそうな事を言われました。

輝夜も輝夜で、どこが気に入ったのかその場で了承。

結果、求婚に来ていた他の連中に睨まれました。

「私の遊び道具になりなさい」

初顔合わせでこんな事を言われたので、左右のこめかみを拳で挟んですり潰してやりました。

痛みで悶える輝夜を見ていたら、危うく変な扉を開くところでした。

そのあと名乗り合って、輝夜でいいと言われてこんな客と仕事人の関係には見えない状態になりました。

「詩音ー、甘いものが食べたーい……………て、きゃあ!？」

「こんにちわ、詩音様。相変わらず、だらしないわね輝夜」

ふと気が付いたら、ぐだぐだしていた輝夜が転がった。

輝夜を蹴り転がしたのは美幼女から、美少女になった妹紅ちゃんだった。

「や、妹紅ちゃんこんにちわ」

「何すんのよ妹紅！」

「あんたが、詩音様に失礼な事を言つてたからよ！」

僕の挨拶は輝夜の怒りにかき消された。

そのあとに、転がったままの輝夜を妹紅ちゃんが蹴り転がすという場面が続く。

僕はそれを止めずに、ただ見ているだけである。

なぜかは、彼女たちの顔を見ればすぐにわかる事だから言わない。

「おらおらおらおら！」

「ちよっ！？ やめっ！？」

はぁ………いい天気だな。

断じて妹紅ちゃんのSな笑い顔は見えていない、見えていないっただら見えていない。

喧嘩友達といった風情だが、心置きなく遊べる相手が出来たのはいいことだと思う。

妹紅ちゃんも、輝夜も同世代の友達はいなかったからね。



### 第三章 境界の夢 (後書き)

東方で憎しみつけていうのは、なんか嫌だなあってことで妹紅と輝夜は喧嘩友達に。

紫が幻想郷を作ろうって思って、幻想郷を愛する理由も創作。といっても、自分の思惑ではなくキャラが勝手に動いた結果ですね。

## 第四章 兄と妹、男と女 (前書き)

恋愛未経験者の作品なので、そういった描写は微妙かもしれません。



## 第四章 兄と妹、男と女

「詩音、あなた結婚しないの？」

「いきなりだね」

また、輝夜が思い付きで話を始める。

「だって、詩音ってもういい歳でしょう？」

「いい歳って………まだ二十代なんだけど」

まだまだ若いよ、能力で不老化してるし。

「かんっぜんに適齢期過ぎてるじゃない！ いい身分何だから一回ぐらい結婚しときなさいよ………」

「最後が聞き取りづらかったんだけど、なんて言ったの？」

適齢期といっても、僕的にはすでに妻と子も持っているからなあ………。

「………なんだったら、私がしてあげてもいいわよって言ったのよ！」

「そういう理由で結婚するのはなあ………」

一般人の感覚を引きずる僕としては、恋愛結婚したいから御情け的なものはちよつとなあ。

輝夜は美人で気心しれた仲だけど、妹としか思えないんだよ。

それに、八坂が抑えきれなくなると困るし……何をとは  
言わない。

「あんだねえ、偉い身分でそれは無いでしょう。せめて血を残す必要もあるでしょうし……わ、私としても、気心知れた仲の詩音なら別にいいと思ってるんだから」

あーあ、初心なくせしてそんな事言うから、顔が真っ赤になってるじゃないか。

結婚、結婚かあ……。

「まだ、考えられないよ」

「……そう」

残念そうに呟いた輝夜に内心謝る。

なんとなく好かれてるのは分かっているんだけど、それが兄妹愛の延長か、男女のそれなのか僕には判断できなかった。

輝夜と在ってから三年、僕はある記憶を掘り出していた。

さて、かぐや姫の有名な御話と云えば何があるのでしょうか？

「答えは五つの難題ってね」

かぐや姫に五人の男が求婚し、一人一人にある難題が提示される。

それを達成した男とかぐや姫は結婚すると言い、男たちはあらゆる手段を持ってそれを達成しようとした。

五つの難題を一言でまとめると、現存するかも不明な秘宝を献上しろというものであった。

仏の御石の鉢。

火鼠の衣。

龍の頸の五色の玉。

燕の子安貝。

蓬萊の玉の枝。

これら五品が、その五つの秘宝である。

「何の事ですか詩音様？」

「何の事よ詩音？」

「いや、なんでもないよ」

妹紅ちゃんと輝夜に眩きを拾われたけど、適当にはぐらかす。

僕の独り言や考え事はよくあることなので、二人とも特に気にした様子は無い。

ふと、輝夜を見てみる。

「詩音、暑いからなんとかして」

このグータラした奴がそんな難題を出したり、男たちは出された難題を達成しようとするのか、それらがかなり疑問だ。

「はいはい、水気よ」

「もう……これが夏なんだから別にいいじゃないですか。詩音様は輝夜を甘やかしすぎです」

水気を集めて水球にして浮かべると、一気に涼しくなった。

「暑いと言えば、求婚してくる連中も暑っ苦しいのよねえ……  
・こんな夏の日に足しげく通ってくるもんだから、汗がひどい事  
になってたわよ」

「お父様はそのあたり気を付けてるんだけどねえ……」

「最近、藤原様が水気の水を大量に発注してきたのは、そのため  
なんだね……」

全部手作業で書いている札のあんまりな使い道に、ちよつと泣いた。

そんな僕をじつと見ていた輝夜が、珍しく引き締まった顔で言葉を発する。

「……………そろそろ、決着付けようかしら」

「「決着？」」

僕と妹紅ちゃんの疑問を置いて、輝夜が使用人を呼んで何か言付けをし始める。

そして、筆を取って何かを書き始めた。

僕と妹紅ちゃんが不思議そうにその作業を見ていると、五つの書状が出来上がった。

「これを持って行きなさい」

使用人に書状を渡し、輝夜はこちらに振り向いて微笑した。

「不思議そうな顔してるわね。残念だけど、何をしたのかはその時まで秘密よ」

「普段の輝夜を知らなければ、似合ってる仕草なただけどなあ」

「まったくです」

微笑が引き攣った笑みに変化したのをみて、僕たちは笑った。

数日後、輝夜の書状の中身が判明する。

輝夜に求婚している中で、身分が高い者たちを五人集めたのだ。

つまり、これから五つの難題が出されるわけである。

現代人としては、これを生で見れるのは感慨深いものがある。

ただ、この世界の藤原様は物語のような失敗はしそうにないんだけどなあ……。

「お久しぶりです、藤原様」

「おお、ひさしぶりですな詩音殿！　いつも妹紅が世話になってすまん」

輝夜の元に来ると、大抵妹紅ちゃんに出くわすんだよね。

二人とも良い友達をやっているようだなによりだと思っ。

「それほどでも。僕も楽しませてもらってますし」

「そうですね、それは何よりですな」

しばらく世間話をしていると、どうやら呼ばれた五人がそろったようで、使用人が呼びに来た。

「そうだ、詩音殿も連れて行ってかまわぬかな？」

「僕もですか？」

このまま部屋に残って、どうなったのかを待とうかと思っただけだ。

「はい、大丈夫です。元々、十夜様が来られるならば案内するよに言われていましたので」

「そうですか。なら、案内をたのみます」

輝夜がそう言っていたのならば、僕は見守るのも吝かではない。

妹のような存在に求婚する連中を見ておくのも、今後の為に悪くないしね。

案内を受け、たどり着いた部屋では四人の男が座っている。

藤原様が席に着いたのを確認し、僕はその斜め後ろに座る。

座ってから少し立つと、奥から輝夜が現れて座る。

「皆さま、本日はお集まりいただきありがとうございます。此度は、求婚への返答をさせていただきます」

その言葉に、三人の男たちは色めき立つ。

他が浮つく中、左から四番目の男と藤原様は一切の変化なく輝夜を見つめている。

「私には、皆さまと結婚する気はありません。ですが、皆さまは

諦めてはくださらないでしょう」

そう言って、輝夜は求婚する者たちを見渡す。

どの男も、自身の望むものを望むままに手に入れてきた男たちである、その言葉ぐらいでは諦めることもないだろう。

「ですから、あなた方に一つずつ難題を出させていただきます」

そして、左に座る男から順に難題を告げていく。

「多治比様には、天竺にあると言われる、仏の御石の鉢を持って来てもらいます」

多治比と呼ばれた男は、荒い息を隠す事もなく頷く。

「阿部様には、火を付けようとも燃えぬと言われる、火鼠の皮衣を持ってきてもらいます」

阿部と呼ばれた男は、落ち着きを取り戻した状態で頷く。

「大伴様には、龍の頸にあるとされる、五色に光る玉を持ってきてもらいます」

大伴と呼ばれた男は、ハアハア言いながら頷く……なにこれこわい。

「石上様には、燕が持つと言われる貝、燕の子安貝を持ってきてもらいます」



石上と呼ばれた男は、ふとこちらを見てから頷く。

「藤原様には、白銀の根、金の茎、白玉の実を持つ、蓬萊の玉の枝を持って来てもらいます」

「うーむ」

………？

藤原様は、何を考えているのかいきなり唸り始める。

「藤原様、どうかなさいましたか？」

「………やはり、万が一も考えられるか」

「いったい、何が万が一なのだろう？」

藤原様と石上殿以外が、僕を含めていぶかしむ。

「………その難題を私は受けられませぬ。私は形だけの結婚など、かぐや姫に求めてはおりませぬので」

「そうですね。やはり私も難題を御受けするのは止めておきましょう」

「藤原様！？ 石上様！？」

輝夜は酷く驚き、他の三人の男はライバルが減ったと晒う。

「代わりに、詩音殿にその難題を受けさせましょう。かぐや姫は

彼の愛を求めているのでしょうか？」

「……………は？」

「そ、それは……………」

え、そこで僕に振るの？

「妹紅には悪いが、かぐや姫は悪い虫が付くべき女子ではないのでな」

「そういうことならば。詩音様、私に蓬萊の玉の枝を持ってきてください……………必ず」

家の依頼減ったりしないよね？ 偉い方三人に凄い睨まれてるんですけど。

あ、また背筋に電流走った……………諏訪子がまた怒ってるんだらうなあ。

「詩音様？」

「詩音殿？」

「……………ハ、ハイ。ワカリマシタ」

なんでこんな事になったんだらうか。

歴史的瞬間を見たかっただけなんだけどなあ……………。

「ふむ、難題に関わらず燕の子安貝は探しておくべきですな」

「おお、それは良い。石上殿、私も協力しますぞ」

「え、ええ!？」

赤くなる輝夜。

おっさん共、そう言つのは自重してください。

ただ、藤原様の言うように、あの三人の誰かが万が一難題を解いてしまい輝夜と結婚するのはいただけない。

蓬萊の玉の枝、どうやって手に入れる………まで、僕は何かを忘れていないか。

「あ………もしかしたら」

王の財宝に検索をかける………あつたよ。

「蓬萊の玉の枝は、白銀の根、金の茎、白玉の実を持っているのですよね」

「ええ、そうですが?」

僕は王の財宝から、蓬萊の玉の枝の原典を取り出す。

『………はあ!??』

皆が一斉に驚く………こら輝夜、女の子がそんな大口あけ

るものじゃありません。

皆が呆然としているので、他の難題も探してみる。

「お、仏の御石の鉢の原典に、火鼠の衣の原典、龍の頸の五色の玉もあるな」

結局、無かったのは燕の子安貝だけでした……唯の貝殻じゃ、ギルガメッシュに宝と認められなかったのかも。

というか、これあげたら将来の輝夜のスペルカードが本物（より強力な原典）ばかりで構成されるぞ……ごめん、主人公組

ふつつ、こんなところでいきなり出されても偽物だと言われるだろうけど、そこはギルガメッシュの原典だけあって、そんな事は言えない王<sup>オーラ</sup>気がある。

しばらく皆が呆然とした時間が過ぎ、三人の男はがっくりとして帰って行った。

藤原様と石上様は、燕の子安貝を必ず持ってきてやるといき込んで出て行った。

「輝夜や、床の準備は出来たよ」

「お、おばあちゃん!？」

「さあ、詩音様」

「え……は、ちょ!？」

僕と輝夜はおばさんとおじいさんに連れ去られ、ある部屋に通された。

「「では、じゅっくり」」

呆然とする僕たち。

「と、とりあえず目を改めよう」

「そ、そうね！ そうしましゅう！」

直感が今までにないほどの警報を鳴らしている……………八坂、もう少し耐えていてよ！

襖を開いて

「ほっほ、輝夜に詩音様。どこに行かれるのですかな？」

おじいさんに閉じられる。

「ならこつちー！」

反対側の襖を開いて

「輝夜や、女は度胸ですよ」

おばあさんに閉じられる。

「……………」

き、気まずい……。

枕を二つ並べられた、一つの蒲団がいやに自己主張している。

「……………やってやるわ」

「か、輝夜？」

突如、輝夜が顔を赤くしながらも決心した表情をする。

「詩音、あなたは私をどう思ってる？」

「護るべき存在、大切な……………妹かな」

意外と輝夜の表情に変わりは無く、納得の表情を見せる。

いや、意外では無いか。

僕は諏訪子の事とかで心に言い訳を作っていたけど（事実ではある）、結局は兄と妹という立場を崩したくなかったただだった。

だから、輝夜が向ける好意が兄と妹の物ではないと気が付いていながら、気付いていない振りをしたり、はぐらかした。

そしてそれは輝夜にも言えることで、僕、輝夜、妹紅ちゃんて過ごす日々を壊したくなかったんだろ。

だから、そう言う素振りを見せながらも、決してそれ以上は踏み込んでなかった。

「そうよね、私も詩音を兄のようだと思っていたわ……  
妹紅もね」

「だろうね、だから僕たちは仲のいい兄妹で在れた」

妹紅ちゃん……いや、妹紅だってそうだ。

出会った当初は、本当に仲のいい兄妹で入れたけど、年月はそれを許してくれなかったみたいで、輝夜と二人して僕なんかを想ってくれていたのだろう。

誰が悪かったわけでもなく、誰もが悪かったと言える。

それが恋愛というの一側面であるのは、今の僕たちには良く解る。

そして、人を愛するということも理屈や言葉で語れるようなものでもない。

お互いに見つめ合い、次の瞬間には輝夜が動く。

「でも、もうそこで止まる気は無くなったわ……詩音、好き」

「……!?!?」

僕はひどく動揺していたみたいで、あっさりと輝夜に押し倒され、唇を奪われる。

「かぐ」

指で口を抑えられる。

僕にまたがり肌を上気させる輝夜は、今までになく女らしさを見せる。

「女として見てくれなくてもいい。妹としてでもいい。だから・・・ただ、詩音として私を愛して」

輝夜の言葉は僕の心にストンと落ちて、僕の心は凧のように静まる。

「・・・・・・・・分かった」

「きゃ!?!」

輝夜を優しく引き倒し、立場を反転させる。

「男としてではなく。兄としてでもなく。ただ、詩音という存在が輝夜という存在を愛そう」

「・・・・・・・・!?!」

それだけを言い、輝夜の唇を僕は奪った。

「妹紅に謝らないといけないかな・・・・・・・・」



胸に輝夜を抱えて、その艶やかな髪に指を梳かしながら僕は言った。

「いや、それじゃ駄目か。だけど……はあ、どうしようか？」

「……………ありのままに言うしかないと思う。ただ、それだけを」

僕に頭を擦り付けながら、輝夜が答えを放つ。

ただ事実を述べる。

僕らに罪悪感を残すその答えこそ、僕たちが行つべき責任なんだろうね。

「妹紅は泣くだろうな」

「そうね。でも、私たちには見せないと思う」

必死に笑顔を維持して祝福してくれる姿が、容易に想像できる。

ああ、心が重い。

輝夜に感じる愛しさと、妹紅だけ置き去りにすることへの罪悪感が僕の心を満たしている。

「ごめん詩音。強く抱きしめて」

「うん」

言われるまま、輝夜を抱きしめる。

肌を通して、輝夜の熱が直接僕に伝わる。

「こんな事じゃいけないのは分かってるの」

「うん」

「だけど……だから……今だけ……」

「うん」

「……うあ……っ……」

混沌とした心を吐き出すように、だけどそれはしてはいけないと必死に抑えて輝夜は泣いた。

勢いに流され、されど僕たちの意思で先に進んだ。

その代償は大きく押し掛かってくるけど、それを抱えて僕たちは進み続けるんだ。

#### 第四章 兄と妹、男と女 (後書き)

夢見がちな文章でしたが、主人公たちが若々しいだけだと思ってください。

恋愛する過程が無いですが、そういうのは何も無い日常を共に過ごすからこそのものだと思うのですよ。吊り橋理論はねえ……結局は錯覚ですから。命を救ったとかそういうのも、恋愛より尊敬が先に来そうですし。以上後付け理論でした。

## 第五章 銀盆より来る者 (前書き)

今回は難産だった。

今までで一番時間をかけた章です、時間と中身は釣り合っていないけど。

## 第五章 銀盆より来る者

「おめでとございます詩音様。輝夜もおめでとごう」

僕らが思った通り、妹紅は笑顔で僕らを祝福してくれた。

「ありがとう妹紅」

「ありがとうね妹紅」

だから僕たちも笑顔で返す。

お互いの内心を良く理解し合っているのに、それを表には出さない。

それを出してしまえば、僕たちの今までを否定することになるから。

「詩音様、輝夜様。そろそろお時間の方が……」

あらかじめ、このタイミングで来るように言っておいた使用人が現れる。

「ああ、分かったよ。そう言うことだから、もう行くね妹紅」

「妹紅、また今度二人で会いましょう」

「うん輝夜、また今度二人で会いましょう」

背を向け、若干早足でその場から僕たちは去った。

「妹紅」

「なに、お父さん？」

その場に少し立っていると、お父さんが現れた。

「すまん、私の都合で」

「怒るよお父さん。詩音様と輝夜は、自分たちの意思でああなっ  
たんだから」

だから輝夜は謝ったりはしなかった。

私たちの今までは無駄ではない、無駄にしてたまるものかと。

輝夜も辛いのだろうに、私に気を使ったりして……………。

「ほら、来なさい」

「輝夜だって耐えてるんだから、私だって……………」

次の瞬間、私は暖かく包まれていた。

「泣きなさい。泣いて全てを吐き出すんだ。また、かぐや姫に会

うのだろっ？？」

「……………う、うあ、うあああああああああああ  
あああ！」

そのあとの事はよく覚えていない。

ただ、優しく背を叩く父の手の温もりだけが記憶に残った。

妹紅に僕と輝夜の結婚を報告した数日後、客人を招いての挙式が行われた。

家の術者たちや、輝夜のおじいさんとおばあさん、藤原様と石上様……………そして妹紅から心よりの祝福を受けて結婚。

付き合いで招いた男性客には、リア充爆発しろとばかりに睨まれたりもしたが、勝者の余裕を見せつけるように鼻で笑ってやったりした。

ちなみに、その式で一番驚いたのが、藤原様と石上様からの贈り物だった。

「まさか、本当に見つけてくるとは……………」

「……………期待していいのよね詩音」

……………何を送られたかは、各自で想像してください。

以降は、幸せな新婚生活を送れていたと思う。

「どう……おいしい？」

「うん、おいしいよ輝夜」

輝夜が不格好ながらも料理を作ってくれたり、二人して縁側でのんびりと茶を啜ったり。

「輝夜ー来たよー」

「あら妹紅いらっしやい」

前のように、遊びに来た妹紅と一緒に縁側で茶を啜ったり。

「やっぱり詩音は頼りになるわねえ………攫っちゃおうかしら」

「この泥棒猫！ あんたに詩音はあげないわよ！」

紫が誘惑してきて、輝夜が追い払うというハプニングもあったけど、その日常は幸福であつたと言えるだろう。

ああ、輝夜からは重要な事を聞いていたね。

まあ、アレしているときに毎度血が出るので聞いてみたら、蓬萊の薬を飲んで不老不死なんだと言っていた。

結構重要な事だったのにやっている事がやっている事だったので、



締まってなかった。

輝夜も、言うの忘れてたって顔してたし。

僕自身は時を操る程度の能力で不老にはなっているけど、不死ではないので気を付けないといけないなと思った。

また、愛する人を残して逝くのは寝覚めが悪すぎる。

そんなこんなで一年が経ち、輝夜の料理は職人顔負けなほどに成長したりしていた。

だけど、ある満月の日を境に、輝夜の様子がおかしくなった。

夜目を眺めてはため息を付いたり、日常の中で涙を流し始めたり。

「ん、輝夜。なんで泣いてるんだ？」

「なんでもないわ。ただ、目に埃が入っただけ」

本人は僕に気がつかれないようにしているみたいだけど、何年一緒にいたかと思っっているのだから。

「ねえ詩音様。最近輝夜の様子がおかしいと思うんだけど」

「ああ、僕も気付いてる。だけど、原因が全然わからないんだよね。だから、そろそろ問い詰めるつもり」

妹紅も輝夜の異変に気が付いて、僕に聞いてきたりもした。

妹紅には原因は分からないと言ったけど、僕には一つ心当たりがあった。

輝夜の故郷である月だ。

つまりは、そろそろ迎えが来るといふ事なのだろう。

月の使者が来れば、否応なく僕と輝夜は離ればなれになってしまうだろう。

使者に従い帰ってしまう。

使者を退けて、そして逃げる。

輝夜の事だから、僕たちに迷惑はかけられないとか言っただけで、どこかに行ってしまうつもりなのだろう。

最近、やたらと妹紅を家に呼んで僕に近づけようとしているので、私が居なくなったら後二人で仲良く暮らしてねとか言っつもりなのか。

だとしたら、舐めるなど言ってやりたい。

僕は未だ諏訪子に会いに行けてないようなヘタレではあるけど、愛する人の為にならなんだって耐えられるのだから。

そう言う訳で、僕は輝夜を問い詰める事にした。

「輝夜、少し話がある」

「……………なにかしら」

覚悟は済んでいるとでもいうような返事だね。

なら、その覚悟を一撃で壊そうか。

「月から何か来たのか？」

「な、なんで……………」

核心を突いたその言葉に、輝夜は動揺する。

「大方、迎えに来るとでもいったのだろうね」

「……………っ!？」

ビクンと体を震わせる輝夜に追い打ちをかける。

「そして、輝夜は帰るか逃げるかするつもりでいるのだろうか？」

「……………あ、ああっ、どうして」

後ずさる輝夜の肩をつかみ、目を合わせる。

「僕たちに迷惑はかけられない、僕たちには幸せに居てほしい。  
そんな事を思っていたんだろう？」

「……………そんなの、当然じゃない」

ああ、そう思ってくれるのは嬉しいぞ。

だけど君は舐めている。

「輝夜は僕や妹紅を舐めているのかい？ 輝夜を見捨てて幸せに暮らせるとでも？ 正直に言おう、僕は怒ってる」

「……………怒ればいいじゃない。こんな最低なおん」

それ以上は言わせない。そんな的外れな事を言わせはしない。

「輝夜にそんな事を考えさせる、僕の情けなさに怒ってる」

「……………あ」

腕を引き寄せ、輝夜を抱きしめる。

「ごめん輝夜、輝夜も精いっぱい僕らを思ってくれた結果だったんだろう。」

「もつと僕に頼ってくれ。なにもせずに輝夜と離れるなんて、そんな事はしたくないんだ」

「でも……………」

出来る限りの自信を持って、僕は言う。

輝夜を安心させるため、輝夜と共に歩むため。

「なに、僕は最強の退魔師だ。相手がなんであろうと退けて見せるわ」

「……………分かったわ。でも、本当に危ないと思ったら逃げてね」

生きていればまた会えるのだから。

言葉に表さなくても、それは僕に伝わった。

「輝夜に詩音様。何か私に隠してるでしょ？」

「ふ、夫婦なんだから別に良いじゃない！」

輝夜、それは墓穴だよ。

「隠してるのは認めるのね。なら、私を巻き込みたくないってところですね？」

「……………そうだよ。はあ、輝夜は嘘が付けないというか」

そういう相手が、僕たちだけだからいいんだけど。

「し、詩音！？」

「ここまで気がつかれたら、何も言わない方が危ないと思う」

「輝夜がなんて言おうと、私も首を突っ込ませてもらうわ……  
・・私たち友達でしょ？」

妹紅の言葉に、輝夜の涙腺が崩壊した。

抱き合う二人を見てると、なんとしてでも護らないといけないと思える。

二人が落ちついた後、月の事を妹紅に説明した。

「そう言う事……私に出来るのは輝夜と一緒に居る事くらいですね」

「ああ、一緒に居てあげてね。輝夜も心配かもしれないけど、僕らは大丈夫だから」

「今更言う事は無いわよ。私は唯あなた達と一緒に居たいと願うだけなんだから」

三人して覚悟は決めた。

なら後は、当日を待つのみ。

次の満月は三日後、その時に僕たちのこれからが問われる事になる。

そして、満月の日が来た。

「詩音様。ようやく人払いが終わりました」

「心配してくれるのはありがたいけど、ここのうのはもう勘弁してほしいわ」

「うん、ありがとう」

家とその近辺の人間を避難させるのには苦勞した様だ。

皆が皆、自分たちも輝夜や僕たちを守ると言って聞かなかったのだから。

輝夜が月の人間の危険性を説明して、ようやく幾らかが引いてくれて、残りは二人の根気強い説得で引いてくれた。

「いよいよですね詩音様」

「……妹紅、いまさら何だけど。詩音様なんて呼ばないで詩音って呼びなさいよ」

「そうだね、ずっとそうだったから気にしてなかったけど、言われてみるとそう呼んでほしいかな」

会話だけを聞けば和やかだけど、僕らの表情は緊張していた。

輝夜から聞いた月の戦力。

それは、僕の記憶にある現代軍隊なんて目ではない、超科学技術の固まりだと。

自分の従者が獅子身中の虫として使者に居るとのことだが、連絡はあの時の一回だけなのでどうなっているか分からないとのこと。

「来たのか？」

エミヤを表出、肌は浅黒く髪は白く瞳は鋭くなった。

千里眼で月より向かってくる存在を確認する。

輝夜を乗せるであろう牛車っぽい何かには、赤青の服を着た銀髪の女性がいる。

八意 永琳。

輝夜の従者にして、月の頭脳とまで言われる女性である。

そして、その周りには鉄の馬に乗った護衛軍たち。

護衛軍のいずれも、地上を嘲るように見ている……胸糞悪い目つきである。

そして光が射す。

その光に紛れて護衛軍が何かを撃って来たが、表出してはいないクーフリーンの矢よけの加護だけで、見当違いの方向へ飛ぶ。

輝夜たちの周りに壁となるように、空間の時間を停止して障壁とした。



無駄を悟った護衛軍は構えていたものを降ろす。

それを確認した僕は障壁を消す。

そして、銀髪の女が前へ進み出る。

「姫様、迎えに参りました」

「御苦労さま永琳。だけど、私は月に帰る気は無いわ」

あらあらとまるで困ったように頬に手を当て、困っていないように笑った八意は護衛軍に振り返った。

「そう言う事なので、皆さんは月に帰りなさいな。私は姫様についていくので」

「そんな事が許されるわけないでしょう八意様」

あらあらと困ったポーズを見せる八意が、再び聞く。

「そこを許してほしいのだけど」

「それ以上言うのならば、八意様といえど容赦しませぬよ」

新たに武器を構える護衛軍。

これが最後通牒とばかりに、八意が言い放つ。

「引きなさい。あなた達の命は保証できないわ」

「話しになりませんな。仕方ありません、八意様……いえ、謀反人八意と地上で穢れた罪人を始末せよ！」

護衛軍が武器を放つ。

光線や銃弾が八意と僕らに向かってくる。

「ロー・アイアス熾天覆つ七つの円環！」

投影した、投擲武具に絶大な効力を発揮する七枚の花弁が、月の超科学を防ぎきる。

そして、その陰から八意が飛び出し、アーチャーのようにいくつもの矢を放ち、護衛軍を仕留めていく。

僕も負けていられないと、アイアスの盾を輝夜たちの守りに置き、黒い洋弓と矢を投影して放っていく。

僕はエミヤのように『中たる』わけではないけど、エミヤの技巧をもってすれば『中てる』事は容易い。

一息に十三連射、弓の英霊たるは何かを示して、一人につき一矢で仕留めていく。

そして爆発音。

護衛軍の武器が暴発していく……どうやら八意が何かを仕込んでいたようだ。

それに気付いた敵は武器を捨て、近接武装を持って降りてきた。

降りてくるまでに出来るだけ射殺し、メディアを表出。

薄紫色の髪と瞳、ぴよこんと動くエルフ耳へと変化する。

「魔術師の神殿に侵入することがどういう事か、その身に教えてあげるよ！」

防御結界で輝夜たちを覆うのは忘れない。

キャスターのクラススキル『陣地形成』で作った神殿、今回は任意トラップを仕掛けたただけだが、その分えげつない物ばかりになった。

空間殲滅結界が展開し、十人が消滅。

圧迫の陣で六人が押しつぶされる。

さらには、五人が突然風化して砂になる。

かの八意もこの陣地の恐ろしさに、顔を青ざめさせている。

さて、護衛軍も残るは三人になった。

連中は極度の緊張で顔面蒼白、過呼吸すら起こしている。

いや……………あれは、毒か。

「ようやく効いてきたわね、予定が狂ったから今になって効果が出たけど、感想はどうかしら？……………ああ、もう死んじゃ

ったのね」

訂正、八意も相当えげつない。

「それにしても、人が全然いないから迎撃するつもりだと分かったけど、たった一人がここまでの戦力だなんてね」

「ふふん、すごいでしょう私の夫は」

「どーよと言わんばかりに薄い胸を張る輝夜、ただその顔は青くなっている。」

「みんな先に家に入っていてくれるかな。僕はこの惨状をどうにかするから」

優美だった庭が、弾痕や死体などで酷い事になっている。

「あら、それならお手伝いしますわ。分別も必要な物もありますし」

たしかに、得体の知れない超科学の物品は下手に触れたくは無いな。

八意の協力を得た庭は、なんとかみれる様相を手に入れました。

片付けも終わり、これからどうしようかと四人で考えるため集まる。

「八意 永琳と申します。姫様の従者をさせてもらっていました」

「これは丁寧にも。私は藤原 妹紅で、輝夜の親友やらせてもらっています」

「僕は十夜 詩音。輝夜の夫やらせてもらってます」

妙に畏まった名前交換を終える。

ちなみに、八意を永琳と呼ぶことになった。

輝夜の夫なのだから、あなたの従者でもあると言われて説得されました。

そのあと、思い出したように永琳がある物を取り出す。

「ああ姫様。そう言えば、頼まれていた蓬莱の薬を持ってきたのですが」

「あ……それは早く燃やさない！」

完璧に忘れていたであろう輝夜の、薬を廃棄しろとの言葉が終わる前に、僕と妹紅はそれをつかんでいた。

「詩音に妹紅、いったい何してんのよ!? それは不老不死なんて碌でもない……」

「だったら、そんなものを飲むんじゃないよ輝夜」

「私たちは輝夜一人置いて逝く気はないの。最後まで付き合っ

あげる」

絶句する輝夜をおいて、僕らは薬をあおる。

「な、なな、なななななななななななんて事を!？」

「特になにも変わった気はしないね妹紅」

「そうですね。少し体調が良くなったかなとしか」

「お二方とも、しつかりと不老不死になってますわよ」

永琳は不老不死になったと言っているが………試してみるか。

皆に見られないように外に出て、武器で腕を斬り落とす。

そうすると、すぐさま新しい腕が現れた。

そのまま落ちている腕と血痕を見れば、それが事実だと分かる。

もう一つ実験を行う。

王の財宝から、不死殺しの武器を取り出して指先を傷つける。

「ああ、やっぱり駄目か」

傷は癒えることなく、血を流していた。

不死殺しで傷つけられたら、自然レベルの治癒でしか治らないよ

うだね。

実験を終了して、戻る。

「妹紅、すっかり不老不死になってたよ」

「なんだか実感はわかりませんね」

これは、その場面を見ないと信じられるものではないからなあ。

「もう知らない……………」

「姫様ったら、本当は嬉しいくせに」

拗ねていた輝夜は、永琳の言葉で、後ろを向いてさらに拗ねた。

ただ、後ろからでも真っ赤になった輝夜の耳は確認できた。

「とりあえず、この話題は終了。次はこれからどうするかを考えよう」

「そうねえ、明日には月にばれてるでしょうから、それまでにここを離れておきたいわね」

「でも、離れるって、どこに行けばいいのでしょうか？」

いつまでも逃げまどつのは嫌だからな、どこか隠れ住める場所が欲しい。

思いつくのは永遠亭だけど……………紫に聞いてみるか？

いや、でも紫に連絡なんて

「お困りのようですね」

「「誰っ!？」」

最初っから最後まで、確実に見てたね。

「お二方は始めまして、詩音と輝夜様はお久しぶりですね。私、スキマ妖怪の八雲 紫と申しますわ」

「妹紅、永琳、二人とも警戒しなくていいよ。で、ちょうどよく出てきたという事は、どこか隠れ場所があるんだね」

僕の問いに頷いて、紫は腕を一閃する。

それによって境界が引かれ、スキマが開く。

その向こうには、竹林に囲まれた屋敷が見える。

「代償は、いつかの約束を果たして下さればいいですね。私の夢、手伝ってくれるのでしょうか?」

「いいよ。そう言うことなら僕も喜んで」

事情を知らない皆は首を傾げるが、紫の夢は紫自身が語るべきであるから、紫が言わないなら僕も言わない。

「よし、皆荷物を運んでおいてくれるかい。僕は家の連中に次の



当主を知らせてくるから」

「詩音、私の荷物はどうすればいいでしょう?」

妹紅の荷物は家においてないから、取りに行かないとか。

「後で藤原様に事情説明とあいさつに行くから、その時に」

「そういうことなら、詩音の荷物を纏めておきますね」

頼むと言って、すぐに家を飛び出した。

十夜家の次期当主を定め、皆に引きとめられながらも屋敷に戻る。

門の前で皆が待っていてくれたので、次は藤原様のところだ。

皆で空を飛んで、藤原様の屋敷に向かう。

妹紅は僕が抱えて行きました……途中から、輝夜が僕の背に乗ってきたりも。

僕らを心配してくれていたのか、ちょうどよく縁側に座っていた藤原様の元に降り立つ。

「おお、詩音殿! どうやら無事の様子ですな。そうそう、妹紅の荷物は纏めてそこにおいてあるぞ」

「お見通しですか藤原様」

そういう事なので、簡潔に事情を説明。

後は、別れを済ませるだけ。

「詩音殿。あなたは私が最も信頼する方だ。だから、いうことは一つしかありません。……妹紅を頼みます」

「任せてください。その信頼は決して裏切りません」

藤原様の顔には、妹紅の心配は一切なかった。

それほどまでに僕を信頼して妹紅を預けてくれるのだ。

僕はそれに応えなければなく、それに応えたい。

「かぐや姫。私はいつまでもあなたの幸せを願っていますぞ」

「藤原様……詩音がいなければ、私はあなたの妻になっていたのかもしれないね」

輝夜はそう言うとはほ笑んだ。

この人がいたからこそ、僕と輝夜は夫婦になったと言える。

「妹紅。言える事は一つだけだ……二人で分け合いなさ  
い」

「はい。お父様」

え、どういう事？

いったい何を分けあえと？

「それもそうね。今から完全な隠遁生活なんだし、常識無視してもいいものね」

「じゃあ、輝夜。私も混ぜてもらって良いんだね？」

「え、ええ！？」

結婚当初の葛藤とか、そこらへんどこに行つたの！？

「詩音………幻想郷は常識に縛られないわ」

いつの間にか隣に居た紫の言葉に、僕は顔を引き攣らせることしかできなかった。

「それでは藤原様、お元気で」

「ええ、詩音殿も」

それだけ言うと、妹紅を置いて僕たちは先にスキマを通る。

親子二人での会話を邪魔する訳にはいかない。

背後から聞こえる泣き声に、僕は上を見上げて瞼を閉じた。

第五章 銀盆より来る者 (後書き)

最後のは、弱ハーレムとタグに書いておいたよねと、言い訳してみる。

中身はそれほどでないのに、なぜか凄い疲労度が……まさか諏訪子に祟られてる!?

第六章 妖怪巡り 天狗編 (前書き)

風邪をひいてだるい……。。。。。。  
思考が上手く回らなくて、物語り書くのが大変でした。

## 第六章 妖怪巡り 天狗編

「えー、これより第一回家族会議を始めたいと思います」

「「「わー」」」

僕の号令と共に、輝夜、妹紅、永琳が気の抜けた声を上げる。

「議題のー、この屋敷の名前は何かいいでしょう?」

「はい!」

輝夜が元気よく手を上げる。

「十夜亭なんてどうかしら?」

「残念、表札に十夜と出すつもりなので、屋敷の名前にはできません」

表札と、屋敷名が被ってるというのはちょっと。

もっとも僕としては、永遠亭という名を引き出したいだけなんだけど。

「もっと、こう……この家を象徴する何かを考えてね」

「はい!」

おっと、今度は妹紅か。

「竹林亭なんてどうでしょう?」

「そのまますぎよ妹紅、もう少し捻らないと」

うん、さすがにストレートすぎる名前だね。

勢いのままで発言したからか、妹紅も自分でこれは無いわって顔をしている。

「はい」

お、今度は大本命の永琳が手を上げたぞ。

「私たちは全員不老不死ですし、永遠亭なんていうのはどうかしら?」

うっわ、さすがは月の頭脳。

作られた笑いが、それでいいんですよねって、暗に言ってる。

「いいじゃない永琳」

「うん、私も賛成です」

「じゃあ満場一致で、この屋敷は永遠亭とします!」

「あらあら」

うん、やっぱり永琳の頭脳は怖い。

でも、これほど味方に居て頼もしい存在は他にいないや。

「では議題の二、家事分担はどうしよう?」

「私と姫様は追手がいるので、そうそう外に出れませんわ」

月に顔が割れてるのは輝夜と永琳の二人だから、外に出るのは僕と妹紅だけになる。

「ですから、家事は私がやって……」

「……はい却下。僕らは家族なので、従者とかそういうのは無しで分担しましょう」

「だったら、分担するよりも順番に回した方がいいんじゃない?」

「そうですね。ただ、詩音にはやらせませんが。こういうのは妻の仕事ですから」

久しぶりに料理とかしようと思ってたのに……。

「詩音はスキマの手伝いがあるでしょ。家は私たちが回すから、詩音はそっちを頑張って」

「そう言う事です。ただ、私は家事出来ないから、輝夜と永琳が教えてね」

「……はあ、分かりました。そう言うことならば、容赦



はしませんよ」

「分かったよ。でも、たまには僕にも仕事させてよね」

おそらく、世界が死ぬまで僕らは生き続けるのだから、趣味の二つや二つは欲しい。

料理研究なんておいしい趣味を、取り上げられたらかなわない。

「「「趣味の範囲なら」「」」

「……もう、それでいいよ」

断じて家事はさせないつもりらしい。

男女比率1：3は、僕の意味を通してくれないみたいだった。

「行ってきます」

「「「いつてらっしやい」「」」

「いつてらっしやいませ」

どこかの新婚のごとく、輝夜と妹紅にキスを貰って家を出る。

それにしても、お約束ってどこにでもあるもんなんだね。

玄関を出て、紫から貰った地図を頼りに待ち合わせ場所へ移動する。

待ち合わせ場所といっても、竹林の入り口である。

ただ、この竹林は地脈が活性化している場所にあつて、霧状の霊気が漂っているために感覚が狂つて、たどり着くのは容易でない。

紫から貰った地図は霊気の流れを示したもので、これを辿ることで永遠亭と竹林の入り口を繋げる事が出来るらしい。

「お、意外と簡単に出れたな」

地図の通りに進むだけで、簡単に入口に出れた。

霊気の流れも覚えたので、次からは地図なしでも往復できると思う。

他に気が付いたのが、竹林で流れる霊力は竹林の外に向かつて流れているということで、霊力さえ知覚できるなら簡単に出れそうだ。

入口から少し歩いた待ち合わせ場所では、紫が手持無沙汰に日傘を回していた。

「ごめん、待たせちゃった？」

「ふふ、女を待たせるなんて罪な人ですわ」

うん、相も変わらず胡散臭い奴。

「なによその顔。どうせ胡散臭いとか思っていたのでしょうか?」

「うん。まあ、そこらへん含めて紫らしいとは思っけど」

素直に認めたら、紫は扇子を広げて口元を隠した……・……・隠れてないこめかみが引き攣っているけど。

「まあいいわ。それで、今回のお仕事は……・……・天狗狩りよ」

「まさか、拉致してくるのか?」

天狗の頭を拉致、妖怪の山に縛りつけて天狗を移住させる計画?

「そうじゃないわ。あの石頭どもは、話をしにいつても聞きもしないで追い返してくるのよ。だから、連中を力でねじ伏せて話を聞かせるの」

「そうするとすると、紫だけじゃあ厳しいから僕も連れて行くってわけか」

スマートなやり方ではないけど、力を示して従わせるといふのは、妖怪相手に有効な手段である。

人間のように脆弱ではない妖怪だからこそ、力の序列にはしたがってくるだろう。

「というわけで、ちやつちやと行っちやいましょう」

「……・……・危ないじゃないか」

とつさに飛んだから良かったものの、足元にスキマ開くなんて。

ボツシュートはされんよ。

「……………ちっ」

さっきの恨みを晴らし損ねたせいか、珍しい紫の舌打ちを聞いた。

「まあいいわ。扱き使ってあげるから」

「それは怖い」

今度は真つ当にスキマを開いてくれたので、普通に通る。

相変わらず不気味なスキマを抜けると、山の麓に出た。

「ここら辺一带が天狗の縄張りよ。山道以外を通ると、追い返されるわ」

「どこら辺が天狗の本拠地？」

紫は一つの山を日傘で指した。

「あの山の向こうの、山と山の間窪地に天狗は集落を作っているわ」

「じゃあ、直線飛んでいけばいいかな」

そう言っって僕は空に飛んで、紫も僕に続く。

戦闘準備に、エミヤを表出させておく。

少しほど飛ぶと、犬っぽいパーツを持った天狗が現れる。

「その者！　ここより先は天狗の領域。今すぐ引くがいい！」

脅しに軽く弾幕を張ってくる。

「私は天狗の長に用があるのだけど？」

「また、貴様か！　天魔様は貴様のような妖怪なんて知らないと言っていたぞ！」

「いやいや、だから話をしに来たんじゃないか！？」

うわあ、話に聞いてはいたけど本当に頭固いな。

「はあ、もういいわ……………落ちなさい、あなた」

「……………ふう！？」

ピチューン。

幻聴と共に、鳩尾に光弾をもらった天狗が落ちて行く。

すると出てくる出てくる……………ざっと二十ほど、武装した天狗が現れる。

「おのれ侵入者め！　皆の者、かかれ！」

『応!』

そう言つとそいつら全員がかかってくる。

気配を探ると、まだまだ天狗はいる様子なのに。

「紫。これは舐められているのかな？」

「そうね。この程度の数で私たちを落とそうなどと、片腹が痛いわよ!」

紫が、飛んできた弾幕をスキマに吸いこみ、そっくりそのまま天狗に返す。

三匹ほどか間抜けにも自分の弾幕で落とされる。

「どいて紫」

「任せるわね」

すぐさま僕が前に出て、突出しすぎた天狗を投影した槍で叩き落とし、叩き返す。

二匹が落ちて、一匹が他の天狗に衝突する。

「さあ、今度は少し多いわよ」

その声に、僕は上昇して射線から外れ、僕に気を取られていた残りの天狗が纏めて十匹落ちる。

「あつけないわね」

防衛に出てきた天狗は残り五匹、すぐにでも駆逐できる数だ。

「くっ……皆の者ですよ！ これ以上侵入者にでかい面をさせるわけにはいかん！ 伝令は天魔様に報告を！」

またまた出てくる天狗、その数百は下らない。

それも、さつきよりは骨のありそうなばかりだよ。

さつきのは新人か何かだったのかも。

「さすがに数が多いわね」

「だから、少しだけ」

「本気をだしてあげる」

うん、即席の割には良いコンビネーションだと思う。

そんな事を思いながら、在る程度の力を持った剣の設計図を脳裏に並べる。

「トレース・オン 投影開始……ロール・アウト 工程完了。バレット 全投影、クリア 待機」

紫も、背面に大量のスキマを開いている。

そして、二人合わせて手と扇子を掲げて

「フリーズ・アウト ソードパレル・フルオーブン  
停止解凍、全投影連続層写！」

「行きなさい……………飛光虫ネスト！」

それを放つ。

僕らを完全包囲することなく、半円状に囲っていた天狗が次々と落ちていく。

紫のスキマから出る高速の何かと、次々と空中に浮かび柄から突撃する剣軍。

天狗は風を操りどうにかしようとするが、バラバラに放たれるそれらでは二つの軍勢を止めることは叶なかつた。

「うーん、紫一人で十分行けたんじゃないの？」

「嫌よ、そんな面倒な事」

眼下には、ぼろぼろとなった天狗が積み重なっている。

肝心なのは、殺してはいない事。

だって、本来の目的は

「ぬう、これは……………」

天狗の長、天魔を交渉の場に引きずり出す事なのだから。

「どうも、スキマ妖怪の八雲 紫と申しますわ」



「いちおう人間の、十夜 詩音です」

「貴様らの事なぞどうでもいい。それよりも、此度は何の用で天狗の領土を侵した」

さすがに怒ってはいるか。

ただ、すぐさま攻撃してこないのはさすが長とでも言うべきかな。

「天魔殿とお話ししたく来たのですが、ここの天狗はただ帰れの一点張りで攻撃してくる始末。用件も聞いてくれないので、直接天魔殿に会おうとした次第ですわ」

あ、頭抱えてる。

いくらなんでも柔軟性が無さ過ぎる部下たちに、頭痛がする様だ。

「こんの馬鹿どもが！ 職務に忠実と言いつくし思考を停止するわ、実力差も理解できず攻撃するわ………嘆かわしすぎるぞ！」

『ひいひい！？』

あ、雷が落ちた。

比喻でも何でもなく、晴天にいきなり現れた小さな雷雲から、のさされていた天狗の近くに雷が落ちた。

おそらくは天魔の能力の一端だろうね。

天狗どもは周辺に散り散りになって隠れた。

それを見届けた天魔は、本当に嘆かわしいと言わんばかりに天を見上げてから、僕らの方へと向いた。

「まずは謝罪を。警備の馬鹿どもがすまんかった」

「いえ、こちらこそ手荒に押し入ったようなものですから、お気になさらず」

天狗の長である天魔が頭を下げているので、紫も相手を立ててこちらも謝罪する。

そうすることで相手の心証を良くして、この後の交渉に繋げるつもりらしい。

「そう言っていたけるとありがたい。そういえば、ワシと話したい事があるとか。このようなところでなく、ワシの家で話を聞こう」

「お招きありがとうございますわ」

紫が一礼するのに倣って、僕も礼をしておく。

あくまでも主役は紫なので、僕は後ろに黙ってついて行くだけである。

しばらく飛んで山を越えると、村が見える。

どうやら、あそこが天狗の里らしい。

その中で、ひとときわ大きい屋敷に案内される。

「おお天魔様、その者たちは？」

「客人だ。茶を用意しろ」

使用人が訝しげに僕らの事を聞いてくるが、天魔は要件だけ応えてずんずん進む。

そのまま天魔についていくと、客間らしき場所で座るように言われる。

しばらく向かい合って沈黙して居ると、先の使用人が茶を持ってくる。

これを合図に、天魔が紫の話しを促す。

「さて、八雲殿。此度はワシに話があるとのことだが、どのような用件かな？」

「今回の用件は、人間の勢力拡大に伴う移住先について話しをしろ」

紫の言葉を聞いて天魔は、その言葉を吟味しているように唸る。

「しばらくの間は大丈夫でしょうが、百年、二百年ほど経てば人間は勢力をさらに広げ始め、妖怪の領域を侵すでしょう」

「そうだな。そうなればこの里も規模を縮小するか、移転せねば

なるまい」

さすがは天魔と言ったところか、伊達に天狗の長ではないみたいだね。」

先見の明があるのが、人間をどうにかするべきと言わない時点で解る。

妖怪に限らず、幻想の存在は人間にその根幹を依存しているからね。」

「その移転先に、今私が創り上げている幻想郷を選んでもらいたいのです」

「ふむ、幻想郷とはどのような場所なのだ？」

さて、ここからは紫の理想が受け入れられるかどうかだ。

「幻想郷とは、人間と幻想が共存する世界。両者のバランスを保ち、幻想を生き延びさせるための隔離所です」

「……………では、天狗はどのような領域に住まうことになるのだ？」

どうやら、受け入れられたみたいだ。

先の下っ端では、ここで怒り狂っていただろう。

いずれ人間は幻想から離れる、長く生きた妖怪はそれを嘆き悲しんでいるのかもしれない。

「妖怪の山と呼ばれている場所ですが、鬼も住んでいますわ」

「そうか………義理がたい鬼ならば、我等が移り住んでも酷い軋轢などは生まれんだろうな」

確かに、鬼というのは嘘は吐かない上に、義理等は命を張ってでも通す。

うまく付き合えれば、これほど信頼できる種族はいないだろう。

「あい分かった。何人かを試験的にそちらへ送ろう。それで問題が無ければ、いずれくる時にそちらへ行かせてもらおう」

「ご理解いただき、ありがとうございます。天狗の住まいなどは数棟すでに用意してありますので、三日後に迎えに来させていただきますわ」

これにて会談は終了。

このあと、いないもののように扱われていた僕に天魔が話しかけてきて、少し驚いたりした。

紫と共に、天狗の大軍を打倒した事を評価してくれた。

スキマを通って、竹林の入り口まで戻ってきた。

「今回は話が通じる相手に良かったわ」

「そうだね。天魔殿が先の見えている妖怪だったから簡単に話が通ったけど、あの下っ端みたいな連中だと大変だろうね」

軽く仕事の感想を言いながら、紫と向き合う。

「今日はお疲れ様」

「僕は軽く暴れたただけだからそれほどでも。紫の方が神経を使う交渉で疲れてるでしょ、お疲れ」

お互いにねぎらいの言葉をかけて、今回の成果を噛みしめる。

紫の夢、幻想郷設立まで道は長いけど、今回の仕事で一步を進む事が出来た。

紫に共感する僕としても、それは嬉しい事だ。

「それじゃあさようなら」

「またお願いするわね。さようなら」

さあて、今日の夕飯は何だろうな？

今日は妹紅の初めての料理で、見栄えは良くなかったけど、一生懸命作ってくれた事が良く解って嬉しかった。

第六章 妖怪巡り 天狗編 (後書き)

東方よくあるテンプレオリキャラこと天魔さんにご登場いただきました。

今後話に絡むかは、いつも通り未定。

第七章 数百年ぶりの再会 (前書き)

べ、別に、諏訪子のこと忘れてたわけじゃないからね！  
ただ………再会話が作りにくかったです。



## 第七章 数百年ぶりの再会

「……………妖怪ゲットだぜ！」

「……………さすがに、飽きたみたいね」

紫の可哀想な物を見る視線は、小妖怪にかじられている手よりも痛い。

手にかじりついている小妖怪を、後ろにあるスキマに放りこんでから座りこむ。

「こつも歯ごたえが無くて単調だと、作業にしかならなくてね」

「作業だから仕方ないじゃないの」

今やっている作業は、幻想郷に小妖怪を補充することである。

この間、紫が人間が減りすぎないように退魔師を流入させるようにしたら、小妖怪が減りすぎてしまったのだ。

そこで、小妖怪を過剰供給、淘汰させることで質のいい小妖怪をそろえようとしている。

が、ただ小妖怪をスキマに放りこむだけの作業なので、とんでもなく暇。

最初あたりは、紫と会話しながら適当に放りこんでいたけど、後半は無言で延々と放りこむ羽目になった。

「そうだ、少し気になってる事があったのよ」

「……………なにが気になってんの？」

正直、気が紛らわせられるなら、天気の話のようなどつでもいい事でもいい。

「詩音がこの間見せた、武器を飛ばす技あるじゃない」

「ソードバレルがどうかした？」

天狗狩りの時は、ギルガメッシュでは加減が利かないから、エミヤにしたんだけど。

というか、喉が渴いたな。

「金気よ、水気よ……………ほら」

「あら、ありがとう」

金気でカップを作り、水気を溜めて飲み水を作る。

適度に喉を潤しながら、紫の話を聞く。

「ん……………はあ。それで、建御名方神が洩矢神に「ぶふっ!? げほっ!?!」……………何してるの詩音？」

油断していたところに来た、予想外の話題で吹いてしまった。

「今の反応で確信したけど、一応続けるわよ。建御名方神が洩矢神に攻め入った時に、多くの手下を失ったのだけど、それを為した神はあなたのように武器を飛ばしていたらしいの」

「……………それは僕です」

幸せ絶頂で意識の隅に追いやっていた事を、完璧に思い出しました。

「道理であんなに強いわけね」

「いや、そこは鍛えてる分もあるからね。今は神様じゃないし」

行かないと、行かないとなあ……………よし、行こう！

ここで決めておかないと、延々と引きずりそうだな。

「会いに行くのね？　ここで、あなたが封印とかされると困るのだけど」

「それは無い。一発二発殴られるだろうけど、敵対しなければ諏訪子はそう言うことはしないよ」

久しぶりに諏訪子の事を話したら、懐かしい気持ちが溢れる。

そうしたら、今まで避け続けてきたのが馬鹿みたいに、諏訪子に会いたくなってくる。

「情けなさぐらい、どうでもいいことじゃないか？」

ああ、本当に馬鹿だ僕は。

「諏訪大社に、一名様ご案ない」

「ちょ、心の準備が!？」

どんと押されて、スキマに落下してしまっ。

「……………っ」と

なんとか足から着地し、あたりを見渡す。

周りの参拝客が、驚愕の目でこちらを見ている。

「ど、どうぞ御気にせずに」

そそくさと人ごみにまぎれようとしたが、僕の周りだけ空白地帯になってしまっ。

しばらく、愛想笑いを振りまきながらそんな事を繰り返している  
と、突如影が射す。

「皆の者離れよ! そして、滅せよ妖怪!」

「やば……………土生金、反り立て!」

上から流星の如く落ちてくる御柱に対し、地面の土気から金気を  
精製し鉄の壁を創る。

「やるな妖怪！　だが、これは防げるか！」

そう言うと、八坂はさらに御柱を投げってくる。

「……………ちよ、ま……………話を……………聞いて……………  
……………くれない……………かな!？」

必死に回避しつつ呼び掛けるけど、全然聞こえてないみたい。

準備なしで神様と戦うことになるなんて、勘弁してほしい。

せめて、能力を行使できるだけの間が欲しい。

やたら怒っているのに、御柱の落ちる場所が計算しつくされている。

正直、逃げるのも精いっぱい。

神気の余波が僕を叩いて、体制が不安定で居続けるためきつい。

「そ、そっだ！」

起死回生の一手を閃いた。

力の溜めがある能力とは違って、封じてるものを外すだけなら何とかなる。

神気を解放し、出来る限り放出。

「二発ほど御柱を避けると、そこで御柱は来なくなつた。

「神気だと？ 勘違いだったのか？ まて、この神気はどこかで  
ふふふふふふ」

「・・・・・・・・え？」

怒気も収まり、どうにかなつたかなと思つたところで、八坂が壊れる。

「そうか、そう言うことだったのか。貴様のせいで私は、私は、  
私は・・・・・・・・」

「な、何の事でしょう？」

ちよつと待てよ？

僕の神気 何かに気が付く 壊れる。

ここに今思いついたことを入れてみる。

僕の神気 僕の正体に気が付く（諏訪子の夫だつた） 諏訪子が  
意味もわからず暴れた原因かも？ 胃の恨み晴らさん！

「やばい・・・・・・・・」

びゅっびゅっとな風が吹いてくる。

「ふふふふふふ・・・・・・・・胃の恨み晴らさんでかー！」

「や、やっぱりー！」

周辺地形が変わらないように飛翔。

王の財宝のように飛んでくる御柱を、時折魔力解放で急速回避しながら避ける。

そして、もう何発避けたか分からない時に、懐かしい神気を感じる。

「蛙は口ゆえ蛇に吞まるる」

「はぶあ！？」

ぱつくん。

そんな擬音が聞こえそうな位見事に、八坂は石の蛇に吞まれた。

「まったく、神奈子は暴れん坊なんだから」

体は知らない、けど魂が知っている澄んだ声。

「久しぶりだね、詩音」

「うん………久しぶり、諏訪子」

数百年前と変わらぬ姿で、諏訪子はそこに居た。

気絶した八坂を屋内に入れ（諏訪子が背負っていたため、膝下がぼろぼろになった）、今は二人して茶を飲んでいる。

「まさか、普通に彼岸に行ってたなんてね。神霊になってないから消滅したのかと思ってたよ」

「それ、向こうで大騒ぎになったよ。結局何もわからなかったけど、数百年ほど僕の神性も調べてたし」

お互い、今までの報告をし合う。

「それにしても、女顔なのは変わらないんだね」

「それ言わないで」

男なら男らしくなりたかったよ。

マッスルにはなりたくない、ネタとしては好きなんだけどね。

「ところで、退魔師の家に生まれたって言ってたけど」

「ん、それがどうかした？」

嫌な予感がしてきた。

あれ、なんだか寒気が。

「十夜って家？」

「そ、そうだけど……」



あ……………まさか……………。

「十夜 詩音と言えば、かぐや姫って美人さんと情熱的な結婚をしたって話しだね。詩音と同姓同名の人がいるんだね」

「それ、僕です……………」

すぐさま土下座。

輝夜と結婚したことに後悔はないけど、諏訪子に一度も会わずにそう言う事をしたのは謝る。

「ふーん、こっちは詩音が居なくなってから泣いて泣いて泣き続けて、原因の神奈子にあやされまでしてたのに、詩音は新しいお嫁さんとよろしくしてたんだ」

「……………本当にごめん」

ぼたぼたと、僕の頭に何かが降ってくる。

「……………詩音はその子と結婚した事を謝ってるの？」

「それは謝ってないよ。ただ、その前に一度でも会いに来なかった事を謝ってる」

そう応えると、僕の頭を諏訪子の小さな手が掴んで持ち上げる。

視界に移った諏訪子は、泣きながらも笑っている。

そして、そのまま頭をぶつけられた。

「これで許してあげる。結婚を後悔してたら、こんなもんじゃなかったからね」

「うん」

諏訪子は涙を拭くと、晴れ晴れとした笑顔を見せる。

「とつくの昔に振り切ったと思ったんだけど、詩音の顔を見てたらつい出てきちゃったよ」

「……………彼岸で、もっと早く戻って来れるようにすればよかったな」

綺麗にまとまってしまったけど、今の僕は実質二人の妻がいる事を言わないといけない。

後回しにしている事はないと、よく実感したからすぐに言おう。

「……………諏訪子、もう一つ話す事があるんだけど」

「何？」

凄い機嫌がよさそうだけど、今度は怒りに燃えるのだろうなと思う。

「実はもう一人妻が……………」

「二人も三人も一緒だからいいよ」

はい？

「えーと、幻聴？」

「結婚しちゃったのは仕方ないけど、私は詩音を手放した気はないよ」

はあ、輝夜たちになんて説明しようか……。

「あ、そうだ。分社代わりのご神体持ってくるから、少し待って」

「そう言うのは、ここに倒れてるのに聞かなくていいの？」

まだ突っ伏したままの八坂を指さす。

「へーき、へーき」

「ならいいけど」

そのまま諏訪子は、宝物庫か何かへ向かった。

それを確認した後、意外と気を利かせていた物体に話しかける。

「で、いつまで寝てんの？」

「……………せっかく空気読んだのに、それは無いだろう」

八坂はのっそりと起き上り、膝下の服に着いた土埃を神力で払う。

「それにしても、三股とは恐れ入った」

「どちらかと言えば二股だけだよ……………」

輝夜、妹紅ペアと諏訪子という二股。

「あー、ようやく胃薬から解放される！」

「胃薬……………噂は本当だったんだ」

さすがに、神が胃薬は無いと思ってたんだけど。

「胃薬が美味いんだぞ」

「すいませんでした！」

何だろう……………この胸に来る切なさは。

「あ、神奈子起きたんだ……………起きなくてよかったのに」

「う……………また、胃が」

どれだけ、諏訪子に弱くなってるんだよ。

「まあ、神奈子はどうでもいいや。ほら、これなら持ち運びしやすいでしょ、詩音」

「お、まさかこれって、僕が使ってた髪紐？」

前世の時に、耳の前で伸ばしていた髪を束ねていた紐である。

髪の毛には力が溜まりやすいため、髪紐等は力を宿しやすい。

神だった僕の髪の毛を束ねていた紐は、かなりの神力を蓄えている。

「これに私の神力を注いで……よし、これで分社代わりになるでしょ」

長さが足りなくて多少不格好だけど、以前と同じ場所に髪紐を付ける。

今度、もう少し伸ばそうかな。

「じゃ、帰った帰った。早く詩音のお嫁さんに会いたいからね」

この様子なら、輝夜たちが受け入れてくれれば修羅場にはならないよね？

通信符で紫を呼んで（神奈子が撃退に出てきた。諏訪子に押さえつけられたけど）、スキマで帰宅した。

諏訪子と呼ぶ前に全部説明しておいたら、諏訪子が来た時に被害者の会を開かれました。

ちなみに、前世で神様やっていた事については

「「「ああ、やっぱり」」」

あれだけの強さを誇っていたのだから、それぐらいでは驚かないとのことでした。

結局は、以前と変わりない生活に、時折諏訪子が遊びに来るようになりました。

ただ、肩身の狭さが以前より増したのは間違いないです。

やっぱり女性は強い……ああ、だから東方は女性ばっかなのか。

そんな事を悟った一件でした。

第七章 数百年ぶりの再会 (後書き)

正直、今回は難しかった。

感想で言われて、ようやく諏訪子と再会話を書けたのですが、分量がいつもより少ないです。

諏訪子が意外と淡泊だったのは、年月のせいです……嘘です発想力不足のせいです。

こんな駄文ですが、いご流魂記を見て頂けると幸いです。

第八章 短編集『夢』 (前書き)

なんだか、雰囲気似た話ばかりだけど、気にしないでもらえると  
うれしいかなど。



## 第八章 短編集『夢』

「月の科学、おそるべし」

月製の空調機の性能が凄すぎる。

両手に乗る程度の大きさで、結構な広さを誇る永遠亭をカバーしきっているのだから。

他にもいろいろな月製品で、永遠亭は先進ライフを送っている。

月が輝夜を迎えに来た時の牛車に、永琳が輝夜の嫁入り道具としていろいろ持ってきていたのだ。

情報があれば大抵予測しきるのだから、永琳はすごいよ本当。

「はぁー」

諏訪子との再会を果たし、家での立場が殊更低くなったけど、それでも愛されているので頑張りました。

具体的に言うと、小妖怪補充計画。

計画完了最終日の僕と紫は、とても見せられたものじゃありませんでした、黒歴史です。

まるで世紀末のモヒカンのように、過剰な力を行使しながら小妖

怪を幻想郷に送りました。

帰って寝て、次の日の朝に皆にお疲れさまとか、ゆっくり休んでと言われた時に、前日の事がフラッシュバックして頭を抱えました。

紫からも、お互い忘れよう、疲れてただ休もうとの旨が書かれた書状が来たりしました。

それで、今日はぐったり寝転がっている。

「……………うん」

「……………しおん」

「……………かなこ、さいきん……………なんでもない」

ただし、両脇は輝夜と妹紅に固められ、上には諏訪子が乗ってるけど。

諏訪子の寝言が、若干気になる。

最近、八坂が不憫になってきた僕です。

胃薬の量は減ったけど、それでもまだ必要とのこと。

「ふあ……………」

ああ、僕も寝ようかな。

その一 諏訪子の帽子

「うーん」

「どうかしたの詩音？」

民に神託を与えて戻ってきた諏訪子の、目玉の付いた帽子を見て唸る。

「いや、その帽子って何なのかなって思って」

「あ、私も気になってました御母さん」

僕の疑問に、娘の早苗も乗っかってくる。

今の帽子の様子は、どこからか出てきた目蓋も使って、笑っている目を表現している。

「ああ、これのこと」

諏訪子が帽子を外す。

すると、目玉は眠りに就くように閉じてしまった。

「これはね、私の姿を誤魔化してくれる神具なんだよ。ほら、こ

のなりだと威厳ないし」

「ああ、そういうことだったのか」

「それで、御父さんと御母さんが逆のように言われてたんだ」

ちよつと待て。

「早苗……それはどういう事？」

「えーと、民の人は御父さんが私を生んだものだと思じてて」

「あー、確かに私がこの帽子付けてると、大蝦蟇の様に見えるはずだから。詩音の容姿を考えると……ね」

道理で巫女扱いだったわけだ……先代の洩矢の使いが笑った理由が、ようやく理解できたよ！

「ほら、情けなく落ち込まない。詩音が男らしい事は、私が良く知ってるんだから……それじゃ駄目？」

「そんなわけない。諏訪子がそう思ってくれてるなら、耐えられる」

そのまま抱き合う。

しばらく二人で甘い空気を作っていると、早苗が居なくなってる事に気が付いた。

「あちゃー、気を使わせちゃったかな？」

「後で、埋め合わせしておこうか」

そんな事を言いながら、二人揃って離れる。

際限なくすと、完全に動かなくなってしまうので。

それから、諏訪子が帽子を被っているのを見て疑問がまた出てくる。

「その目玉って、なんで動くの？」

「これは、基本私の感情に会わせて表情を変えるようになってるの。外すときは寝る時とかだから眠ったふうになるし」

別に、生きてるわけではないのか。

「なるほどねえ。言われてみれば確かに」

記憶を振り返ると、諏訪子と連動している事がわかる。

一緒にいろいろな表情をする諏訪子が浮かんで、萌えた。

「さて、そろそろ動こうか」

神様稼業を開始するために、二人揃って行動を始めた。

後日、諏訪子が昼寝しているのを見つけた早苗。

「あ、御母さんは何もかけないで寝て……………」

諏訪子にかける布団を持ってきて、僕はそれを見る事となった。

「あ、蚊が」

ひよい、パク。

「え？」

え、帽子の下から何かが出て、蚊を引っ攫って行って……………えー!?

「!？」

目が合った……………合ってしまった。

じりじりじりじり……………。

「ひ、秘密にしてほしいの？」

ぽいぽいぽい。

帽子が半ばで凹んだりして、顔いているように見える。

「わ、分かっただから、泣かないでね……………ね？」

泣きやんだ帽子にホツとして、胸をなで下ろしている。

「じゃ、じゃあね？」

それだけを言うと、その場を去って行った。

.....。

「もう、出て行っても大丈夫かな？」

一部始終を見ていた僕は、様子を窺って帽子が寝ているのを確認した後、諏訪子に毛布をかけて退室するのであった。

## その二 ZUN帽

「な、ななななななな.....なんで紫になってるんだ！  
？」

朝起きて鏡を見ると、そこには紫がいるではありませんか。

髪は長くなった上に金色になっているし、瞳も紫に。

服装も、女性ものの寝具になっている。

「.....かなさいましたか詩音様！？」

使用人が駆け込んできて、そのまま十夜家はパニックに陥るのだった。

「まずは、今までを振り返ろう」

昨日の夜は依頼終了の祝いに、藤原様と酒を飲んでいたはず。

藤原様が泥酔していたからそこはあてにならない。

そのあと、飲みすぎだと止めに来た妹紅ちゃんの態度は普通だったのは覚えている。

「つまり、この時点ではこんなことにはなっていなかった」

そこから帰って、従者に迎えを受ける。

まだ、変化は無し。

そのまま用意されていた服に着替えて、就寝………やけに寝つきが良かった気がする。

怪しいのはこの時間帯か。

泥酔状態だった僕に気付かれない程度に、軽めの暗示を隠蔽して掛けてきたのか。

そして、僕は女ものの寝具に自分で着替えさせられ、寝てる間に髪と瞳を弄られたと。



犯人は紫だと分かっているので、視線を感じ次第捕えないと。

「良く見ると、微妙に紫とは違うみたいだね」

こうすると紫そっくりなのだけど、その分だけ僕と紫の表情や仕草の違いがはっきりと見て取れる。

僕には、あの胡散臭い笑みはできない。

と、そこまで考えたところで、ある物が無い事に気が付いた。

東方の人気装飾具である帽子。

ZUN帽である。

ドアノブカバーの様な形状の帽子で、何人が被っていたはず。

だけど僕の記憶には、紫がZUN帽を被っていた物はない。

「ちようどいい、作って見るかな」

こうして僕はZUN帽子を作ることにしたのだった。

わざわざ布屋に素材を見に行き、紫のZUN帽と同じ色合いの布を探し出す。

円筒状に布を固定してみるも、全然思っていたのと違った。

「むう……」

失敗は成功の母。

次は、忘れていたひらひらが出来るようにしてみたけど、なかなかうまくいかず、五回目にちゃんと見れるひらひらになった。

だけど、リボンを巻いて締めるとすっぱ抜けてしまった。

「あつれー？」

失敗は成功の母。

今度は、円筒をの中間地点だけを窄めるようにしてみた。

見事リボンが綺麗に巻けたけど、サイズがあってなくてずり落ちた。

「僕の阿呆」

失敗は成功の母。

次こそ最後と、細心の注意でひらひらや形状を整えて、リボンを結び付ける。

念には念を入れて、材質強化でそう簡単に型崩れしないようにした。

被って見て、扇子で口元を隠すとあら不思議

「おお、紫だ」

八雲 紫の完成。

いい仕事をしたと額を拭うと、ZUN帽が取られた。

「へえ、結構可愛いわね……これ、貰うわ」

「あ……」

さっとスキマに逃げられてしまった。

しばらく呆然と僕は突っ伏していた。

布の代金 庶民一人の一月分以上。

買い出しから完成までの所要時間 十三時間程度。

僕の情熱と努力 プライスレス。

「うん、なんだかしくくりとくるわ」

ああ、髪と瞳は呆然自失から復帰した時に治ってたよ。

その三 妹紅のリボン

「詩音様、御邪魔してます」

「いらっしやい。今日は藤原様と一緒にじゃないんだ？」

仕事から帰ってくると、縁側の定位置に妹紅ちゃんが座っていた。

「は、はい！ えっと、その、あの……」

「ほらほら落ちついて」

あたふたと、混乱したように手を動かしていた妹紅ちゃんの肩を押さえて落ちつかせる。

さっきの感じからすると、何か僕に個人的な用があるみたいだけ  
ど。

「それで、僕に何か用かな？」

「……お、御祭りに一緒に行きませんか？」

ああ、そういえば近くの神社で御祭りをやっていたな。

結構大きい神社なので、半現代人の僕でも十分楽しめると思う。

「あ……ごめんなさい！ お仕事帰りで疲れてるのにこ  
んな事……」

「いや、いいよ。妹紅ちゃんが良ければ、僕と一緒に行かない？」

ちょっと考え事をしていたら、急激に妹紅ちゃんがしぼんでいったので少し焦った。

「い、いきますー！」

こちらから誘い直してあげると、花開くように笑顔に戻ってくれたのでひとまずはよし。

「せっかく着飾ってきてくれたのに、断ることなんてできないしね。良く似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます」

うん、照れていてとっても可愛らしい。

その姿には、赤い着物が良く似合っていた。

「ちょっと、僕も着替えてくるから待っててね」

「はい、待ってますー！」

あんなにはしゃいで、珍しいな。

妹紅ちゃんを待たせるわけにはいかないのです、さっと着替えて来る。

「お待たせ妹紅ちゃん。さあ、行くうか」

「はいっー！」

離れないように手をつかんで、妹紅ちゃんの歩幅に合わせて歩いた。

「わあ……………」

「なかなか賑わってるね」

薄暗くなってきた世界を、幾百もの提灯や灯籠等が照らしている。

現代と違って、火の明りであるそれは幻想的な雰囲気醸し出している。

妹紅ちゃんと一緒に、ゆっくりと祭りを見て回る。

見慣れない物ばかりの露天に、妹紅ちゃんは目を輝かせている。

「だけど、何も買わない。」

「一瞬物欲しそうな顔をするのだけど、思いとどまってしまうのだ。」

「どうしたの妹紅ちゃん？ 欲しいものがあるなら買えばいいのに」

「……………その、はしたくないですか？」

ああ、現代人の感覚が残ってる僕では、貴族の子である妹紅ちゃん

んとそのあたりに差が出来ていたらしい。

「せっかく来たんだから、良いと思うよ。藤原様には僕が言っておくし」

「じゃ、じゃあ……あのお店に行つていいですか？」

その問いにもちろんと答えてあげると、妹紅ちゃんは嬉しそうに僕を引つ張るようになった。

元気なのはいいことだよ。

そのあと何件か店を回り、ゆっくりと歩いていると見知った顔を見つける。

「あれ、服福（服屋）の旦那じゃないですか。お久しぶりですね」

「おお、詩音様。これは奇遇ですな」

挨拶をすると、焦つたように返事が来た。

「どうやら、また勝手に抜け出してきたなようだ。」

服福は十夜家御用達の服屋なんだけど、この人はそんな名店の主人なのに、こつやつて脱走して物を売っている事があるのだ。

「また抜けだしてきましたね」

「まったく、皆さんいつも心配してますよ」

「あはは……妹紅様にまで言われてしまうとは、まいっ  
た」

少し呆れていると、僕の目にあるものが入った。

赤い粹取りが外から内に三つほどされた、若干横に長めで上質な  
布。

ある事を思いついたので、購入する。

「主人、ほどほどにしておくように」

「もう少ししたら戻りますわ！」

主人と別れ、また歩き出す。

「詩音様は先ほど何を買われたのですか？」

「んー、内緒」

妹紅ちゃんに上げるものなので、内緒と言っておいた。

この後は、神社でやっていた舞を二人で見えて感動したり、足が疲  
れた妹紅ちゃんを肩車したりして祭りを楽しんだ。

「はい、到着」

「詩音様、ありがとうございました」



藤原様の屋敷に着いた。

肩車の件は乗せた当初は謝られたけど、気にしないように押し切ったので何も言わない。

「今日は、本当に楽しかったです」

「そう、それは良かった」

本当に楽しそうだったので、僕も付き合った甲斐がある。

あとは、あれを渡してあげないと。

「妹紅ちゃんお願があるんだけど、少し向こうを向いててくれるかな？」

「・・・・・・・・・・？」

妹紅ちゃんを後ろに向かせて、僕はさっきの布を取り出す。

「ちよっと、髪に触るよ」

「はい・・・・・・・・・・っ」

あ、ちよっとくすぐったかったみたい。

手早く丁寧に、布で頭上に髪を纏めてあげる。

リボンのように縛ってあげれば完成だ。

「金気よ、火気よ。ほら妹紅ちゃん、見てごらん」

金気で鏡を作り、火気で光源を作る。

妹紅ちゃんにそれで創った鏡を渡す。

「わぁ………!? 詩音様、嬉しいです!」

「気に入ってくれてよかった。うん、似合ってるよ」

浮かべてくれたいい笑顔を、心のメモリーに保存する。

確認するようにリボンに触れながら、妹紅ちゃんのはしゃいでくれた。

「詩音様、この髪留めずっと大切にしますね!」

「はは、そんなに気に入ってくれてうれしいよ」

「おお、良かったな妹紅」

門前で騒いでいたからか、藤原様が出てきた。

「あ、すみません。うるさかったですか?」

「いやいや、気にしなくてもいい。それよりも、家の妹紅がすまないな」

二人で、妹紅ちゃんを微笑ましく見ながら会話する。

「いえ、僕も楽しんでいましたから」

「それは良かった」

そのあとは、妹紅ちゃんを寝かしつけてから酒飲みに移った。

帰り際に、妹紅ちゃんの寝顔を見て行かされ（女の子の寝顔を見るのは宜しくないけど、藤原様に押し通された）、リボンが丁寧に畳まれて置かれているのを見て嬉しくなった。

その日の後、妹紅ちゃんはそのリボンを愛用してくれ、ぼろぼろになっても同じ柄の物を愛用。

しかも、ぼろぼろになった奴も丁寧に取っていてくれてたよ。

#### その四 妻とその親友

雀の鳴き声が響き渡る。

僕の意識がゆっくりと浮上する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

上半身を起こして、ぼろっとする。

だんだんと頭が回ってきて、経験から今の時間を把握する。

「まだ、起きなくてもいいかな」

「……………ん」

隣に寝ている輝夜が震える。

僕が起き上った隙間から、冷気が侵入してしまったみたいだ。

時間もあるので、また布団に入って輝夜の寝顔を眺めることにした。

輝夜の髪をかき上げて、僕も顔を近づける。

「……………おお」

偶然指が耳たぶに触れて、柔らかかったのでつい掴んでしまった。

ちょっと癖になりそうな柔らかさである。

「……………しおん？」

「あ、起こしちゃった？」

ぱちつと輝夜の目蓋が開く。

「ちよつとくすぐったかった」

「ごめん、柔らかかったからついね」

耳たぶから手を離して、輝夜の頬に当てる。

「おはよ輝夜」

「おはよつ詩音」

顔を寄せて唇を当てる。

一度離れるけど、今度は輝夜からしてくる。

そのまま、唇を啄みあう。

結局、昨夜に続いて新たなラウンドを繰り広げてしまった。

若干搾られた感があるけど、今日は仕事もないので大丈夫。

「それで、妹紅がね今日来るのよ」

「お、久しぶりだなあ」

そう言っつて味噌汁を啜る。

近頃、妹紅は家に来なくなっていた。

別に喧嘩したり仲が悪くなった訳ではなく、妹紅自身の気持ちの整理と、僕らに遠慮しての事だと本人から聞いていた。

「ああ、はやく来ないかしら」

「そうだね、楽しみだ」

「そう言ってもらえるとうれしいです」

会話していて、何も口に含んでなくて良かった。

妹紅が、部屋の入口にいつの間にか現れていた。

どうやら、使用人が気を利かせたようだ。

「食べ終わるまで、いつものところで待ってますね」

「ええ、すぐ行くわ妹紅」

「本当、久しぶりだもんね」

朝食を終える。

輝夜を先に行かせ、僕は茶を用意しに台所に向かう。

盆に茶を載せて、妹紅の定位置である縁側へ進む。

「……………って詩音がいったのよ」

「確かに、詩音様ってそういうところありますね」

どうやら、僕が話題のタネにされているようだ。

「二人とも、隠れて僕の話話を話してるなんてひどいじゃないか」

「ふふふ、妻とその親友だから」

「問題無しですよ詩音様」

もう少し若い時は、やんちゃで喧嘩友達って感じの二人だったけど、成長して女らしくなったらお淑やかになったんだよね。

「それで、何を話してたの？」

「「内緒」」

あらら、女同士の秘密ってやつだね。

一日全部使って、皆で積みりに積もった話をした。

輝夜が妹紅に泊まるように言ったので、客間に二人分の布団を用意させた。

女同士での話もあるだろうから、明日は二人とも寝不足かなと笑みが浮かぶ。

「「お背中お流しします」」

「……………な、なんで!？」

僕が風呂に入っていると、輝夜と妹紅まで入ってきてびっくりしま

した。

小さい頃とは違って、女らしい曲線がまぶしかったです。

輝夜とそういう事やってるのだけど、風呂場でっていうのはまた違った恥ずかしさがありました。

「小さい頃にもやった事在るけど、詩音様の背中変わらないですね」

「意外と遅しいのよね。それでいて女らしさを失わないっていうんだから、とんでもない話よ」

「女らしいって……」

いや、分かっていた事だからいいんだけどね。

嘘です、やっぱりショックです。

なんて、微妙に僕の心に傷を付けたりしながら、お風呂イベントは終わった。

久しぶりに一人で寝て、一人で起きる。

二人の様子を見に行ってみると、仲良く同じ布団で寝ていた。

少しはだけていた布団をかけなおしてあげて、嬉しそうに抱き合う二人を目に納めた。



昨日は本当にいい日だった。

今日もいい日になるといいな。

その五 夢から覚めて

「……………」

目が覚めると、外が暗くなってきた。

どうやら、かなり寝ていたみたい。

皆もまだ寝ていて、定位置から一切移動していない。

寝る前と違うのは、かけられた布団ぐらい。

「御目覚めですか？」

「うん。布団ありがとう永琳」

いつの間にか現れた永琳に、布団の礼を言っておく。

「そろそろ夕飯が出来るので、姫様達をお願いできますか？」

「うん、まかせて」

返事を聞いて、永琳は一礼して炊事場に戻る。

そつと、輝夜と妹紅に捕まれた腕を外して、上に陣取る諏訪子を起す。

「諏訪子、そろそろ起きようか」

「……………あ、詩音。うえ、もうこんな時間かあ」

少しふらふらしていたけど、すぐに時間まで把握してくれた。

「そろそろ、帰った方がいいんじゃない？」

八坂はあれで面倒見がいいので、帰って来ない諏訪子にやきもきしているのではないだろうか？

「うん、そうさせてもらつよ」

「ちょっと待って、二人も起こすから」

そう言っつて今度は輝夜と妹紅を起こす。

ちなみに僕は体を起こしたけど、まだ諏訪子が膝の上に乗っています。

「……………おはよう？」

「……………？」

二人ともまだふらついている。

「もう、夕飯の時間だよ」

「「もうそんな時間!？」」

僕のその言葉に、二人して目を覚ます。

「うわ、凄く寝ちゃったわね」

「本当。せつかくの詩音の休日なのに、ちよっともったいなかったですね」

「あー、そういえばそうだよね」

「僕としても、もう少し何かしてあげたかったかも」

寝て過ごすなんて、凄く贅沢な時間の使い方をしてしまったな。

「これはこれで良かったんですけどね」

「それもそうね。また今度何かしてもらおうかしら」

「それがいいと思うよ」

「その時は、精いっぱい持て成させてもらうよ」

次休みが出来たとき、何をしてあげようかな。

ま、考えるのは後にして、今は諏訪子を帰そう。

「諏訪子、八坂はいいの？」

「おお、そうだった。じゃ、そういうことで詩音に輝夜に妹紅、さよなら」

「ええ、またね」

「気軽に来てくださいね」

神力の残滓を残して、ふっと諏訪子の姿が消える。

諏訪大社に戻ったのだろう。

「姫様、旦那様、妹紅様、御夕飯が出来ましたよ」

永琳が呼びに来たので、皆揃って食卓へ向かう。

「……いただきます」「」「」

四人で囲む食卓は、明るくて暖かいものである。

「あ、妹紅。お醤油とつてくれる？」

「はいお醤油。永琳、そっちのお皿寄せてもらえる？」

「これでどうですか？ あ、詩音様こちらの煮物をどうぞ」

「ありがとう永琳。うん、おいしいや」

いつも、僕が遅くなるかと帰ってくるのを待ってくれる妻たちに  
心の中で感謝をする。

こんな日常を続けられるように、皆で頑張っていけたら、それは  
とても幸せな事なのだろう。

だから、僕たちは幸せなんだと胸を張って言える。

これが、僕らの日常だから。

## 第八章 短編集『夢』

(後書き)

今回は、今までのカットされていた日常部分を短編にしてみました。  
諏訪子、紫、妹紅、輝夜、永遠亭の順です。

駄文ですが、心を温めてくれたら、自分の目的は達成されています。  
それでは、また会いましょう。

第九章 妖怪巡り 鬼編 (前書き)

たぶん機能を扱えるようになったので、感想とか書いてくれると嬉しいです。

## 第九章 妖怪巡り 鬼編

大仕事の後の休暇を、輝夜と妹紅と諏訪子の三人とだらだらしながら終え、黒歴史も記憶の奥底に封印完了。

心機一転して紫からの連絡を待つも、なかなか連絡が来ないのでこちらから連絡する。

「……………あ、紫。詩音だけど、そろそろ仕事しないの？」

『……………ぐすん。うああああ、私のバカバカバカ!』

通信符の向こうで、紫が悶えているのが聞こえる。

ああ、僕は皆がいたから回復早かったけど、一人だった紫は延々と黒歴史に悩まされているみたい。

「一人でいると余計酷いだろうから、仕事に打ち込んで忘れよう?」

『……………そうね、そうするわ』

すぱっと空間が別れて、中から紫が出てくる。

その顔は、らしくもなく憔悴している。

どうやら、羞恥心は妖怪を殺しかねない劇薬らしい。

「今日仕事終わったら、いっしょに酒を飲もう。いい酒出すから」



「ありがとう。じゃあ、頑張らなくちゃね」

紫を励ますため、数百年ぶりに王の財宝から神酒を出そうと思う。筆舌しがたいほど美味しいのだが、一つ難点がある。

美味すぎて、数カ月は普通の酒が飲めなくなってしまったのだ。

昔諏訪子と飲んで、二人してそれを実感した。

普通にいい酒をそこらの安酒なみに感じてしまっから、しばらくは味気ない生活を送る羽目になった。

まあ、今ここで一気に持ち直させるにはちょうどいいと思う。

「それで、次は何をするつもりだったの」

「そうね………鬼に会いに行こうかしら」

少し調子を取り戻してきたのか、うっすらと笑って言った。

「鬼は、十分妖怪の山に居たはずだけど？」

「天狗が追加人員をそろそろ送りたいらしいから、家の建築とか天狗が増える事とか話にね」

交渉だけなら紫一人だけで十分なはず。

なんで僕も一緒に行くのだろうか、他の仕事をさせた方が効率が

いいのに。

「不思議そうね。大方交渉だけなのに詩音を連れていく理由が分からないのでしょうか？」

「うん、僕に他の仕事をさせた方が効率良くない？」

僕の言葉に紫が苦笑する。

「確かにそうなのだけど、今回の相手は鬼。力比べが大好きな鬼は強い相手を見つけると……」

「……なるほど。それを僕に任せて、紫が交渉に専念するんだね」

正解とでも言うように、扇子で僕を指した。

鬼と戦うとなると、一番はヘラクレスかな。

真つ向勝負を好む鬼だから、好意的に受け入れてもらえると思う。

「じゃ、行きましようか」

ふわりと浮き上がる。

上空から永遠亭を初めて見るけど、結構な広さを誇る永遠亭が、長大な竹林と霧のせいではぼ見えないのだから凄いものだ。

妖怪の山の方角へ、靈気の流れに沿って進むことで竹林上空の霧から抜け出る。

迷いの竹林から人里の上空を越え、しばらく進むと妖怪の山へ入る。

しばらく飛ぶと、家屋が見える。

家屋を作る妖怪はなかなかいないので、おそらくは天狗たちの住処だろう。

「一度降りるわよ。天狗も一匹引つ張っていかないとだから」

「ああ、当事者として必要か」

そのまま、天狗の里に下りる。

すると、一軒の家から天狗が飛び出してきた。

「これは八雲様。今日はどのような御用件で？」

「天狗の家屋建築とさらなる移民を鬼に伝えるに行くので、このご責任者も連れていこうかと思ひまして」

話を理解した天狗が、個々の責任者らしい天狗を連れてくる。

「お待ちせいたしました」

「じゃあ、行くわよ詩音」

「りょーかい」

特に言葉を交わす事もなく、再び飛翔。

さらに山を上り、所々洞窟が見える場所へやってきた。

僕らに気が付いたか、鬼がぞろぞろと現れる。

鬼たちに見られながらも、ひときわ大きい洞窟の前に紫は降り立ち、僕もそれに続く。

「や、久しぶりだね紫」

「あら萃香、久しぶりね」

妖霧がかかったかと思うと、それが密集して小さな鬼となった。

伊吹 萃香。

いつつも酔っ払っている鬼で、鬼の四天王だったかな。

「お、なんで人間がここにいるんだい？」

うる覚えな東方知識を引き出していると、さらに鬼が現れる。

体操着っぱいものを上に着た、星柄の一本角が特徴的な鬼。

星熊 勇儀。

萃香と同じく、鬼の四天王だったはず。

「へえ………あんだ人間なのに、なかなか楽しめそうだね

「！」

「そうだね、勝負しよう勝負！」

いきなり勝負しようと鬼二人に詰め寄られるが

「こーれ、客人をもてなす前に勝負挑んでんじゃないよ！」

二人が、姫の様な鬼に殴り倒される。

二人はそのまま気絶してしまふ。

長い黒髪に切れ長な目、雅な着物に包まれた姿はどこかの姫に見えるけど、額から伸びる短いながらも力強い角が、姫が鬼だと主張している。

姫と言ったが、輝夜の様な平安の姫ではなく、戦国の姫といった女傑具合が窺われる。

「お久しぶりですわ、鬼子母神様」

「紫よ、吉祥果さくもで良いと言ったであろう。今更堅苦しく呼ぶでない」

鬼子母神は確か鬼の母……だよね？

しかも名前の通り、鬼でありながら一柱の神様である。

「吉祥果様、本日は天狗の件について御話に来ましたの」

「おお、また増えるのか、よきかなよきかな。いつでも妾は歓迎するぞ」

さすがは母といった感じで、懐が深く広い。

前世からこつち、母は皆早死にしていたので母性を大きく感じる。

「あとは、前のように家の建築をお願いしたいのです」

「ふむ、どの程度立てておけば良いかの？」

その質問に、紫は少し悩んでから言う。

「とりあえずは十軒ほど。後は天魔様をお呼びしまするのでその時に」

「ふむ、了解した。それで……その男は紫のいい人か  
の？」

いきなりこつちに話が飛んできたし。

「いえ友人です。紫の理想に共感したので、こうして手伝っているんですよ」

「なんじゃ詰まらん。ほれ、紫はいい女じゃぞ」

「吉祥果様、詩音が困っていますわ。それに彼はこう見えて三人の妻持ちですわ」

全員しっかり愛して、皆が愛してくれてくれるからいいのさ……

・・・多分。

「なんと豪気な事よ。そんなにいるなら紫も入れてもかまわんだろっに」

「いえ、これ以上は妻たちに悪いですし、あくまで紫は友人ですので」

「あら、残念」

それに輝夜と結婚する前は、紫にそういった方面のからかいを受けていたので、なかなかそういう対象として紫は見れない。

「・・・ううん？　なんでこんなところで寝てんだっけ？」

「・・・えーと、確か母様に殴られて気絶したんじゃないかっただかい」

「その通りだよ馬鹿娘ども」

そんな話をしていると、気絶していた二人が起きた。

「そっだ、勝負！」

「お、まだいるね。勝負しようじゃないか！」

「・・・すまないね詩音殿。馬鹿娘たちには空気を読むように言っておくから」

「いえ、元気でいいんじゃないかと」

さすがにここまで来ると、苦笑いしか出てこない。

「吉祥果様。勝負させるために連れてきたので、勝負させてあげても構いませんわ」

「そうであったか。馬鹿娘ども、そういうことらしいから外でやっ  
つておいで」

「「よっしやー!」「」

元気よく外へ駆けていく二人に続いて、僕も歩いていった。

周りでは、鬼たちが騒いでいる。

というか、賭け屋とか売り子がいるんだけど。

「第一戦目、八雲様が連れてきた人間対我らが四天王、技の伊吹  
」!

司会が叫ぶ。

「東ー、伊吹 萃香!」

萃香が両手をあげてやってくる。

「西ー、十夜 詩音!」



後ろの鬼に促され、僕も手を挙げて進む。

「解説の八雲様。この勝負、どう見ますか？」

「そうね、萃香の鬼の力と多彩な技は驚異的。でも、詩音の本気はまだ見たことはないから、何とも言えないわ」

さて、お前は交渉していたんじゃないのか？

「審判は妾に任せよ！」

鬼子母神様まで……………。

「ああもう！ やってやるさ！」

メドゥーサを表出する。

髪は伸びて瞳と共に紫に、虹彩は四角くなる。

魔眼が力を示す前に目を閉じて、自己封印・ブレーカー・ゴルゴーン暗黒神殿を発動して眼帯を付ける。

メドゥーサには怪力スキルがあるので選んだけど、一応魔術で強化を加えて力と強度を上げる。

「眼帯なんて、余裕じゃないか」

「いや、外すと皆石になっちゃうんだよね。それに、見えてるから問題ないよ」

「おおっと、詩音選手の姿が変わった!? これはどういこと  
でしょうか、紫様?」

「どうやら詩音には複数の能力があるみたいね。おそらく、姿を  
変えることでその能力を最大限発揮できるようにしているのだしょ  
う」

司会がうざい……………。

そして、紫が意外と真面目に解説しているのがさらにむかつく。

眼帯取って石にしようかと、危ない考えが通り過ぎていく。

「それでは双方準備は良いな……………始め!」

鬼子母神の号令と共に、伊吹が千鳥足で駆けてくる……………  
よく転ばないな。

とりあえずは、鬼の力を見極めさせてもらおうかな。

釘剣を取り出し、近づく伊吹へと投擲する。

「こんなものじゃ……………ってえ!??」

伊吹はそれを迎撃しようとするが、僕が繋がっている鎖を操るこ  
とで、迎撃しようとした腕を捕える。

そのまま、引き合いに持って行く。

「鬼と力比べしようっていうの……………舐められたもんだね

「！」

「つぐ！」

怪力＋魔術強化しているっていつのに、こっちが引っ張られるなんて！

鬼の力の見極めを終えて、すぐに鎖を離す。

「わわっ！？」

支えを失ったことで伊吹がバランスを崩すけど、千鳥足の時のようにすぐにバランスを取り戻す。

その一瞬の隙に四肢を地につけ、滑るように接近する。

「せいっ！！」

「何の！！」

迎撃に来た拳が風を生み、僕の髪を吹き流す。

ギリギリで腕の外側に回避して密着、脇腹に向かって掌底を放つ。

「つぐ！！？」

筋の伸び切った箇所打ち込んだ一撃に、伊吹は顔をゆがめる。

「この、程度！」

伸ばしきった腕を畳んで、肘を放ってくる。

最短の打撃は、退いていた僕の頬を若干斬り裂く。

僕は回避動作のままコンパクトに回転、そこから畳んだ足を放つ。

「ぶ!?!」

それは正確に伊吹の顎を打ち抜いて、小柄な息吹を十数メートルほど飛ばした。

「はあはあはあ………」

当たれば一撃必殺である鬼の拳は、結構な緊張を僕にもたらして、息が荒くなる。

飛ばされた萃香はそのまま落下し、うつぶせのまま倒れてくれた。

「まだ、やられて………あれっ!?!」

立ち上がるうとした伊吹が失敗して転ぶ。

何度もやって失敗していることから、意識を奪うことには失敗したものの、十分なダメージを与えられたと判断する。

「………そこまで! 勝者、十夜 詩音!」

鬼子母神が僕の腕を持ち上げる。

それを合図に周りの連中が声を上げた。

「うあー、くやしー」

結局立つのを諦めた伊吹が、地面を叩いて悔しがる。

能力を出してこなかったけど、出されていたらメドゥーサじゃ敵しかなかったかも。

鬼との勝負だと、ペガサスを出すわけにもいかないからね。

僕は伊吹の元まで歩いて行き、手を差し出す。

「あ、ありがとう」

「よつと」

小さな体を引き上げ、支える。

「えつと、詩音っていつたっけ？」

「うん、十夜 詩音。詩音で構わないよ」

平衡感覚も戻ったか、しっかり立ち上がる（揺れてるけど）。

「私は伊吹 萃香。こっちも萃香でいいよ。それにしても効いたよ、とても人間の1撃とは思えなかったね」

「まあ、英雄の1撃だからね。効いてもらわなきゃ困る」

名前を交換して、お互いの健闘を称えあう。

「萃香、はやく変わっておくれよ！ 闘いたくて凄く疼くんのだ」

「あらら……またあとで、ゆっくり酒でも飲もうか詩音」

「そうだね、その時はいい酒を出すから期待していいよ」

そりゃ楽しみだと言って、観客の方へと萃香は向かった。

変わりに出てきたのは、闘いたいという疼きを隠しもしない星熊だった。

「ふふふ、私は萃香みたいにやられないからね！」

「鬼の種族値は把握できたから、今度の僕はもっと強いからね」

次は肉弾戦で最強の一手を使用する。

メドゥーサからヘラクレスに変更。

髪は黒く短くなり、肌は硬質化して鈍色に染まる。

最後に瞳が黄金色になり、他の英雄と一線を画した力が湧き上がる。

「第二戦目、我らが技の息吹を倒した人間対力の勇儀！」

「両者位置に着け！」

初期位置に付き、深く息を吐く。

星熊の能力はたしか、怪力乱神を持つ程度の力。

ヘラクレスとどちらが強いか、試そうじゃないか。

「双方準備は良いな………始め！」

突撃。

御互いに突撃しぶつかり合う。

その衝突で衝撃波が起こるも、星熊が弾き飛ばされる。

「……………つぁ！？」

「……………！」

気合い一閃、追撃をかける。

こちらも十二コトウの試練シレンの、Bランク以下無効を超えられてダメージを負ったけど、ヘラクレスの肉体にはかすり傷程度だった。

今度は拳が衝突する。

「……………つがぁ！？」

「……………ぐう！？」

お互いの拳が割れる……………けれども、僕の拳は元に戻る。

これは十二の試練の効果じゃなくて、不老不死のせいである。

そして、拳を弾かれて無防備なところへ、タックルを打ち込む。

星熊を吹き飛ばし、その進路状に居た鬼も吹き飛ばされた。

「……………はあ、負けだよ」

「勝者、十夜 詩音！」

星熊がリタイアを宣言して、勝負は終わる。

衝撃で肌が裂けたのか、星熊は血濡れになっている。

「大丈夫か？」

「なんとかね。ただ、今のままだとあんたとは闘えそうにないから止めたよ」

星熊の手を引いて起こして、肩を貸す。

ついでに治癒魔術を使って、ある程度傷を癒す。

「おお、すまないね」

「女性に傷を残すのは本意じゃないからね」

本当は手を上げるのも良くないけど、試合や力試しは好きです。

「おやおや、女殺しだねえ」



「ははは……そういつ台詞だとは自覚してるんだけどね」  
妻たちにはよく怒られています。

「まあ、それは置いておいて……私は星熊 勇儀 勇儀  
って呼んでおくれ、私も詩音って呼ぶから」

「分かったよ勇儀。そうそう、萃香にも言ったけど、後でいい酒  
を用意しておくから」

傷は治したけど疲労は残っているはずなのに、酒と聞いただけで  
はしゃぎ出す勇儀。

鬼ってというのは本当に酒好きなんだなあ。

「詩音と言ったか、見事だったぞ……まだ、本気を隠し  
てあったようだがな」

「吉祥果様、詩音は女性に優しいので殺し合いにはしたくなかつ  
たのでしよう……ね、詩音」

「正解。後は鬼に合わせて、力で挑んだからだね」

「あちゃー、それなら最初っから全力全開で行くべきだったね」

「詩音ー。勇儀なんてほっておいて、さっき言った酒を飲もう  
よー」

鬼子母神に紫がやってきて、勇儀が悔しがり萃香が酒をせびって

くる。

というか、結局解説なんてやってなかった気がするんだけど・・・  
・・・気にしたら負けかな。

と、そこで紫がいたずらな笑みを浮かべる。

「そうそう吉祥果様。詩音に勝利の褒美を与えてあげませんか？」

「そうじゃな、妾の媚にしてやろうか・・・冗談じゃ。と  
りあえず妾の名を許そう。詞梨かりていも帝母 吉祥果じゃ。吉祥果と呼ぶが  
いい」

「ありがたく頂戴します吉祥果様」

「お酒ー」

厳かな雰囲気の名を預かったのに（冗談はスルー）、萃香の気の  
抜けた声で台無しだ（萃香自重）。

「まったく萃香は仕方ないのう。・・・皆の者、酒宴じゃ、  
酒をあるだけ持ち寄るがいい！ ただし秘蔵の酒は開けるな、それ  
は勝者へ与える酒だからの！」

『おおおっ！！！』

吉祥果様の言に、歓声を上げる鬼達に僕と紫は目を合わせて苦笑  
した。

瞬く間に酒宴の場が整えられ、皆が好き勝手に酒を飲む。

「詩音殿、お酌します」

「おお、ありがとうございます」

すっかり存在を忘れていた天狗に、酒を注いでもらう。

今周りに居るのは、紫とこの天狗だけだ。

吉祥果様と萃香と勇儀は、何か準備があると言っていた。

鬼の秘蔵酒を味わい、紫と笑みを浮かべる。

どうやら、黒歴史を忘れる事が出来たみたいで何より。

そのまま気楽に酒を飲んでいると、萃香と勇儀が太鼓と大道具を持って現れた。

見ているとあっという間に舞台が出来上がる。

「詩音よ、鬼の酒楽しんでるか？」

「はい、吉祥果様」

後ろから声がしたので振り向くと、そこには美しく着飾った吉祥果様がいた。

「これより妾が舞いを見せよう、存分と楽しむがよい」

そう言つと、優雅に舞台へと上る。

……結論だけ言おうと思つ。

「凄い」

見ていた僕には、これだけしか僕には言えなかった。

吉祥果様の優雅で在りながら、鬼らしく力強い舞い。

太鼓だけなのに、吉祥果様の舞いを際立たせる勇儀と萃香の太鼓。

これは王の財宝にはない、至高の宝であつた。

「そうね、あれは鬼だからこそ見せられる舞いね」

「繊細なのに剛毅、矛盾してるけどそんな感じかな」

「そうじゃろう、そうじゃろう。これは遙か昔に鬼と人間が共に創つた舞いじゃ」

つまり、僕らの理想の完成形の一つつてことか。

「人間の繊細さと鬼の豪快さを合わせるのは、当時最も苦勞したのじゃ」

嬉しそつに語る吉祥果様に、紫は高揚した視線を向ける。

「私も、そのように幻想郷を作りたいですわね」

「ふふ、御主ならでできるぞ紫よ」

「そうだね、紫の幻想郷に向ける愛は本物だ」

そう、まるで母が子を愛するかのよう。

「ありがとう詩音」

「はは、泣くほどうれしかったみたいだね。よし、ジャンジャン飲もうか！」

そう言って、僕も王の財宝から酒を出すのだった。

第九章 妖怪巡り 鬼編 (後書き)

よくある東方オリキャラ第二弾、鬼子母神こと訶梨帝母 吉祥果。名前は鬼子母神の Wiki を見て頂ければ理解できるかと。いつの間にか PV が 6 万越えてて驚きました。みなさん読んでいただき、ありがとうございます。

第十章 傳き桜の姫 (前書き)

大変、お待たせしました。

今回は、酷く出来が悪いと思います。

全然文章が思い浮かばなくて、少しずつぐだぐだと書き進めてきたからです。

## 第十章 傳き桜の姫

「はあ………」

「どうかしたの紫？」

紫に呼ばれてきたけど、なぜか相当気落ちしている紫に話を聞く。

「ああ、詩音。そのね、幻想郷に欲しい人材がいたのだけど、気が付いた時には封印されちゃったのよ」

多少の封印ぐらいなら紫がどうにか出来るのだろうけど、封印されたという事実が厄介なのかな。

封印されてすぐ封印が解かれれば、封印されていたものを再封印か討伐しようと動くだろう、そうすればその人材を追って来た連中に幻想郷を蹂躪されかねない。

「どういう人材だったの？」

「人間の側でありながら、妖怪も救っていた僧侶よ。それがばれて人間たちに法界へ封印されてしまったのだけど」

ああ、確か東方にそういう人がいたね。

そういう人なら、幻想郷にぜひ欲しい人材だったろうに。

「おしい人材だったね」



「ええ、本当に。だから、今回は都の情報収集を欠かさないよう  
にしたの」

能力持ちや、そういった希有な思考を持った人間は、幻想郷の人  
妖のバランス維持に役立つてくれるだろうからね。

「つまり、今回都に行くのもそういった関係？」

「ええ、歌聖と呼ばれる法師がいるのだけど、その娘が死霊を操  
る程度の力を持っているの」

誰だったか、それっぽい能力を持っていたのが東方に居たと思っ  
ただけ。

思い出せないな………仕方ない、実際会えば思い出すだろ  
う。

「ふーん………だけど、どうやって幻想郷に呼ぶんだい？」

「死霊を操るなんて、人間には毒なのよ。だったら、それを抑え  
てあげられる存在がいればいいの」

確かに、死霊が近くに居るだけで、妖怪はともかく人間は死に寄  
せられてしまうだろうね。

死に寄せられる………ああ、思い出した。

西行寺 幽々子。

死を操る程度の能力を持った亡霊姫で、紫の親友だったはず。

生前は、段々と強く名を変えていく能力に自害してしまったはず。

「まあ、うまくいくといいね」

「さすがに、早々うまくいくとは思ってないのだけどね」

人間と妖怪、その溝はあまりにも大きいからね。

利を示しても、妖怪を恐れて断られる確率が高い。

「それでは、行きましようか」

紫がスキマを開く………便利でいいなあ。

「へえ………」

トンネルを抜けた先は、桜並木でした。

見事な桜が咲き乱れ、少し先には一際大きく見事な桜があった。

「見事なものね」

「そうだね………と、あそこに居るお嬢様が目的の人？」

顔色は悪いけど、西行寺に間違いない。

それにしても、死霊が周囲をうろついていれば顔色も悪くなるよ。

「それじゃあ、御姫様と御話してみましようか」

そう言うと、紫は隠れていた場所から出ていく。

僕もそれに続いて歩き出す。

「……………誰かしら？」

「スキマ妖怪、八雲 紫ですわ」

「いちおう人間、十夜 詩音です」

ん、僕の名前に反応した？

ああ、十夜の名に反応したのかな……………頑張ってるのかな家の連中も。

「十夜 詩音って、竹取物語の？」

そ、そっちの方ね……………。

「そ、そうだけど……………」

肯定すると、いきなり目を輝かせ始める。

「藤原ノ末姫とはどうなったの！？ かぐや姫は今どこに!？」

「え、えーと、妹紅は僕の妻になったし、輝夜の居場所は月から

逃げてる身だから言えない」

いつも、自分が過去の有名人を見て驚く側だったから、自分が過去の有名人になるっていうのはむず痒いものだね。

「そうなんだ、そうなんだ……良かったわ、藤原ノ末姫も愛する人と一緒になれたのね」

待てよ……もしかして。

「一つ聞きたいのだけど、竹取物語の作者って？」

「藤原様と石上様の連名よ」

西行寺に聞いたけど、答えは紫から帰ってきた。

どんなふうに書かれているか、今度輝夜達と見ようと思う。

「そんな事より、勧誘しなくちゃ」

「ああ、そうだね」

「むう、残念」

まだまだ聞きたい事があったのだろう、西行寺は少し頬を膨らせてしまった。

「ええ、実は 詩音お願い」

「任されたよ」

話を始めようとした紫だが、突然切つて僕にお願いしてくる。

佐々木 小次郎を表出、髪と瞳を紺色に染める。

向かってくる気配に合わせて、五尺もの長さを誇る備中物干し竿青江を振う。

「ぬう！」

金属の擦れ合う音を響かせ、二刀を持った青年を退かせ、青年を自然体で見据える。

青年の近くには、靈魂が浮かんでいる。

魂魄 妖忌。

確か、白玉楼の専属庭師だったはず。

今は、護衛か何かなのだろうか……良く考えると、普通は刀で庭師はしないからそれが当然だよな。

「つく、侵入者め。幽々子様から離れよ！」

「紫。ここは僕が押さえておくから、説明をしておいてくれない？」

「わかったわ。あなたは適当に彼をあしらっておいてね」

「妖忌」。相手は竹取物語の十夜様だから、胸を借りる程度に頑

張ってね」

女性陣二人の、魂魄への扱いが酷い。

もつとも、事実それが出来るとは思うけど。

見た目年齢は僕とそう変わらないけど、立ち振舞いから経験が不足している事がわかる。

とりあえずは遮音と人払いの結界を張って、邪魔が入らないようにする。

「貴様を倒して、幽々子様を救いだす！ 十夜の姓を語る偽物め、我が楼観剣と白楼剣の錆となれ！」

「そう意気込まない。感情に揺れる刀では、斬れる者も斬れなくなってしまうよ」

魂魄が駆けてくるが、魂魄の間合いに入る前に僕の首狩りが妖忌へ迫る。

それを白楼剣で防がれるが、すぐさま刀を翻して再び首狩りを行う。

「ぬぁ！？」

今度は楼観剣で防がれるが、魂魄は体制を崩して無様に退いた。

それに追撃を行わないで、再び自然体無形の型に戻る。

「舐めるな！」

「吠えない。そんな言葉は負け犬しか言わないよ」

物干し竿の届く範囲、それは絶対不可侵の結界である。

侵入した瞬間、首狩りが奔る。

ただそれだけの事なのに、刀を振るうという事を最速でこなすことで、技というレベルまで昇華する。

「攻めて来ないのならば！ 断霊剣『成仏得脱斬』！！」

「間合いに入れないのなら外から攻撃か……威力は高そうだけど、密度が足りないよ」

物干し竿を魔術強化、霊力の流れを読み刀に霊力を込め、流れを断ち切る。

霊力が霧散して、その向こうからは絶望した魂魄が現れる。

「まだまだ経験不足。技の錬度は、中級妖怪に通用するかどうかってところかな」

「……………お強いんですね」

結局のところ、僕の力は借り物である。

それでも、先ほど刀に霊力を込めたりしていたように、他の力と組み合わせるなどしてさらに強くなるうとしている。

そこからは、僕本来の力と言えるだろう。

完成された英霊の力で、基礎などを高水準を保っていたから、それぐらいは当然だけど。

「まだまだだよ僕も。修練に果ては無い。極めたというのなら、別の何かを新たに極めなければならぬし、それと組み合わせ発展させねばならない」

「……………申し訳ありませぬ十夜様。我が身の無礼をお許しください」

そう言つて土下座する魂魄。

「構わないよ。そもそも僕は侵入者なのだから」

「それでもです。私の名は魂魄 妖忌。宜しければ妖忌とお呼びください」

妖忌の武者者としての琴線に触れてしまったか、なんだか尊敬されている気がする。

「あらあら、ずいぶん仲良くなったのね」

「お茶でも飲んで、お休みしましょう？」

屋敷から紫と西行寺が現れる。

妖忌は立ちあがって、おそらくお茶を用意しにいった。



「紫、話は終わったの？」

「そうなんだけど、勧誘は失敗よ」

首を横に振りながら紫は言うけど、残念そうな感じはあまりしない。

「でも、お友達にはなれたわ」

「まあ、今回は駄目で元々だったから、収穫があつて良かったんじゃない？」

西行寺の顔色が良い。

おそらく能力故にその存在を遠ざけられていた西行寺にとって、妖怪とはいえ友人が出来たというのがいい影響をもたらしているんだろう。

「西行寺。紫は胡散臭い奴だけど根はいい奴だと思つから、仲良くしてあげてね」

「ふふふ、せっかく出来たお友達ですもの、当然仲良くさせてもらつわよ。それで、あなたはどのなの？」

あらら、僕にもお声がかかりましたよと。

「友人なら喜んで。詩音って呼んでくれるかな」

「なら私も幽々子と呼んでちょうだい。………なんだか不

思議な気持ち、物語の登場人物とお友達になれるなんて」

それはそうだろうね。

僕もアインであった時、始めは現実感が全く湧かなかったしね。

このあと、幽々子に僕はいろいろと質問された。

輝夜と妹紅の事や、その出会いに日常の「コマなど。

紫が諏訪子の事までばらすものだから、幽々子に苦笑いされたりした。

お茶を持ってきた妖忌を交えて、西行妖（まだ妖怪化していない）を眺めながらの花見をしたりした。

「紫に詩音……また、会えるわよね？」

「心配しないで幽々子。私たちはやるべき事が多いけども、幽々子と会う時間ぐらいは取れるから」

初めての友人ができて、もう来なくなってしまっただけではないかという不安を覚えたのか、幽々子が紫の袖をつかんで引き留めていた。りした。

紫が安心させるように、素直な笑顔で幽々子に諭したことで離してくれたけど。

「僕も妻たちに怒られない程度に遊びに来るよ。ついでに妖忌と試合ぐらいはしてやれるし」

「わ、私なぞに構う事はありません！ そのぶん幽々子様のお相手を」

妖忌の経験を積ませようと声をかけたけど、妖忌は幽々子に遠慮してしまった。

けれど、幽々子が有無を言わせぬ笑顔で

「妖忌ったら・・・その心使いは嬉しいけど、せっかくなのだから遠慮しなくてもいいのよ」

と言ったことで、カクカクと妖忌は頷いた。

うん、女性には逆らわない方がいいね。

「それじゃあ、また来るわね幽々子」

「ええ、また会いましょう」

紫がスキマを開く。

「妖忌。次来る時まで、少しは強くなっているか楽しみにしてるよ」

「は、はい！」

最後に一言を告げて、スキマに入る。

幽々子と妖忌に見送られて、僕らは幻想郷に帰った。

その後、紫に連れられてちよくちよくと幽々子のところへ通っていたが、ある事件が起きる。

幽々子の父、歌聖が西行妖の下で永眠。

丁度忙しい時期に重なったそれは、僕や紫の耳に入ることはなかった。

もう少し僕が東方について知っていれば、もう少し紫が気を払っていれば。

そう思う事件が、幽々子の身に降りかかってしまった。

幽々子の能力『死霊を操る程度の能力』が『人を死に誘う程度の能力』へと変質。

おそらく原因は、歌聖を慕って西行妖の下で人が死に過ぎたため。

そして、西行妖も妖怪桜へと変質。

幽々子の影響も受けたか、人を誘い殺すようになってしまった。

事態を知った僕と紫は西行妖を排除しようとするが、幽々子と西行妖に霊的つながりが生まれてしまっていて、幽々子にも影響が

出てしまう。

ルールブレイカーやメディアの魔術でどうにかしようとするも、自然発生した繋がりである事と、霊脈そのものから力を引く西行妖によって阻まれてしまった。

「くそっ！　なんでこんな事に……………」

「どうして！？　どうして境界が操れないのよ！」

「私では、幽々子様を守れぬのか！？」

あらゆる手を尽くした。

僕と紫の人妖ともにレベルの高い人脈、王の財宝にある宝具 e t  
c……………。

それら全てが、西行妖に嘲笑われるかのように失敗した。

「……………紫、詩音」

絶望にひれ伏す僕と紫の下に、幽々子がやってくる。

「……………幽々子。大丈夫よ、私と詩音がなんとかして見せるから」

「そうだよ、だから幽々子は休んで。最近、あまり眠れていないだろう」

必ず助けてみせると僕らは強がるけど、僕らのその姿は幽々子に

決意を抱かせてしまった。

「……………紫。私を生贄に、西行妖を封印出来ないかしら？」

「……………何言ってるの幽々子？」

「幽々子様!？」

呆然と、思考が停止する。

僕らの意思を離れた頭脳は、幽々子の言葉の意味を読み取り、冷静に冷徹に解を出してしまう……………すなわち、それで西行妖を封印できると。

「そんな事出来るわけないだろう！ 僕は幽々子を助けたいの  
に、それじゃあ本末転倒だ！」

「もういいの……………もういいのよ。短い期間だったけど、  
紫と詩音に会えて私は幸せだった。それに、私はもう長くないわ」

幽々子がもうすぐ死ぬ？

意味がわからない、なんでそんな答えが出てくるのだろうか？

「幽々子……………能力の制御は？」

「駄目。西行妖に魅かれてる」

「幽々子の能力で幽々子が……………死ぬの？」

そんな馬鹿な、嘘だと言ってよ。

「そう。そろそろ私の手には負えなくなってしまうわ。そうやってしまえば、私は死をまき散らすだけの存在になってしまうのじゃないか。」

「……………諦めないでよ幽々子」

「そうですね、幽々子様」

「……………幽々子、あとどれくらい持ちそう？」

「そうだ、幽々子が限界を迎える前に僕らが」

「後三日ぐらい、早ければ明日が限界」

「……………それまでに、準備をしておくわ」

「なんだって？」

「ゆか」

「詩音。もう、幽々子を苦しめたくないの」

「紫が泣いている。」

「あの、いついかなる時も余裕を持っていた紫が。」

「幽々子を生きさせてあげたいっていうのは、私たちのわがままなのよ。幽々子が耐えられないというのなら、私たちはそれを尊重」

すべきなのよ」

「……………そんな、八雲様」

「……………分かったよ。分かりたくないけど」

力を得て、初めての無力感。

英雄の力を手に入れようと、僕は友達一人助ける事も出来ない。

他の桜を置いて満開に咲き誇る西行妖を、僕は憎々しげに睨みつけることしかできなかった。

次の日、僕らはお茶を飲んでいた。

友人との最後の語らい。

笑いながら、今までのように話をする。  
泣き

そして、時が来てしまう。

「……………時間ね。おねがい、幽々子」

「もうそんな時間なのね……………楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまう。だからこそ、その時を楽しもうと思えるのだけど」

「そうだね……………そうなんだよね」



「幽々子様……………」

時間を操るなんて大層な能力を持っていても、一瞬の儚さを変えられることはできないんだ。

「紫……………あなたは私に縛られないで、しっかりと夢を叶えなさい」

「ええ、言われなくてもやって見せるわ」

幽々子が言葉を残していく。

「妖忌……………私が居なくなったら、西行寺家に縛られずに広い世界を見てきなさい」

「はい……………!」

僕らが幽々子に縛られないように、幽々子が僕らを縛らないように。

「詩音……………紫を助けてあげてね。飄々としているけど、女の子なの」

「うん、幽々子が安心して見ていられるようにしてあげるよ」

幽々子が背を向け、西行妖へと歩み寄る。

「さあ、私と一緒に眠りましょうっ?」

風が吹く。

風に瞬く間に幽々子は消えて、西行妖はその花を散らし始める。

僕は紫を引き寄せ抱きしめる。

紫の震えを感じながら、歪む視界で僕は桜吹雪を見続けた。

第十章 傳き桜の姫 (後書き)

結構強引に書きあげたので、あまり納得していないのですが、最低条件は埋めていたのででした。あ、文才が欲しい。

第十一章 天狗と仕事と休みとモフモフ (前書き)

久しぶりの永遠亭メンバー登場回です。

もう少しでユニーク1万突破するなんて……みなさん、あ  
りがとうございます。

## 第十一章 天狗と仕事と休みとモフモフ

「詩音様、お手伝いありがとうございます。粗茶ですがどうぞ」

「いや、このくらいならお安い御用だよ」

大天狗が出してきたお茶を飲む。

ほうじ茶おいしいなあ……。

「しかし、八雲様は大丈夫ですかね？」

「紫は強いよ。だからこうして、僕に指示を出すぐらいはできているんだ」

幽々子が死んで、おそらく紫は自宅に引きこもってしまった。

あれ以来、紫に僕は会っていない。

おそらく、紫にとって初めての死別だったせいだろう。

紫は妖怪で、その友人の大半が大妖怪である。

要は、友人が長寿で死にそうもない連中ばかりで、そういった事に慣れていないのだ。

僕の方はもともと人間として生きていたから、折り合いを付ける

のは早かった。

「はあ、十夜様がそうだったのでしたら」

「だから、しばらくは僕を頼ってくれるかな、出来る限り紫の分も働くから」

紫の代わりに完璧にはできないけど、やれることはやろう。

行った事のある場所なら、もしもの為と空間転移用のアンカーを設置してあるのだけど、それ以外への遠出は厳しい上に情報収集もままならない。

やっぱりスキマの利便性が高すぎて、ある程度の代理すら難しい。

「……………なんでしたら、家の者たちを使って構いませんよ？」

どうも顔に出ていたみたいで、気を遣わせてしまった。

だが、よくよく考えるといい手かもしれない。

天狗は機動力があるし、東方では新聞作りをやっていたはずだから情報集めも得意だろう（故意に捻じ曲げたりしていたけど）。

「お願いしていいかな。紫がいないと情報収集が出来なくてね」

「では、速さに優れた者を集めさせてもらいます」

「十夜様、召集完了しました」

「ありがとう、助かるよ」

僕の前には、二十人（羽？）の天狗が整列している。

集められた天狗は、速さに優れた烏天狗という種別らしい。

ただ、天狗の里の規模や僕が記憶している数に比べて少なすぎる。

「少なくて済みません、情報収集出来るような柔軟性を持っているのがこの程度しかないもので」

「ああ、そういう事ね。いいよ、誰もいないより十分助かるから」  
疑問を解決してくれた言葉に、簡単に納得する。

僕の脳裏に浮かぶのは、初めて天狗の里へ行った時撃墜した、頑迷で融通や機転の利かない哨戒天狗だった。

「とりあえず、自己紹介してもらおうかな。何が得意だとか知っておけば、効率良く仕事を回せるから」

「左から順に前へと出て、名前と得意事項を述べよ！」

大天狗の号令のもとに、次々と名前と得意事項を述べていく天狗たち。

横で、大天狗が補足を加えてくれるのがあるがたい。

一人一人記憶していると、見覚えのある顔が現れる。

ただ、天狗の知り合いなんて大天狗以上だけなので、一瞬疑問に感じたけど東方のキャラだと思いついた。

「射命丸 文です。得意事項は飛行で、天魔様を除けば天狗最速です」

「射命丸はまだまだ年若いですが、超長距離でもなかなかの速さを維持できますし、社交性も高いので最も十夜様の要求に合致するかと」

高評価だね、さすがは原作キャラ。

見たところ下の上ぐらいの力を持っているから、千年もすれば中の上ぐらいにはなれるだろう。

天狗の把握も終わって、紫と共同開発した超長距離通信符を天狗らに渡してから解散する。

誰に何を任せるかなどを考えなければいけないな……と、考えたところで妖霧が僕を取り囲んだ。

「そうだ萃香、頼みがあるんだけどいい？」

「何かな？ あ、お礼は普通のいいお酒で受けてあげるよ」

妖霧が集まって萃香になる。



萃香が『普通の』と念を押ししたのは、初めて会った時の酒宴で出した、王の財宝でも最高クラスの酒のせいだろう。

しばらくは、普通にいい酒程度では飲めなくなってしまい、ここ数百年は見せてないらしい素面を晒していた。

その酒の事では、吉祥果様や勇儀にも複雑な顔で、文句か感想が良く解らない言葉をもらった。

閑話休題。

「取引成立だね。で、萃香には霧化で幻想郷の情報を集めてほしいんだ」

「うん、いいよ。妖怪とか人間を見てればいいのかな？」

良く解っていらっしやる。

「後は幻想郷の地形変化とかだね。細かい部分はその都度指示を出すから」

「りょーかい！ で、お酒ちょうだい！」

催促してくる萃香に、王の財宝から普通の酒を取り出し（便利な倉庫扱い 多分英雄王が見たらキレル）、通信符と一緒に渡した。

「毎度あり！」

元気にそう言うと、萃香は霧になって散る。

実直な鬼という種族だから、さっそく仕事を始めてくれたと見ていいと思う。

「さて、僕もいろいろと動かないと」

どんどん増える懸案事項に紫の理想の重さを感じながらも、それを達成していくことに楽しみを覚える僕だった。

……家族サービスはちゃんとしないとなあ。

数ヶ月が経った。

だけど、今でも僕が幻想郷を運営している。

勘違いしてはいけない、紫はちゃんと立ち直っている。

ならばなぜ紫が運営していないのかというと、何か思う事があったのか紫が旅に出たからである。

幸い、数ヶ月である程度の運営基盤が出来ていたので、大きく支障はない。

紫はとりあえず大陸に行ってみると言っていた。

大陸、現代で言う中国である。

幻想郷は、あらゆる幻想を認める世界である。

だからこそ、紫は海外にも足を伸ばしたのだろう。

そうそう、もしかしたら紫が従者（式）を作ってくるかもしれない。

東方で、紫は藍という九尾を式として従えていた。

そして、九尾といえば、中国で猛威をふるったのが有名である。

これらを考慮すれば、結構確率が高いと思う。

「姫様、旦那様、妹紅様、お茶が入りましたよ」

思考を浮上させる。

目を開き、輝夜の膝枕から頭を上げる。

………ちよつと休憩してただけだからね。

しっかりと仕事をしていた証拠に、目の前の机には処理済みの書類が乗っている………部屋中に未処理の書類があるけど。

最近、諜報様の天狗や萃香が集めてきた情報を元に、実働用の天狗を飛ばしている。

実働用天狗は、一時的に式を与えて（土符で防水付き）力も供給しているので十分役立つ。

天狗の里の拡張も進んできているため、使える天狗も増えて、そ

の分書類が増える。

最近の内勤ばっかで疲れる……まあ、妻たちと一緒にいれるのが帳消しにしているけど。

「詩音、また考え事？」

「仕事中毒ですよ詩音。もう少し休んだらどうです？」

「睡眠薬を処方しましょうか？」

「いや、もう少し……やっぱり休んどく」

永琳、その注射器はなんだい？

ここで休むと言わなかったら、強制的に眠らせる気だったんだろ  
うね。

ナイス判断、僕。

永琳が持つてきてくれた茶を飲んで、一息吐く。

湯呑みを置くと、固まっていた体をバキバキと鳴らす。

少し楽になったけど、まだまだこりが取れない。

「詩音、私が揉みましようか？」

妹紅がマッサージを買って出てくれたので、その言葉に甘える。

うつ伏せに寝っ転がり、妹紅が背筋などを丁寧に揉み解していく。

最近、妹紅は永琳に整体を習っていたので、とても心地よい。

ああ妹紅の習いものと言えば、僕が符術を教えたりもしている。

やっぱりというかなんというか、妹紅が得意な属性は火である。

他の属性も扱わせているけど、火の覚えが一番早い。

才能があつたのかメキメキと上達して今では中堅クラス、このまま時が経てば最強クラスにもなれるだろう。

妹紅が整体を始めてからそれほど経たないうちに、詩音はぐっすりと眠ってしまった。

「やっぱり疲れていたのよね」

「蓬莱人といえど、死にはしないだけで風邪もひきますから」

「とりあえず、全身のこりを取ってあげるね」

詩音が寝たけど、妹紅は続けるみたい。

私も何か覚えようかしら。

「もう少し待っててね詩音」

そうすれば、八雲も帰ってくるでしょうし、私たちも仕事を手伝えるようになるから。

最近私たちは、詩音の作業を見ながらその作業を覚えている。

詩音の負担にならないように、永琳へと教えを請いながら、妻としてあらゆる面を助ける事が出来るようになるうとしている。

「妹紅、外に出れるのはあなただけだから……」

「分かってる輝夜。外の詩音は私に任せておいて」

詩音の負担となると分かっている、妹紅が詩音に符術を習ったのはそのため。

私も戦いは得意ではないけれど、妹紅だけその術が無いのは妻として許せなかったのね。

「でも、妹紅も無理しちゃだめよ?」

「そ、その時は詩音に護ってもらおうから」

苦笑いしながら目を逸らす妹紅に思う、それじゃあ本末転倒でしょうに。

本当なら私や永琳も外に出たい、外に出て詩音の手伝いをしたい。

だけど、月は追手を差し向けてくるでしょうね。

月人だったからこそ、彼らの恐ろしさが良く解る。

ある程度の数までなら詩音や永琳がどうにか出来るけど、月の実力者が出てきたら多人数を捌くほどの余裕はなくなってしまう。

それに、月の科学は進化を続けている……私や永琳が知る技術ですら、すでに過去の物かもしれない。

私たちのせいで皆が傷つくのは嫌。

それに、月人を傷つけることもしたくない……穢れを嫌いすぎて心ない者も多いけれど、月は私の故郷だから。

「姫様、私や旦那様がいるのです。そう簡単に月と戦いにはなりませんよ」

「ならいいのだけど……」

「まったく、輝夜は心配性ね……ほら、こっち来なさい」

妹紅に引っ張られて、詩音にくっつけられる。

詩音の体温が私に伝わってくるだけで、私の不安は消えてしまう。

「意外と私って単純ね」

「それでいいと思うよ」

そうね、詩音の前で肩肘張る必要ないものね……って、妹紅は？

「そつだ……いい加減妹紅も、詩音に丁寧言葉使つのやめなさいよ」

「い、いやそれは……く、癖みたいなもので」

癖、癖ねえ……。

「夜の時はそんなことないのに」

「あ、あれは何も考えられなくなるからで!？」

かかったわね。

「癖ならそのままのはずでしょう?」

「……いまさら変えるのも恥ずかしいんだ」

妹紅は貴族の子だったのだけど、意外にも男口調を使う。

「というか、出会ったころの私との喧嘩で、そうなってしまった気もする。」

「姫様。あまりからかわないであげてください。旦那様が起きてしまいますわ」

「あら、失敗」

「……大丈夫みたいだ。ぐっすり寝てる」



詩音は静かに寝息を立てている。

さて、どうしようかしら。

このまま寝かせてあげたいのだけど、畳にそのままというのは宜しくないわね。

「永琳、布団を用意しておいて」

「わかりましたわ」

布団は用意してもらった。

後は、どうやって詩音を移すかね。

能力で一瞬で移動させる？

却下、時間操作を持つ詩音は、能力を発動させるだけで気が付いて起きてしまう。

抱えて移す？

無理、私や妹紅の細腕では、意外と重い詩音を運べない。

良く考えると、どの選択肢を取っても詩音は起きてしまうわね。

鋭すぎる詩音に頭を抱える。

「やっぱり、一度詩音に起きてもらうしかないわね」

「半覚醒ぐらいなら、すぐに寝れると思う」

それ採用。

そのあと案は成功、詩音を二人で挟んで寝たわ。

翌日には、綺麗に疲れも取れていたみたい。

「久しぶりね詩音」

「やっと帰ってきたね紫」

久々にゆっくりと休んだ翌日、紫がスキマから顔を出す。

そのまま出てきた後ろから、予想通り九尾も出てくる。

「紹介するわ。この子は八雲 藍、九尾に式を打ったものよ」

「紹介にあずかりました八雲 藍です。十夜様の事はよく聞かせていただいています」

「丁寧にも。知っているだろうけど、僕は十夜 詩音。紫の手伝いをさせてもらっているよ」

それにしても……あの九尾を超モフモフしたい。

あれを好きにできるなんて、羨ましすぎるよ紫。

「ふふ……いい尻尾でしょう?」

「うん……藍、触るね」

「えええ!？」

モフモフ。

やばい、凄い癖になる。

モフモフ、モフモフ。

「私も……」

「ゆ、紫様までえ!？」

モフモフモフモフモフモフモフ。

モフモフモフモフモフモフモフ。

「ら、らめえー!？」

「反省はしている、けど後悔はしていない」

「右に同じく」

やりすぎた。

以後、藍に会うたびにモフモフを警戒されてしまうことになった。

……まあ、結局はモフモフするんだけどね。

「いいわねこれ」

「まっただ」

「いいなあ、私も欲しいなあ」

「紫のだから、上げられないよ」

モフモフモフモフモフ。

モフモフモフモフモフ。

モフモフモフモフモフ。

モフモフモフモフモフ。

「う、うわーん!？」

今のは、我が家に藍が来た時の話。

モフモフしているのは輝夜に妹紅、遊びに来ていた諏訪子、そして僕。

この後、藍のしっぽは幻想郷の皆に愛される事となった。

「愛さなくていいですよー!？」



第十一章 天狗と仕事と休みとモフモフ (後書き)

ああ、藍のしっぽ(尻尾にあらず)をモフモフしてえ。  
失礼。

今回は繋ぎ的な話ですが、結構書きたいことが書けたかなど。

そろそろ第一次月面戦争の時期か……どうしよ。

第十二章 映し世の月 (前書き)

今回の分量は少ないです……大イベントなのになぜ？

## 第十二章 映し世の月

「詩音、月に行つてくるわね？」

「……………は？」

始まりは、紫の唐突な一言だった。

「月つて、空に浮かんでるあの？」

「そう、永遠亭で月の技術を体感してみたけど、あれなら精神的に余裕を持ったまま、幻想郷を良くできるわ」

たしかに、目に見える代償を必要としないレベルまで、月の技術は突きつめられているから、そうだろうけど。

「幾ら紫でも、月を敵に回すのは厳しいと思うよ？」

「なにも一人つてわけじゃないわよ。囿用に結構な妖怪を連れて行つて、私はその隙にちよろまかすだけだから」

囿……………ああ、幻想郷内で好き勝手しようとしている、血の気が多い連中か。

中には、ちらほらと中の上クラスや、力だけなら大妖怪もいる。

いずれも、幻想郷を人間養殖場とでも勘違いした連中だ。

幻想郷は全てを受け入れる。



そう謳っている以上、表だって始末することはできないからね。

この話に乗ってくる妖怪は、幻想郷の意義を理解できる頭はない。

逆に乗って来ない連中は、幻想郷の意義を理解できるだけの頭を持って持っているはず。

黒歴史の際の小妖怪が、予想以上に残っている事もある。

蟲毒のように縄張り争いで喰らい合わせて、ある程度の力を持った連中であるから、中の下クラスぐらいはあるんじゃないだろうか。

「……………一応、逃げに徹しておいてね。紫が居なくなったら、幻想郷は回らなくなっちゃうから」

「あら……………私がいない間にしっかりと回っていてくれたじゃない？」

不用意な発言をした紫を、少し睨む。

「冗談でもそういうことは聞きたくない」

「そうね、ごめんなさい」

まったく、自分の死を暗示するような事を言わないで欲しい。

「大体さ。解ってるんだろうけど、あれはあくまで一時的なものだったからなんとかあっただけで、ここから先数百年を見たら幻想郷が消えてしまう程度だよ」

「もしかして心配してくれてるのかしら？」

何を言ってるんだ紫は。

「当然だろう。数百年来の友人をこんなことで失いたくはないからね」

「……………ありがとう」

顔を赤らめる紫。

なんとというか、純粹な感情に弱すぎるだろう。

普段から胡散臭い笑みを浮かべてるから、そんなのになるんだよ。

それから、幻想郷周辺の妖怪に声がかかる。

有象無象で実力を過信した妖怪たちは、月に攻め入る話に容易く乗ってきて。

小心者の妖怪などは、恐怖の具現が未知に恐怖する姿を見せる。

天狗は、慌てず騒がず静観する。

鬼は、意図を見抜きながらも戦いに魅かれ迷う。

そして満月の日になる。

「紫、本当に行くの?」

「もう、心配性ね。大丈夫よ、いざとなったらスキマで逃げるわ」  
スキマの便利さは僕もよく知っている。

それでも不安が残るのは、何故だろうか。

「離れてて」

僕は内に不安を抱えながらも、紫の言葉に従う。

集まった妖怪たちから離れ、もしもの為の準備を始める。

監視用の小さな使い魔を大量に作り出し、転移用のアンカーも付属した一体を紫に付けておく。

「皆さま、本日はお集まりいただき、誠にありがとうございます。  
今宵は空に見えますあの月へと、我々は攻め入ります。入口はこの  
水面に映る月でございます」

紫が演説を始め、妖怪たちも神妙にそれを聞く。

そして、紫が扇子を一振りすると、水面の月が割れて巨大なスキマが現れる。

「それでは、皆さまの雄姿に期待させてもらいます。出陣!」

紫の号令のもとに、数多の妖怪がスキマへと侵入していく。

そこに使い魔も紛れこませ、月の世界を見る。

出たのは海。

生命をかけらも感じさせない、死の海。

妖怪たちは飛翔し、紫の誘導に従って進み続ける。

海を越えて陸地に出ると、妖怪兎が銃を構えて整列していた。

「撃てえー！」

掃射される銃、小妖怪が次々と落ちてゆく。

が、少数の中堅以上の妖怪が弾幕を抜け、兎たちに食らいつく。

「撤退ー！」

戦線を維持できないと見るや、迅速に兎たちは撤退する。

まさに、脱兎のごとく……そのまんまだ。

それを追う妖怪たち。

すると、強大な炎が上がって、多数のマズルフラッシュが目を焼く。

第二陣、それも先ほどより高性能な火器を使用している。

先ほどの一陣は、この二陣を敷くための物だったのだろう。

設置型火器の強力な一撃が妖怪たちを焼く。

だが、大妖怪はその程度の攻撃では倒せないだろうと思ったところで、神気を感じする。

「穢れよ消えなさい！」

神降ろしねえ………月攻略に参加している大妖怪では歯が立たないねこれは。

使いこなせていないならともかく、器として扱えるだけ十全に使っているからどうしようもない。

こっちは終わりが見えたからもういいね。

さて、次は紫の方だけだ。

用心してか、空間にスキマは使っていないみたいだね。

使うのは存在している隙間を広げる力ばかり。

あれなら、気配もほとんどしないだろうね。

「まさか、こんな所まで侵入されてるとは思いませんでした」

「この警備、結構ザルだったわよ」

戦いが似合わなそうな、お嬢様が出てきたね。

あーあ、兎に包囲されてるし。

兎はともかく、お嬢様の力量が分からないな。

「仕方ないですわ……あなた達にはここで眠っていても  
らいます」

紫が日傘を振り、光弾を発射する。

「それは遠慮させてもらいます」

兎たちは逃げ、お嬢様が扇子を振るうと光弾が消えた……  
いや、どこかへ飛ばされた感じだった。

「……今の、神隠しね」

「正解です。地上の妖怪にしては賢いですね」

紫のスキマは副産物なのに対して、お嬢様の能力はそれ一本の可  
能性が高い。

さっきのから判断すると、力量も同程度。

つまり、お互いの能力で干渉し合った場合、紫はその身だけで闘  
う羽目になるのに対し、お嬢様は月の武器と兎が付いているという

戦力差が生まれる。

急いで空間転移術式を起動、魔力は十分龍脈から取っていたので、まだ開いているスキマでショートカットすれば月にも届く。

「おとなしく縛に……………あら？」

「それは困るから、僕が責任もって地上に連れて行かせてもらうよ」

「詩音!？」

ソードバレルを周囲に並べて兎を牽制し、僕自身はすぐに魂をシフトできるようにしておく。

「……………いいでしょう。あなたが来た時点で、私の優位は消えましたから。玉兎たちがもう少し役に立てば……………駄目ですね」

『豊姫様酷い!？』

「うん、冷静で柔軟な判断ありがとう。目的の一つは達成したし、帰るよ紫」

「はあ、分かったわ……………」

紫には干渉を警戒してもらいつつ、僕の転移で幻想郷に帰った。

「豊姫様、宜しかったのですか？」

「依姫がここにいたのなら、戦ってもよかったのだけど。あなた達程度では、彼の相手をするだけ無駄だったから」

あそこで戦闘になっていたら、玉兔たちは皆死んでしまっていただろう。

死の穢れは払えるとはいえ、都の中で穢れは生みたくない。

一応、認識した情報と予測を交えて計算してみたけど、あのまま戦っていたら、周辺一帯が壊滅しかねないと出る。

「やっぱり、戦わなくて正解だったわ」

それにしても、彼らの目的とは何だったのだろうか？

「あーもう、悔しい！」

「まあまあ、落ちついて紫。今日は家で飲もう？」

珍しく駄々をこねる紫を家に連れ帰る。

「おかえりなさい詩音」

「ただいま輝夜」



「御邪魔するわね」

永遠亭に帰ってきた僕らを、ちょうど玄関前にいた輝夜が迎える。

「永琳がお酒用意してるって」

「ああ、予想済みね」

どうやら、輝夜は僕らを待っていてくれたみたいだ。

輝夜の案内に従い、縁側に出る。

月身酒……………なんとも痛烈な悪戯だね。

「……………笑えばいいじゃない！」

「……………くっ」

子供のように怒る紫に、ちょっと我慢できなかった。

「まあまあ、飲んで嫌な事は忘れましょう？」

「つまみも用意しておいたから」

奥から永琳と妹紅が、皿を持って出てくる。

「いいわ……………今日はやけ酒よ！」

紫の号令と共に、小さな宴会が始まった。

「うう……………」

「……………ひつく」

「……………すう」

永琳と僕以外が寝てしまったので、二人して片づけを行う。

ちなみに、紫は飲みすぎて青い顔をしている。

片付けを終えて、永琳と二人して静かに飲む事にする。

今回は、月の事を聞こうと思って誘った。

「どうぞ旦那様」

「ありがとう」

永琳に酌をしてもらい、飲む。

何かから聞こうか……………そうだな、あのお嬢様とかどうだろう。

「永琳。月の知り合いに、神隠しの能力を持ったお嬢様っている？」

「ええ、豊姫ですね。私の弟子の一人です」

へえ、だったらあの力量にも納得できる。

「もう一人。依姫という子も私の弟子で、神を降ろす事が出来ません」

「ああ、妖怪たちをなぎ払ってたよ」

僕と彼女だったら相性がいいから簡単に勝てそうだけど、天の鎖無しではあまり相手したくはないね。

というか、豊姫と依姫って名前からすると姉妹？

「その弟子二人って、もしかして姉妹？」

「ええ、そうですね。豊姫が姉、依姫が妹です。ちなみに姓は綿月になります」

懐かしそうに言う永琳。

普段は顔に出さないけど、望郷の念は永琳や輝夜にもあるだろう。

そのあと、永琳による綿月姉妹の嬉し恥ずかし暴露大会が行われました。

その時の永琳は珍しく、心からおかしそうに笑っていたと思う。

「……あ、頭が」「」

「お水です。二日酔い用の薬も用意しますので、少し待っていてください」

僕たち四人が酷い頭痛に悩まされているのに、涼しい顔で永琳は歩いていった。

輝夜と妹紅は、紫の飲みっぷりに引きずられて酒量を誤ったみたいだ。

僕の方は、永琳の話に付き合いながら飲んでたら、いつの間にかかなりの本数を開けてしまっていた。

ただ、永琳も同じぐらい飲んでいたはずんだけど、涼しい顔とはどれだけ強いのだか。

「……ああああああああ」「」

皆、酒量に気を付けようね。

「皆さま、御薬お持ちしましたよ」

「……あ、ありがとー！……あ、頭が」「」

## 第十二章 映し世の月 （後書き）

今回はかなり短くなってしまいました。

あと、忘れていたことが・・・・・・幽々子が居ない。

幽々子は月面戦争を見たことある、それを書き終わった後に思い出しました。

今回の資料として儚月抄を読んでいたのですが、書き終わった後読んでたらその旨を発見、一度完成させたものをいじりたくないのです、そのまま投稿となりました。

そのあたり、修正なしが気に入らない人はすいませんでした。

第十三章 白玉楼 (前書き)

またオリキャラが登場します………今後の出番は分からないんですけど。

## 第十三章 白玉楼

「詩音！ 詩音起きて！」

「どうかしたの？」

第一次月面戦争で妖怪が減ったのと比例して、幻想郷内での仕事も減ったので、休日睡眠を満喫していたのだが、慌ててきた輝夜に起こされる。

「いいから来て！」

特に危険性を感じないので、ゆっくりと行こうとしたのだけど、輝夜に引っ張られて強引に連れて行かれる。

「いったい何が………へ？」

「お久しぶりですね、詩音君」

客間に連れて行かれたのだけど、そこには懐かしい人が座っている。

「え、え、え、閻魔王様！？」

「ふふ、寝間着姿の詩音君も可愛らしいですね」

死者を裁く十王が一角、閻魔王様がそこにいらした。

一旦部屋に戻り、着替えてきました。

「それにしても、予想通り綺麗どころを引っ掛けましたね。私が迫った時はのらりくらりと回避したくせに」

「えーと、それは……………」

「いったい、何をしに来たんだこの人は？」

僕が呆然としている間に話は逸れ続けて、なぜか死んでいた時の僕の話になっていた。

閻魔王様は話好きなのだけど、どんどん話が逸れていくので有名だった。

「……………で、詩音君が……………ネギで……………ラ  
ーメンだったんですよ」

「詩音らしい失敗ですね」

「詩音はそういうところが抜けてるもんねえ」

気が付いたら輝夜と妹紅も参加して、ちょっとした主婦の集まりっぽくなってる。



「えーと、閻魔王様？ 本日の用件は何でしょうか？」

「……おおっと、すみません。関係ない事を話し続けてしまうのは、私の悪い癖ですね」

なんとか、ひと区切りしたところを狙って割り込むことに成功する。

「今日の用件はこれです」

「地図……ですか？」

閻魔王様に取りだしたのは、一つの地図と手紙。

「そうです。一月後にスキマ妖怪とここに訪ねてください、会ってほしい人と手伝ってほしい事があります。詳細はその手紙に」

「これって……西行寺の」

その地図には、かつての西行寺の場所が記されていた。

閻魔王様を見送り、縁側で茶を入れる。

「西行寺か……」

思い浮かべるのは幽々子。

前世含めて、今までで最も己の無力を嘆いた事件だった。

当時に思いをはせながら、茶を飲む。

「どうかしたのかい？」

「いや、少し感傷に浸っていただけだよ」

横からした声に答え、また茶を口に含む。

「年寄りくさいねえ」

「実際年寄りだからね」

茶菓子を取って口に含む。

「まあ、元気だしなよ。過ぎた事で落ち込んでも仕方ない」

「それもそうなんだけどね」

また茶菓子を取ろうとしたけど、手が空を切る。

どうしたのかと横を見ると、一匹の妖怪兔が茶菓子を頬一杯に啜っていた。

「……………うっぐ!？」

「ほら、お茶」

喰い意地を張って無理に詰め込んだせいで、喉に詰まらせた妖怪

兎に茶を渡す。

必死に呑み込んで、なんとか呼吸が出来るようになったみたいだ。

「ところで、我が物顔でここにいる君は誰だい？」

「幸福の白ウサギこと、因幡 てみだよ。気軽にてみって呼んでね！」

そのあたりの妖怪兎と同じように見ていたけど、確かに良く見ると東方知識に合致する顔だった。

胸元には、にんじんのお守りも提げている。

「それで、そのてみが何の用かな？」

「兎に智慧を与えてくれないかと思って。もちろん代価は用意するよ」

兎の代価ねえ………幸運？

「見たところ、あなた達は隠れていたと見た。だから、この竹林に人が入らないようにする………これでどう？」

「この竹林自体の特性で、永遠亭までたどり着くのは元から難しいんだけど」

別にそれでもいいのだけど、少し渋ってみる。

「ちっ」

……舌打ちしたぞ、おい。

「万が一も潰してもらおうかな。入ってきてしまったら、始末するか幽閉するか記憶を消すしかないし」

「……やったね！」

よっしゃーというように手を挙げてゐる。

大仰なそれは、振り<sup>ボース</sup>なのだろうか……う詐欺だもんなあ。

「と、言うことで永琳にお任せ」

「あらあら……別に構いませんけど。旦那様、新しい茶菓子とお茶です」

「いただきまへぶっ!？」

補充された茶菓手に手を伸ばそうとしたてゐの頭を、永琳がひっぱたいた。

「勝手に主人の物に手を付けようなんて、手癖の悪い兎ね」

「うう……痛い」

地味にすつきりする……食べ物への恨みは、ね。

「お師匠様、その自然界の物にはあり得ない色の薬は何でしょうか？」

「あなたは知らなくていいのよ」

僕は聞かなかった。

絹を裂いたような悲鳴が響いている気がするけど、そんなものは幻聴に過ぎない。

「平和ね」

「うん、平和よね」

「ああ、平和だね」

「えーと、平和、ね？」

輝夜、妹紅、僕、紫の順で言う。

がんばれてる、鈴仙<sup>スケープゴート</sup> 優曇華院 因幡が来る日まで。

てゐへの黙禱を終えて、紫への用件を済ませることにする。

「それで、今日の用件なんだけど、これを見てくれる？」

紫に、閻魔王様から渡された地図を見せる。

訝しげに地図を手に取りそれを見た瞬間、紫は顔に驚愕を張り付

ける。

「西行寺……いえ、西行妖に何か起こったの!？」

「そういう訳ではないと思う。この地図は閻魔王様から渡されたんだけど、会わせたい人がいるっていうのと、頼みたい事があるって言ってたから」

これだけ言えば、紫もなんとなく予想が付くと思う。

閻魔王様、西行寺、会わせたい人。

この三つのワードから予想できるのは、幽々子の可能性が高いという事。

ただ、僕の知識に間違いが無ければ、幽々子には生前の記憶が無い。

紫にどれくらいの負担がかかるかが心配である。

「詩音様ー、助けてくださーい!？」

どたどたと、てるが駆けてきて僕に隠れる。

すぐ後に、開いたままの戸から永琳が顔を出す。

「駄目じゃない、旦那様達に迷惑を掛けるなんて」

「ひいー!？」

ガクブルガクブル！

僕の肩に顔を埋めて、てゐが震える。

少しだけ見える顔は、命の危険を感じているのかかなり青い。

「永琳、脅かすのはそろそろやめてあげなよ」

「残念、いい実験体だと思ったのだけどねえ」

てゐに見られていないのを確認して、永琳と僕はしてやったりという顔をする。

実を言うと、永琳とてゐの一連の流れはアイコンタクトで決めていた事である。

簡単にいえば、主従関係や立場を刷り込むための小芝居なのである。

「ほら、いつまでも旦那様に縋りついていないで来なさい。あなたは智慧を得に来たのでしょうか？」

いい笑顔でてゐを引っ張っていく永琳……小芝居だよな？

最後に曲がり角をつかんだてゐの手が消えて、嫌な沈黙が僕らに流れる。

「……………輝夜、お茶切れちゃった」

「……………今入れてくるわね！」

「……………私は茶菓子をもってくる!」

「……………詩音。さっきの話、またあとでしましょうね!」

沈黙に耐えきれず喉を潤そうとしたら、お茶が切れていた。

つい出た僕の一言に反応して、輝夜がお茶を入れに行き、妹紅が菓子を取りに行つて、紫がスキマで逃げ帰る。

八意先生怖い……………。

一月後、僕らは西行寺へと飛翔している。

スキマでじかに行かないのは、やっぱり心の準備が必要なのだらう。

「この辺りもだいぶ変わったね」

「西行妖の影響が無くなったせいね。あれだけの力ですもの、あらゆるところにその力は及んでいたのでしょうか」

記憶とは違う様を見せる土地、最後に来た時に満ちていた妖気が、清廉たる靈気に変わっている。

「西行妖……………紫様と十夜様のご友人が人柱となって封じたという?」



「そうよ。私の不甲斐なさ故に、幽々子が動かざるを得なかったのよ」

「紫、あまり自分を責めないで。それに、不甲斐なかったのは僕も一緒だよ」

親友が没した地に来たせいか、紫が陰鬱になっている。

幽々子に会えるかもしれない、その希望が心労に拍車をかけているのだろう。

なぜなら、ありえないと思っていながらも、幽々子に責められないか等の心配を無意識下でしてしまったりするのだろう。

そういう僕も、自覚してる分ましかけど、そういう物はある。

そもそも、妖気が靈気に変わるぐらいの期間墓参りにも来ていないあたり、思ったよりも心に刺さっていたみたいだ。

僕と紫の雰囲気が悪くなってしまい、藍は失敗したという顔で黙ってしまふ。

そして、暗い雰囲気のまま僕らは西行寺へ降り立つ。

「来てくれましたか詩音君」

「閻魔王様、待たせてしまったでしょうか？」

西行寺の庭には、閻魔王様が待っていた。

「いえ、私も今来たところです。それで、そちらの方がスキマ妖怪ですか？」

「ええ、スキマ妖怪の八雲 紫ですわ。これは式の藍です」

先ほどの空気は一切見せず、紫は優雅に一礼する。

「丁寧にも。ここで何か話したいところですが、無駄に時間を食う訳には行かないので、単刀直入に行きます」

普段からそうすればいいのに。

一瞬そんな事を考えながらも、真面目に閻魔王様の声に耳を傾ける。

「まずは、会ってもらいたい人ですが………西行寺さん、来なさい」

西行寺………!

「幽々子！」

「えっと、どちらさまでしょう？」

閻魔王様の声に呼ばれてきたのは、僕らの予想通り幽々子であった。

生前よりも元気そうである。

痩せこけていた体が、ふつくらと健康的な肉付きを取り戻している。

その姿、その声、纏った空気すらも僕らの知るものなのに、幽々子は僕らを見て不思議そうに首を傾げる。

「ゆ、幽々子？ 笑えないわよ、その冗談……」

「もしかして、生前に会った人？ ごめんなさい、私……  
生前の記憶が無いの」

かすれた音を鳴らしながら、紫が息をのむ。

知っていた僕ですらショックで、知らなかった紫には見た目以上の衝撃があつたのだろう。

「……………」

「……………紫？」

紫が俯き、前髪で目元が隠れて感情が読めない。

そして、次の瞬間。

「……………ごめんなさいね、西行寺さん」

「紫!？」

まさか、こんなことになるなんて。

予想外の結果に、僕は絶句した。

「でも、あなたが良ければ……また、私と友達になって、幽々子と呼ばせてもらえないかしら？」

「いいわよー。むしろ、私からお願いしたいわ。それに、あなた達とは初対面の気がしないのよね」

「……なんだ、杞憂だったのか。」

紫と幽々子は、以前のように笑いあいながら話している。

「ふう……」

「ふふ、苦労性ですね詩音君」

ため息をつくとき、閻魔王様が話しかけてくる。

「大切な友人の事ですから」

「愛人ではないのですか？」

一人凝り固まっていた事を見抜かれているらしい。

せつかく気を使われたのだから、乗っておこう。

「何言ってるんですか閻魔王様！」

「え、違うのですか十夜様？」

あれー？

なんでそこで藍がボケるの？

真面目な藍の事だから素なんだろうけど、つまりそれはそう思われていたという事に他ならない。

「藍………君が僕をどう思っていたか、よく解ったよ」

「ひっ！？ と、十夜様、その笑い顔怖いです！」

藍は何を言っているのだろうか。

「そうしてるんだから当然じゃないか」

「ゆ、紫様助けてー！？」

背を向け逃げようとした藍………だけど、それは失策だ。

「ひゃん！？」

藍が背を向ければ、そこにあるのは九本の豊かなしっぽ。

それをむんずと掴み、優しく引っ張り上げる。

「ら、らめれふ！ と、とぶやはまー！？」

「藍はしっぽを掴まされると弱いもんねえ」

コクコクと頷き、離してくれと蘭は涙目で訴えてくる。

「おお、いいですねそれ。私もいいですか？」

「どうぞ閻魔王様。癖になりますよ」

「ら、らめえー！」

「ら、らめえー！」

「いいの紫？」

「別にいいわよ。藍はそれも仕事ですもの」

中国で見つけた時、あのしっぽに一目惚れしたからそれも仕事として式を打ってある。

それなのに嫌がるのは、モフモフに対する羞恥心等を残しておいたから。

「我ながらいい仕事をしたわ」

「ふふ、楽しそうね」

微笑む幽々子。

記憶が無くなっていたのは残念だけど、話してみると既視感のよ

うに私たちを覚えている事が分かった。

「あたりまえじゃない。こうして幽々子と友達になれたのだから」  
「嬉しい事言ってくれるわね紫。私も紫と友達になれて嬉しいわ」  
打てば響く。

かつてと同じ感覚で言葉を交わし合う。

私と幽々子の間は、友達になったばかりのそれではなく、長年共にあった親友のそれである。

そういう感覚的な部分だけでも、私の事を覚えていてくれてうれしい。

「紫ー！」

「あら、呼ばれたわよ？」

「名残惜しいけど、お仕事の時間ね」

詩音に呼ばれて、幽々子と二人で詩音の下に向かう。

「……はっ!? 詩音君、遊んではかりはいられません  
「ー」

藍のしっばで一番遊んでた人が、何を言う。

「ゴホン！ 詩音君、お仕事ですよ」

なかった事にする気だよこの人。

モフられ過ぎて、地面に突っ伏す藍が哀れである（責任転嫁）。

「紫ー！」

幽々子と楽しそうに話していたみたいだけど、お仕事の時間です。

「すみませんね、楽しそうに話していたところを」

「いえ、また会えるのでしょから、次は時間がある時にでも幽々子と会います」

二人の雰囲気は昔のそれと同じで、少し瞳が潤んでしまう。

軽く涙を指で拭い、閻魔王様の話を聞く事にする。

「さて、今日あなた達を呼んだのは、西行寺さんと会わせるためではありません。それはついので、本題はこの西行寺を冥界に移す事です」

「……………ずいぶんと大がかりな仕事ですね」

「私が呼ばれた理由も分かりましたわ」



これは確かに僕や紫が必要だね。

紫の境界操作で西行寺を冥界の領域として、西行寺が無くなったことで空いた領域を、僕の時空間操作で閉じる。

西行寺を冥界に運ぶのは、あまりにも現界に与えてしまう影響が大きすぎるためだろう。

現に、西行妖一つで周辺の霊気と妖気のバランスが、簡単に傾いてしまっていたからね。

「そういう事ですので、よろしくお願いします」

閻魔王様が説明を終える、内容は予想通りだった。

「じゃあ、始めようか」

「……………疲れたわ」

「……………同じく」

今までの仕事の中で、今回の仕事は最も重労働だったと思う。

今は、幽々子が入れてくれた茶を飲んで、休んでいる……………  
あ、味変わってないね。

「御苦労さまでした。報酬と言ってはあれですが、西行寺はあなた達が守護する地に繋げておきましたので。あと、これからはここを白玉楼と呼ぶように」

名前を変えることで冥界になじませて、穢れを浄化するのか。

さすがに冥界とするには、西行寺は穢れに溢れすぎていたからね。

「あら、これで会いやすくなったわね幽々子」

「いつでも来てね紫。おいしいお茶を用意しておくわ」

「あまり生者が冥界に来るのは宜しくないのですけど……まあ、いいでしょう。野暮ですし」

「結構適当ですね閻魔王様」

裁判では一寸の狂いなく罪に見合った罰を申しつける、そういう厳格な人とは思えない適当さだ。

「職務では妥協はしませんけど、この程度を見逃せないほど私は堅物じゃありませんよ」

もつとも、普段の顔をしている僕としては妥当な所だけだ。

「閻魔王様が堅物……？ あり得ませんね」

「……どーせ私は家事もできないはずですよーだ」

何度、閻魔王様の家を片づけた事か。

「それに、名前が職務に似合わないからって、職名で呼ばせるよ  
うな方ですし」

「そ、その話は禁句です!」

閻魔王様。

本名 閻魔<sup>ヤマ</sup> ヤミー＝ヤマラーヂヤ。

他の十王様からは、親しみをこめてヤミーちゃんと呼ばれている。  
というか、他の十王様は老人の姿なのに、閻魔王様だけが少女の  
姿なんだよね。

その接し方はまさに、孫を甘やかすおじいちゃんとおばあちゃん。  
性格も幼く、結構気にしているらしい。

「詩音君はまた私を子供扱いして!」

「ああ、最初職場で見かけたときには迷子かと思いましたし」

「……ふはっ!」

あ、幽々子と紫が噴き出した。

そのあとも閻魔王様の恥ずかしい話をし続けたら、すっかりそ  
を曲げてしまった。

そんな閻魔王様を宥める僕は、子守に苦戦するお父さんのようだったと、後に紫と幽々子に言われることになった。

第十三章 白玉楼 (後書き)

そんなBad Apple!!で大丈夫か? 【エルシャダイ】を聞きながら書いていたら、「大丈夫だ、問題ない」とか「いいいいいいいいいい」とか「つまようじ」とか書きそうになってふいた。シャダイ面白過ぎ。

今回のオリキャラは閻魔王様です、名前の由来は閻魔でWiki見ればすぐにわかります。

しかし、執筆速度落ちてきたなあ……。  
中々、書き始めの頃のように筆が進みません……。なんか、テンション上げる方法無いかなあ。

## オリキャラ設定 (前書き)

次話が全然進まないのので、お茶濁しにオリキャラの設定を。

## オリキャラ設定

### 天魔

名前 ろくよくてん  
六欲天 はしゅん  
波旬

容姿 Gガンダムの東方不敗 マスターアジア黒髪版。

能力 『風雷を司る程度の能力』

性格 容姿通りの御方。

る。  
ただ、天狗の長として、種族の為なら簡単に頭を下げれる。

備考 天魔について調べずに出した方。

です。  
最初に決まっていたのは能力だけで、他は今回の後付け

台詞がそれっぽくて良かった……。

やっぱり肉弾戦が最も強い。

### 鬼子母神

名前 訶梨帝母 吉祥果

容姿 サモンナイト3のミスミ様。

能力 『増と産を司る程度の能力』

性格 偉大な母、そしてお茶目で人をからかうのが好きなお姉さん。

備考 鬼と母というワードから、当初からイメージはミスミ様で書いてました。

## 閻魔王

名前 閻魔 ヤミー ヤマラージャ

容姿 とある魔術の禁書目録の月詠 小萌先生を、閻魔様の格好にしたもの。

能力 『相手に与える程度の能力』

性格 仕事時は厳粛で公明正大な方。

プライベート時は見た目通りの子供っぽさで、大人ぶるうとする。

一度メッキが剥がれると、確実に子供扱いされてしまう。



備考 映姫様よりもちっさいです。

cm台。 自分的には、映姫様≡140cm台 ヤミー様≡130

シークレットブーツや、パッドで涙ぐましい(無駄な) 努力をしています。

能力

『風雷を司る程度の能力』

風と雷を操るのは朝飯前で、風や雷そのものとなったりすることも可能。

さらには司るとい言葉通りに、それに付随する概念をある程度使用できる。

なお、この能力を使えば、確実に幻想郷最速であると言える。

『増と産を司る程度の能力』

増と産、増は乗算を示し、産は加算を示す。

例えば、増の力で一発の弾があたり一面に広がる弾幕になったりする。

産は無から有にすることも可能だが、どこからか代価を持つてくる必要がある。

『相手に与える程度の能力』

裁きを与える、死を与える、祝福を与える。

相手に対してあらゆるものを与える事が出来る。

ただ、自身の権能を超えることはできないし、与える理由（代価）も必要とされる。

## オリキャラ設定 (後書き)

普段、東方Wikiの幻想郷年表を参考にさせてもらっているんですけど、ここいらは事件のない空白期で、想像しずらくて進みません。

うーん、文才か幻想郷から何かを受信したいです。

こんな感じでペースが落ちてきていますが、がんばって書いていきます。

第十四章 妖怪巡り 花と瞳 (前書き)

週一、二か……もう一つぐらい投稿できるようにしたいんですけどね。

## 第十四章 妖怪巡り 花と瞳

幻想郷と呼ばれる土地は、意外と広い。

中央に人里があり、四方を山々が囲む。

その中で一際高く大きい北の山が妖怪の山と呼ばれていて、天狗や鬼などの強力な種や、弱小神が領域を据えている。

妖怪の山は種族ごとの縄張りがはっきりとしているが、各々の関係は良好である。

天狗と河童などは友人になることが多く、鬼は天狗の上司のようになっている。

妖怪の山のさらに上空へ行けば天界に出るが、僕はあまりよく知らない。

なお、天界よりも低い位置だが、幻想郷上空に白玉楼が固定された。

位置的には妖怪の山に近い場所になる。

その周囲に張られた結界が冥界と顕界を分けているが、僕と紫はそれを越えてよく遊びに行く。

人里の西には魔法の森が広がり、そのすぐ北には霧の湖が湖面を揺らす。

将来には紅魔館がここにやってくるのだろうが、今は妖精が多いことぐらいしか特徴はない。

霧の湖を川沿いに北上すると、人里から妖怪の山を挟んだような位置に中有の道が現れる。

その先には三途の川が存在し、普通は中有の道からしかたどり着けない。

魔法の森を西南西に抜けると、一本の道が出てくる。

その先は行き止まりとなっているが、いろいろな力が溜まって淀み、いろいろな空間へと繋がってしまう。

主に冥界や三途の川に繋がるため、六十年ごとに大量発生する幽霊を三途の川へ連れてくるバイパスとしている。

その際に幽霊は、そこにある紫の桜を咲かせることで罪を認めて解放される。

これは、裁判や三途の川を渡す際の順番整理の役目も持っている。

このように、死に近い場所の為そこで死ぬものは多く、無縁塚が多く存在する。

そのための対策として、そこに至るまでの道に彼岸花が植えられている。

人里から南に行くと、迷いの竹林が存在する。

あまりに高く伸びた竹と微妙な傾斜が五感を惑わし、吹き出る靈気が第六感すら惑わす。

この竹林を自由に動くには、竹林に宿る妖精か兎たちと話を付けるか、靈氣の流れを感じて記憶する必要がある。

そして、竹林の中には我らが永遠亭が存在し、永琳の仕掛けによって嚴重に隠されている。

人里から東に行くと、幻想郷の土地とそれ以外の土地との境界に博麗神社が建っている。

博麗神社の祭神は紫ですら知らず、いつから存在しているのか分からない神社はオーパーツのようだ。

神社の裏山には、地獄の一部たる地下世界への穴があったりする。

他にも魔界への道や幻界への道がある等言われているが、何故そんなものがあるのかは不明。

「そして、神社の南には見事な太陽の畑がありますよ」と

眼下に広がる向日葵畑を見て言う。

「このごろは、夏の日差しにさらされながらも幻想郷巡りをしている。」

というより、大妖怪巡りをしている。

幻想郷のパワーバランスの一角たる彼らの様子を見て回ることも、管理者の補助として必要な事らしい。

という訳で、知った妖怪や見知らぬ妖怪にあいさつしつつ、観察して回ってきていた。

それで、本日最後の妖怪の場所まで来たのだ。

#### 四季の花妖怪、風見 幽香。

花のあるところに彼女あり………なんだけど、幻想郷各地に花畑が存在しているため、中々捉えられないでいる。

で、今日は太陽の畑に来ただけ………強い妖気を見つけた。

日傘を差し、鼻歌を歌いながら花に水をやっている少女がいる。

妖気の出所はその少女で、その姿は僕の東方知識にも合致する。

彼女の傍まで降下し、確認を取る。

「こんにちは。風見 幽香さんですか？」

「そうだけど、何か用かしら？」

花に水を与えるのをやめ、風見が顔を上げる。



「管理者やらせてもらってる十夜だけど、少しお話しいいかな？」

「いいわ。でも、少し待ってて。花に水をやるから」

近くの木陰で待っている事を告げ、水やりをする風見を眺める。

先ほどよりは急いでいるが、丁寧に花を世話している。

幻想郷の花が、他の土地よりも美しく力強いのは彼女のおかげといえるだろう。

六十年周期の幽霊大量発生の際に強制的に花は咲かされるけど、多少弱る事はあってもしっかりと咲く。

さすがは四季のフラーワーマスターといったところだ。

花の世話を終えた風見に話を聞く。

街頭アンケートの様なものと思ってもらえばいい。

幻想郷の強者の一角としてや、ただの一妖怪としてなどの様々な話を聞いた。

「うん、これで終わり。付き合ってもらってありがとう」

「ふう………花以外との長話は久々ね」

持参した竹の水筒を渡す。

当然、まだ飲んでないやつだ。

「気が効くわね、ありがとう」

「こつちの都合に付き合わせたのだから、これくらいはね」

僕も水筒を開けて、茶を飲む。

適度に冷たい茶が喉を潤す。

「あらあら、一気に飲むのは体に悪いわよ。花も人も、水分は多すぎず少なすぎず、適度に取り必要があるの」

「はは……分かってはいるんだけど、つい」

優しいお姉さんのように、人さし指を立てて言う風見。

他の大妖怪と同じく、普段はのんびりとしたものである。

余裕のある存在だからこそ、自然に生まれる雰囲気である。

「気持ち分かるけど、気をつけなさい」

「うん、そうするよ」

なんか新鮮である……なんでだろう？

そうか……いつも、精神的に対等か年下としか会話して

ないから、こつこつ年下のように扱われるのは初めてなんだ。

「どうかしたのかしら？」

「いや、風見が姉のようだなと思って」

花の世話が好きなお姉さん………違和感ないな。

「ふーん、面白い事言うわね。私、これでも大妖怪よ？」

「むしろ、そうだからこそその包容力かなと」

僕の言葉を聞いた風見が噴き出す。

「そんなにおもしろかった風見？」

「ええ、久しぶりに心から面白いと思ったわね。そうね………

・あなたのお姉さんになってあげてもいいわ」

………びっくり。

しばらく呆然とする。

「あなた気に入ったから、義弟にしてあげるわ」

「………はい？」

いや、もう一回言われても。

「風見なんて他人行儀で呼ばないで、幽香お姉さん？ 幽香姉さ

ん？ 幽香ねえ？ さあ、好きなの選びなさい」

「いや、いきなりそんな事言われても」

なんとなく放った一言から、トンデモナイことになってるんですけど。

とてもうれしそうに僕を見続ける風見。

さすがにいたたまれなくなってきたので、選ぶことにする。

「……………じゃあ、幽香姉さんで」

「うん、いいわね。それで、あなたの名前は？ せっかく姉弟になったのだから、名字だけなんて他人行儀なのはよろましよう？」

もしかして、他人に飢えてたのかな？

「詩音だけど……………」

「いい名前ね。何かあったら幽香姉さんを頼ってくると良いわ」

この後、風見……………幽香姉さんのペースに終始圧倒される事となった。

夕方によくやく解放されて、僕は首を傾げながら我が家へ帰る事になるのだった。

今日も今日とて幻想郷巡り。

今回の目的は、第三の目を持ち心を読む妖怪『さとり』である。

東方知識を読まれるわけにはいかないのです、今回は禁止ワードを設定して魔術で心にロックを掛けてある。

知識内の東方ワードに『ピー』という音がかかるだろう……  
・もう少しましなのによければ良かった。

魔術を掛けた当初は笑っていたけど、冷静になるとこれは無い。

仕方が無いので、出来る限り東方ワードを出さないようにしよう。

しばらく飛んでいると、閑散としたところに一軒の屋敷が見える。

だが、様子がおかしい。

妖怪が集まり、何やら騒いでいるのだ。

「出てこい古明地！」

ある妖怪の一言に会わせたように、屋敷の扉が開く。

出てきたのは少女、桃色の髪と胸元の第三の目から古明地 さとりと分かる……種族名と同じ名前で厄介なので、種族名をサトリとしよう。

「……………ここを立ち去れですか。少女に向けて気持ち悪い  
は無いですよ」

「っく、相変わらず」むかつくやつですか「……………このっ  
」！

激高した妖怪の一匹がさとりに殴りかかるも、予想通りと言わん  
ばかりにさとりは回避する。

それが引き金になったか、他の妖怪の空気も張りつめてくる。

呼応するように、屋敷から妖獣が現れる。

一触即発、このままでは話も聞けないので、間に入る事にする。

「土気！ 水気！」

双方の間に岩の壁が立ちはだかり、上から降らせた水が全員を濡  
らす。

「双方とも落ちつけ！ それと、この屋敷の住人でない者は解散  
しろ！」

「なんだてめえ！」

「あ、あいつは！」

一匹の妖怪が向かってきたので、軽く魔力強化を加える。

「命たまとつたるわー！！ げふあ！？」

「「としざーん!?」「」

裏拳で適当に殴り飛ばしたけど、やたらとヤクザっぽい妖怪だった。

どこかに吹っ飛んで行った妖怪を追っかけて、屋敷の前に陣取っていた連中が消える。

「なんなんだか」

そいつらの行方を見ていたら、屋敷前には誰も居なくなってしまう。

「濡らしたから当然か」

人だろぅが妖怪だろぅが濡れたままでいたいとは思わないだろぅ。

もしかしたら風呂とかにも入ってるかもしれないので、しばらく待ってみる事にする。

「お兄さん、家に何か用？」

「……………そうだけど」

唐突に目の前へと少女が現れる。

古明地 こいし、閉じた第三の目が彼女だと証明する。

それにしても驚いた。

僕は気を抜いていても、近くに人が寄れば気が付くぐらい出来るんだけど、まったく気が付かなかった。

さすがは『無意識を操る程度の能力』と言ったところか。

だけど、古明地妹（暫定で妹さんと呼ぶ）をちゃんと意識していれば、その気配や存在を捕えていられる。

それにしても、無意識に気配を探っている奴を無効化できるぞ、まさに達人殺し。

「古明地 さとりさんに話を聞きに来ただけだ」

「じゃあ、家に入って待ってるの良いよ！」

不用心……いや、無意識領域の害意とかを見ているのかもしれない。

「いらっしやーい！」

「おじゃまします」

どたどたと駆けていく妹さんの後ろを歩く。

そのまま客間に通され、妹さんはどこかに行った。



「あれ、僕だけだと不法侵入者になるんじゃない？」

少し不安になったけど、妹さんはお茶を取りに行っていただけで杞憂だった。

待っている間、僕は妹さんと会話していた。

僕が幻想郷各地の事を語ると、目を輝かせて話を促してくる。

「あれ、こいし帰って……きゃあ！」

「……ミティマセンヨ」

古明地姉がはだ……ゲフンゲフン。

輝夜と妹紅、諏訪子を思い出し、徐々にそこから意識を逸らしていく。

そして、魔術で記憶封印を掛ける。

「……おーい」

「……はっ!？」

目の前で妹さんが手を振っている。

何があっただけ?

嚴重に記憶封印を掛けたのは覚えているんだけど……ま  
あ、忘れていた方がいい事なんだろう。

「ごめんねー。お姉ちゃんに言っつゝの忘れてて、貧相なもの見せて」

「……………何の事かな？　ちよつと記憶封印かけたみたいなんだけど」

貧相なもの？

「硬派なんだね」

「良く解らないけど、愛妻家なだけだよ」

「お待たせしました」

古明地姉が現れる。

「さつきはこちらの失態ですので、気にや……………まったく覚えが無いんですか。そうですね、記憶に残らないほど貧相で悪かったですね」

「あー、記憶封印掛けたから何の事だかわからないけど……………もしかして、僕が古明地さんの風呂あがりでも見たのかな？」

水をぶっかけた事は覚えているので、前後の記憶から推測するとそうだった。

「……………名字は呼びづらいでしょっつから、名前で呼んでくれて構いませんよ」

「あ、私もいいよー」

「じゃあ、そうさせてもらうよ、さとりについで」

はぐらかされたので、気にしない事にする。

「そうしてくれると助かります」

「知っててもこれは驚くね」

人間より妖怪が恐れている理由が分かる。

妖怪にとって精神攻撃の方が、物理攻撃より有効だから。

でも、そんな事はしなと思うのだけどね。

「そうでもないですよ」

でも、害意ある存在とかにするだけでしょ？

「……………むやみやたらに敵は作ってませんから」

素直じゃないね。

「用件は何ですか！」

顔を赤くして、大声を放ってくる。

その赤さの何割かは、恥ずかしさからだろうと想像は難くない。

「にやにや」

「にやにや」

「よ、う、け、ん、は、な、ん、で、す、か！」

からかい過ぎたか。

口元がにやけてしまうので、意識を仕事用にシフト。

「切り替えが早いですね」

「こういうのは交渉に必須だからね」

この後はきつかりと仕事（幻想郷アンケート）をこなし、こいしと遊んでから帰宅した。

少しは僕を信用してくれたのか、最後にさとりがこんな事を言っていたのが印象的だった。

「また来てくださいね。人とあまり接しないこいしが、あなたには懐いてますから。それに、私もあなたのような人は好ましいと思うので」

第十四章 妖怪巡り 花と瞳 (後書き)

話と話の間で、実は百年たったりしていることもあり、それでもまだ現代には届かず……やり残してることも多いです。からいいんですけど。

モブキャラ設定(笑)

名前 矢島 歳三

外見 角刈り三白眼、ヤのつく自由業の方

能力 『素手喧嘩<sup>ステコロ</sup>する程度の能力』

備考 結構いい人、さとの対応では嫌われてしまうと、身をもって示しそうとしている。単純ゆえに、さを前にしたときはそんなことを考えていられないから、ばれてない。

『素手喧嘩<sup>ステコロ</sup>する程度の能力』

どんな相手だろうと、強制的に肉弾戦にしまう能力。

格闘戦が強ければ有効な能力。

二度と登場しないでしょうから、ここで紹介しました。

では、また次回をお楽しみに。

第十五章 拾われる歴史 (前書き)

もともと執筆遅くなってんのに、リアルも重なってこんなに遅れて  
しまいました。  
すいません。

## 第十五章 拾われる歴史

「ほらほら！」

「つく！ 火よ廻れ！」

輝夜が放った弾幕を、妹紅が回転する炎で焼き尽くす。

だが、その間に輝夜は次の準備を終えている。

掲げるのは『蓬萊の玉の枝』その原典。

そこに宿る力を顕現させ、強力な弾幕が展開される。

「次行くわよ妹紅！」

「火よ！ 火よ！ 火よ！ 火の銅剣！」

妹紅は懐から火符と銅板を取り出し、それを柄として炎で剣を造り出す。

妹紅が一瞬でできる最大限の強化、五行比和による火の三乗を火符に行い。

さらに五金において火の位置にある銅板、銅剣の意味を持つてくることで剣の形に密度を高める。

それらの強化で、並み妖怪を一瞬で焼き尽くす武器が出来上がる。

「それだけじゃ足りないわよ!」

「はあっ! せいっ!」

が、蓬萊の玉の枝の原典から生み出される力、それらを打ち消すには足りない。

「火よ! 火よ! 火よ!」

「無茶するわね」

弾を消すごとに弱くなる火の銅剣。

妹紅は、それを強化をし続けることで元の火力を維持している。

すでに振われている力を強化する。

繊細なコントロールを要求されるそれを、的確に剣を振るいながら妹紅は実行する。

火の銅剣は元の勢いを維持しながら弾幕を焼くが、さすがに妹紅の表情は険しいものだ。

「火よ! 火よぶっ!?!」

「はい、お仕舞い」



輝夜が隙を見て放った一撃が、妹紅の額を弾くいて戦い……  
いや、訓練は終わった。

「お疲れさん、妹紅、輝夜」

「姫様、妹紅様、どうぞ」

「ありがと永琳」

「あ、ありがと」

涼しげにお茶を受け取る輝夜とは対照的に、息を切らせながら受け取る妹紅。

月に居たところから嗜みとして戦い方を身に着けていた輝夜と、ここ二百年ほどで戦い方を学んだ妹紅では差が出るのも当然か。

ただ、僕や永琳に輝夜という優秀な教師がいるので、その成長はかなり速い。

剣術や五行、符術を僕から学び、緻密な戦術論を永琳から学び、物に宿る力の引き出し方を輝夜から学ぶ。

もつとも、五行は火に偏っていたり、力の引き出しもそれ関連ばかり、戦術も経験不足でまだまだといった具合だけど。

「あー、勝てないなあ」

「当たり前よ。そんなに簡単に、私たちに勝てる訳ないじゃない」

嘆息する妹紅。

もしかしたら、成長してないとか役に立たないとか、そんな馬鹿な事を考えているのかもしれない。

「それでも、かなり成長しているけどね。経験さえ積みめば、中級妖怪ぐらいとは戦えるよ」

「……………はい？」

なるほど、感覚が狂ってるのか。

「妹紅。もしかして、私たちに勝てないと一人前になれないとか考えてなかったでしょうね？」

「ち、違うの？」

「姫様は大妖怪並みですし、旦那さまや私などは上位神ほどになります」

啞然とする妹紅。

「強いとは思ってたけど、そんなに強かったんだ……………」

「諏訪子も、上位神だしね」

まさに少女<sup>幼女</sup>だけど、それでも土着神を統べていた神様だ。

「そういえば、紫さんも大妖怪よね。私の周りほとんどもない人ばかりだったんだ……………」

改めて知った現実に、妹紅が遠い目をする。

「何言ってるの妹紅？　あなたも、いずれはその一人になるのよ」

「……………頑張ってみる」

若干気が抜けた表情になった妹紅。

妹紅の百面相を心のアルバムに刻みながら、妹紅の訓練予定を考  
える。

そろそろ、外に出してもいいかな。

輝夜と永琳は追手がいるから外に出れないけど、妹紅にはそんな  
縛りはないのだから。

この間は輝夜に相談を受けたりもした。

自分のせいで、妹紅をここに縛り付けたままでいるのは嫌だと。

妹紅はそんなふうには思わないだろうけど、輝夜がそう感じてし  
まうのも頷ける。

それに、いずれは僕は僕は輝夜たちが外に出れるようにするつもりだ  
から、その先駆けになってもらいたい。

「妹紅」

「どうかしたの詩音？」

首を傾げる妹紅。

うん、可愛い……じゃなくて。

「そろそろ外に出てみようか」

「やだ」

清々しい笑顔で言いきつてくれました。

「どうしてこうなった……」

「まあ、仕方ない事じゃないかと」

僕の嘆きに、永琳が苦笑する。

「ふんっ！」

僕の前では、輝夜と妹紅が視線を合わせないようにしながら、剣呑な雰囲気ですべてを食べている。

どうしてこうなったか簡単に言うと、お互いがお互いを思い過ぎたからである。

自分に縛られないで、妹紅に外を見てほしい輝夜。

興味はあるけど、輝夜を残して出る気はない妹紅。

結果、久方振りの大喧嘩である。

まあ、嘆いては見たけど、実際そこまで心配してない。

原因がお互いを思いあつての事だし、さっきからお互いをちらちら見ているのだから。

就寝。

僕を挟んで、妹紅と輝夜が寝ている………起きてるけどね。

僕は寝たふりをしながら、聞き耳を立てる。

すると、妹紅が動き出した。

「……………輝夜、起きてる?」

「……………起きてるわ」

輝夜も動き出し、会話を始める。

「輝夜……………私は輝夜を置いていきたくないよ」

「そうね……………私も置いて行かれたくはないわ」

その言葉に妹紅が反応しようとした瞬間、輝夜が話を繋ぐ。

「でもね。私のために妹紅が我慢して欲しくないの」

「でも、私だけ外に出れるなんて……………」

妹紅が落ち込み気味に言うけど、輝夜がくすりと笑う。

「いずれ私も外に出るのだから、気にしないでいいわよ」

「……………え？」

あらら、これは

「いつか外に出れるようにしてくれるんでしょ、詩音？」

気付かれてたみたいだね。

「いつになるかは分からないけど、そうするつもりだよ」

「ということらしいから、妹紅は気にしないで外に行きなさい。

土産話、期待してるわよ？」

「……………分かったよ。輝夜が外に出れない間は、私が輝夜の代わりに外を見て来てあげる」

吹っ切れたように言う妹紅。

これだけ背中を押されれば当然だね。

「あふ……」

緊張感が切れたのか、妹紅が欠伸をする。

「話も付いたし、もう寝ましょう?。」

輝夜がそう言い、僕は寄り添って目を閉じる。

「「「おやすみ」」」

数年の時間が経ち、妹紅は一人で外を巡っている。

週二回ほどの日帰り旅行で、いろいろな所のお土産を持ってきては輝夜に土産話をしている。

輝夜もそれを楽しみにしていて、そわそわと妹紅の帰りを待っている。

実は永琳も楽しみにしているみたいで、時計を良く見ていたりする。

「まだ妹紅帰ってきてないのー?。」

「いらっしやい諏訪子」

遊びに来る諏訪子も、妹紅の話を楽しみにしている。

「ところで、八坂には言ってきたの？」

「うんにゃ、書置きだけしてきた」

八坂、泣いてんじゃないか？

この前会いに行ってきたとき、胃薬を常食のように飲んでいた八坂を思い出す。

なんかいい笑顔でサムズアップする幻影が……。

と、そこまで考えたところで、玄関が開く音がする。

「お、帰ってきたみたいだね」

「じゃあ、行こうか」

軽い気持ちで玄関に行っただけ、漂ってきた血の匂いに意識を切り替える。

「諏訪子」

「分かってる！」

広い永遠亭を駆け玄関に行くと、妹紅が血まみれの少女を永琳に渡していた。

「永琳、どう？」

「大丈夫です。妹紅様の応急処置が完璧でしたから、見た目ほど



酷くはないですよ」

永琳はそう言つと、苦しそつに息を吐く少女を医務室へと連れていった。

「あ………詩音」

「詳しい事は後、先に体洗ってきたほうがいい」

血だらけになっている妹紅を風呂場へと促す。

「じゃあ、詳しい事は後で」

妹紅が行つて、僕と諏訪子が残される。

「とりあえずは………掃除しようか」

「頑張つてねー」

逃げようとした諏訪子の襟首をつかみ、道具を取りに移動した。

掃除を終えて居間で待っていると、着替えた妹紅がやってくる。

「永琳はまだ来てない？」

「うん、検査とかもしてるんじゃない？」

それにしても、いったい何があったんだろうか？

「あの子さ、どっかの金持ちに追っかけられてたみたいなんだよね」

そのあと、妹紅は助けた状況を語る。

いつも通り空を飛んでいたら、下の方が騒がしかったので様子を見に行った。

そうすると、高そうな装備に身を包んだ兵士と陰陽師が、少女を追っかけていた。

足止めの為に陰陽師が放った一撃が直撃してしまい、少女が倒れた。

見たところ妖怪じゃなくて人の子だったので、適当に追手を気絶させてから少女を助けたらしい。

それで、少女に負荷がかからない程度の速度で帰ってきた。

「幸い、そんなに遠くない場所だったから良かったよ」

「どう思う諏訪子？」

「何か重要なものでも盗んだかしたか、不老不死とかそういう迷信の対象にでもされたか……そんな所かもね」

宝か何かを持っていたら攻撃するとは思えないから、後者の迷信関連の確率が高いな。

考え込んでいると、永琳がやってくる。

「永琳、どうだった？」

「出血量が多かったです。問題ありません。妹紅様の応急処置と彼女が半獣だった事が幸いしましたね」

迷信の可能性が増してきた。

「あの子、半獣だったんだ。人間だと思ったんだけど」

「人間の姿だったから気付けなかったんだと思うよ。姿が変わる半獣は、姿次第で特有の力と霊力の割合が変わるから」

逆に、姿が固定されている場合、割合は固定されたままになる。

「あれこれ言っても、本人から聞かなきゃ分からないでしょ」

「諏訪子の言うとおりでだね。永琳、いつぐらいに起きそう？」

「明日の朝ぐらいではないかと」

明日か。

「じゃあ、服とか用意しておかないと」

「何の話ー？」

「あ、輝夜」

輝夜がやってきたので、事情を説明。

「そういうことなら任せて。妹紅、生地用意しておいて。永琳、寸法測るから付いて来て」

あらら、あれは凝るつもりかな。

「暇だね」

「うん、暇だね」

残された僕と諏訪子は、静かにお茶を啜っていた。

翌日、起きて居間に来ると昨日の少女がいた。

緊張した面持ちで、食卓についている。

「詳しい事は後で聞くから、今は食べて体力を取り戻すと良いよ」

「は、はい！・・・っ!？」

大きな声で返事したせいで、傷に響いてしまったようだ。

痛みに悶える少女に、妹紅が優しく声をかける。

「そんなに慌てなくていいの、傷に響くでしょ？」

「……………はい」

少女の痛みが引くのを待ってから、僕たちは朝食を食べ始めた。

ずずずっ。

食後に皆してお茶をすすっている。

さて……………食事を終えて一息吐いたところで、本題に入るとするかな。

「さて、まずは君の名前を覚えてもらえるかな？」

できるだけ優しい声音で、少女に話しかける。

「か、上白沢 慧音です。慧音と呼んでください」

「そんなに緊張しなくていいのよ、詩音は優しいからね」

一言余計だよ妹紅……………照れるじゃないか。

僕の気持ちは置いて、まず何を聞こうか考える。

まずは……………何との混血かがいいかな。

僕らは半獣だからって排斥しないって教えてあげなきゃ。

「まずは、君が何の獣との子供かを教えてもらおうかな？」

「っ!？」

霊力が強く、妖気の中に少しの神気を感じることから、神獣とか幻獣あたりだと思っけど。

「警戒しなくていいよ、僕らは下手な神様より強いから」

「詩音、それだけで全て察しろって言うのはかわいそうよ」

「つまりね、慧音。強者は弱者を恐れないし、なにもされなければ排斥しないってことよ」

輝夜に怒られて、妹紅が教えてあげてくれました………ぐすん。

「その、あの、えっと………ハクタクって知ってますか？」

「大陸の方の聖獣だね。つまり君は、ハクタクの力を宿している訳か」

これだけで、おおよそ事情は理解できた。

「はい。それが貴族の人にばれて………」

「………今に至ると」

でも、ハクタクの力があれば、なんとかできそうな気もするけど。

「ハクタクの力は使わなかったの？」

「……………まだ上手く使えないんです」

なら仕方ない。

事情は把握できたし、慧音の処遇をどうしようか。

まあ、ほとんど決まってるんだけどね。

「慧音は行くあてはあるの？」

「ないです……………とりあえず逃げただけでしたから」

うん、決定。

皆を見渡すと、僕と同じ事を考えたか、笑っている。

「なら、ここに住まないかい？　ここは月のお姫様の隠れ家だから、隠れるのにはうってつけだよ」

「月のお姫様って……………もしかして、かぐや姫ですか？」

良く気がついたね。

「そうよ、私がかぐや姫こと、十夜　輝夜よ」

「じゃあ、もう一人の黒髪のお姉さんが藤原ノ末姫？」

「藤原 不比等の末女ならそうだよ。今は十夜姓で十夜 妹紅だ  
けど」

慧音が、答えを聞いたたびに段々と目を輝かせていく。

「もしかしてお医者様は、月の使者に紛れていた、かぐや姫の従  
者ですか？」

「紛れていたというか、頭目でしたけどね」

一通り見渡して、最後に僕へ視線が戻ってくる。

「つまり、この方が十夜家三代目当主、十夜 詩音様」

「懐かしい肩書だ」

さすがは夢見る年頃、恋愛物語は大好物って感じかな。

そのまま夢に浸ってもらってもいいとは思っけど、返事がまだな  
んだよね。

「で、慧音はここに住むのかい？」

「………お、お世話になります！」

こんな感じで、永遠亭に新たな住人が増えました。

なお、暇つぶしに幻想郷の歴史を、紫と共に裏表教育するのは別  
のお話し。





## 第十五章 拾われる歴史 (後書き)

最近、テーマが浮かばなくて困る。

その話のテーマが決まれば、結構すらすらといけるのだけどもなあ。  
幻想郷の歴史の空白期は、結構厳しいです。

第十六章 閻魔様と幻想入り (前書き)

テストとレポートを終え、何とか書きあげました。  
皆さんお待たせしてすいません！

## 第十六章 閻魔様と幻想入り

「と、そういう理由で私は月面戦争を起こしたの」

「な、なるほど。表の理由だけでは失敗したかのように思ったんですけど、裏の理由では一応の成功を見せていたのですね」

紫の話聞いて、その内容を理解した慧音が歴史の裏表に驚く。

「捗ってるみたいだね慧音」

「はいっ！ 紫さんの話は凄く為になりますね！」

「ふふっ、それは良かったわ」

元気に返事をする慧音、微笑む紫。

さすがはハクタクの半獣というか、歴史の話聞く慧音の瞳は輝いている。

教える側の紫も、慧音がすっかり知識を吸収してくれるからか楽しそうである。

「でも、根を詰め過ぎるのはよくない。もう結構な時間が経ってるから、今日はここらへんで終わっておくといい」

「あら、もうこんなに経ってたの。それじゃあ、お開きにしまし

「よう」

「うう……残念です」

紫や僕も結構忙しい身のため、幻想郷の歴史を教えるのは月に一回あるかである。

それ以外は、妹紅の旅に付き添っていたりする。

妹紅も腕を上げたため、慧音を連れていても安心できる。

「それじゃあ、失礼するわね」

「ありがとうございます、紫先生」

「またねー」

スキマを開いて、紫は帰って行った。

「じゃあ、私は慧音と寝るから」

「またー?」

慧音の部屋に行こうとする妹紅と、妹紅の服の裾をつかむ輝夜。

僕はその後ろで笑いをこらえている。

輝夜が妹紅にあんな甘え方をしたのは、何十年振りだろうか。

今の輝夜を例えるなら、新しく生まれた妹に母親を取られそうになって、駄々をこねる少女だ。

基本的に二人は似通っているので、慧音を拾ったのが輝夜なら、妹紅がそうになっていただろう。

「慧音はまだ子供なんだから、仕方ないでしょう？」

「でもー！」

うん、慧音が来てしばらくしてから見続けている光景だけど、何度見ても飽きない。

ちなみに十回に一回ぐらいで、妹紅がしかたないなあと折れる。

まあ、そろそろ僕も大人げない事を止めて、解決をしますか。

「じゃあ、慧音を連れてくるといいよ」

「え、いいの？」

慧音も僕らと一緒に寝させるという選択肢は、僕が許可を出さなければ出なかった案だろう。

僕と輝夜と妹紅は夫婦なわけで、あんな事とか……まあ、後は察してほしい。

そういう訳で、慧音を連れてくるといういろいろ出来なくなるわけで、

僕を中心に考えてる二人としては迷惑をかけたくなかったのだろう。

僕自身は結構前から慧音を連れてきてもいいとは思ってたんだけど、あまりに子供みたいな輝夜が可愛かったので放置してました。

それに、僕も男の子なわけですて……。踏ん切りつかなくったんだよねー。

若干自分に甘過ぎた事に苦笑いしながらも、妹紅に慧音を連れてくるように促した。

「あわわ、い、いいんですか詩音さん？」

「慧音つてもしかして、結構耳年増？」

皆で一緒に寝ると言っつて、耳まで赤くなられるとは思いませんでした。

「えつと、私は半獣なので、見た目より少し年齢は高いんです」

「ああ、そういえばそうだったね」

妖怪だとかそういった幻想種の体は、寿命に比べて早く成人並みに成長して、その姿を長期にわたって維持し続けるのだ。

だが、それでも10歳程度の見た目では耳年増と言ってもいいだ

る。

まあ、これ以上いじる気もなかったので、慧音を落ち着かせる。

「まあ、そういうことは気にしないでいいよ、慧音も永遠亭の員、僕らの家族なんだから」

「……………あ、凄くうれしいです詩音さん」

感極まったのか、少し目じりに涙を浮かべる慧音。

「それはよかった。実を言うと、僕らは慧音を娘の様なものだと思ってる」

「む、娘ですか」

「うん、詩音の言うとおり、私は慧音を娘だと思ってるよ」

僕と妹紅の言葉に、完全に涙ぐむ慧音。

そんな慧音を微笑ましく見たあと、不貞腐れてる輝夜を僕らは見る。

「……………私も、そう思ってるわよ。詩音や妹紅にかまってもらってて少し嫉妬したけど」

「ありがとうございます、輝夜さん！」

後ろを向く輝夜だけど、それが照れ隠しなのは誰が見ても明らかだった。



正直なところ、僕は慧音を本当の娘にしたいと思っている。

なぜなら、僕らの子供を半ば諦めているからだ。

この数百年、どんなに頑張っても僕らは子宝に恵まれなかった。

多分、原因は蓬莱の薬。

推測だけど、妻たちの体は状態が固定されていて妊娠できないの  
だろう。

それに、問題を解決して蓬莱人同士から子供が生まれたとして、  
その子が蓬莱人になってしまいかもしれないのも怖い。

赤子のまま成長しないかもしれないし、何も知らずに永遠の命を  
背負わせるのも心苦しい。

そもそも、蓬莱人を増やしすぎれば世界の循環も狂ってしまいか  
ねない。

だから、慧音の存在は僕らにとっても救いなのだ。

「ふあ………そろそろ寝ようか」

「ええ、そうね」

夫婦三人＋ が寝ても、特注布団は余裕がある。

大きなベッドとか布団ってロマンじゃない？

まあ、ロマンは置いておいて、僕の隣に輝夜と慧音、慧音を挟んで妹紅が布団に入る。

「「「「おやすみなさい」「」「」」」」

しばらくは寝ないで、慧音の様子をうかがう。

「すう……」

良かった、安心しきった表情で寝ている。

数百年ぶりの娘に、僕は顔をほころばせるのだった。

「最近人間が増えてきたのよね」

隣で茶を飲んでいた紫が言う。

「そうねー、ここにも一杯霊が来るようになったし」

隣で僕の分のまんじゅうを食べる幽々子が言う………相変わらず食い意地が張ってるなあ。

「生まれて、生きて、死んで、魂が巡って、また生まれる。正しい循環はしているけど、生活が安定してきたからか人口が増えつつあるみたいだね」

さすがに僕の知る現代ほどではないけども、僕が神だったころに比べれば人は裕福になった。

世界規模での人口増加に伴い、幻想郷も人が勢力を拡大しつつある。

「そうなのよね。そして、また妖怪が押され始めてるのよ」

「うげ……………また、あれやるの？」

「……………？」

僕と紫のトラウマ兼黒歴史が脳裏によみがえる。

だけど、紫は大胆不敵に笑う。

「ふふふ……………今回はあんな醜態は晒さないわ！」

「紫の醜態？ 詩音、どんな事があったの？」

「いや、紫の話聞いてあげようね」

僕も話したくないから。

「私は思いついたのよ、わざわざ私たちが集めに行く必要があるのかと」

「つまりなんだ、勝手に妖怪が集まってくるようにすると？」

度が過ぎれば、幻想郷に人がいなくなるから調整しやすい方法が  
いいのだけど。

「そう、幻想郷を名前通りの場所にするの。幻想郷は幻想の世界、  
その外は実体の世界と境界を引く事で」

「つまり、忘れられ力を弱めた妖怪たちが、幻想郷に呼び寄せら  
れるってことか」

これは妙手だ。

特に、忘れられて弱ったというのがいい。

それはつまり、人間がいなければ自分たちの存在が維持できな  
い、強制的に認識することだから、この世界の趣旨を理解しやすい  
ということだ。

それに、弱っていれば来てすぐに馬鹿な行動を起こすとも思えな  
いし、力を取り戻そうと切磋琢磨してもくれるだろう。

短期的には目立った成果は出ないけど、長期的にはこれほど幻想  
郷の為になる方法はそう無い。

「それで二人に協力してほしいのは、冥界の上の方々へ話を通す  
事。幽々子は仕事柄、詩音は閻魔王様と交流があるから」

「いいわよ、幽々子にお任せー」

「分かったよ紫。それにしても閻魔王様か、またほかの十王様に  
孫扱いされているんだらうなあ」

同年代のはずなのに、十王様方に孫扱いされて凹む閻魔王様が容易に想像できる。

飴玉やお小遣いを涙ながらに受け取ったり、ちょうどいい所にあると言わんばかりに撫でられる。

……僕も昔やったことだから、本当によく解る。

「じゃあ、私が下の方に話を通しておくから、詩音が閻魔王様に話を通してきてね」

「うん、分かった。さっさと向かうとしようか」

「私は準備だけ進めておくから、頑張ってきてね」

紫に見送られて、僕と幽々子は冥界を飛んで行った。

十王様達のいる所などは、普通は死者しか行けないけれども、三途の川を渡っていかなければ生きてままする。

白玉楼は、そういうバイパス路の一つになっているのだ。

ずいぶんと懐かしい風景を見ながら、僕は閻魔王様の住居に向かっている。

閻魔王様がそこに居ないとしても、使用人に連絡を頼めば円滑に

面会できるだろうと踏んでの事だ。

ちなみに、幽々子とは途中で別れている。

役所の様な物に、話を通しに行ったからだ。

目的の屋敷が見えたので、降下する。

門の前に降り立ち見知った番兵に話を通すと、中に案内された。

使用人の話によると、僕が来た事を連絡したら丁度いいとばかりに、少し待っててもらえと言われたらしい。

客間で小一時間のほほんど待っていると、襖が開いて閻魔王様ともう一人が入ってきた。

「お久しぶりです閻魔王様」

「はい、久しぶりですね詩音君。この子の事は、後で」

閻魔王様と似た格好をしたその少女は、綺麗に会釈を返してくる。

なお、僕はその少女に見覚えがある。

この世界であった訳でなく、いつもの東方知識としてだが。

四季 映姫「ヤマザナドウ

幻想郷担当の閻魔王様だった。

つまり、丁度いいというのは、彼女が幻想郷担当になった事を教える事が出来るという事か。

「それじゃあ、まずは詩音君の用件から聞きましょうか」

閻魔王様に促されて、僕の用件である幻想入りの仕組みを報告する。

「分かりました。詩音君たちならば悪いようにはしないでしょから、好きにして構いませんよ」

「ありがとうございます」

僕らを信用して、容易く許可してくれた閻魔王様に深々と礼をする。

「それじゃあ、私の方の用件ですけど……映姫」

「はい、閻魔王様。私の名前は四季 映姫。ヤマザナドゥ、この度には幻想郷地区を担当することになった閻魔です」

「丁寧にも。僕は十夜 詩音です、これからよろしくお願ひします」

お互いに頭を下げる。

それにしても閻魔か……。今までは十王様達だけで裁判を行っていたはずだけど。

「不思議そうな顔ですね詩音君。まあ、今から説明しますので」

「お願いします」

こほんと、咳を切る閻魔王様……可愛らしかったけど口には出さない。

「詩音の用件の原因である人口増加に伴い、此度は全国の古い地蔵を閻魔として登用することにしたのです」

「さすがに、十王裁判では手が回らなくなってしまいましたか」

十王裁判では、近年の人口の多さに対して効率が悪すぎる。

おそらく、あれこれ手を打ってきたけど限界が来たのだろう。

「ええそうです。あとは、その際に十王全員が閻魔王と名乗ることになりました」

「……とすると、閻魔王様をなんてお呼びすればいいのでしょうか？」

十王様方、絶対これを狙ってただろ。

「……詩音君の好きなように」

「では、ヤミー様と」

ひくひくと口元を引き攣らせながらも、ヤミー様は了承してくれた。



そのあとは、仕事としてではなく私人として会話し、夜には酒を飲んだりもした。

「お酌します」

「あ、すみません」

恐縮しながら、酌を受ける映姫様。

「そんなに畏まらないでも……………」

「いえ、詩音殿は私の大先輩の様なものですから」

どうやら、昔こつちで働いていた事を知っているらしい。

「詩音君の事は、こつとでは皆が知っていますよ……………超高性能万能職員として」

「そ、そうですか……………」

「そうなんです。私の同期達も、皆詩音殿の仕事ぶりにあこがれているんですよ」

いろいろな所に顔出して手伝っていたのが、そんなことになっているとは露にも思わなかったし。

なお、酒の席では飲み過ぎた二人が暴走して、低身長同盟を結んだのは……………面白かったです。

「胸がなんだあ!」

「身長がなんだあ！」

映姫様の方が微妙に身長が高く、そのことで同盟が即時分裂したのも追記。

「準備はできたわ」

「さすが、手際がいいね」

翌日僕が帰ってくると、紫がすでに準備を終えていた。

藍は各地を飛び回っているらしく、ここにはいない。

「所で詩音、そちらの方は？」

「幻想郷の、新しい閻魔様だよ」

あと、僕が受けた説明も追加しておいた。

「四季 映姫〃ヤマザナドウです」

「ご丁寧にも、私は八雲 紫ですわ」

幻想郷の管理者である紫にも顔通しをした方がいいだろうと、ヤマミ様の命で映姫様も付いてきたのだ。

「忙しいみたいです。私はここで失礼しますね。白玉楼の方にも顔見せしないといけませんし」

「あ、最後まで案内できずにすいません」

雰囲気を読んで、気を聞かせてくれた映姫様に礼を言う。

「詩音殿もお忙しいのに、そんなにお手間を掛ける訳にもいきませんから。むしろ、ここまで案内してくれて助かりました」

「そう言ったださると助かります」

この後、二人して頭を下げ合う場面が続き、見かねた紫が間に入ってくれたことで収束した。

「それでは、私はこれで」

「映姫様、お気を付けて」

「ご足労、ありがとうございました」

僕と紫に見送られ、映姫様は白玉楼へと飛んで行った。

「さて、始めましょうか詩音」

「りょーかい」

気持ちを切り替えて、幻想境界の準備を始める。

とは言っても、紫がほぼ終えていたけど。

僕の役割は紫への力の供給、アルトリアの魔力炉心と僕の霊力をメディアの魔術で紫に供給する。

今まで訓練はしていたけど、実際に行使するのは初めてである。英霊の同時表出。

「成功かな」

「ええ、凄い力ね」

今の僕は、メディアの尖った耳とアルトリアの金髪碧眼を持っている。

紫へと安定した供給が出来ていると分かり、後は細心の注意で紫に合わせる。

「じゃあ、始めるわよ」

「いつでもどうぞ」

儀式が始まる。

紫の力の行使タイミング、その必要量を見極め、紫に出来る限り負担のかからないように供給する。

感覚的に数時間ほど経った頃、紫が儀式を終える。

「……………ふう、成功よ」

「……………そうみたいだね」

一応二人で念入りに調査、問題無しと出る。

終了に安堵し、太陽を見ると一時間程度しか経っていないと驚いた。

「きょうは、もう休みましょうか」

「そうだね、じゃあまた」

二人してげっそりしながら、僕らは帰宅するのであった。

第十六章 閻魔様と幻想入り (後書き)

また忙しくなるかもだけど、復活！

一週間に三話更新できたらしいなあ……と漏らして、このありさまですいません。ただ、リアルで何もなければできるかな？

とは思っていますが。

それにしても、慧音が娘になってしまいました。

上白沢 慧音と、十夜 慧音。

どっちで行こうか悩み中です。

それでは、また今度お会いしましょう。

第十七章 半人半霊 (前書き)

久々に直ぐ更新できました。

いつもこんな感じでいけるといいんだけどなあ……………。

## 第十七章 半人半霊

「お土産よ、慧音」

「あ、ありがとうございます紫先生」

「ちよつと待った紫」

紫が慧音に渡したものを解析して、僕は頭を抱える。

「どうかしたの詩音？」

「………それ、三種の神器だよね」

やけに力がある道具類だと思って解析すると、三種の神器だった。

剣に勾玉に銅鏡とくればそうだとは思ったけど、まさか本物とは思わなかった。

「かっぱらって来ちゃった！」

「可愛く言っても駄目」

「だ、駄目ですよ紫先生！」

紫にチヨップを喰らわせる。

慧音から神器を受け取り、紫に押し付ける。



「返してきなさい」

「えー」

今度は拳骨をくれてやり、次は慧音に向き直る。

「慧音には、僕の物を渡しておくから」

「ありがとう……お父さん」

やばい、すっごい嬉しい。

そう呼んでくれると嬉しいといったのだけど、上目遣いで頬を赤らめながら言われると萌え死にそうになる。

隠しきれない嬉しさを頬に浮べつつ、王の財宝から三種の神器の原典を取り出す。

「大事にするんだよ」

「……………紫先生、お父さんって凄いですよね」

「そうね、改めて私も思ったわ」

頬をひくつかせながら受け取る慧音。

あれ……………選択肢ミスった？

もしかして、こんなものいらねーよとか思っていないよね？

反抗期？ 反抗期なのか！？

ズーンと沈む僕。

「ああ！ 凄すぎる物をもらって驚いただけで、お父さんから贈り物もらえて嬉しかったから元気出して！」

「……………少し見ない間に、ずいぶんと愉快になったわね詩音」

慧音に励まされ（紫がどうかした？）、僕は立ち上がる。

「よかった……………嫌われたかと思ったよ慧音」

「もう、そんな事あるわけないのに」

ああ、良かったと安堵の息を吐く。

自分でも親バカ過ぎるとは理解してるんだけど、前世で早苗の結婚すら見ずに死んでしまったのが響いてるっばい。

やば、鬱になりそう。

そつだよなあ……………早苗の晴れ姿見れなかったんだよなあ。

諏訪子も相当待たせちゃったし、会いに行った時には僕、結婚してたし。

僕は最低の父親だったなあ……………。

「お、お父さん？」

「なんか、袋小路に入ったみたいね。用があったのだけど……  
・急ぐ用事でもないし、しばらく待たせてもらおうね」

僕って、駄目な男だなあ……。

「落ちついたかしら？」

「うん、大丈夫」

慧音の励ましを受けて、なんとか復活した。

その慧音は妹紅に連れて行かれました。

「慧音。詩音ばかりにかまってないで、私たちのところにもおいでー」

「え、えっと」

「紫が話あるみたいだし、行っておいで」

こんな感じでした。

最後まで僕を心配してちらちらと見てくれる娘を得た僕は、きっと勝ち組なんだろうと思う。

「それでね、今日は面白い話を聞いたのよ」

「面白い話？」

面白いつていうより、懐かしいって顔をしてるんだけど。

「ある土地でね、二刀を扱う幽霊の憑いた人間が大悪霊を退治したって話」

「なるほど……でも、面白いつてほどではないと思っけど」

懐かしいという話なら分かるけど、面白いとは思わない。

「ふふふ……実はなんと、娘を連れてたそうよ」

「そういう事が。確かに面白い話だね」

「ひい！？ お、お師匠様助けてー！」

にやりと笑いあう僕と紫。

その笑い顔は、茶を届けに来たてゐが逃げ出すほど邪悪だったかもしれない（結局茶も持って行っているの、後で永琳にお仕置きさせよう）。

「善は急げ、幽々子も呼びに行かないと」

「ええ、行きましようか！」

「あなたの生前の護衛で」

「面白そうだわ。私も連れて行って！」

「もちろんだよ」

とんとん拍子で幽々子を連れ出し、今は件の剣士が住む村へとやってきている。

「長閑な所だね」

「幻想郷は幻想を集めてるから、陰陽問わずに活気があるのよね」

「幻想郷の雰囲気は好きだけど、たまにはこういうのもいいものねえ」

見た限りは幻想郷と違いはないけど、幻想の密度が違うからか緩やかな空気が流れている。

農夫たちを横目に、農道を歩いていく。

結構派手な格好の僕らに好奇の視線が集まるが、すぐに自分たちの仕事に戻る。

まあ、自分たちの命がかかっていると過言ではないから当然だ  
けど。

長かった農道が終わり、僕は件の村に着いた。

「さて、どこに居るかな」と

「幽々子様……?」

「あら?」

「どちら様? あー、でも知ってる気がするから生前会った人ね」

丁度近くの民家から出てきた男が、幽々子の名前を呼んだ。

「やあ、ちょっと老けたね妖忌」

「見ない間に結構な貫禄つけちゃって」

「ああ、この人が私の護衛だった」

「幽々子様?」

自分の事を忘れている幽々子に、疑問符を浮かべる妖忌。

とりあえず、幽々子が生前の記憶を薄らとしか覚えてない事を教える。

「そういうことでしたか」

「まあ、また交流を繋げばいいよ」

「私たちがそうしたようにね」

「詩音ー、紫ー、おなか減っちゃった」

幽々子の言葉に、妖忌が苦笑する。

「幽々子様は、相変わらずのようですね」

「いんや、昔が可愛いぐらいだよ。亡霊になったせいで、物理的に無理な量も胃に納めるんだから」

「あれは私も驚いたわ」

「えー、あれでも八分目ぐらいよ？」

幽々子の胃袋は宇宙か異界への門だろう………小宇宙<sup>コスモ</sup>？。

金色の鎧を着た幽々子が脳裏に浮かぶが、まったく似合っていないのですぐに消えた。

「お父さん、その人たちは誰？」

「ああ、私の仕えていた方とその御友人だ妖未<sup>よつみ</sup>」

妖忌と同じ白髪である少女が、家から出てきた。

傍らに憑いた靈魂が、彼女を半人半霊と証明する。

「妖忌、どこの半人半霊から預かった子なの？」

「正真正銘、私の娘です」

「え、えー？ だつてねえ」

「そうよねえ、似てなさすぎよ」

結構敵つい妖忌に比べ、妖未は花のようといつても過言ではない可愛らしさだ。

「むしろ、娘なのに私に似られたら困りますよ」

「「「それもそうだ」「」」

嫁の事も聞きたいところだけど、家の中にそれらしい気配が無いため、妖未がいないときに聞こうと思う。

「粗茶ですが」

「いきなり尋ねたんだから、そんなに気を遣わなくてもいいのよ」

「幽々子、茶菓子を次々と喰ってる時点で台無しだよ」

次々と幽々子の胃に消える饅頭。

仕方が無いので、王の財宝に入れておいた緊急用茶菓子を取り出す。



「あ痛！」

「幽々子自重」

補充した茶菓子にも手を伸ばしてきたので、それを払う。

そして、一つを取って妖未に差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「へえ、礼儀正しい子だね」

慧音もそうだったが、最近の子供はみんな礼儀正しいのだろうか。

「いやいや、やんちゃ盛りですよ妖未は。この前なんて村の子供たちとお父さん！」ぶっ!?!」

すばーんという音を立てて妖忌の頭が叩かれた。

うん、やんちゃだね。

生温かい目で見ていたら、さすがに気付かれて顔を赤くして俯いてしまった。

「まあ、子供はそれくらい元気が無いと」

「さすがに、現親バカの言葉は一味違うわね」

そうだけど、そうなんだけど、紫に言われるとむかつく。

「え、何時の間に子供出来たの詩音!？」

「おめでとついでいます詩音殿」

「お、おめでとついでいます」

「まあ、養子なんだけどね、これが可愛くて可愛くて」

〈青年娘語り中〉

「分かりますよ、詩音殿。家の妖未は」

〈中年娘がた「お父さん!」

「ぬおっ!？」

数十分にわたる僕の娘語りを妖忌が引き継ぐところ、妖未の一撃が妖忌を捉えた。

しかも、今度は楼観剣（鞘入り）による一撃だ。

「これはまた良い太刀筋で」

「うん、理想的な一撃だったよ」

「妖忌なんかすぐ抜かれちゃうかもしれないわね」

「お粗末さまです」

悶える妖忌を尻目に、僕たちは妖未を褒める。

実際、年の割にはとても安定した一閃だった。

ちょうどいいし、妖忌の腕前でも測ろうと思う。

「よし。妖忌、剣を取れ」

「はい、今までの成果をお見せします」

悶えていた妖忌がすっと立ち上がり、妖未の手から楼観剣を抜き取る。

僕も小次郎を表出させ、物干し竿を抜き放つ。

十分な広さを持つ広場まで移動し、互いに距離を置く。

「いざ参る！」

妖忌が身を低くし一瞬、靈力を炸裂させて高速で向かってくる。

現世斬

痺れ鯨

体勢低く突撃してくる妖忌を斬り払うが、居合抜きで防がれる。

「シッ！」

「ハア！」

風三連

炯眼剣

物干し竿による三連突きを、二刀を駆使することで掠らせるだけに留められる。

「ふっ！」

「ちいっ！」

憑坐の縛

風流し

突撃してきた半霊を受け流している間に、妖忌が間合いの外に出る。

結跏趺斬

霊刃が放たれ、横に移動することで回避。

頭上花剪斬

鬼殺し

霊刃を幽兼目隠しにして頭上から斬りかかってくる妖忌の剣を流し、蹴りを叩きこむ。

「ぬおっ！」

### 風車

予想以上に間合いを取れなかったので、下がりながら追撃。

体勢を崩していたせいで受け流せなかった様だが、二刀で受けら  
きられた。

一呼吸吐く。

「まさか、ここまで成長してるとは思わなかったよ」

「男子三日会わざればして刮目して見よ、等と言いますからな」

それなら、秘剣を披露してもいいかもしれないね。

そう思い、ここに来て初めての構えを取る。

「最高の剣士が誇る秘剣、見せてあげるよ」

「ありがたく受けさせていただきます」

無形を基本とする佐々木 小次郎が、唯一構える秘剣。

妖忌が集中し、次の瞬間に間合いを侵す。

「秘劍」

身を翻し、最高の一閃を放つ！

「燕返し！」

小次郎最高の一閃が、三つ煌めく。

「ぬあああああ！」

楼観剣で一刀を防ぎ、人型を取った半霊が同じく楼観剣で一閃を防ぐ。

そして、もう一閃が妖忌を打ち据えた。

「お父さん！」

決着が付いたのを見てとった妖未が、慌てて妖忌に駆け寄る。

妖未の支えを受けて、妖忌が立ち上がる。

その右肩は、骨が折れているのが容易く解る。

骨折で済んでいるのは、峰打ちだったからだが。

なお、セイバーに峰打ちで放とうものなら、刀の反りの分の空間を突かれて切り捨てられるだろう。

「……………手合わせありがとうございました」

「無理しなくていい」

治癒魔術で骨を整えて繋ぎ、鎮痛を行う。

「手間を掛けます」

「なに、軽い応急処置しかしていない。後は安静にして自分の治癒力だけでどうにかするんだね」

何でもかんでも治す気は無いからね。

「それにしても、同時に三閃が放たれるとは、とんでもない秘剣でしたな」

「実は技名通りに、燕を斬ろうとして出来た秘剣なんだよ」

『燕すら斬れる』じゃなくて、『燕を斬る』ために編み出された秘剣なのだから驚きだ。

啞然とする妖忌を連れ、妖忌の家へと僕たちは戻った。

「じゃあ、いづれまた」

「はい！ その時はまた手合わせをお願いします」

「もう、お父さんは私に心配ばかりかけて！」

「ふふふ。大丈夫よ、詩音なら綺麗に斬ってくれるだろうから、元通りにつながるわよ」

「幽々子、それで安心はできないわよ……………」

夕暮れ時、妖忌に夕飯も食べていかなかったかは言われたが、家の人間に何も言わずに僕らは出てきたので遠慮した。

幻想郷の場所も教えておいたので、いずれはやってくるだろう。

妖忌と妖末の見送りを受け、僕らはスキマで帰るのだった。

「あ、妖末の母親の事聞くの忘れてた」

「そういえばそうね」

「あ、忘れてた」

紫が何かを忘れていたらしい。

「実は、大悪霊を倒した半人半霊だけど、女だったって話なのよ」

「……………はい？」

「あ、お母さんお帰りー」



「おお、依頼の方はどうだった？」

「難易度の割には良い稼ぎだったわ。あ、あと、次の依頼はあなたも付いてきてくれる？」

「僕らが各々の家に付いたころ、こんな会話がされていたとかいなかったとか。」

第十七章 半人半霊 (後書き)

今回は戦闘回でした。

やっぱり戦闘難しいです。

しかも、戦闘抜くとそんなに中身が無いという罫。

妖忌の技は非想天則から、詩音が使っていた技はアンリミテッドコードから拝借しました。

というよりも、詩音が小次郎の動きにその技名をつけたと言った方が正しいです。

それにしてもあれー？

詩音が親バカになるとは、露にも思わなんだな。

## 第十八章 地底移住 (前書き)

超遅くなりました、すいません！

全然文章が浮かばなかったのとゴッドイーターにはまったので、  
こんなに時間がかかってしまいました。

モンハンのもっさりとした動きが合わず、買いませんでした。

## 第十八章 地底移住

「すまん、妻たちも地上に残りたいのは山々なのだが……」

「いえ……これも仕方のない事ですから」

本当に申し訳なさそうに謝る吉祥果様と、悲痛な面持ちで返す紫。

「いや、妾の謝罪を受け取ってほしい。最後までここで紫の夢を見てやれなかった、妾のせめてもの自己満足じゃ」

「……分かりました。その謝罪、お受けします」

幻想郷から鬼がいなくなる。

幻想郷のパワーバランスの一角であるため、天狗への縄張りの引き継ぎ等ではらくはとどまるが、徐々に鬼は姿を消すだろう。

原因は人間の鬼の乱獲だ。

それだけなら鬼は正面から受けて立ったであろうが、人間は騙し討ちなどの卑怯な手段でそれを行っていた。

嘘や卑怯な事を嫌う鬼は、昔から続く鬼と人間の戦い、助け合う関係を懐かしむも、潮時だと理解してしまった。

人間の方も命がかかっている。

それが分かっているために、鬼は何も言わずに身を引いたのだ。

「移住先は……詩音、地底界の旧都で良かったかしら？」

「うん、ヤミー様にも許可はもらってあるよ。むしろ、ただ放置するよりはずっといいだろうって言ってた」

以前は地底界も地獄の一部だったが、最近の急な人口増加等に伴って改革を迫られた地獄がスリム化政策により、地底界から撤退することになった。

「ただ、地底界にはまだ怨霊が封じられてるらしいから、鬼にそれを鎮めて貰いたいとも言ってた」

「大丈夫じゃ詩音。無理を通してるのは妾たちの方、その程度の事はこなしてみせるわ」

豪気に言い放つ吉祥果様。

無理して明るくしているのが分かっってしまうが、吉祥果様の気持ちをくんで笑い返す。

「ははっ、吉祥果様達相手なら怨霊たちも恐れ震えてしまっただろっね」

「そうじゃろっ、そうじゃろっ」

「ふふっ……吉祥果様たちにかかれば、旧都もお祭りのように賑やかになるでしょうね」

紫の言う通りだと思っ。

住めば都……いや、都と思うのでなく、都にしてしまうのだろう。

そんな事を考えていると、いったいの鬼が吉祥果様を呼ぶ。

「紫、詩音、すまぬが呼ばれてしもった」

「いえ、私たちに気を使わず、吉祥果様は自身のお仕事をなさってください」

「しばらく忙しくなるでしょうけど、こちらも陰ながら動きますんで」

感動したように薄ら涙を見せる吉祥果様が、僕と紫に抱き付いてくる。

「お主たち、本当に良い子らじゃー」

僕も紫も、何も言わずにその温もりを享受する。

少しして、吉祥果様が離れる。

「ではな、またいずれ会おうー」

「はい、いずれまた」

「いずれまた」

鬼たちの下へ駆けてゆく吉祥果様、その背中はとても大きく見え  
た。

「さあ、私たちは私たちがやる事をやらないと」

「そうだね。さーて、これから忙しくなるぞ！」

吉祥果様を見送った後、僕らも幻想郷の管理者としての責務を果  
たさなければならぬ。

意気込んでいると、紫が通信符で藍に連絡を取っていた。

式を通じて交信できるはずだから、僕にも聞かせるためなんだろ  
う。

「藍、誘導はどの程度進んだかしら？」

『申し訳ありません、まだ二割程度です』

まあ、もともと三人で手分けしてやることだから、それでも十分  
なのだけだね。

「そうね……私たちも回るから、一度こっちに来なさい」

『了解しました』

通信を終え、紫がスキマを開く。

「ただ今戻りました」

「御苦労さま」

「藍、名簿を」

帰ってきたら即言う紫、大分扱き使ってるなあ。

さめざめと泣きながら、藍が地底界移住予定の妖怪の名簿を取り出す。

「んー、こんなところかしら？」

紫はさっと筆を奔らせて、名簿を四分割する線を引く。

そして名簿を指で弾くと、名簿が線に沿って綺麗に切れた。

一枚はすでに誘導済みの二割、後は四割、二割、二割となっている。

「はい、これが藍の分。こっちが詩音のね」

「……分かりました」

「あー、任された」

当然のように藍が四割となっている。



ですよー、といった風に悟った表情をする藍に苦笑するしかない。

まあ……ぱつと見たところ、藍の四割は住処が密集しているので、実際の手間は三割あるかというところかな。

ただ、十全にスキマが使える紫の手間は一割ないだろうから、結局一番働くのは藍になるのだけ。

「うう……それでは行ってまいります」

「まだ行ってなかったの？」

あ、泣きながら飛んでいった。

「そうね……終わったら、パーっと飲みましょう」

「そうだね、それも悪くない」

幻想郷。

本来の世界の広さに比べれば、ただの箱庭でしかない世界。

だけれど、僕や紫二人が力を合わせても手に余るのが世界の重さかな。

「まずは、水橋 パルシイ……っぺいきなりか」

東方の登場キャラの一人で、嫉妬ばかりしている妖怪だったはず。

「えーと、この辺りか」

名簿の番号と地図に振られた番号を照らし合わせて、目的の場所に到着する。

「えーと、水橋さん！ 水橋 パルシイさんはいますかー？」

「迎えが来たのね。スキマ妖怪じゃない………手伝いがいるなんて妬ましい」

いきなり嫉妬されてるよ紫。

ただ、このままでいられると次に支障が出るので、恐る恐る呼びかけてみる。

「えーと、案内してもいいかな？」

「………ああ、ごめんなさい。種族柄、嫉妬するのは体質みたいなものなのよ」

体質なら仕方ない………っぺいというか、妖怪っぺいというのはそういうものなだけだね。

「じゃあ地底まで転移しますが、荷物はちゃんと持っているかな？」

「……………よし。問題ないわ」

荷物を確認し、大丈夫だと言う。

「じゃあ、転移するよ」

メディアを顕現、高速神言で瞬間転移する。

「はい到着。しばらくはこの仮設住宅で暮らしてもらうことになるけど、鬼に住居を立てて貰うか、旧都の物件を探すかしてください」

今回の地底移住の為に、ヤミー様がしばらく不動産紹介の人員を残してくれたので、その受付場所を紹介。

あとは、吉祥果様の方に紹介された鬼達<sup>太一</sup>の受付場所も紹介。

「後は、こっちの冊子を読んでください」

永遠亭総出で作った『地底生活のすすめ』、貳、参』を渡す。

「これ、移住者全員分作ったの？」

「頑張りました」

きつちりと製本されたそれを、やたら重いものを見るような目で見る水橋。

うん、みんなしてハイになってやたら凝りました。

というか、永琳特性栄養ドリンクのせいな気がする。

「ええと……あとはこれを見れば大丈夫そうだから、次行ったらどう？」

水橋の目が、あんたらどんだけ寝てないんだと言っているが、華麗にスルー。

『地底生活のすすめ』

全三冊で、一冊の厚さはタウンページの倍。

用紙が高張るのを考慮しても、筆で書くにはとんでもないページ数。

なお、慧音にも手伝ってもらいました。

もちろん早めに寝させたよ。

「お父さん、私はまだ頑張れます！」

「気持ちには嬉しいけど駄目。体に悪いから早く寝なさい」

こんな感じのやり取りがあっただけだね。

ちなみに、結構粘って一度僕らが折れたけど、規則正しい生活をさせてきた慧音は、普段の一時間に寝てしまったのは良い思い出。

なお、てみやそのほかの因幡達は扱き使った（主に大人数での添削。さすがに数で当たれば、しっかりとミスを発見した）

「では、楽しい地底生活を」

「そうさせてもらおうわ」

水橋に手を振り、地底から転移する。

次の予定ポイントに出て、名簿を確認。

「次は古明地姉妹か……まあ、仕方がないのか」

あれから数度会って交友を深めていたけど、やはり心を読まれる  
というのは気分のいいものではないらしい。

僕はいくつかそれを防ぐ方法を持っているから気にしないでいら  
れたけど、それが無ければどうなっていたか分からない。

避けたかもしれないし、今のように友人になっっていたかもしれないな  
い。

「まあ、考えても詮無い事だね」

今は今、二人は大事な友人でいいじゃないか。

「そう、ありがとう」

「あらら、少し失敗した」

声のした方を見ると、さとりとこいしが居た。

ちょっと恥ずかしい所で、心を読まれてしまった。

「なら私も言わせてもらっわ。詩音と友人になれてよかったわ」

「あ、私も詩音と友達になれてよかったよ！」

「ごういづのは言葉で表すようなものじゃないよね。」

「そうね、結構恥ずかしかったわ」

「何がー？」

「ごういづのは言葉で表すようなものじゃ無いなって」

僕の言葉を受け、こいしは首を傾げる。

「んー？ 私は楽しかったよ？」

こいしの言葉を聞いて、僕とさとりは顔を向き合わせて苦笑した。

やっぱり、大人になると素直になれないものだなと思う。

「そうね、私も楽しかったわ」

「僕も嬉しかったよ」

「でもさー、詩音から聞いてないよ？」

古明地姉妹と交友してきたなかで、久方ぶりの凡ミスをしてしまった。

さとりと二人だけなら、さとりが勝手に読み取ってくれるので口を開かなかくてすむ。

だけど、こいしが居る時は僕も話さないと、傍からはどんな会話をしているか分からなくなってしまう。

と、言う訳で。

「さとりもこいしも、僕の大切な友達だよ」

「うん、宜しい」

こいしが背伸びをして僕の頭を撫でた。

しばらくそれを受け入れ、こいしが名残惜しそうに離れてから本題を切り出す。

「それじゃあ………送るよ」

「お願いするわ………二度と会えないわけじゃないんだから、そんな顔しないで」

「いつでも来ていいからね!」

気遣ってくれるさとりや、元気なこいしを見て気を持ち直す。

そして、二人を連れて転移　到着。

今回は仮設住居でなく、城の様な造りの建物。

その名も　『地霊殿』

元は地獄の管理施設だったけれども、一部を居住空間に改装してある。

改装が行われたのは、スリム化政策が決まって管理者を置く事が決定していたためである。

今回の移住に伴い、ヤミー様に相談を受けた僕がさとりを推薦。

さとりに引き受けてくれるか確認を取り、改装が開始された。

施設が広大なためまだ完全改装はできていないけど、引き継いだ鬼によってそれは行われるだろう。

ちなみにさとりを推薦した理由は、管理に使われているのが会話できない妖獣ばかりだったためである。

なお、灼熱地獄の地獄鴉はまだ人型を取っていなかった。

地獄鴉とやけに仲のいい黒猫が居た事も追記。

「おつきいねー」

「そうね、私たち二人じゃ使いきれないわ。まあ、動物たちも住むから広い方がいいわね」



「とりあえず、今使える部分はあそこまで。他は改装中だから、細かいことは工事担当の鬼に聞いて」

で、僕はある書類を取り出す。

「で、これがさとりによってもらう仕事の資料と、地底生活のしおり」

ヤミー様に渡された大量の資料を編纂しなおしたものの一部と、さっきのあれを渡す。

「頑張ってるのね詩音」

「まあ、やりがいはあるね」

僕の苦勞を読んで微笑むさとりは、苦笑を返す。

幻想郷の管理者というのは相当な重労働ではあるけど、これほどやりがいのある事はないと思う。

けれども、疲れるものは疲れるのだ……いや、本当。

「お疲れ様、詩音」

「おつかれー」

「ありがとう」

まあ、まだ終わってないんだけどね。

「名残惜しいけど、次に行かせてもらおうね」

「そう………残念」

「一連の騒動が終わったら、また会いましょう」

落ち込むこいしを撫でて、さとりが言う。

「その時はおいしいお茶をお願いしていいかな？」

「もちろん。いいものを用意しておくわ」

「そうだ！私がお茶菓子作るから楽しみにしててね！」

これは楽しみである。

「それじゃあ、もう行くね。こいしの料理、楽しみにしてるよ」

「頑張って作るから！」

「私も何か作るから、楽しみにしてくださいね」

さとりとこいしに元気をもらい、僕は次の場所へと向かった。

翌日、全ての仕事を終えて、僕、紫は縁側でぐだっていた。

藍は家事手伝いに駆り出されています。

「あー、そこそこ」

「きもちいいわー」

妹紅と輝夜に二人してマッサージしてもらいながら、たれる。

二頭身のデフォルメ状態をイメージして貰えばいいと思う。

「うわ、大分凝ってるわね」

「ほんとだよ。妖怪の紫ですら相当凝ってる」

輝夜、妹紅の絶妙な力加減に、眠気がしてくる。

「詩音ー、おやすみー」

あ、紫が墜ちた。

「ああ、俺もやばい」

そして、僕も墜ちてしまうのだった。

「あらら、寝ちゃったか」

「私は布団を取ってくるわ」

輝夜を見送り、詩音と紫を見る。

元々似通った顔の二人の寝顔は、まるで双子の姉妹のようだった。

「あ、紫様達は寝てしまいましたか」

「ああ、藍ちようどいい所に」

ちようどいい所に来た藍を、詩音たちのそばに引っ張ってきて後ろ向きに座らせる。

「妹紅様？」

「よつと」

藍の尻尾を詩音と紫の枕にする。

「・・・・・・・・ええ、分かっていましたよこうなるって」

「ふふっ・・・・・・・・」

まったく良い抱き枕である。

「あ、良いわねそれ」

戻ってきた輝夜も紫に布団を掛けて、詩音の隣に陣取る。

「じゃあ、私も」

そして私も詩音の隣に寝る。

「・・・ああ、癒しが欲しいなあ」

切実な願いが聞こえたけど、いつもの事だと放置して私も寝るの  
だった。

第十八章 地底移住 (後書き)

たったこれだけの文章に、一ヶ月かけてしまいました。

感覚で書いているから、一度詰まると中々進まないんですよ。

いまさらですがゴツドイーターにはまっています、先日ようやく無印分のストーリーを終えました。

バスター、スナイパー、バックラーでやっていますが、ハンニバルの頭が壊しにくくてしかたありません。

しかも、角が手に入らねえ……。

毎回頭破壊してるのに、全然手に入らない……おのれ物欲センサー。

次回もつと早く上げられるといいんですが、気長に待っていただけると助かります。

第十九章 冷たい二人 (前書き)

最近、キャラを見失ってきている気がする…………。

## 第十九章 冷たい二人

「……………幾ら冬とはいえ、これは寒い」

「そうね……………幾らなんでも寒すぎよ」

という訳で、ぬくぬくと布団にもぐりこむ僕と輝夜。

「「ああ……………ぬくい」」

「おきろー!」

バサア!

「「おお……………寒い寒い」」

「そんな余裕があるなら、さっさと起きててくれ……………」

妹紅に布団がはぎ取られたため、二人してうざい顔でつぶやいた。

そんな僕たちに、妹紅は呆れ顔である。

「妹紅お母さん、お父さんたち起きましたかー?」

「よーやく起きた……………って、また布団にもぐろうとするな輝夜!」

「えー」



渋谷と布団から出てくる輝夜。

のそのそと起き上っていると、僕に抱き付く。

「あー、ぬくい」

「あ、ずるい」

仕方ないので、輝夜を後ろから抱き締めて、輝夜に妹紅を抱きしめさせる。

「これいいな………ということで慧音も」

「あ、あわわ」

さらに妹紅が慧音を抱きしめて、行列が完成。

若干僕の背中が寒いけど、その程度は我慢する。

「じゃあ、出発」

ムカデの如く、慧音を先頭に居間へと向かう僕たち。

「姫様達、何やってんの………」

「てゐ、一緒にやりませんか？」

先頭の慧音が新しい仲間を手に入れた。

今度はてゐを先頭に居間へと向かう。

「あらあら、暖かそうで良いですね」

「えーりんも入るー？」

今度は永琳が現れて、輝夜が列に勧誘する。

「魅力的な提案ですけど、これを運ばないといけないので」

「じゃあ、しょうがないわね」

永琳の手には、なにも載っていないお盆がある。

つまり、朝食を運んでる最中だということだ。

調理場に戻っていく永琳を見送り、再び列が動き出す。

そのまま居間へと到着。

温さを惜しみつつも解散し、各自の席へ座る。

しばらく雑談していると、永琳が朝食を運び終えて席につく。

全員そろった事を確認し、皆で手を合わせる。

「「「「「いただきます」「」「」「」

そうして、朝食を食べ始めるのだった。

囲炉裏で暖を取る。

永遠亭は月の機械で冷暖房完備だったんだけど、永琳があまり頼りすぎるのもよくないと言ったのが発端。

輝夜は文句を言ったけど、僕や妹紅が納得したのでそのまま使わない事になった。

だけど、湯沸かしとか洗濯等はそのまま月の機械を使っている。

「ひさしぶり……さぶつ!？」

「いらっしゃ……って、いないし」

諏訪子が来たようだけど、すぐ帰ってしまったらしい。

それも仕方ないことで、暖房を使わなくなったのが、前に諏訪子が来た時より後だからだ。

しかも、さつき換気をしたばかりなので寒いことこの上ない。

「……久しぶり詩音」

「久しぶり諏訪子」

厚着をして、いわゆるダルマストーブ状態になった諏訪子が抱き付いてくる。

「というか、なんでこんなに寒くなってるの？」

「そういうのに慣れ過ぎるのもよくないってことで。まあ、今の諏訪子のようにならないようにって感じかな」

守矢の神社は、神力によって温度が一定に保たれているから、それに慣れた諏訪子がこうなった。

なお、暖房を切ったところは、今の諏訪子に近い感じに僕たちもなった。

「……………寒くて、眠くなってきた」

「あら……………やっぱり、信仰の縛りは厄介だね」

神様の力の源泉たる信仰。

これがあればある程、神としての格も力も強くなるのだけど、逆にそれに付随されたイメージ等にも縛られる。

諏訪子の場合、大蝦蟇の姿で神託を下すために蛙の性質が付随してしまっ。

つまり、蛙のように冬眠とまではいかないものの、寒さで眠くなりやすくなっている。

なお、僕も神であったとき、信仰の影響で周囲を魅了していたのは泣きそうになった（美少女神と思われていた）。

「・・・・・・・・つ、ふつ・・・・・・・・」

考え事をしているうちに、諏訪子が舟をこぎ出す。

まだ空気が暖まらないので火符を使って部屋を暖める。

「すう・・・・・・・・」

「ちよつと遅かったか」

少し間に合わず、背中に抱き付いたまま諏訪子が寝てしまった。

「よつと」

背中から諏訪子をはぎ取り、膝上に乗せて抱きこむ。

諏訪子の帽子なまものは外しておく。

「ぬくい」

「・・・・・・・・うん」

僕の吐息を受けて、諏訪子がくすぐったそうにする。

その仕草に、自然と口元が緩むのを自覚する。

「ふぁ・・・・・・・・はぁー」

吐息を掛けないように気をつけながら、欠伸をする。

暖まった空気と諏訪子の体温で、僕も眠くなってくる。

頭を降ろし、諏訪子の髪に顔を埋める。

諏訪子の甘い香りが安らぎを与えてきて、僕の意識が急速に落ちる。

「すう……………」

「うん……………」

二つの寝息が聞こえる。

あれからしばらく経ったようで、外が暗くなりつつある。

そろそろ動かないといけないのだけど、安らかな寝顔の二人を起すのも忍びない。

いつの間にか僕と諏訪子は横になっていて、諏訪子を抱いた僕を後ろから抱き締めている輝夜が居る。

掛けられた布団と枕は、多分永琳がやってくれたのだろう。

あと、妹紅と慧音は夕飯の用意でもしている頃だろう。

「あつたかそつで良いわね」

「紫には藍（の尻尾）があるじゃん」

いつの間にかスキマから顔を覗かせている紫に声を返す。

「夕飯作りの邪魔って言われたのよ」

「それは仕方ない」

紫と藍の二人暮らしたから、藍が働かないと家事が滞ってしまう。

うん、紫が働くという選択肢はないのがみそ。

「とうか……上半身だけ出してるけど、その下は布団の中だね？」

「……よく分かったわね？」

仕事が無ければ冬は寝まくる紫が、早々布団から離れるわけがない。

今は幻想郷が安定してないからいいけど、安定したら冬眠ってレベルになるんだろっなあ……。

冬に永遠亭へと紫が泊まった時の様子から、その光景が容易に浮かぶ。

「分からないでか。それよりも、紫がわざわざ来る用事は何？」

「ああ、ちょっとした妖怪退治をお願いしようと思って」

もしかして、例年よりかなり寒い理由かもしれない。

「今年の冬がやたらと寒い理由よ」

「うへ、それはどうにかしないと」

正直、寒くてやってられん。

「退治してほしいのは氷精と雪女なんだけど……………」

紫の話によると、幻想郷の各地に冷気をまき散らす巨大な氷像が建っているらしい。

それを製作したのが氷精と雪女で、例年より寒いお陰で力を増した氷精が子供のようにはしゃぎまわっていて、その保護者役の雪女も甘やかし過ぎているらしい。

というか、氷精が作った巨大氷柱を削って氷像にして職人顔しているらしい。

「つまり、子供の遊びが過ぎただけだから、適当に叱って来いと」

「そういうこと。そのあと氷像から力を抜いてくれれば、気温も例年より少し寒い程度に戻るはずよ」

それにしても、氷精に保護者役の雪女か……………確か、チルノにレティ＝ホワイトロツクだったっけ？

「それで、行ってくれるのくれないの？」



寝たまんまで受け答えしているからか、行く気が無いように思われたらしい。

実際、こんな寒い中行きたくはない。

「紫がやればいいじゃん」

「寒いから嫌よ」

「にやろっ……」。

「なら藍に……」

「藍が出かけたら夕飯は誰が用意するのよ」

時間停止。

輝夜と諏訪子の腕から、空間を弄ることで抜けだす。

ついでに二人を抱き合わせてから、紫の下へと行きアイアンクロ  
ーを仕掛けて時間を戻す。

「いたたたたたたたたたた！」

「紫も一緒に行こうね」

みしみしと紫の頭を締めあげつつ言う。

「や、やめっ……」

「紫も一緒に行こうね」

さらに締めあげつつ言う。

「わ、分かった、分かったわよー!？」

「ならよし」

紫から手を離すと、紫はぐったりと倒れてエクトプラズムっぽいのを吐き出す。

それを口に押し込み、気付けを行う。

「……………はっ!？」

「それじゃあ、行こうか」

紙を用意し、皆への言伝を残してから、紫の首根っこを掴んでスキマから引きずり出す。

スキマの向こうの蒲団に未練たらたら紫を引きずりながら、冬空に僕らは飛び立った。

ガチガチガチガチ。

ブルブルブルブル。

全て紫からしている音である。

それほどまでに、今年の冬は寒いのだ。

僕は、火行を使って自分の周りだけ保温しているので余裕。

とはいっても、ここまで大げさなのは紫のポーズだろうけど。

それを無視しつつ、幻想郷を高空から見下ろすと凄い事になっている。

「外に出なかったから分からなかったけど、これは凄い……」

正直、いろいろな意味で凄い。

幻想郷じゅうに巨大な氷像が並んでいるのもそうだけど、それがとてつもなくリアルに出来ているのだ。

それにしても、あの大きさがつこの数の氷像から一人で力を抜けて、どれだけ手間がかかると思うんだ。

紫をじと目で睨むと、紫は半笑いしながら目を泳がせる。

「仕方ないじゃない、寒いんだから」

「それは僕もだ」

オラっつと嘘を言う。

嘘を吐いているのはお互い様だから、別に問題はない。

紫の能力の万能性や、そのほかの技術を考えれば寒気から身を守るぐらい容易い事だ。

「っと、ふざけているうちに目的の相手を見つけたわ」

「………ああ、僕も見つけたよ」

さすがに、いきなり馬鹿でかい氷柱が立てば？でも気が付く。

というか、その実行犯がおそらく？なのだけど。

氷柱の下に向かい、そこで二つの人影を見つける。

一人は妖精。

「あたいつたらさいきょーねー!!」

氷の六枚羽をはばたかせながら、薄い胸を張る幼女。

もう一人は妖怪。

「さて、削るわよー!!」

青と白の服を着て、妖力で作られた巨大な彫刻刀を持つ女性。

なるほど、妖気で作った彫刻刀だから自由自在に動かせるのか。

あれだけのサイズの物をどうやって削っていたのか、理解できた。

疑問も解消されたところで、止めに入るとしますか。

「ちよつとまった！」

声を掛けると、二人が振り向き疑問符を浮かべる。

「あんた達だれ？」

「チ、チルノ！」

ポカーンと尋ねてくるチルノに、慌ててチルノに声を掛けるホワイトロツク。

僕たちの力の大きさから、機嫌を損ねない方がいいと考えたんだろつ。

力の総量が強さの全てではないが、力の大きい存在はそれだけの年月を過ごした大妖怪である事が多い。

だから、その判断は正解……まあ、反省してもらえば手を出すことはないと思うけど。

「申しおくれました。私は幻想郷の管理者、スキマ妖怪の八雲紫ですわ」

「僕は紫の手伝い、一応人間の十夜 詩音だよ」

「かんりしゃー？」

「ええっと、丁寧にどうも。私は雪女のレティ　ホワイトロックで、こっちの氷精がチルノです」

意味が分かっていないチルノと、冷静になつたか冷や汗だらだらなホワイトロック。

「ホワイトロックはなんで僕らが来たか分かってるよね？」

「は、はい。この氷像ですよね」

「へへーん、凄いでしょ！」

「……………妖精だもの、仕方ないわよね」

僕の問いに冷や汗を増やすホワイトロックに、自慢げに胸を張るチルノにこめかみを押さえる紫。

？はある意味得だと思う（胃的な意味で）。

まあ、ホワイトロックはやってしまった事に自覚を持っているよ  
うなので、言い含めておけば十分だろう。

チルノは……………妖精にしては力を付け過ぎだけど、春になれば勝手に元に戻るだろう。

いざとなれば、一回休みをしてもらえばいいし。

「これ以降、冷気をまき散らす氷像、氷柱を立てない事。これが守れないときは、お仕置きしなければならぬわ」

「はい、分かりました……………」

「な、なんでよ!?!」

がつくりとうなだれるホワイトロックに、理由が分かっていないチルノ。

ホワイトロックが、申し訳なさそうにチルノを見ているところが保護者らしい。

「……………紫」

「分かったわ……………ただし、冷気を散らさない小さな氷像ならば、そこまで目くじらは立てません」

「あ、ありがとうございます」

「ええー、おっきいのがいいー」

制限が付いたとはいえ嬉しかったのだろう、ホワイトロックは笑みを浮かべる。

チルノも文句は言っているけど、ホワイトロックとの遊びが取り上げられなくて嬉しそうだ。

「ホワイトロックはチルノに言い聞かせておく事」

「それで、今回の事は不問とします」

「はい！」

「ぶー」

頬を膨らませるチルノに微笑ましいものを覚える。

「慧音も可愛いんだけど、なかなかあんな風にわがママを言ってくれないのがさびしい所だ。」

「それでは、失礼します」

「べー！」

「こら、と軽くチルノが小突かれる。」

若干不機嫌そうにするも、手をつないだらすぐに笑顔になった。

手を繋いで帰る二人に、僕たち頬が緩むのが分かる。

「あーいうのもいいな」

「慧音は大人びているものね」

「家族の距離ではあるんだけど、遠慮が強いんだよね。」

「いや、自立心が強いのか」

「かまってももらえなくて、お父さんはさびしい？」

「紫に言われるとむかつくのは何故だろう？」



「……………さびしいに決まってる」

「ふふっ、詩音って結構素直よね」

あまり隠す必要性を感じてないだけだけどね。

「そんな事より、氷像を始末しないと！」

「そうね、さっさとやっつけてしまいたいしょうか」

強引に話を変えると、合わせてスパッと切り替える紫。

そのあたりだけは尊敬する。

「さーて、さっさと終わらせてぬくぬくするのでしょうか！」

「がんばってねー」

お前も来るんだよ。

この後、紫の首根っこをつかんで、氷像を巡るはめになったのであった。

## 第十九章 冷たい二人 (後書き)

更新が遅いのと関係ないですが、風邪をひきました。熱は38度で咽が酷いことになってました。

今はだいぶ良くなってますが、咽がまだ痛いです。皆さんも、風邪やインフルには気をつけて下さい。

今回はチルノとレティ登場。

正直、全キャラに出番を与えとか難しすぎる。

幽香が姉になつたのに、登場回数は一回とか……………。

口調とかで違いを出すのも難しい。

キャラによつては、他のキャラと変わらないのとか絶対いる。

そして、キャラの表現が難しい。

チルノとか微妙に違う気がするし。

9じゃなくて?なんだよ……………って感じ。

結論：小説って難しいですね……………。

## 第二十章 似て非なる世界？

(前書き)

話が浮かばないので、もっと後で使おうと思ってたネタを解放・・・  
・・・ちくせう。

## 第二十章 似て非なる世界？

「あのー大丈夫ですか？」

中国っぽい服を着た赤髪の女性が僕に話しかけてくる。

「・・・・・・・・・・は？」

僕は彼女に見覚えがあるのだけど、彼女はまだ僕に会えるはずがない。

彼女の名前は紅 美鈴。

何の妖怪だかよくわからない格闘戦のエキスパートである。

また、紅魔館という館の門番をやっている。

そして僕が知る限り、紅魔館が僕の住む幻想郷に来るのは・・・・・・・・  
・数百年は後の事なのである。

「も、もしかして頭を打ったり!？」

「いや、大丈夫。というか、意外と酷い事言うね」

幾ら呆然としていたからとはいえ、そんなにおかしい態度ではなかったと思う。

「ああ、ごめんなさい！」

「いや、良いけど……」

うん、東方において、彼女ほど良識のある人物はなかなかいないだけある。

いや、ホントいい人だ。

「……えっと、少し聞きたい事があるんだけど」

「はい、何ですか？」

周囲を見渡すと見覚えのある湖に、見覚えのない赤い建造物が存在している。

僕が気絶する前に何があったのかを必死で思い出しながら、現状の把握のため紅に聞くことも考える。

「永遠亭って知ってる？」

「はい、診療所をやってますね」

記憶の確認とでも思ってくれたのか、そこで行っている事も教えてくれる。

「じゃあ、幻想郷で十夜って姓に聞き覚えは？」

「それは……ごめんなさい。あ、でも、人里に行けば分かるかもしれませんよ!」

一生懸命励ましてくれる紅……あんだ、ええ子や。

中国とか名前で呼ばれなかったり、いろいろと不遇な扱いを受ける彼女だけど、僕だけでも優しくしてあげようと心に誓った。

「じゃあ、藤原 妹紅って人の住んでる場所分かる？」

「えーと、確か竹林の近くって聞いてますけど」

これは厄介な事になったなあ……これからどうしよ。

「いろいろ教えてくれてありがとう。少し考え事したいから、そつとしておいて貰っていい？」

「それじゃあ、少し離れて見てますね」

面倒見がいいなあ。

とある妖怪の優しさに心ほだされつつも、これからの事を考える事にする。

「今いるのは多分、並行世界かつ未来の幻想郷」

おそらくは原作通りの世界で、紅が永遠亭と妹紅を知っていることから、東方永夜抄は終わってる。

「そして、僕はこの世界に存在しない」

もしくは、前世を引き継がないで普通の人として生きていた。

さすがに、僕が居なくなったら後十夜姓を棄てたとか、その上妹紅

と輝夜が仲たがいがいたとかは思いたくない。

「そして、ここに来た原因は……………」

今日の記憶を朝起きたところからたどっていく。

朝起きて、夏の暑さに辟易しつつも妻たちと腕組んで食卓へ。

朝食を食べた後、因幡達に扇がせながらぐったりして……………  
そうだ、幽香姉さんが来たんだ。

それで、縁側でみんなして談笑をして……………紫が来た。

「思いだした……………そのあと、紫と幽香姉さんが喧嘩して、  
八重結界とマスタースパークがぶつかって空間がおかしくなったん  
だった」

皆を避難させて、空間操作で安定させようとして失敗。

そのまま空間の狭間にドボン……………で、今に至ると。

それならと、空間を探って見る……………あ、歪んでるところ  
見つけた。

その場所は、空いた穴に周りを寄せて無理やり塞いだようになって  
いて、若干風景もゆがんでしまっている。

「あれ……………これ、時間が経ったら帰れるかも？」

その穴は、本当に少しずつだけど自然な形で修復しつつあり、僕

の存在もどこかに引っ張られている感じがする。

想像するに、これは世界の修正力だろう。

並行世界を移動した上、安定して存在するには、かの死徒27祖第4位兼魔法使いである宝石翁のように、全ての世界に存在しなければならぬ。

だけど、それが出来ていない僕が移動してしまった。

それにより、元の幻想郷は僕という欠損を抱え、今いる幻想郷は僕という異物を抱えている。

それをどうにかする際、最も自然な状態はなにか………簡単な事だ僕を元の世界に帰せばいい。

本来ならすぐにでも返したいのだろうが、安定していない道を使えば何が起こるか分からないため、空間を修正してちゃんとした道を作っているのだろう。

これまでの話を例える。

何本かのビル並行する世界があつて、ある階で全てのビルが連絡橋で繋がっている。

僕はビルA元の幻想郷にしか入る権利は無く、存在宝石翁は全てのビル世界に入る権利が有る。

宝石翁は自由に連絡橋を行き来できるが、僕は連絡橋を渡る事が出来ない。



だけど、僕はビルB今いる幻想郷に事故で来てしまった。

そうならば当然、ビルBに居る権利の無い僕は追い出されてしま  
う。

ビルの外から来たのならそれで終わりだ。

だけど、ビルAとビルBは繋がっているから連絡もとりに合える。

ビルAから僕が来てないかと聞かれ、ビルBは送り返すと返事を  
する。

なら送り返しますねとビルBが言い、ビルAもそうしてくれと言  
う。

だが、事故で扉が壊れているので、修理が終わるまで僕はこっち  
の世界で待たされている状態にあるという訳だ。

いる時間帯が違うのは、繋がっているビルの階が違うようなもの  
と考えてもらえばいい。

「……………だったらいいんだけどねえ」

が、今までののは全て憶測。

引っ張られている感覚があるけど、その先が世界の狭間とかだっ  
たら泣ける。

ただ、世界の修正力に抵抗は出来そうにないので、そのあたりは

諦めてしまつべきか。

僕の知る限り、元の世界に帰る為の手段を持っているのは紫だけど、宝石翁のように世界の許可が無いため、能力の行使に途方もない量の力が居るだろうから無理だ。

よそから持つて来ようにも、それだけの力を集める方法が無い。

アインの時の聖杯としての機能を使って、聖杯を創れば力の補充はできるだろうけど、僕は聖杯になって終わりだから本末転倒だ。

「つまり結局、なるようにしかならないか……」

世界の狭間に放り出されたらどうなるんだろう……この  
並行世界を内包する世界の終りまでそのままかも。

「止めた、考えても限が無い」

これが最後になるかもしれないなら、この世界を楽しむべきだ。

「うん、そうしよう。丁度お客さんも来たみたいだし」

「むしろ、私があなただを持て成す側ですが」

銀髪のメイド　十六夜　咲夜が僕のそばに降り立つ。

なお、僕が考え事をしている最中に周囲の時間は止まっている。

「私は後ろに見えます館、紅魔館でメイド長をさせていただいて  
いる十六夜　咲夜と申します、好きにお呼びください」

「じゃあ、咲夜さんでいいかな？」

僕の問いに咲夜さんは了承の意を示し、再び口を開く。

「当館の主、レミリア＝スカーレット様があなた様をお招きしたいと仰っています」

「うん、行く宛てもないし、招かれさせて貰うよ」

綺麗な礼をして、咲夜さんが僕を先導する。

レミリア＝スカーレット 種族は吸血鬼で、とても幼い外見をしているはず。

フランドール＝スカーレットと言う妹がいて、その力の危険性がら相当の間幽閉されていたはず。

しばらく歩いて、館の門の前で達寝している紅を見つける。

流れるような動作でナイフを紅に投げつけた直後、慌てたように咲夜さんが時間停止を解除する。

「あいたー！」

「……………お見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

それは、紅にナイフを刺した事と慌てて時間停止を解除した事のどちらだろうか？

「なにぶん私以外の方があの世界で動く事が無いもので、つい解除を忘れてしまいました」

ああ、そっちなね。

「それと、これは一応当館の門番です……ほら起きて挨拶しなさい」

ナイフが刺さったまま倒れている紅に、それは見事な蹴りを入れて叩き起こす咲夜さん。

「えっと、紅 美鈴と申します、美鈴とお呼びください。それで、考え事はまとまりましたか？」

「うん、さっきはありがとう。お陰様で纏まったよ」

僕の返事を聞いて笑顔になる美鈴……脳天に刺さったままのナイフがシユールだ。

「ではどうぞ、こちらへ」

「ゆっくりしてってくださいねー」

美鈴が門を開き、再び咲夜さんの先導に従う。

館までの石畳を軽快に鳴らしながら、僕は庭を眺める。

いやはや、よく手入れされているものである。

これなら幽香姉さんにも合格を貰えるだろう……って、

みんなどうしてるかな？

紫と幽香姉さんこれに懲りて少しは仲良くしてほしいものだけど・  
・・・・あそこまで相性が悪いとは思わなかったし。

嫌味の応酬から表へ出るのコンボで、僕等永遠亭メンバーはおいで  
てけぼり。

僕が被害を抑えたから良かったけど、下手したら竹林が無くなっ  
てたもんなあ・・・・。

そんな事を考えているうちに、玄関に着く。

周囲の時間が止まり、咲夜さんが扉を開ける・・・・これは  
癖だろうね。

「・・・・あ」

「時間停止を多用しすぎて癖になってるね」

うん、動作とかは完璧なんだけど、所々抜けている人だ。

「・・・・ようこそ紅魔館へ」

恥ずかしかつたか、若干頬を染める咲夜さん。

あまり虐めるのも可哀想なので、普通に入る。

「お邪魔します」

中に入ると、違和感が僕を襲う。

「ああ、空間弄ってあるのか」

「はい、私の能力で少々」

同じ能力を持っているため、自分以外の人が操作した空間と言うのは若干むず痒さを覚える。

「少々よろしいですか？」

「ん、なにかな？」

弄られた空間に慣れたころ、咲夜さんが声を掛けてくる。

「何か食べられないものや苦手なものがありますか？」

「いや、特に無いよ。普通の人間が食べる物なら大抵大丈夫。強いていうならゲテモノは遠慮したいかな？」

なるほどと頷く咲夜さん。

「お答えいただき、ありがとうございます」

「それぐらいの事ならいつでも」

そして再び歩き始める。

それにしても、目的地が遠いな。

正直言つと暇である。

咲夜さんは肅々と先導しているし、他人の屋敷をあまりじろじろ見渡すのもどうかと思うし、僕が話すと咲夜さんの天然度合いをつい口に出してしまいそうだし。

さつきから視界の端で動く妖精メイドたちの事を聞くと、咲夜さんの頭を痛めそうだし（見て見ぬ振りが吉）。

他になんの話題があつたか……あ、スカーレット姉の話  
を聞けばいいじゃないか。

「こちらの部屋になります………?」

今の僕は間抜けな顔をしている事だろう。

中途半端に口を開けて、頬を引くつかせて……ちくせう。

「ああ、ありがとう」

強引に表情を治し、咲夜さんが開いた部屋に入る。

部屋はシャンデリアに照らされている。

まだ日が出ているのにカーテンはすべて閉じられ、一分も日の光は入ってくる事は無い。

中央には大理石のテーブルが置かれ、その上座には一人の蝙蝠の羽を持った少女が静かに座っている。

少女は席を立ちその瑞々しい唇を開く。

「ようこそ紅魔館へ………外来じ痛ツ!？」

横へ抜けようと回転した際に、肘を椅子の手すりにぶつけてしまった………これが有名なカリスマブレイクか。

しかも、ファニーボーンを痛打したようだ。

涙目で腕を抑える少女に、慌てて咲夜さんが駆ける。

「ああっ、お嬢様大丈夫ですか!？」

「さくやー！　なんかビリッてきた！　ビリッてきたの！」

吸血鬼は脳を持たないって話だったけど、人間と同じような行動をするためか似た器官はあるっぽい。

ファニーボーンとは、浅い所を通る神経をぶつけることで起こる反応だからだ。

スカーレット姉と咲夜さんの会話から目を逸らす………そうしないと爆笑しそうだから。

「なんかもやってして気持ち悪いのよ、さくやー!？」

「お、お嬢様、落ちついてください！」

「………ん？」



二人のコントを聞き流していると、部屋の入口付近に気配を感じたので振り向く。

金髪紅眼の少女が開いたままのドアから顔を出して覗いていたけど、視線が合ったことでさっと顔を引っ込めてしまう。

といつても、木の枝に宝石が生ったような羽は丸見えだけど。

後ろのどたばたをスルーして廊下に顔を出すと、再び少女と眼が合う。

特徴的な羽からスカーレット妹と判断する。

「こんにちわ」

「……………こんにちわ」

声を掛けて見ると、若干引きながらも返してくれる。

うーん、人見知りの気でもあるのだろうか……………いや、それも当たり前か。

幼いころから幽閉されていれば、対人関係の構築の仕方なども分かるわけがない。

狂気に触れていないときは、人見知りなのだろう。

「いやー、ちょっと取り込んでみたいで暇だから、お話しさせてもらっていいかい？」

「……………一応姉の不始末だから、お相手してあげる」

はあ、あの馬鹿姉と馬鹿従者が……………って感じてこめかみを押さえるスカーレット妹。

うん、正直に言おう……………姉より妹のがカリスマあるよ。

脳内で姉妹のスキルのカリスマが浮かぶ。

スカーレット姉

スキル カリスマ(偽) C(D)

館の主としては十分すぎるほどの度量であるが、偽故にカリスマブレイクで間違った方向に向かう事も。

( )内はブレイク時の別方向へのカリスマ性。

スカーレット妹

スキル カリスマ D(C+)

こちらも館の主の親族としては十分な度量だが、狂気と人見知りのせいでランクが落ちている。

( )内は本来持っているであろうカリスマ性。

こんな感じかな。

結構的を射ているのではと吹きそうになったけど、抑えてスカー

レット妹に声を掛ける。

「まだお姉さんと話をしていないけど、君の名前はなんて言うんだい？ 僕は十夜、十夜 詩音」

「私はフランドール、フランドール＝スカーレット。フランって呼んでくれればいいわ」

スツとスカートの手をつまんで一礼するフラン……………すこしイリヤを思いだしてクラツとした。

「どうかしたの？」

「いや、少し知り合いとフランの雰囲気似ていてね」

幼げでいて妖艶、相反するであろう要素が一体化して居る所なのか特に。

「ふうーん、大切な人なんだ」

「どうしてそう思ったの？」

まあ、答えは分かってるんだけど。

「詩音、すごくいい顔してたから」

「そんなに……………？」

自然と漏れ出ていた笑みへ、確かめるように手を当てる。

「よく分からないね」

「天狗にとらせた皆の写真、それを見ていた時のお姉さまみたいだったわ」

「って、あるとき見てたのフラン!？」

あ、スカーレット姉が復活したみたいだ………相変わらずカリスマはブレイクしてるけど。

。こっちまで一気に騒がしくなったけど、この疎外感は………

フランにいいようにあしらわれてるスカーレット姉。

まるっきり子供な姉をからかうフラン。

微笑ましそうに見ながらも、時折フォローする咲夜さん。

それを傍からぼつーんと見る僕。

ちよっと泣いていい？

## 第二十章 似て非なる世界？

（後書き）

今回は初めて、次話に持ち越すタイプを書きました。

普段は基本的に一話完結で来てましたからね。

現代異変に入れば、こういう形式が増えると思います。

それにしても、原作世界に入るネタはもう少し後までとっておきたかった。

だけどネタが思い浮かばなかったのでこうなりました。

あー、ほんと電波でもいいから何か降りてこないものか。

## 第二十一章 似て非なる世界？

(前書き)

戦闘表現、まじ難しいです。

どうしたらもっと重厚な戦闘が書けるのだろうか……？

## 第二十一章 似て非なる世界？

「ようこそ紅魔館へ外来人」

「お姉さま、いまさら格好つけても遅いよ」

威厳たっぷりと言い放ったスカーレット姉へ、フランが毒を吐く。スカーレット姉は引き攣る眉間を片手で押えている。

「妹様、話が進みませんのでご自重を」

「つまんないのー」

「まあまあ、あとで僕が遊んであげるから機嫌直してよフラン」

口を尖らせていたフランが、僕の言葉であつという間に笑顔になる。

「ほんと！？ 後で嘘とか言わないでね！」

「うん、本当。約束するよ」

イリヤの姿が無邪気に喜ぶフランと被るが、すぐに振り払う。

イリヤはイリヤ、フランはフランだと自身に言い聞かせる。

「まったくフランは………。妹のわがままに付き合わせて  
すまないね」

「いや、僕も久しぶりに妹を相手しているようで楽しいから、気にしないで」

スカーレット姉が呆れながらもフランを慈しむように見る。

僕もそれに共感して、若干微笑む。

「妹様、お嬢様は詩音様とお話があるので、少し席をはずしまし  
よう」

「分かったわ咲夜」

咲夜さんがフランを連れ出し、それを見送ってから僕らは顔を引き締める。

「さて、話を進めましょうか。ゴホン……私は紅魔館当主、レミリア＝スカーレット、レミリアと呼んで構わないわ」

「僕は十夜 詩音。僕も詩音で構わないよレミリア」

ようやく名前を交換する僕たち……レミリアのカリスマブレイクのせいで、出会ってから小一時間経ってようやくだけど。

「それにしても、詩音は興味深いわ。運命が見えないし、幻想にも驚かないなんて。幻想郷の外から来たということ、便宜上外人と呼んだのだけど」

「運命が見えない……うん、だろうね。僕は元来レミリア達とは違う軸に住んでるから」



そう、今回のように線が一時交わる事があっても、すぐに離れるものだから。

「軸？」

「似て非なる世界、いわゆる並行世界ってやつから来たんだ……  
……事故でだけど。正規の手段じゃないから、いずれ元の場所に  
還されるけどね」

幼いなりをしてもレミリアは聡明で、少し考えたと思ったら、  
すぐに納得したように頷いた。

レミリアの思考を待っていたら、ノックと共に台車を押しながら  
咲夜さんが現れる。

「お嬢様、紅茶をお持ちしました」

「ええ、御苦労さま」

「ありがとうございます」

カチャリと微かな音を鳴らして、カップが僕とレミリアの前に置  
かれる。

紅茶に口を付けて、軽く息を吐く。

「最も、僕がいた時代より幾分か先みただけど」

「そう………災難だったわね」

これは、帰ればただの旅行といった気分だ。

「紫と幽香姉さんの喧嘩の余波のせいなんだよね……………」

「スキマとフラワーマスター？ それ、本当に災難ね……………むしろ天災かしら？」

そのあまりの厄さに、レミリアが頬を引き攣らせる。

「いやはや、あそこまで二人の相性が悪いとは思わなかったよ」

「なんとなく解るとは思うのだけど？」

水と油程度かと思っていたら、磁石の同局どうしレベルの反発だったんだよね。

「想定以上だったんだ。誰が、会って30秒で喧嘩になると予想するんだよ……………」

「あー、竹林の連中のような間柄ね……………会ったら大喧嘩か」

知識としては、東方の妹紅と輝夜が仲悪いのは知っているけど、自分が知る二人からすると信じられないものだな。

「妹紅と輝夜は仲悪いのか。一歩間違えばそうなるのも予想はできるけど……………」

「……………信じにくいと。そっちの竹林連中は、余程仲がい

「いみたいね？」

意外そうな顔をするレミリア。

「二人とも僕の妻ですから」

「………はい？」

信じられない事を聞いたように、軽く耳を擦るレミリア。

いや、そんなに頼りなさそうかね僕は。

「二人とも僕の妻だからね。二人とも親友だし」

「………そ、そう。な、仲がいいのならそれでいいんじゃない？」

ここでの二人は、余程仲が悪いらしい。

嘆かわしい事であるが、ここでは当事者でないので口出しできないのが残念だ。

「一度、見に行ってみるかな………」

ぼつりと呟くと、それを聞いたレミリアが何やら考え始める。

しばらくその様子を紅茶を飲みながら眺め、何かを決めたレミリアに声を掛ける。

「で、何を考えていたんだい？」

「詩音の力量を測っておこうと思っただけさ。場合によっては、あれでフランの遊び相手もしてもらおう事にしよう」

あれってなんだろう？

「約束したからフランとは遊ぶよ？」

「いや、その遊び方の問題だよ。スペルカードルールの弾幕決闘がフランが最も好む遊び方になるのだけど……詩音に出来るものかとね」

嗤うようにレミリアが言う。

へえ……久しぶりに弱者に見られたよ。

意外と自分の実力にプライドを持ってたみたいだ、安い挑発だけど少し頭に来た。

「いいよ、少し試し合おうか」

「咲夜、スペルカードとルールの説明を」

「はい。詩音様、こちらを」

渡されたのは白紙の紙片。

「こちらに詩音様の技を記してください。力を込めれば、形にしてください」

「便利なものだね」

一応解析して、向こうで導入しやすいようにスペルカードを把握しておく。

それから力を込め、数枚のスペルカードを精製する。

「スペルカードルールについて説明いたします」

「ああ、お願い咲夜さん」

肉弾戦や弹幕戦を混ぜた弹幕決闘と言う物。

スペルカードルールとして、被弾したら負けの弹幕戦等もあるらしいが、今回は近接も交えた弹幕決闘を行う。

使用スペルカード枚数を決め、大技は全てスペルカードとして使う。

気絶させるか、降参させることで勝敗を決める。

なお、弹幕戦ではスペルカードを全てブレイクする事でも勝敗が決まる。

飛行は総力量の少し程度を限度とし、主戦場は地上とする。

また、天候影響の術式も行使される。

「なるほど、理解できたよ」

「じゃあ、ロビーにでも行こうか。あそこなら十分な広さもある。咲夜、パチエを呼んでおいて」

「館に防御魔法を掛けるように、頼んでおきますね」

一礼して駆けていく咲夜さん。

「まったく、家の因幡どもとは大違いだ。」

「あげないわよ？」

「……………こっちで貰ってもね。向こうで手に入れるよ」

永琳一人で十分だけど、優秀な従者は何人いてもいいからね。

「そこは、向こうの私の器量に期待ね。詩音は本気で取りに行く気はないみたいだし」

「まあ、咲夜さんがレミアアの従者である自然さを見たからね……………あわよくばって程度かな」

この駄目駄目なところのあるカリスマを支えるのは、咲夜さんが一番だと思う。

「……………何か馬鹿にされた気がするわ」

「気のせい気のせい」

そんな雑談をして待っていると、咲夜さんがやってきた。

「準備が整いました。詩音様、スペルの用意はできていますか？」

「あ、行きながら作るよ」

スペルカード作るの忘れてたし。

今回はとりあえず、ゲイボルク（投擲）と王の財宝でいいかな。

というか、ゲイボルク（近接）は必中必殺だから、不殺では使えないんだよね。

幾ら吸血鬼や妖怪相手とはいえ、ゲイボルクの真名解放では死にかねない。

よし、向こうに帰ったら、宝具の効果の再現を研究しよう。

「あ、出来ましたよ詩音様」

「これがスペルカードか」

精製したスペルカードはこの三枚。

宝具『王の財宝』

宝具『突き穿つ死翔の槍』

宝具『天地波濤す終局の刻』

最後の技は、王の財宝から武器を引き出しての乱舞で、止めに王の財宝掃射を行う。

とりあえずは、表出は一人ずつに絞って戦うことにした。

「レミイ……きつちり仕事をしたつもりだけど、限度を超えれば壊れるから注意して」

「ありがとパチユ。あと、それは詩音……この外来人次第よ」

ロビーにたどり着くと、紫を主体とした服に身を包んだ少女が話しかけてくる。

その隣には頭から小さな羽を生やした、悪魔族の少女もいる。

「パチユリー＝ノーレッジ。パチユリーでいいわ」

「あ、小悪魔です。コアという名前をもらってます」

さつと名乗ると、パチユリーはすぐに引っ込んでしまう。

「……詩音！ 僕は十夜 詩音です！」

パチユリーが去った方へ大声で名乗る……これで、聞こえていればいいけど。

「詩音様、気を悪くしないでくださいね。気難しい方なんです」

「ああ、大丈夫。あの程度の事で気を悪くしてたら、紫と友人はやってられないから」



「ははは！ それもそうだ！」

レミリア大爆笑。

その気持ちが分かかってしまつのが笑える。

「……………はあ、よく笑つたわ」

「それはよかつたね。で、始めない？」

つばに入ったのか、しばらく笑い続けていたレミリアに催促する。

正直、そろつとスペカを試したくてうずうずしているんだよね。

「ああ、すまない。ジャッジは咲夜にさせるけど異存は無い？」

「問題ないよ」

ならよしと頷くレミリア。

お互い一定の間合いを離し、軽く構える。

「それでは……………開始！」

咲夜さんの合図とともに、爆発したかのように駆ける僕ら。

表出、クー＝フリーン。

蒼髪紅眼になり、さらにスピードを上げる。

「ははっ！ 私より速いなんてやるじゃないか！」

「速いだけじゃないよっつと！」

ゲイボルクの石突きで突きを放つ。

「つく!?」

妖力で伸ばして硬化させた爪を小刻みに振るうことで、ゲイボルクを逸らし続けられる。

このまま押し切ってもいいけど、それではつまらないのから一旦下がって札を取り出す。

「水気よ水気よ！」

水流による攻撃をレミリアに差し向ける。

「甘い！」

すれすれを掠らせながら、その弾幕を抜けてくる。

あれがグレイズか……面白い！

「なら、木気よ木気よ木気よ！」

今度は木気を使い、99もの風の矢による弾幕を放つ。

「くっ……しもべよ！」

僕の濃密な弾幕に対し、レミリアは妖気を纏った蝙蝠達で迎撃してくる。

衝突、爆風、煙がロビーに広がる。

突風に乗るようにして廊下に至るまで下がり、ゲイボルクに魔力を込める。

煙が晴れると、レミリアが妖力を長大な槍の形に束ねていた。

「行くわよ……我が神の槍に打ち勝てるか！」

「我が魔槍、その身に受けよ！」

互いの力が高まり、ある一点を以って放出にかかる。

スペルカード宣言。

神槍『スピア・ザ・グングニル』

宝具『突き穿つ死翔の槍』

レミリアの手から神槍が放たれ、僕も跳躍の下に真名解放を行った魔槍を放つ。

一瞬で互いの間を埋めて二つの槍がぶつかり合い……深紅の魔槍が神槍を打ち破る。

飛翔、炸裂、再び爆風がロビーを埋める。

「……………ん？」

少し時間が止まっていた事に気が付く。

「勝者は詩音様です」

「う……………」

煙が晴れた先には、眼を回したレミリアを抱えた咲夜さんが瀟洒に立っていた。

軽く駆けて、二人の下に近寄る。

「はあ……………特に怪我もないようで何より」

「あれだけの威力の物で、これほど上手に無力化するなんて驚きました」

咲夜さんの言うとおり、レミリアは汚れてはいるけど、怪我は無い。

「いや、実際冷や汗ものだったよ」

神槍を抜ける威力の上で出来るだけ威力を落とし、それでも過剰な威力を、床に着弾させることで削いだ。

それだけやっても、着弾の衝撃で吸血鬼を気絶させるのだから、ゲイボルクは半端ない。

「そうですね……………ありがとうございます」

「ん、なんで感謝されてるんだらう?」

突然の感謝に疑問符を浮かべる。

「いえ、お嬢様に怪我をさせないように気をまわしていただいた  
ようなので、その感謝をただけです」

「律儀なもんだね」

いや、ほんと瀟洒な従者だよ……やっぱり本気で手に入  
れるように動こうかな?

あまりの瀟洒さに心揺さぶられるも、なんとか抑える。

「……負けた」

「あ、お目覚めですかお嬢様」

むくりと、咲夜さんの腕の中から頭を起こすレミリア。

若干寝ぼけ眼なのはご愛敬。

「ゴホン……よくぞ我が神槍を打ち破った詩音!」

咲夜の腕の中から飛び出し、宙に浮きながら胸を張るレミリア。

浮きながら見下ろしてくる事に、少しの哀愁を感じるのは僕だけ  
だらうか?

「ちよ、切ないものを見る目止めなさい！」

「いや………ねえ？」

苦笑いしながら、密かに様子を見ていたフランに顔を向ける。

「お姉さま、哀れなだけだから降りた方がいいよ」

「い、妹様！ そんなはつきりと………あ！？」

「いいもん………どうせ威厳なんて無いもの。笑いたければ笑えばいいのよ！」

「レ、レミリア、落ちついて！」

うーうー言い始めたレミリアを僕と咲夜であやし、追い打ちをかけるフランを止め、いじけるレミリアをあやす。

どうしてこうなったんだろうか疑問に思いながらも、また毒を吐き始めたフランを止めるのだった。

## 第二十一章 似て非なる世界？

(後書き)

どうしてもレミリアのカリスマブレイクに逃げてしまう……。

というか、自分の中ではレミリア「カリスマブレイク」という等式が成り立ってるから仕方ないと思う。

それにしても、もっと戦闘の表現力上げたい。

何この超短期決戦……。もっと一話丸ごと使うようなのが書きたいです……。誰か教えてえー！。

## 第二十二章 似て非なる世界？

(前書き)

実は、当初はパチュリーをぱちゅんぐにしたかった自分。人のネタなので自重しましたが、今でも手がうずきます。



## 第二十二章 似て非なる世界？

「それでは、双方準備は宜しいですか？」

「こっちはいいよ」

「私もいいよー」

咲夜さんに応え、僕とフランは自然体で構える。

「詩音勝ちなさい！ でないと私の威厳が！」

「レミィ……………」

外野のレミアが騒ぎ、その親友のパチュリーがこれはだめだという視線を向ける。

僕もフランも弄りたいのを抑えつつ、互いににらみ合う。

「それでは……………開始！」

「いっくよー！」

「どんと来い！」

咲夜さんの合図の下に、僕とフランは飛び立った。

数分前。

「お姉さまばかり詩音と遊んでズルイよ!」

「い、いや、これは腕試しなのよ」

ちょっと前までレミリアで遊んでいたかと思ったら、フランがいんな感じで怒り始める。

この辺りはレミリアと違ってまだまだ子供だな、そう思いながらフランとレミリアを見る。

「腕試しー? お話はどうしたの!」

「そ、それはもう終わって、詩音が幻想郷でやっていけるか測るために……」

筋道立てて答えるレミリアだけど、慌て過ぎていて言い訳がましく見えてしまう。

「そう言って誤魔化して! 結局はお姉さまが楽しんでたんでしょ!」

「いや、そういう訳じゃ……」

あーあ、こんなに追い詰められちゃって。

「結局は、フランが詩音と遊びたいのでしょう?」

「うん！」

「あ……助かったわパチエ」

うるさいといった表情でやってきたパチュリーがレミアに助け船を出し、見事救出に成功する。

「さっきのちゃんと聞こえてたんだ」

「あれだけ大声で叫べば聞こえるわよ」

さっきは名乗るだけ名乗って去ってしまったので大声で名乗ったのだけど、そのおかげでちゃんと名前を覚えて貰ったみたいだ。

「あ、分かった！パチエ、また名乗るだけで引っ込んだじゃったんでしょ！駄目だよ、ちゃんと相手の名乗りも受けないと」

「人見知りのフランには言われなくなかったわ」

パンツと手を打って晴れ晴れとした顔でいうフランに、苦笑しながら返すパチュリー。

「ちゃんと名前の交換はするからいいんだもん」

「そこはちゃんとしてるのよね」

「やっぱりしっかりしてるなー」

姉よりしっかり者の妹……イリヤは僕よりしっかりしてたから、兄弟姉妹ってそういう物なのかも。

「それより、詩音と弾幕じっこしたいんだけどー！」

「はいはい………いいかしら詩音」

「約束したからね。まあ、お手柔らかに」

手加減するのが難しいから、本気で来られると少し困るけど。

「今あるスペカは残り二枚だから、とりあえずはそれで」

「少ないけど、仕方ないかぁ……。また今度、もっと枚数増やしてやるうね！」

元の世界に帰るまでに時間があれば約束できるけど………。

「うーん、機会があれば………ね」

「うー、残念だけど、それで我慢する」

フラン、まじでいい子なんですけど………何この萌え生物。

僕の視線に首を傾げるフラン………分かっているとばかりに頷くなレミリア。

「じゃ、はやく始めよー！」

「よし、来い！」

で、ちつきに至る。

眼前にはいくつもの弾幕が光を放っているが、微かに体をずらすだけでグレイズする。

時間停止　お返しとばかりに刃潰しした黒鍵を数回投擲　時  
間停止解除。

「わわわっ！　咲夜みたい！」

「刃潰ししてあるけど、当たるとかなり痛いから気を付けてね」  
刃潰ししても、代行者が使う黒鍵であることには変わらないのだから、吸血鬼には痛い代物である。

「えいつ、やつ、今！」

黒鍵と黒鍵の間を抜け、フランが杖を振りかぶり突撃してくる。

僕もそれに合わせ、王の財宝から抜刀する。

ギンッ！

鋼が強くぶつかる音と共に、僕とフランの間が弾ける。

ガンッガ、ギンッ！　ギギギギ………ギイン！

数合うち合わせ、示し合わせたように下がり合っ。

「すっごーい！　吸血鬼の力と張り合うなんて、詩音って本当に人間？」

「一応は人間だよ……普通の人間ではないけど」

無邪気な質問に微妙に傷つきながらも、王の財宝を射出可能状態にする。

「それなら、本気で行くよ!」

禁忌『フォーオブアカインド』

「あはははは!」

「四人の私と!」

「遊べるかしら!」

「普通じゃない人間は!」

フランが四人という状況に、僕も少し眉をひそめる。

「少し厳しいな……手加減が難しいや」

「……じゃあ、本気で来て!!」

まあ、数で来るなら数で応えるのが一番。

宝具『王の財宝』

王の財宝を励起し、比較的安全な宝具を柄から飛ばし始める。

「わわわ!?!」

「危な!?!」

ギイイイイン!

「痺れるー。一発が重すぎるよー!?!」

「グレイズグレイズグレイズー!?!」

まあ、さすがは弾幕戦経験者、危なげとはいえ見事な回避を見せる。

「あだつ!?!」

「「「ああつ!?! 私Cが!?!」」」

なにそのRPGみたいな呼び分け。

「グハツ………さらば私たち」

「「私Aー!?!」」

宝具『王の財宝』スペルブレイク。

設定した量の宝具を放出したのでスペルブレイク。

結局、分身を二体しか削れずブレイクしてしまった。

これはフランの回避が上手だったせいかな。

「あらら、これで削りきるつもりだったんだけど」

「実は私も」

「びつくりしてる」

そう言った後、小声でもう一人の自分を褒め称えるフラン。

よくやった私、凄いぞ私とか聞こえる。

「じゃ、次行こうか」

「させない!」

禁忌『レーヴァテイン』

二人のフランが、長大な炎の剣で斬りかかってくる。

それに合わせて、僕も財宝から杖の様な剣を引き抜いて振るった。

フランの二振りの炎剣と、僕の二振りの炎剣 「レーヴァテインの原典」がぶつかり合う。

「うそ!?!」

「レーヴァテイン!?!」

「僕としては使い捨てれる宝具だけどね」



だからスペルにもしてない、原典だから名前が無くて真名解放で  
きないしね。

力を込め、炎剣を振り払いフランたちを飛ばす。

「「きゃあ!?!」」

壁に突っ込んでまた一人のフランが消えた。

そしてスペル宣言。

とっさの機転で弄ったスペルが火を噴く。

宝具 『天地波濤す終局の刻 Easy 』

天の鎖を飛ばし逃げようとしたフランを引き寄せ、王の財宝から  
抜刀。

魔術的な加工を行ったハリセンやピコピコハンマーを振るう。

スパアアアアン!

ピコッ!

スパアアアアアン!

ピコッ!

おもちゃと侮るなかれ、魔術加工で紫にすらダメージを与える一  
品になっているのだから。



やった時は名案だと思ったけど、今考えると迷案だよこれ。

散らばったおもちゃを収納し、フランを抱き起こす。

「むー」

「あー、機嫌直してくれフラン」

こんなんだから、イリヤにお兄様はレディの扱いがなってないと  
言われたんだよ………自重しろ僕。

「ん？」

フランが腕から抜け出し、僕の肩に座る。

「しばらくこのままでいたら許してあげる」

「了解しました、お姫様」

フランを肩車しながらレミリア達のところへ向かう。

「あら………よかったわねフラン」

「へへーん、いいでしょお姉さま」

「ぜ、全然羨ましくなんかいわよ！」

「お嬢様が可愛すぎて辛いです」

大人なパチュリー、まるつきり子供な姉妹、そして大丈夫か咲夜

さん。

ちょっとアレなところもあるけど、紅魔館はいい所だ。

その頃の小悪魔。

「パチュリー様ー、お薬の時間ですよー！ はぁ………どこ行っちゃったんでしょうか？」

見当違いのところを探しまわるコア………フランが遊んでいるのが分かっているので近づいていない。

つまり、何時までたっても見つかるわけがない。

その頃の美鈴。

「ZZZZZZZZZZ………たいせいろくん、かくごぉ」

「や、止めようよチルノちゃん」

「大丈夫だって、所詮中国だもん」

爆睡中、この後見事な氷像が一つできたがそのまま寝続けても不思議じゃない。

「フランに付き合ってもらって悪かったわね……. . . . .  
か、今もだけど」

「いやいや、僕も楽しいから別にいいよ」

「私も楽しーよー」

またさっきの部屋でティータイム。

レミリアは上座に、僕はその対面に、フランは僕の膝の上に座っている。

テーブルの右の方では、米神に血管を浮かばせたコアが毒々しい色をした薬をパチュリーに押し付けていて、パチュリーが冷や汗を流しながらも飲もうと努力している。

「どつぞ」

咲夜さんが各自の前に紅茶を置いていく。

レミリアがそれに口を付け、頬を引き攣らせる。

「咲夜、今度は何入れたの？」

「ウオツカを少々ブレンドしてみました。詩音様たちの物は普通ですので」安心を」

砂糖を大量に投入するレミリアと、それを微笑ましく見る咲夜さ

ん。

「なんか主に対しておかしくない？ 最近舐められすぎじゃない私？」

小声でブツブツと最近のカリスマについて悩むレミリア……  
・ 凄く面白いです。

「レミリア……は無理か。咲夜さん、幻想郷を見て回りたいのだけど、どこかお勧めのところ無い？」

「そうですね……ひとまず人里とかはどうでしょう？  
夜には当館に戻っていただければ宿泊の準備は済ませておきますので」

あ、泊まらせてくれるんだ。

当主はうんうん唸ってるけど、勝手に決めていいのだろうか？

「大丈夫です」

「それならいいんだけど」

「あれだったら、私が許可するしね」

フランもこう言ってるし、気にしない事にしよう。

よし、そうときまればさっそく行こうか。

フランを抱えて肩に乗せ、紅茶を飲みきって席を立つ。

「それじゃあ、人里に行く事にするよ」

「案内は私がするから、日傘持ってきて咲夜」

「はい、少々お待ちを」

咲夜さん、僕に気を使って時間停止出来ないから手間だろうなあ。

「ゴホツゴホツ！……………まずい、もう一杯」

「残念ですけど、容量は一杯ですから」

「あれ飲んだんだ……………」

あの毒々しい薬を……………。

「一番まずい奴だけど、コアを心配させたからこれくらいは飲み干すわよ」

「本当に心配しました。パチユリー様はもう少しご自愛してください」

ぶんぷんと怒るコアから、口をばってんにして目をそむけるパチユリー。

SD化して一枚絵にしたい光景である。

「妹様、日傘お持ちしました。詩音様、今の幻想郷の通貨も用意しておきました。あと、簡単な物価を書いた紙も入れておきました」

ので」

「あ、わざわざありがとうございます……まじでむこうの咲夜さん欲しくなるな」

「ありがとう咲夜。詩音、お勧めの団子教えてあげるからね」

未だ悩むレミリアを放置し、他の皆を引き連れて館の入り口までやってくる。

「フラン、詩音にあまり迷惑を掛けないようにしなさい」

「はい。パチュリーはコアに迷惑かけないようにね」

レミリアより保護者っぽいパチュリーである。

「その時は一番まずいの用意しますから」

「むきゅー」

まあ、この辺りはレミリアと似た感じだけど。

「詩音様、妹様をよろしくお願いします」

「うん、任されたよ」

咲夜さんにフランを託され、しっかりと答える。

「それじゃ、行ってきます」



「「「いつてらっしやい（ませ）（「（「（

フランを肩に乗せたまま飛び立ち、フランの案内の下人里へと向かう。

「つて、あれ？」

「あ、美鈴凍ってるー。きゅっとしてどかーん！」

途中凍っていた美鈴がいたが、フランが何かを握ると氷から解放された……。もつとも、爆発で焦げていたけど。

「今のはフランの能力？」

「うん、『ありとあらゆるモノを破壊する程度の能力』だよ。昔は制御できてなかったから閉じ込められていたけど、今ではちゃんと制御できるんだよー」

さらっとなびーな事言ったな。

「へえー、偉いねフラン」

「やった、褒められちゃった」

さらっと言われたので、さらっとなびも流す。

にこやかな雰囲気のまま、僕らは人里へ向かうのであった。

「あれ……皆なんでもないの？」

一人わびしく椅子に座っていたレミリア。

彼女のカリスマは、いったいいつ戻るのだろうか。

## 第二十二章 似て非なる世界？

(後書き)

なんかスイスイと書けた今回の話、戦闘もまあまあかなと思うんですがどうでしょうか？

レミが相変わらずのギャグ要員……面白ければいいよ。

暇つぶしというか、サブに東方世界語の話が書きたいと思うころ。

何か詩音に行ってほしい世界があれば書いてください、書けそうなので適当に書くかもしれないので。

## 第二十三章 似て非なる世界？

(前書き)

怒涛の連続更新、どうしたし自分。

今日は人里回・・・実は人里書くの初めてなんだ。

今までを見返してもらえば分かると思いますが、人里のことに全然触れてないのですよ。

## 第二十三章 似て非なる世界？

「お、フランと・・・・・・・・誰だ？」

「やつほー魔理沙」

魔法の森上空を飛んでいると、一般的イメージの魔法使いが飛んできた。

といつても、陰気とは無縁のカラツとした性格がその笑顔から見とれる。

「十夜 詩音、一応外来人だよ」

「お、飛べる外来人とか珍しいな。私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ。魔理沙って呼んでくれていいぜ」

帽子のつばをずらし、二カツと歯を光らせる。

「魔理沙は私ん家というか図書館？」

「おう、新しい魔導書を探しにな」

そう言って、手に持った空の大袋を掲げる。

「手加減して上げてねー、最近パチエがぶつぶつ文句言ってるから」

「あー、考えとくわ。よし、今日はスニーキングで行くか」

盗って行くのは止めないんだな。

脳裏でむきゅーと言っているパチュリーに合掌。

「そっちはこの方角だと……人里に向かっているのか？」

「そうだよー、詩音にあの団子屋を教えてあげるんだ！」

「まあ、観光をちよつとね」

僕の肩の上で元気にはしゃぐフラン……ああ、ちゃんと日傘を差して。

フランの持つ日傘がゆらゆら動くので、魔術で光を遮断する。

「あんたも魔法使いなのか？」

「そんな感じ、五行符術とか西洋魔術とかいろいろかじってるけどね」

僕の応えに、感心したように頷く魔理沙。

魔法というのは一つの系統を扱っただけでも、結構な苦労があるものだからだ。

「詩音とは一度、魔法について話し合いたいもんだ」

「すまないけど、その時間は取れそうにもないや」

「詩音、はやくしないと日が暮れちゃうよー」

肩の上のフランを指して首をすくめると、だるつなと言つように魔理沙も笑つ。

「それじゃあ、さよなら」

「おう、また機会があればいいな」

「じゃーねー魔理沙」

紅魔館へと去っていく魔理沙を、二人して手を振って見送る。

「よし、行こうか」

「うー！ うー！」

畳んだ日傘を人里方面へと向けて、フランがはしゃぐ。

その期待に応えて、さっきより少し早めに飛んで行く。

「とーっちやくー！」

スタンと僕から飛び降りて着地するフラン。

魔理沙と別れてからは、特に何かと会うこともなく人里に付いた。

「まずは団子屋さん！ こっちだよ！」

「おおっ！？」

フランに引つ張られ、前傾気味で走らされる。

すたすたと幾つかの路地を超え、中々人がいる茶屋に着く。

「ここ！ ここの草餅が絶品なんだよ！」

「あらフランちゃん。いつも来てくれてありがとうね」

「あ、こんにちわ」

フランの声に、中から人のよさそうなおばあさんが現れた。

「フランちゃんはいつものでいいかい？」

「うん、お願いおばあちゃん。詩音には草餅と三色団子と玉露で」

はいはいと、店に戻るおばあさん。

僕とフランは、店内の席に付いて待つことにしたのだけど

「あ、フランさん」

「あ、妖夢」

ふよふよと半霊を引き連れた少女が、風呂敷一杯の団子を背



負っているシユールな光景に出くわしてしまった。

なんとというか、その風呂敷の中身がどうなるかがよく分かるのが  
ちよつと悲しいわけですよ。

絶対幽々子の胃に収まる、それも二日以内に。

大体七分の一ぐらいを今日食べて、次の日には隠し場所がばれて  
全滅。

実際にこうなったのを見たからよく分かる。

今は白玉楼の管理もやってる、僕の方の藍涙目でした。

「お疲れ妖夢」

「これだけ買っても、どうせ明日には無くなるんですよ……」  
「」

幼い外見なのに、これだけ哀愁漂わせるとは……不憫な。

「じゃあ、私はこれで」

「頑張つて」

ふらふらと飛んで行く半霊と少女を見送る僕とフラン。

青空に浮かぶ幻影に敬礼をしても仕方ないだろう。

「はいフランちゃん、いつものどうぞ。お兄さんの草餅、三色団

子、玉露もお待ちどうさま」

「いただきますー！」

「いただきます」

お、これはおいしい。

生地の食感が、今まで食べてきたどの餅とも違う。

よく伸びる癖に歯切れがいいとか………最高だ。

餡も幾つかの種類を混ぜ合わせてあって、独特の味を出してるみたいだ。

そして、その餡に適温の玉露がよく合うのなんの。

「フランが進めるのも分かるよこれ」

「えへへ、おいしいでしょー」

自分の好物を美味しいと言われて嬉しそうにするフラン。

向こうでこの店が出来たら、鼻屑にしよつと思つ。

まったりと団子を食べ終え、次の場所へとフランに連れられてきた。

「ここは寺子屋だよ。私とか一部の妖怪も勉強しに来るんだよ」

「へえ、それはすごい教師だ」

「そう言われると、案外恥ずかしいものだな」

丁度出る所だったのか、扉が開いて成長した慧音が現れた。

「フランか、今日は人の案内をしているのか？」

「うん。外来人の詩音だよ」

ああそつだ、個々の慧音は僕を知らないんだ。

「十夜 詩音、詩音でいいよ」

「丁寧にも。私は上白沢 慧音です、この寺子屋で教師をやっています」

なんとというか………違う世界とはいえ、仮にも娘に改めて名乗ると言うのも不思議な気持ちである。

「おーす慧音………って、吸血鬼の妹もいるのか」

「あ、もこーだ」

聞きなれた声に勢いよく振り向く僕。

「やっと来たか妹紅、お前はもう少し時間に正確に………」

って」

「うおっ！ 急に振り向くなよ、驚くじゃないか」

アルビノになっではいるが、最愛の一人がそこには居た。

「……………じっと見ないでくれ、さすがに恥ずかしい」

「ああ、ごめん。ちょっと知り合いに似てたからさ」

「それほど似ていたのか？ 尋常じゃない目つきだったぞ」

いけないいけない……………この妹紅は、僕の妹紅じゃないんだから。

少し目を閉じ、気分を落ち着かせてから目を開ける。

瞳に映るのは首を傾げる妹紅……………ああ、可愛いなあ。

「大丈夫。君が僕の知っている人とは違っつて分かってるから」

「よく分からないけど、大丈夫ならいい」

少し深く息を吐いて、心を落ち着かせる。

「僕は詩音、十夜 詩音だよ。君の名前を教えて貰っていいかい？」

「丁寧にも。私は藤原 妹紅……………なんか、詩音とは初めて会った気がしないんだけど、似ている人って私じゃないの？」

あれだけ一緒に暮していれば、並行世界の妹紅も親近感を覚えるほどに似るのかも。

ほら、よく夫婦は似るっていうし。

「ああ、何かと思ったたらそういう事か！ 詩音と妹紅の仕草がそっくりすぎるのか！」

どっちら当たりらしい。

この世界の妹紅と親しい慧音が言うのだから間違いないだろう。

「あ、ホントだー。妹紅と詩音の首の傾げ方とか、ぴったり合ってる！」

「そ、そんなにそっくりなのか………って、私と似ててそんなに嬉しいのか？」

どうも頬が緩んでしまう………にやにや。

「あ、私に似ている知り合いの方が」

「あー、そうであってそうでない感じ」

僕の知らない人には意味の分からない言葉に、軽く混乱する妹紅。

あー、まじで可愛いんですけど。

これで輝夜や諏訪子が集まったら、僕は萌え死ぬかもしれない。

「あ、そろそろ行かねばならないな。詩音、すまないが妹紅も連れて行かせてもらおうぞ」

「引き留めてごめんね慧音」

「いや、不思議と楽しかったから問題ないさ」

「残念、詩音の案内手伝ってもらおうと思ったんだけどな」

ちよつと時間を取り過ぎたのか、小走りで去る慧音たちを見送る。

さて、次はどこに連れて行ってくれるのかな？

「うーん、幻想郷観光だったら……稗田家がいいかも。

あ、魔理沙の実家も捨てがたいなあ」

「両方に行く時間無いの？」

まだまだ時間に余裕はあると思うのだけど。

「えつとね、稗田家には幻想郷の資料が一杯あるから、そういうのが好きな人だとかかなり時間かかっちゃうんだ」

「なら、資料読むときは時間停止でも使っよ」

こういう時に便利な時間停止、咲夜さんもこの間にガンガン仕事しちゃってください。

それにしても、広域時間操作系能力者が二人いると、これほど不

便になるとは思わなかった。

「なるほどー。詩音が同じ能力持つてるから、咲夜も能力使わなかったんだ」

あ、疑問に思ってたんだ。

「あれ……そうになると、詩音が能力使わないと咲夜の仕事が滞っちゃうじゃん」

「あーまあ、そういうことになるのかな？」

紅魔館に戻ったら、咲夜さんに仕事してもらってる間は図書館で時間を潰そう。

「まあ、咲夜なら大丈夫だと思うけどね。伊達に紅魔館のメイド長をしてないから」

凄いい信頼だ……僕らも永琳に対してこういう信頼はしてるけどね。

「それじゃあ、稗田家に行こう！」

また肩車に戻り、フランが進行方向を指し示す。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

ちよっと歩くと、人里に入る前に見た大きな屋敷へと着いた。

「とうちゃーく。門叩けば使用人が出てくるよ」

「すいませーん」

どんとんと門を叩くと、横の扉から使用人らしからぬ少女が現れる。

「フランさん、何かご用でしょうか？」

「あ、丁度いいわね。阿求、詩音に幻想郷の資料を見せてあげてほしいんだけど」

あれ、阿求って事は九代目の阿礼乙女か。

「いいですよ。あ、もしかして外来人の方ですか？」

「一応そついう分類になるかな」

齒切れの悪い僕の台詞に首を傾げる阿礼乙女。

「……………？ あ、私九代目阿礼乙女、稗田 阿求と申しま  
す」

「一応外来人、十夜 詩音です」

深々と頭を下げ合う。

「では、こちらになります。脆くなっている資料もあるので、丁寧に扱って下さいね」



「そういつのは術で補強しておこうか？」

余り強度は上がらないけど、恒久的に効果が続く強化とかがいいだろう。

「あ、ありがとうございます。お願いしてもいいですか？」

「そのくらいはお安い御用だよ」

そういえば、僕が資料を見ている間はフランどうするんだろ？

「詩音が資料見ている間、お話ししよ阿求」

「あ、フランさんの好きなお店のお菓子もありますよ」

どうやら心配はいらないみたいです、お友達っていいよね。

「あ、ここです。こちらから年代順に並べられているので、仕舞うときもそのようにお問い合わせします」

「うん、分かったよ。あと、強化は恒久的な分、鉄並みの強度とかなはならないから注意してね」

いらぬ紙をもらい、どの程度の物かを実演しておく。

「これだけ強くなれば十分です。それじゃあ、お願いしますね」

「じゃあ、資料見させてもらひつよ」

さて、こっちの幻想郷はどんな歴史をたどって来たのかな？

「お、もうこんなに経ってる」

途中時間停止も交えていたけど、幻想郷の歴史は結構な量があった。読むのにかなりの時間を使ってしまった。

最後の一冊を棚に戻し、読み終わったら来るように言われている部屋へと向かう。

「阿求、資料ありがとう」

「あ、お役に立てたのなら何よりです」

「むぐむぐ」

女の子は甘いものに目が無いのはどこでもいっしょか。

結構大きめの皿が空になっているのを見てそう思う。

「あ、これはですね……」

「阿求、言い訳は見苦しいよ。私より食べたくせに」

顔を真っ赤にして俯いてしまう阿求。

「いや、僕の妻たちも甘いものが好きだし、おかしいほど食べる友人もいるから気にしないで」

あれと比べるのもどうかと思うけどね。

「うう、フランさん意地悪です」

「食べ物の恨みは恐ろしいのよ」

にやりと言うフラン、仲がよろしい事で。

玄関まで案内され、少し待っていてくれと去る阿求に言われる。

「次は魔理沙の実家ね」

「もう少し阿求と話していてもいいよ?」

あれだけ楽しそうだったしね。

「ううん、阿求とは何時でも会えるけど、詩音は時間があまりないから」

「気遣ってもらってすまないね」

「お待たせしました、これお土産にどうぞ」

僕は食べてなかったから、お菓子を持ってきてくれたみたいです。

「ありがとう。ゆっくり食べさせてもらおうよ」

「それじゃあ、またね阿求」

「はい。また会いましょうフランさん。詩音さんも機会があれば」  
手を振り見送ってくれる阿求。

僕らもそれに手を振り返して、稗田家を後にした。

「うーん、楽しかったね」

「そうだね。魔理沙のお父さんとか、全然似てないのに親子って分かるし」

かなり敵つい顔のお父さんだったけど、カラツとした笑い方とか  
が物凄く親子を感じさせた。

しかも、フランに魔理沙の事をさりげなくきいて一喜一憂していた。

「しかも商売上手と来た」

「人里でも古くからある老舗の店主だから当然だよ！」  
夕暮れの中、笑いながら僕らは紅魔館に戻るのだった。

ほんと、今日は楽しい日だったよ。



## 第二十三章 似て非なる世界？

(後書き)

登場してないのにオリキャラ説明。

名前 霧雨 魔理緒<sup>マリオ</sup>

容姿 金のひげがいかした彫の深いナイスガイ。

性格 H A H A H A というアメリカンな笑いが特徴的な、商売上手。

実は親バカ+ツンデレ。

以後登場するかは未定。

それにしても、調子が良すぎて怖い。

反動でスランプに陥らないように願って下さい。

では、また次回で。

## 第二十四章 似て非なる世界？

(前書き)

やっと更新しました・・・おせえ。

しかもなんだか、とってつけたような感じの構成です。

あの絶好調具合もどってこないかなあ・・・。

## 第二十四章 似て非なる世界？

「ふんふーんふふーん」

「手土産も買い込んだし、喜んでくれるといいんだけどねえ」

紅魔館に一日宿泊し、今日もフランとお出かけ。

なお、咲夜さんの手がけた洋食は大変おいしゅうございました・・・  
・・・レミリアは実験料理食わされてたけど。

朝食に不格好な物もあつたけど、それもなかなかおいしかった。

すっかりとフランにそれを伝えてあげると、隠しながらも喜んでくれて何よりである。

「妖夢、働き過ぎてないかなあ」

「あー、そのあたりは大丈夫だと思うよ？」

白玉楼での主なお仕事は、毎日大量の料理を作る事と、家計簿のエンゲル係数を減らす事だから、慣れればなんとかやれない事もない・・・はず。

なお、今の会話から分かるように、今日は白玉楼に行きます。

朝はフランとレミリアは寝ているから、お昼からの出発になった。

人里で手土産に大量の食べ物を買ひ込み、せめてもの助けにして



やるつという気遣いも忘れない。

「お、階段が見えたね」

「無駄に長いんだよねー」

正直階段がある必要性が見えないけど、何か意味があったはず。

ただ、思い出せないので僕には関係ない話だろうと思う。

「ん、何か楽器の音が……………」

「あ、今日はプリズムリバー楽団のライブがあるのかも」

プリズムリバー楽団……………騒霊の三姉妹だったはず。

「騒霊のプリズムリバー三姉妹のライブだよ。私も何度か聞きに行ったこともあるんだー」

「へえ……………一度聞いてみたいかも」

「どうぞ。今夜ライブだから、よければ聞きに来て」

さつきから演奏が止まっていると思ったら、僕らの話を聞いているらしい。

「長女のルナサ＝プリズムリバー。弦楽器担当で、主に使うのはヴァイオリンよ」

「次女のメルラン＝プリズムリバーだよ！担当は管楽器で、ト

ランペットを愛用してるんだ！」

「三女のリリカはプロズムリバーです。私は鍵盤楽器担当で、使ってるのはキーボードだよ」

「丁寧にも。僕は十夜 詩音っていうんだ。残念ながら楽器類は扱った事無いや」

今の人格の原型は楽器なんて引かなかったし、アインは聖杯としてだけ求められて、詩音は楽器に触れる機会もなし。

英霊もアルトリア、ギルガメッシュ、メディアは王や王女だから聞く側だし、クー＝フリーン、ヘラクレス、佐々木 小次郎はそんな余裕が無かった。

もの見事に音楽との関連性が無い僕である………何か始めようかな。

「詩音は楽器使わないんだ。私は壊しちゃう事が多かったけど、一応ヴァイオリン弾けるんだよ」

「帰ったら何か楽器始めて見るよ」

フランはお嬢様の嗜みといったところか、一度聞いてみたいかも。

それに、フランが弾けるのならレミリアも弾けるのだろう………  
・意外と上手かもしれない。

「お姉さまは私より断然上手いよ。弾いている間はカリスマあるし………弾いている間はね」

「ああ、やっぱりそうか」

腕前とカリスマ、二重の意味で言葉が漏れる。

「へえ………紅魔館の吸血鬼はヴァイオリンが弾けるのね」

「あくまで嗜み程度だから、本職には勝てないけどね」

「いや………楽器に触れもしない僕からしたら十分凄いよ」

うん、帰ったら本気で何か楽器に手を付けよう。

元の世界にいずれ来る妹分フランに聞かせてやりたいしね。

「うーん。よければ、後日教えてあげてもいいよー」

「あー、気持ちはありがたいんだけど、それまでここに居られるかどうか分からないんだよね」

「どういう事？ 幻想郷に居るのなら、いつでも会えるでしょう？」

「………」

急にフランが黙ってしまっ。

レミリアとの話を聞いてはいなかったはずだけど、なんとなく僕が居なくなること察しているのかもしれない。

「言い辛いんだっつたら言わなくていいからね！」

「あー、そう言ってもらえると助かるよ」

僕の服の裾をフランが掴んできたので、軽く撫でてあげる。

「それにしてもー、かなり懐いてるみたいだねー」

「まあ、結構人に好かれてはいると思うよ？」

穏やかでいるように心がけているからか、人には……あれ？ 人間の知り合いが全然いない……。

真つ当な人間の知り合いと言ったら、蓬莱人になる前……つまりは都に住んでいた時にしかない。

それ以後は全員妖怪とか人で無い者ばかり……いや、皆人型だからいいんだ、いいんだよ、いいんだよね？

「詩音、もしかして人間の友達がないの？」

「うっ！？」

「えーと……ほら！ 博麗の巫女とか、白黒魔法使い、山の巫女も妖怪の知り合いばかりらしいし、気にしない方がいいよー！」

「そうだよー。それに、友達に種族は関係ないよー」

「うん、私もそう思う。だから、元気出して」

フランの毒舌にさらされ落ち込んだ僕を、三姉妹が慰めてくれる。きずかれないようにちらりとフランを見ると、少しは元気を出してくれたようで、わずかだけど笑っている。

「皆ありがとう。そうだよ、友達に種族は関係ないよね」

「ねえ、詩音。私と詩音は友達？」

フランが聞いてくるけど、さつきも考えた通り妹分が正しい。

「友達と言うより、妹分かな？」

「あ、それいい。お姉さまなんかより頼りになりそう！ 詩音お兄様……うん、じっくりくるね！」

レミリアだってやる時はやると思うけど、普段の状態では確実に僕の方が頼りになるだろう。

「そんなに頼りになるのー？」

「こらりリカ、失礼だろう」

「あ、私も気になるー！」

三姉妹にさつき変なところを見せたせいで、頼りないように思われているようだ。

「すっごく頼りになるんだよ！ 私やお姉さまに簡単に勝っちゃ

うし、とっても優しいし、私の我侭にもちゃんと付き合ってくれ  
んだよ」

「うーん、フランはあまり我侭言っていないと思うよ。それに、僕  
を案内してくれたりするいい子だから、少しの我儘ぐらい聞いてあ  
げないと」

「良いお兄様だねフランさん！」

「私のお姉さんたちもー、見習ってほしいかなー」

「それならフランさんのように、いい妹になって欲しい」

べた褒めだけど、僕はお兄様失格である。

今までを思うと、妹分には悪い事ばかりしているなと思う。

アインの時はイリヤを置いて逝ったわ、詩音の時はいずれフラン  
を置いて還る事になるわ。

正直、フランを連れまわすのがいい事かどうか、僕にはわからな  
い。

フランと親しくすればするほど、以後の悲しみも増すだろう。

だけど、ここまで親しくなった以上、避ければ確実に傷つく。

僕が考えなしに親しくなるから……いや、これはフラン  
への冒瀆か。

「それじゃあ、多分ライブに行くからー！」

「ライブ楽しみにしてるよー」

「今晚は、最高のライブにするから」

「多分じゃなくてー」

「絶対に来てね！」

プリズムリバー三姉妹と別れ、悩む思考を分けて裏に押し込む。

またフランを肩車し、適度な速度で飛行して白玉楼を目指す。

しばらく飛んでいると、フランが注意を促してくる。

「あ、そろそろ妖夢が飛び出してくるかもしれないから注意して」

「……………どういう事？」

なんでも、妖夢の仕事は多岐にわたるようで、家事は当然で、屋敷の見回りや警護もその内に入る。

さて、あの自由奔放な主をもっている妖夢が余裕を以って仕事が出来るか……………といったら、否としか言いようがない。

そしてそこに妖夢のフランでもよく分からない行動原理の一つ、  
「斬ればわかる」が化学反応を起こすと

「くせもの！」

こうなる。

出会った当初の妖忌よりはましな一撃を素手で払い、斜め45度のチョップ。

「みよん！？……………あれ、フランさん？」

「妖夢……………その見境なく斬ろうとする癖、いかげん治した方がいいよ」

「僕だったからいいものを、場合によっては逆に切り捨てられるよ？」

辻斬り機械になっていた半人半霊の少女が、良い角度から入った衝撃で正気を取り戻す。

「咲夜みたいに時間が止められるわけじゃないんだから、もう少し手を抜かないとだめだよー妖夢」

「そんなことできません！ おじい様から受け継いで、幽々子様から任されたこの役目から手を抜くなんて！」

「あー、それで潰れかけてたら本末転倒だろう？ 幾ら半人半霊とはいえっても限界はあるのだから、せめてもう少し要領よくやった方がいい」

これは向こうで妖忌に言いつけておこう、適度な手の抜き方も教えるように。



幽々子も幾らか止めてるんだらうけど、あんまり強引に言いつけるタイプじゃないからなあ……。

紫のように扱き使う時に扱き使って、普段は適度に扱えるようだといいのだけど。

向こうの藍は、八雲本邸にマヨイガ、白玉楼と管理しているけど、それをこなせるだけのキャパがある。

対して、この子では年齢的にも経験的にも未熟だから、白玉楼一つでもアウト。

せめて、もう二十年ぐらい経てば今のままでもやっていけるのだらうけど。

「うう……しかし」

「しかしもかかしもないよ！ 妖夢が無理してみんなが喜ぶと思ってるの！ 少なくとも私は嫌だよ！」

「はあ……せめて八雲 藍に効率のいい仕事の仕方を聞いておくといいよ。あっちも忙しいだらうけど、それくらいやれる余裕は持つてるだらうから」

こっちの藍にはまだ会ってないけど、おそらくこっちでも白玉楼の管理をやっていたこともあるはず。

そうでなくても、紫にこき使われている藍なら、どこの世界でも効率のいい仕事が出るはずだ。

脳裏に浮かぶ藍の諦観した泣き顔に心で合掌しながら、本人の知らぬうちにさらなる仕事を押し付ける僕。

「……………分かりました」

「妖夢は頑固すぎだよ」

「で、この話はまとまったけど、主さんとしてはどうなの?」

「ようやく困り種の一つが無くなったわね。妖夢の主としてお礼を言わせてもらっわ……………ありがとう」

雲の陰から幽々子が下りてきて、僕らに頭を下げる。

「ゆ、幽々子様!?!」

「うーん、私は妖夢の友達として当然の事をしたただけだよ?」

「そうだね、妹分の友達を案じたただけだから」

「ふふっ、ならこの子とお友達でいてくれてありがとうね?」

少女の隣に降り立った幽々子が、少女の頭を撫でながら言う。

俯き頬を染める少女と、微笑みながら名で続ける幽々子。

「そうそう、妖夢のお友達とそのお兄さんは家に御用みたいね。歓迎するわ、普通とは違う外来人の御方」

事情はもう把握済み……………なのも当然か。

「八雲から？」

「紫からね」

まあ、レミアアへの説明自体、スキマで覗いていた紫への説明がメインだったしね。

「紫様をご関係ですか……えつと……その……」

「詩音、十夜 詩音だよ。あと、ここの八雲とは直接の面識は無いよ」

まあ、向こうの紫とどういった関係だったかは、ここの紫もなんとなく把握できているだろうけど。

「そ、そうですね……あ、私は魂魄 妖夢といいます。白玉楼の庭師と、幽々子様の剣術指南を任されています」

「一応私も名乗っておこうかしら。たぶん知っているのだろうけど、西行寺 幽々子よ」

幽々子が剣術……だと……？

あの、三度の飯より六度の飯の幽々子が……？

暇つぶしが暴食の幽々子が……？

「何か失礼なこと考えてないかしら？」

「イエ、ナンニモ」

事実とはいえ、これは見て見ぬふりをするべきところだった。

幽々子の目が笑ってない笑顔から目を逸らし、冷や汗を軽く垂らす。

「まあ、いいわよ。それより、その風呂敷包みなんだけど……」

「ああ、妖夢に手土産だよ」

「これしか持って来れなくてごめんね、妖夢」

「いえ、凄くありがたいですフランさん！ これで少しは足りになります！」

妖夢……本当にけなげで真面目でいい子である。

「立ち話もなんだから、屋敷の方でお話ししましょう？」

「うん、そうしようか」

「あ、先導します」

「先導も何も一本道だけどねー」

幽々子の風呂敷から外れない視線をスルーしつつ、妖夢の後ろに付いて僕らは飛んで行った……もちろん、妖夢より高度を

取  
つ  
て。

## 第二十四章 似て非なる世界？

(後書き)

妖夢、藍、咲夜さん、映姫様は幻想郷で最も働いている方達です。年中無休がデフォ・・・原作世界の輝夜にも見習ってほしいものです。

なお、本作の輝夜は立派に新妻しています、結婚数百年ですけど新妻です。

詩音爆発しろ・・・失礼。

## 第二十五章 似て非なる世界？

(前書き)

またまた遅くなつてすいません。

その時のノリとテンションだけで書いてるからこうなる……  
皆さんは真似しないでくださいね！

## 第二十五章 似て非なる世界？

トントントントン

規則正しく、包丁がまな板を叩く。

「お料理、慣れてるんですね」

「まあ、趣味だからね。普段の食事は妻や従者や娘が全部作って、僕は台所に入れさせてもらえないけど」

今の人格の墓の生の時は、家事なんて面倒なだけだったけど、今は趣味の一つである。

時折、妻たちの隙を見て家事をするぐらいには好きである。

「娘さんがいらつしやるような歳に見えませんが……」

「これでも700歳は越えてるはずだよ、あと養女だからね」

中身は1500歳ぐらいだったかな？

「700!?!? ……人間じゃなかったんですか？」

「ほら、不死の薬………蓬莱の薬って聞いたこと無い？」

多分幽々子だから、竹取の話ぐらい話していてもおかしくないと思うんだけど………ああ、輝夜達と知り合いなら分かるか。



「ああ、なるほど。妹紅さんや輝夜さん達と同じ蓬萊人ですか」

「そういう事」

予想通りの答えが返ってくる。

ついでに、僕の事をどの程度把握してるか聞くかな。

「そういえば、幽々子から僕の事は聞いた？」

料理から目を離さずに聞く。

僕も妖夢も料理に対して同じスタンスのようで、料理中に目を離すことは無い。

手慣れているため会話程度はするけど、調理には真摯に挑む。

これが料理人として当然のことだと、僕に料理を覚えてくれた十夜家の料理人が言っていたし、僕もそうだと思った。

「一応は………へいこう世界でしたっけ？」

「そうだよ………一応聞くけど、並行世界の意味分かる？」

思考がそれていたため、あやふやな妖夢の返事への反応が遅れてしまった。

「えーと、分かりません」

「かなり適当に言うけど、似ているけどどこか違う世界って把握でいいよ」

講釈は、もっと余裕がある時にすればいい。

僕が帰った後でも、紫あたりが説明してくれるだろうしね。

「はぁ……」

妖夢の上に大量の疑問符が浮かんでるんだろうなあ。

そんな事を思いながら、料理を仕上げていった。

「おいしいわ」

「お兄様、お料理上手なのね」

「味見させて貰いましたが、やっぱりおいしいですね」

「それはよかった。腕を振るった甲斐があるよ」

皆で食卓を囲み、和やかに遅めの昼食を取る。

最近妻たちの警戒が強くてしばらく台所に入って無かったのもしかしたら腕が錆ついてるかもしれないと思ったけど杞憂だったらしい。

さすがに数百年単位でやってきた事だから、それも当然か。

『「ごちそうさまでした」』

食事を終えて妖夢と二人で片付けを終えた後、皆して縁側で茶をすすする。

お茶を入れたりなんだり手伝おうとしたけど、さすがに客人だからと遠回しに遠慮されてしまった。

「良い天気ねー」

「そうだね。あ、フラン日よけの角度はこのくらいで大丈夫？」

「もーまんたいー」

あれ、確かそれは中国語・・・・・・・・ああ、美鈴から教わったのか。

「それ、美鈴から教わったの？」

「そーだよー。これしか美鈴の国の言葉知らないけどね」

ちよこんと僕の足の間に座ったフランが、僕を見上げて言った。

剣伎「桜花閃々」

妖夢のスペカが煌めき・・・・・・・・庭の木々が切りそろえられる。

「今日の妖夢は張り切ってるわねー。ふふ、詩音に触発されたの

かもね、良い顔してるわ」

「そうかもね。そうなってくれたのなら幸いだよ」

「んー、どういう事？」

首を傾げるフランに、妖夢の変化を教えてあげる。

「ほら、妖夢を見てご覧・・・・・・・・フランにはどういふふうに見える？」

「なんだか楽しそう・・・・・・・・あ、分かった。咲夜や美鈴、小悪魔達と同じ顔してるんだ」

仕事をするにあたって、義務でやる場合と楽しんでやる場合とでは大いに違いが出るだろう。

楽しんでやれば効率も良く、疲労も少なくなる。

僕が楽しんで料理や片付けをやっていたことから、悟ったのだろう。

僕の手伝いを遠慮したのも、これが関係しているのかもしれない。

「あらあら・・・・・・・・詩音にばかりいいとこ持ってかれて、主として面目ないわ」

「まあ、これは外部の人間じゃないとどうしようもないことだろうから、仕方ないさ」

幽々子と妖夢は仲がいいけど、その事が逆に妖夢へ負担をかけていたのだろう。

主従の仲がいいのはもちろんいいことだけど、従者が持つやらなければいけないという義務感が大きくなりすぎることに注意しなければならぬ。

そう言ったのを正そうとしても、従者が生真面目過ぎると主従という関係が邪魔をしてしまう。

今回の僕みたいな外部の人間が梃子を入れてやらないと、中々解決しない厄介な問題だった。

剣伎「桜花閃々」

また、別の木々をスペカで切りそろえる妖夢。

「……………ちよつと、困ったわね」

「……………そうだね」

「限度があるよ妖夢……………」

楽しそうに木を切っていく妖夢、そこはまあ良いんだけど……………のめり込み過ぎているのはちよつといただけだね。

なんというか、フランの言うように限度ってものがあるだろう。

「よーむー」

幽々子が呼びかけると、すぐさま妖夢が駆けよってくる。

「何でしょうか幽々子様！ あ、もしかしてお茶のお代わりですか？ 今入れてきますね！」

「行っちゃった……」

「また暴走してるんかい……」

「妖夢らしいんだけどねー」

呆然と見送るフランと僕、幽々子は苦笑い。

妖忌……いや、この場合は妖末の教育が悪いのか？

妖夢の祖父と母の顔を思い浮かべ、すぐに妖忌が悪いと結論付ける。

「お待たせしました！」

声の勢いとは別に、茶を注ぐ動作は丁寧なものである。

「また仕事に戻りますが、何かあれば遠慮せずにお呼びください！」

そう言ってすぐに消えそうな妖夢を掴む。

「し、詩音様なに……」

「いや、楽しんで仕事するのは良いけど、しっかりと休憩もと

る事。楽しんでる分、気付かないうちに結構疲労が溜まる事もあるからね」

「そーそー。それに、妖夢は今まで働きづめだったんだから、少し力を抜かないと駄目だよー」

「妖夢、今日は料理だけやってくれればいいわ。あと、体力の配分とかを後で一緒に考えましょう?」

全員で説得し、そのあと少し皆で説教をした。

そのあと、妖夢含めた全員で茶を飲んでいると、妖夢が舟を漕ぎ始めた。

「あらあら、大分疲れてたみたいね」

そのままぱたりと、幽々子の腿に倒れてしまう。

「……………んー」

と、こっちのお姫様もおねむのようで、僕の胸に頭を預けて目蓋を閉じてしまう。

とりあえず札で簡単な人形ひとがたを作り、妖夢の足を縁側に上げさせて楽な体制にしてあげる。

「幽々子、布団とかはどこにある?」

「えーと、確か向こうの奥の部屋ね」

布団を人形に取りに行かせ、日が移動したので日よけの角度を変えらる。

妖夢には人形が持つてきた布団を被せ、フランには王の財宝から取り出した僕の上着を被せて抱いてあげる。

「……………ん」

小さく喉を鳴らし、僕の腕の中で丸く小さくなるフラン。

妖夢も、幽々子に手で髪を梳かされて気持ち良さそうに寝ている。

「いいお兄様してるわね」

「……………いや、そうでもないよ」

本当に駄目な兄だよ。

「そうなのかもしれないわね。ただ、それを決めるのはその子でしよう?」

「まあね。フランが僕を悪く言わないっていうのは分かってるけど……………要は僕が僕を許せないだけだよ」

フランがどう言おうと、僕がフランを傷つけることになるのは変わらないから。

「そう……………詩音自身がそういうのだから仕方ないわね。貴方も子供じゃないから、これ以上は何も言わないわ」



「助かる……まあ、結局僕は歳喰っただけの子供だと思っけどね」

そう、いつもこういった事から逃げてるだけだから。

歳だけは無駄に食っても、これが治らなければ意味もない。

夜になり、白玉楼近くの広場に多くの人妖が集まる。

人里と違って、この場所で妖怪が人を襲えるのだけど、そのような素振りは見えない。

おそらくは暗黙の了解でもあるのだろう。

それに、何人かの妖怪と退魔師が狼藉者に対して目を光らせているようだ。

「相変わらず、すごい人気だー」

「これは予想以上の盛況ぶりだね」

ざわざわと話声が響き渡る中、皆の視点はプリズムリバー三姉妹が出てくるであろう場所に集中している。

そして、三姉妹が出てきた瞬間にざわめきはぱたりと止む。

ルナサ、メルラン、リリカの順に出てきて、皆から見えるように少し浮き上がる。

「皆さん、今日は来てくれてありがとうございます」

「今日はー、私たちの演奏をー、ゆっくり楽しんで行ってねー」

「それじゃあ！ 始めるよー！」

幽霊楽団 〉 Phantom Ensemble

ルナサのヴァイオリンの静かな音色が安定を、メルランのトランペットの賑やかな音が揺れを、リリカのキーボードの不思議な音が幻想を紡ぎ出す。

この演奏は耳にももちろん通るが、魂に直接響き渡ってくる。

魂に直接来る感動とは、音楽……いや、芸術の本質ではないだろうか。

演奏に聞き惚れているうちに、一曲目が終わる。

少しの間を開け、次の演奏が始まる。

幽雅に咲かせ、墨染の桜 〉 Border of Life

e

ライブが始まってから数刻経って、いよいよ最後の曲が終わる。

皆が一呼吸付いた後に、盛大な拍手が鳴り響く。

もちろん僕らも大きく拍手をしている。

「ふわー、すごかったねー」

「うん、本当に凄かったよ」

視線の先では、三姉妹が観客に応え手を振っている。

そして、一人の妖怪か人間が大きく声を放つ。

「アンコール！」

それはすぐさま広がり、僕らもそれに参加する。

「アンコール！ アンコール！ アンコール！」

それは盛大な合唱となり、会場がさらに盛り上がる。

『アンコール！ アンコール！ アンコール！』

そして、三姉妹が手を掲げるとその声援が止まる。

「皆さんの期待に応えて」

「アンコールにー」

「いつてみようか！」

ネクロファンタジア

「皆さん、今日はありがとうございました」

「皆！ 次の公演もぜひ来てね！」

「それじゃー、気を付けて帰ってねー」

プリズムリバー三姉妹に見送られながら、名残惜しそうに観客が帰って行く。

僕らもその流れに乗り、白玉楼へと戻っていく。

「詩音、楽しかったね」

「そうだね。やっぱり、これを機に僕も楽器を始めてみようかな」

未だライブの余韻が抜けきらないのか、はしゃぐように僕の周りを飛ぶフラン。

かくいう僕も、脳内で演奏が未だ響いている。

「あ、おかえりなさいフランさん、詩音様」

「あ、妖夢たっだいまー！」

「ただいま、妖夢」

門の前で妖夢が僕らを待っていた。

演奏が終わったのに合わせて、わざわざ迎えに出てきてくれたみたいだ。

「その様子だと、十分楽しんでこれたみたいですね」

「うん！ 妖夢もくればよかったのにー」

「そうだね。ここから聞こえるとはいっても、会場で聞くのとは違うだろうし」

それに、前までの妖夢では耳にしようともしなかったのではないかと思う。

「ええ、次の機会にでも行ってみようと思います」

「じゃあ、次は私と一緒にいこう？」

仲良く会話する二人に、僕と遠くから見ていた幽々子が微笑む。

お互いの顔を見て、苦笑に変わってしまったけどね。

いろいろな事に誘うフランに、戸惑いながらも応えて行く妖夢。

うん、良い友人関係だ。

笑いあう二人の後ろで、僕はそう頷いた。

## 第二十五章 似て非なる世界？

(後書き)

ここのフランちゃんは、実はかなり交友関係が広いです。閉じ込められていた分を取り戻すように、外で遊びまわっているのです。

お目付け役は美鈴。

咲レミ、パチエコア、メイフラがこの紅魔館のセット。

お互いにいるいる補充し合っているのです。

それにしても、予想よりだいが長くなっっていくなこの並行世界編。やっぱ、無計画はいかな・・・直さないけど。

## 第二十六章 似て非なる世界？

(前書き)

今回、いろいろと強引且つご都合主義が蔓延っています。自分お得意の論理の飛躍もあります、あと過程もいぶつ飛んでいた

り。そのあたり承諾して読んで頂けると幸いです。

あと「かぐもこ」です。



## 第二十六章 似て非なる世界？

「じゃあね妖夢。ちゃんと休みもとるんだよ？」

「うう………何度も言わなくても分かりますよ」

分からないからフランも言ってるんだけどね。

「一晩泊めて貰ってありがとう」

「いいのよ。妖夢も大分世話になったしね」

年長組は頭を下げ合う、親しき仲にも礼儀あり、だ。

出会って一日程度で親しき仲というのは、人の繋がり不思議だなと思う。

すぐ仲良くなれることもあれば、紫と幽香姉さんのように水と油な関係もある。

といっても、お互いに認め合ってるから喧嘩になるのだろうけどね。

紫も幽香姉さんも大妖怪………認められるだけの何かが無い奴は、その視界にすら入らないだろう、もしくはただの食料か。

「おいでフラン」

「はいお兄様」

胸元に飛びついてきたフランは、そのままそこから動くことしな  
い。

どつやら、今回は抱っこを希望のようだ。

腕をまわし………そこでふと悪戯心が芽生えて横抱きにする。

「お兄様！」

残念ながら驚かすことはできず、ただ喜ばせるだけになった……  
……なら良いか。

「あらあら、かつこいいお兄様がいて良いわね」

「そうですね、羨ましい限りです」

「いいでしょう」

失敗した………これ、僕がダメージ受けるだけじゃないか。

まさか遠坂家みたいに、僕もつつかりの呪いとか持ってないよね。  
………?

「ゴホン………じゃあ、もう行くね」

「妖夢ーまったねー！」

「はい、また今度！」

「さようならー」

元気に手を振り合うフランと妖夢に微笑む。

だけど、内心では鬱に入っている。

幽々子の視線が一瞬悲しいものを見る目になったからだ……  
・別れのあいさつにさようならを使ったのもわざとだろう。

つまり、幽々子は僕がそろそろ元の世界に帰るだろうと感付いた  
のだろう。

事実その通りだろうと思う……段々とあの空間の歪に引  
っ張られる感覚が強くなっている。

多分三日以内には修復は完了するだろう。

「お兄様、次はどこに行きたいー？」

「ひとまずは紅魔館に帰らないとだけど……次は、永遠  
亭に連れて行ってもらえないかな？」

内の動揺は一切外に出さずに告げる。

ここの輝夜と妹紅の不仲を少しでも和らげたい……残り  
少ない日数でどれだけ事が出来るかは分からないけど、これだけ  
はやっておきたい。

向こうの二人の仲の良さを一番知っている僕としては、たとえ違

う世界の二人だろうと憎しみの関係は持っていてほしくない。

僕のエゴの押し付けだけど……所詮人の行動はエゴに基づいているんだ、この程度の我儘を押し通したって良いだろう？

「兎でも見に行くの？」

「それも良いかもね」

鈴仙 優曇華院「イナバ」。

向こうの永遠亭にはまだ来ていない兎、その人となりを見ておくのも良いかもしれない。

「ただいまー、めーりん」

「ただいま美鈴」

「あ、おかえりなさい妹様、詩音さん」

今度はしっかりと起きていた美鈴にあいさつし、屋敷に入る。

「おかえりなさいませ妹様、詩音様」

超高速で飛んできた咲夜さんが、僕らに一礼する。

「あー、手間かけてるようでごめん」

「いえ、時間停止に頼りつきりているよりは、スキルアップに繋がりますのでお気になさらず」

考えたものだなと感心する。

時間停止は世界に働きかけるため、どうしても僕が効果内に入ってしまう。

だったら、範囲を自分だけに設定すればいい。

時間停止で自分だけ範囲にしても意味は無いけど、時間加速で自分だけを範囲にすれば疑似的な時間停止を行使できる。

といっても、空気抵抗やら突風やらがあるので、普通よりも速いと言ったレベルだろうけど。

時間を操る程度の能力は便利なもので、自分の時間を加速させても、寿命や成長のみを停止させたりできる。

実際、僕も蓬莱人になる前はやっていた事である。

「ならいいけど。あ、レミリアはどこにいるか分かる？」

「お嬢様は自室です、ご案内します」

「お兄様、私はまた出かける準備しておくねー」

丁度良くフランと別れ、レミリアに会いに行く。

「こちらになります。では、また後ほど」

去って行った咲夜さんを見送り、コンコンとノックをしてレミアに声をかける。

「レミア、少し報告があるんだけど」

ガタン、ガッ！

「……………」

僕の予想が正しければ、寝かけていたところで急に覚醒したせいでどこかにぶつけたのだろう………そういう音だった。

仕方ないので、しばらく中に入らないで待つ。

「……………まだいるのかしら詩音？ 居るのなら入っていいわ」

「入るよ」

扉を開けて入ると、レミアが優雅に座っている。

ぶつけたであろう机の角が欠けていたり、泣いた跡が無ければ力リスマだったろうに。

「それで、いつ帰ることになりそうな詩音？」

「おそらく三日以内だと思う」

レミリアが僕の言いたい事を聞いてきたけど、報告するよつなとなんてこれぐらいしかないから驚かない。

「そう……残念ね」

「こればかりはね」

お互いに苦虫を噛み潰したような表情になる。

おそらく二人して同じことを考えている……フランの事を。

「ねえ……ここに残ることはできないの？」

「無理だよ……向こうには家族や友人がいるから、捨てることはできない。それに、世界がそれを許すとは思えない」

フランも大切ではある、それでも僕の天秤が向こうの世界を指し示してしまうほどに、向こうには大切な人たちがいる。

「そう……すまないね、馬鹿な事を聞いたわ」

「いや、元は僕のせいだからいいよ」

お互いに黙り、空気が重くなる。

「はぁ……しっかりしなさい詩音。これからまたフランと出かけるのでしょうか？ そんな表情で私の妹を悲しませる気？」

「レミリアに言われたくは無いけど、それもそうだね」

パンツと自分の頬を打ち、いつもの僕を取り戻す。

「それじゃあ、僕は行くから」

「フランと楽しんできなさい」

姉の表情をしたレミリアに見送られ、僕は部屋を出た。

「えーと……ごめんねお兄様」

「迷った？」

現在迷いの竹林にフランと居るのだけど、意気揚々と先導していたフランが迷ってしまったようです。

僕自体も自分の庭で迷うなとかって感じなんだけど、世界が違うから何か靈気の流れが変わる様な事件があったか……あ、もしかしたら異変の時の術のせいかも。

「ん……誰か来るな」

「あ、もこーだ」

「フランドールに詩音？ 何してんだこんなところで？」



松葉杖を突いた青年を連れ、妹紅がやってきた。

「いや、永遠亭に行こうと思ったのだけど迷ってね」

「まったく何をやっているんだか。まあ、運が良かったな、私もこいつを連れて行くところだから一緒に来な」

呆れた視線で見られ、フランと二人顔を合わせて苦笑いする。

けが人の歩みに合わせるのも手間なので、浮遊させて運ぶ。

「どうもすいません」

「こっちの都合だから、特に気にしなくていいよ」

いきなり浮かされたのに驚かないあたり、中々度胸が据わっているね。

僕はフランと会話しながら妹紅に付いて行くけど、妹紅と青年はだんまりだ。

こっちの妹紅は、あまり人と関わりを持ちたくないみたいだ。

仕方ないか……向こうの妹紅と違って、ずっと一人で生きてきたのだろうから。

「到着したぞ」

「ありがとうございます」

「ありがとー」

「ありがとう妹紅」

永遠亭に到着した………良く考えると、妹紅もないと僕の目的は達成できない。

どうやって引き留めようかと思ったら、中から誰かが出てきた。

「………輝夜」

「………妹紅」

丁度良く輝夜が玄関から出て来てくれた。

一瞬で険悪な空気が妹紅から発せられる。

そういえば、東方では妹紅が輝夜に逆恨みをしていたのだったか。

藤原様が蓬莱の玉の枝を作らせて、それを作った職人に支払いを迫られ偽物だとばれ、周囲の人間に嘲られて憤死。

それを輝夜のせいと逆恨みして、不老不死の薬を強奪して輝夜を追った………だったか。

藤原様を知る自分としては、他の求婚者を見て絶対に自分が成功せねばと作らせたのだろうと思う。

慌て過ぎて支払いを忘れてばれて、そんなミスをした自分が許せ

ず憤死。

向こうでは僕が食生活に口を出したから大丈夫だったろうけど、元の食生活だったなら高血圧で心臓麻痺とかかもしれない。

藤原様の妹紅への溺愛具合と僕がいない事を考えれば、妹紅がフアザコンであったことは想像に難くなく。

藤原様の輝夜への愛情を真に理解していなければ、先の表層だけの話で輝夜を逆恨みするだろうなあ。。。。。

。。。。これを信じさせられれば、二人の仲も少しは改善するのではないか？

「じくろつさま」

「ちっ。。。。。」

嘲るように言う輝夜に舌打ちする妹紅。

かなり仲が悪いように見える。。。。ただ、輝夜の態度はおそらく演技。

僕が輝夜から見たのは愛情。。。。愛おしい子を護る母のような心。

向こうの妹紅だったら一発で見抜くであろうそれも、こっちの妹紅では見抜けない。。。。憎もうとする心がそれを邪魔しているのか？

対する妹紅からは濃厚な熟成された憎悪を感じる……が、どこかそうあるうとしていっているようにも見える。

予想では、元は逆恨みということと年月が、妹紅を冷静にさせてしまったのかと思う。

不老不死の厄介なところは、心までがそうなるわけでないと言う事である……つまりは生きる目的が必要なのだ。

最初は本当に憎悪し、長い年月の中でそれを増幅させていたのだろう……その年月のせいでそれが消えてしまったのだろうが。

逆恨みである事に目をそむけていても、永遠の時から逃げ切ることはできない。

永遠の時にそれを直視させられ、それが無くなった時に残る物が無ければ、それを維持し続けるしかないのだから。

「フラン……この二人に話があるから、その男と先に入らせてもらいなさい」

「……分かったわお兄様。いくわよ人間」

「は、はい！」

フランと男を先に永遠亭に入れ、二人に向きあう。

ここに来る前に練っていた計画は、先の事情から捨てる。

やるべきことは、堅く絡まった心を解きほぐすことだから。

「何かしら？ 私たちに話があるそうだけど」

「詩音。あとで話を聞くから、もう行ってもいいか？」

「駄目だ……妹紅と輝夜二人一緒になければ意味が無い」

妹紅と輝夜は僕をいぶかしむ様に見る。

「妹紅……そんなに輝夜が憎いのか？」

まずは妹紅に問うた。

「赤の他人が首を突っ込むような「赤の他人じゃない」……  
・どうということだ？」

でたらめを言ったら容赦しないぞと、鋭い目で僕を見る妹紅。

「このことよく似た世界の、という枕詞が付くけど、僕は君たちの  
夫なのだから」

「ふざけてんのか？」

「……」

妹紅は不快だと僕にありありと示し、輝夜は静観する。

そんな二人に、まずは分かりやすい関係性を見せつける。

右手で剣を取り出し、袖をまくった左手を斬り落とす。

「おい、何を………んな!？」

「………不老不死。あなたも蓬萊の薬を飲んだのね？」

「そうだよ」

斬った左腕が瞬間再構成され、落ちた腕がそのまま残る………  
・蓬萊人は核となる位置から順に再生するため、斬り落とされた部位などはそのまま残るのだ。

が、これだけだと逃げてきた月人でもあり得るから、多分あつて  
いるだろう事を言う。

「妹紅のその髪を束ねている布………その元は、祭りで服  
福の主人から買った物だろう？」

「な、なんで………」

ふう………合つてて良かった。

「元いた場所ではそれは僕が買ってあげたものだったけど………  
・ここでは大方、藤原様に祭りに行く事をねだつて、その時に買  
ってもらったんだろうね」

「どうなの妹紅？」

「あ、合ってる………」

大分僕の方と外れているとはいえ、妹紅ことだからこの程度の予想はできる。

他にも屋敷の間取り、僕がいなくても起こったであろうことを次々と口にすることで信用を得た。

「……………それで、私を妹紅が憎悪することに何を言いたいの？」

「簡単な事だよ……………憎しみに依る必要はもうないだろうと言っただけだよ」

妹紅を護るように前に出た輝夜に、僕の意味を伝えた。

それを聞いた輝夜は、険しかった表情を一転して肩の荷が下りたかのような顔をした。

「妹紅。妹紅の憎しみが逆恨みだとは、もう分かっているんだろう？」

「……………分かってる」

やっぱりか。

「だけど、それが無くなると……………死んでしまうから、捨てられないんだろう？」

「……………そうだ……………そうなんだよ！」

膝を折り、泣きだす妹紅。

すぐに抱きしめて上げたいが、こっちの世界では僕の役割で無い・  
・・・それは、最もこの妹紅を愛している人の役目だ。

輝夜に目配せしてから、僕は永遠亭の中に入る。

後ろ目で輝夜が妹紅を抱きしめるのを確認して扉を閉じて、廊下  
で待機していた永琳と頷き合う。

しばらくの間、妹紅の鳴き声が竹林に響き渡った。



## 第二十六章 似て非なる世界？

(後書き)

筆が進むままに書いていたら、ちょっと良く分からない文になってしまいました。

いろいろと目をつぶって頂けると幸いです。

でも、大方自分なりに妹紅と輝夜の関係を表現できたかな？  
と  
思います。

以前にどこかで書いたと思いますが、東方でドロドロの憎しみって  
いうのはなんか違うな、嫌だなんて感じなのです。

東方は祭りであり、喧嘩異変は華である……異論は認めます！  
あと、妹紅のリボンの話は、八章短編集のその三からです。

## 第二十七章 似て非なる世界？

(前書き)

いつも通り遅くなつてすいません。

なかなか、筆が進まなくて困つたものです………毎回こんなこと書いてる気がする。

それにしても地震怖いですねー。

自分のところは揺れはしましたけど、そこまで酷くなかつたので助かりました。

日本海側に津波起きなくてよかつたです………新潟はだいたい海抜0m以下ですから、完璧に沈んでしまう。

被災地の、一刻も早い復興を願います。

あと、原発の一刻も早い修復、復旧も。

## 第二十七章 似て非なる世界？

さて、ここで問題です。

憎しみと愛情は表裏一体と言いますが、憎しみが無理やり思いこんでいただけと判明しました。

それを自覚し泣き崩れたところを、そっと抱きしめてくれる相手がいたらどうなるでしょう？

「かぐやー」

「もう、妹紅ったら」

答えはこの通り。

輝夜にぴったり張り付いて離れない妹紅に、仕方ないなあと微笑む輝夜。

二人とも同じくらいの外見年齢なのに、母娘と言われれば簡単に納得してしまうだろう。

「え、え、えー？」

「何呆けているのうどんげ？ お客様がいらっしやるのだから、きりきり働きなさいな」

「お師匠様ー、今日はごちそうですかー？」

永琳に純粋な子供のように話しかけるてゐに嘖き出しそうになる。

猫を被った兎とはこれいかに………微笑ましく輝夜と妹紅を見ながら、そんなどうでもいい事を考える。

「えー？ 妹紅さんと姫様がべったりで親子でほんわかで……  
えー？」

「邪魔ようどんげ、隅でも言っただなさい」

「お客さんたち、お茶どうぞー」

てゐが持ってきたお茶を飲む。

「フランは何も聞かないんだね？」

「ん………お兄様がどうにかしたなら、妥当かと思って  
だから」

随分信頼………というか、評価されてるみたいだ。

「それに、仲がいいに越したことないでしょ？」

「それもそうだね」

再びお茶を啜る………平和だ。

「は、これは新たな異変！？ どのどいつが仕組んだのか知らないけど、姫様達には手をださせはしないわ！」

「うどんげ、馬鹿やってる暇があるなら患者を人里に送ってきなさい」

さつきから混乱してるのが鈴仙 優曇華院 イナバ。

現代の高校の女子制服みたいなものを着た、兎の妖獣だ。

僕らが客として入った時は礼儀正しいいい子だったのだけど、輝夜と妹紅があの様子で入ってきてからあの様子である。

ただ、口や表情はいろいろ暴走しているけど、永琳からの命令は体が勝手に動くらしい。

向こうののめに対するお仕置きを思い出せば、そうなるだろうなとは思う。

原色とか、自然界にはあり得ない色の薬を思い出して、背筋を震わせる。

「お兄様、調子悪いの？」

「い、いや、気にしないでいいよ」

フランに心配されるが、気にしなくていいとしか言えない。

あれはフランが知らなくていいものだから。

しばらくして、料理が運び込まれて来始めたところに、かなり慌てたような足音が聞こえる。

大きな音を立てて襖が開き、慧音と鈴仙が現れる。

「ほら！ これって異変ですよね!？」

「妹紅!? 何があつたんだ妹紅!？」

「どうかしたのか慧音？」

信じられない物を見たように慌てる慧音に、輝夜に抱きついたまま冷静に応える妹紅。

向こうの輝夜と妹紅を知っている身としては、輝夜と妹紅の仲が良いのは当然なだけで、こっちの世界では異変並みの事件らしい。

「妹紅。私たちがいきなり仲良くなっているのを見れば、親しい人から驚かれるのも当然でしょう?」

「ああ、なるほど。こっちの方が自然だっ感じてたから、気付かなかった」

「うどんげ、ちょっとこっち来なさい」

良く分かっていなかった妹紅に、輝夜が教える。

永琳に連れて行かれた鈴仙は見なかったことにする。

妹紅と輝夜が慧音に事の顛末を話し、慧音も納得したのか泣きながら妹紅に抱きついている。

「よかつたな、もこー……………ぐすっ」

「あー、大げさだよ慧音」

「けーねせんせー……………自分の事じゃないのに」

困った顔をしながらも、うれしそうに慧音を落ちつかせる妹紅。

フランは呆れつつも、微笑んでいる。

ふと輝夜と目が合い、お互いに苦笑した。

なんとか慧音が泣きやんだのだが、涙で顔が真っ赤になってしまっていた。

「あーあ、こんなに真っ赤になってる。慧音、顔洗って来な」

「う、分かった」

スンと鼻を鳴らしながら、ゆっくりと慧音が部屋を出て行く。

「お待たせしました。お食事の準備が整いましたわ」

入れ違いに永琳が来て、机に料理を置いてから言った。

1、2、3……………7。

1、2、3・・・やっぱり7だ。

何の数かと言うと、机に置かれている箸や皿のセット数である。

僕<sup>1</sup>、フラン<sup>2</sup>、輝夜<sup>3</sup>、妹紅<sup>4</sup>、慧音<sup>5</sup>、永琳<sup>6</sup>、てゐ<sup>7</sup>、鈴仙<sup>8</sup>と、人数は8人のはずだけど。

輝夜も疑問に思ったのか、永琳に聞く。

「ねえ、永琳。慧音が来て8人分必要はずなのだけど・・・」

「大丈夫ですわ姫様・・・うどんげの調子が悪いので、食事はいららないですから」

この場にいたフラン以外の顔が引きつった。

フランは良く分からないと言った顔をしている・・・フランはそのまま良い子に育ってくれ。

「すまない、待たせたか・・・って、皆どうしたんだ？」

戻ってきた慧音が、僕らの様子に首を傾げるのだった。



「はぁ・・・・・・・・・・」

溜息が出る。

今いるのは永遠亭の縁側、いつも自分が酒を飲んでいた場所だ。

今日は止まるつもりはなかったのだけど、輝夜や妹紅、永琳に引き留められてしまった。

フ란の着替えなどは、こうなると予想していた咲夜さんが持ってきてくれたので助かった。

フ란を寝かしつけ（幽閉されている時にいつでも寝れるようになったらしい）、今はこうして鬱に沈んでいる訳だ。

「ずっと目をそむけてたわけだけど・・・・・・・・みんな心配してるよなぁ」

こうして家族に長く触れ合ってしまうと、元の世界の家族の事を意識せざるを得ない。

輝夜に妹紅は泣いてるかな？

それとも、僕を信じて気丈に待っていてくれるかな？

紫や幽香姉さんが責められてないといいけど・・・・・・・・僕にとって彼女たちが大切なように、僕の事も大切に思っていてくれたからきつと自分を責めてしまっている。

永琳はきつとどうにかする方法を考えているんだろうな。

家族と友人の心の負担を考えると、胃が縮むような思いが駆け巡る。

「……………っ!？」

ずっと、酒瓶が横から差し出された。

「永琳……………さん」

「永琳でいいですよ、向こうでもそう呼んでいたのじゃない?」  
感傷に浸りすぎていて、永琳が近づいていたのに気が付かなかった。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

にこりと笑って永琳が杯を僕に渡し、そこに先ほどの酒を注いでくれる。

「……………ん」

杯を傾け、熱い液体が喉を通る。

気の向くままに飲んで、永琳に差しだすと何も言わずに注いでくれる。

ある程度酔いが回ってきたところに、僕はぼつりと口を開く。

「情けない話だけども……たった数日離れただけなのに、家に帰りたくて仕方が無いんだ」

「……………」

こっちに来て今まで明るく振舞ってきたけど、実際は内面でホムシツク……………いい年して、情けないにもほどがある。

「多分帰れる……………そう分かつてはいるんだけど、それは多分だ。ほとんど確信でも、確定した訳ではないんだ」

帰れるというのは僕の直感や感覚だけの話……………直感の性能を知っていても、事が世界に関することだから安心できない。

しかも、この直感が僕の妄想や願望である事も捨てきれない……………スキルまでになった直感を信じられないと言うことは、自分を信用できないと言う事。

「強くなった、僕は強くなったはずなんだ。なのに、僕はいつも人を置いて行ってしまう……………皆と離れるのが不安なんだ」

皆を心配と偽って、皆に何かあって置いて行かれるのが嫌なだけなんだ。

心底そんな弱い自分が嫌になる。

英霊の力を得て、肉体は強くなった。

英霊の経験を得て、精神は強くなった。

「ただ、英霊の人格を取り込まなかった僕は、人として強くはなれなかった。」

「誰かと居られないと弱い、本当に弱い人でしかない。」

「詩音さん、失礼します」

永琳の声と共に、柔らかい腕の中に僕は包まれた。

「詩音さん、あなたは恐れて良いのです。いえ………明確な意思ある者なら、妖怪、人間と種族問わずにそれを恐れるものです」

「………うん」

妖怪、人間、共にあり方に違いはあれど、僕のような恐れは常に奥底に持っている。

「ですからあなたは弱くてもいいのです、ですが強くなければいけません」

「………うん」

だが人は獣のように本能のまま恐れるのではなく、人として理性の鎧で心を強くする。

永琳の言葉は、心ではなくその鎧を修復してくれる。

「私もそうなのですが、頭で考えすぎているのです。それも重

要ですが、幾ら頭が回ろうとも未来の事を確実に知ることはできません」

「そうだね」

頭が回りすぎると先の事を考え過ぎて、自分で自分を不安に沈めてしまう。

「妖精のようにとまでは言いませんが、少しは何も考えない事も重要ですよ」

私もなかなかできませんが、と苦笑する永琳。

「たまには行き当たりばったりでもいいか」

「そういつことです」

なんだか、肩の荷が下りた気がする。

また永琳が注いでくれた酒を飲むと、さっきよりも清々しく飲めた。

「あら、もう行ってしまっの？　もう一日ぐらい泊まって行けばいいの？」

「そうだよ、もう少しぐらい居てもいいんじゃないか？」

「ありがたいけど、他の場所にも行ってみたいからね」

朝食を終えて帰る旨を告げると、輝夜達から引き留められた。

僕もまだ居たいという気持ちがあるけど、残り時間も少ない上に今行かないと動けなくなりそうだったので行くことにした。

「私と輝夜の事の礼もできてないっていうのに」

「手厚く歓迎してくれて嬉しかったよ」

「それだけじゃ気が済まないのよ、妹紅も私も」

妹紅と輝夜が礼をしたって言うけど、僕がやりたくてやったことだし、昨日の歓迎で十分嬉しかった。

「まあ妹紅、そう詩音を困らせてやるな。気持ちを押し付けるのでは礼にはならないぞ」

「う…………それは、分かってるけど」

慧音が妹紅を諭して、妹紅も少し引いてくれた。

「お兄様に何か上げれば？」

「そうね、それがいいか」

フランの提案に、輝夜も頷く。

うん、物を貰う程度ならいいか。

「なら姫様、こつ言つのはどうでしょ？」

「何かしらてゐる？」

ひそひそと、う詐欺が輝夜に耳打ちする……嫌な予感がするけど、変な物なら輝夜が却下するだろうし大丈夫だろう。

「なるほど、それは良いわね……妹紅も」

「あー、それなら、まあ……吝かではない」

顔を赤くする妹紅。

なんだか雲行きが怪しくなったが、僕は輝夜と妹紅を信じる。

「永琳、お土産を持ってきてあげなさい」

「はい、姫様」

「……ふう」

良かった、永琳に取りに行かせるってことは普通のお土産だろう。

直感が警報を鳴らしていたのに、流してしまった時点である事実は決定していたのだろう。

「姫様、妹紅さん、お持ちしました」

永琳から、輝夜と妹紅が高そうな風呂敷包みを受け取り、それを  
持って僕らの前にやってくる。

「私と妹紅の間を取り持つてくれて、ありがとうございます」

「正直、これだけじゃ感謝を表しきれないけど、ありがとうございます」

そう言っ二人で差しだしてきた風呂敷を受けとり、礼を言おう  
として

「僕がしたくてやったことだから、そこまで気に……！！  
？」

左右の頬に柔らかい感触を受けた。

「わー、二人とも大胆」

「こ、こら！ フランが見るのはまだ早い！」

「てゐ、今日はニンジン多めにしてあげるわ」

「ありがとうございます、ししよー」

二人にキスされて少し呆然としていたが、すぐに元に戻る……  
……さすがに慣れているので。

「十分感謝の気持ちが伝わってきたよ、ありがとうございます」

「……………」



あらら、二人して真つ赤になっちゃって。

久しく見ていなかった輝夜と妹紅の初々しさに、自然と頬が緩むのも仕方ないだろう。

「それじゃあ、さようなら」

「さようならー」

「……………さ、さようなら」

「一応、帰り道はお気をつけください」

「あっ！ 落とし穴とかも有るんで気をつけてねー！ ってなんでつかむの慧音さん」

「てゐ、悪戯のお仕置きだ」

ゴソッと鈍い音を背に、僕は永遠亭を後にした。

## 第二十七章 似て非なる世界？

(後書き)

今回は詩音の独白がメインでした。

行き当たりばったりで書いているので、若干統合性が無い気もしますが、各自で補完してくれると幸いです。

久しぶりに初々しい輝夜と妹紅書いたし……初々しくなくなっではいるけど、十夜夫妻らは新婚のようないちやつきです。慣れている人以外は糖尿病に注意ですw

あと、八裂き兎さんの企画に参加して、魔理沙の弾幕戦の短編を書きました。

4月1日投稿予定ですので、楽しみにしてください。

## 第二十八章 似て非なる世界？

(前書き)

ゆうかりん可愛いよゆうかりん。

幽香は、結構面倒見がいいお姉さんだと思う。

USC？ それは幽香の側面にしかすぎないのさ！

## 第二十八章 似て非なる世界？

「ん、この香りは……花？」

永遠亭から紅魔館へと帰る最中に、強い花の香りを感じる。

「んー、良い香り。これは多分、幽香が近くにいるからだと思うわお兄様。幽香はフラワーマスターって呼ばれてるの」

「それで、この辺りの花の生気が強いのか。少し探してみようか」

こっちの幽香姉さんにも会っておきたかったしね。

幽香姉さんはいつも幻想郷中の花の元を渡り歩いているから、中々捕まりにくいんだよね。

「お、あそこか」

魔法の森のそばに中規模の花畑が見え、そこに見覚えのある日傘を差した幽香姉さんが居た。

「こんにちわ、幽香」

「こんにちわ」

「こんにちわ、フランに……人間？」

フランと僕を見て訝しがる幽香姉さん。

おそらく、妖怪と人間が一緒にいる事を疑問に思ったのだろう。

力ある人間というのは限られているから、幻想郷内ではと出はほぼ無い。

となると外から来たと考えるだろうが、幻想と遠いはずの外来人はさらにあり得ない。

こういう訳で、いきなり現れた実力ある人間を訝しがるのも当然である。

「一応人間の十夜 詩音です。詩音って呼んでくれると嬉しいかな」

「風見 幽香よ。こっちも幽香で構わないわ」

そう言って微笑む幽香姉さん。

その笑顔は、幽香姉さんが花の妖怪だと理解できるような柔らかいものである。

「え………えー？」

「どうしたのフラン？」

パクパクと口を開閉させ、信じられないものを見たような顔をするフラン。

「ゆ、幽香がこんな表情するなんて………!?!?」

「失礼ね。私だって気分が良ければ笑うわよ」

フランが何を言いたいのかが良く分からない。

幽香姉さんはいつもこんな感じだったと思うんだけど……  
どういう事？

「笑うって……嗜虐心がありありと見えるような笑いし  
かないもん！」

「……まあ、否定はしないわ」

「否定はしないんだ。といっても大方、幽香姉さんの逆鱗に触れ  
たりした奴ばっかなんだろうけど」

あるいは、体質的に反りが合わないような相手とか……  
それが原因でこっちに飛んできたからなあ。

「幽香……姉さん？」

「あ……」

しまった、こっちではそう呼ぶように言われてないのに。

逆鱗に触れてしまったのか、フルフルと震える幽香姉さん。

悪いのはこっちなので、一発は覚悟する……一回は死ぬ  
かな。

「い、いいわねそれ……詩音、もう一度幽香姉さんって呼んでくれるかしら？」

「ゆ、幽香姉さん？」

良かった、機嫌を損ねた訳ではないようだ。

「お兄様……なんか幽香が怖い」

「え……そ、そう？」

や、やっぱり怒ってるのか？

「ふう……落ちつきなさい私、らしくないわよ」

大きく息を吐いて、凜とした雰囲気になる幽香姉さん。

「そういうことだから、幽香姉さんでいいわ」

「良く分からないけど、それでいいのならそう呼ばせてもらおうよ」

僕も呼びなれたそちらの方が助かるが……残念ながらこ  
っちの幽香姉さんをそう呼ぶ機会は少ないだろう。

またネガティブに入りそうだったけど、フランの一言でそれは回  
避された。

「お兄様のお姉様……幽香お姉様、家の馬鹿姉よりいい  
かも」

うん……皆のレミリアの扱って結構酷いよね。

レミリアだって頑張ってカリスマ出そうとしてるんだから、あんまり虐めるのも可哀想けどなあ。

「くしゅん!？」

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

スンと鼻を鳴らして、鼻のむず痒さを抑えるレミリア。

「誰かが私の噂をしているみたいだな」

「はあ、そうなのですか」

咲夜が差しだしたティッシュで鼻をかむ。

「大方、人里の人間達が私を恐れ崇めているのだろうよ」

「はあ……そうですか？（絶対それは無いと思いますけど）」

胸を張るレミリアを、微笑ましく見る咲夜であった。

なんか電波で現在のレミリアが見えた気がする……  
実際にありそうだから嫌だ。



同時に僕、フラン、幽香姉さんが微妙な表情になる。

「あー、皆も?」

「うん……駄目な意味でお姉様は皆に理解されてるね」

「あれがカリスマだったのは……吸血鬼異変と紅霧異変の二つだけじゃない?」

レミリア……どうかそのまま純粹なままでいてくれ。

こんな扱いで、レミリアがいつかグレないかを心配する僕。

やることなす事空回りしてカリスマから遠ざかるレミリアだけど、本当にいい子なのだから……!!

「くっ……」

なんだか不憫で泣けてきた。

思わず目頭を押さえる。

「お兄様……ある意味それは酷いと思う」

「そうね、どうあがいても無駄だろうって意味になるわね……  
……まあ、同感なのだけど」

「……それもそうだね」

少し悪ノリしすぎた、ごめんレミリア。

「日差しも強くなってきてフランには辛いでしょうから、私の家に来なさいな」

「お願い、お兄様に直射日光は遮ってもらってるけど、明るくて少し消耗してる……」

「気付かなくてごめんねフラン」

目を遮っている術を弄り、範囲を広くしてフランを覆う。

それを背に回してフランを背負えば、僕と術が陰になって日差し  
の大半がフランに当たらなくなる。

「良いお兄様してるのね」

「どうかな……」

幽香姉さんの言葉に、自重気味に顔を歪める。

永琳に言われて考え過ぎるのを止めようとは思っているけど、数  
百年積み重なってきた思考ルーチンはなかなか変えられないものだ。

「むー。お兄様は変なところで自身が無いんだよね。もっと昔か  
ら一緒にいてほしいぐらい良いお兄様なのに」

「フランがそう言ってくれるなら……まあ、そうなの  
かな」

自嘲を止め、素直にフランの言葉を受け取る。

永琳のおかげで、少しはよくなったのかもしれないね。

「話もまとまったみたいだし、行きましようか」

「はい」

そう言って浮く幽香姉さんに続いて飛ぶ。

フワフワと飛び、幽香姉さんの家に着く。

向こうでは幽香姉さんが永遠亭に来るばかりだったので、幽香姉さんの家は久々である。

やはり年月でかなりの違いがあって、特筆するべきは温室が増えている事かな。

「どうかしたの詩音？」

「いや、温室なんて珍しいなと思って」

「お兄様は見えないみたいだけど、紅魔館にもあるよ」

幻想郷の文化レベルでは、こんな温室を作るのは難しいと思うの  
だけ。

「あそこの花は、外の世界で人工的に生み出されて忘れられた種  
よ」

「紅魔館の温室の花も、幽香からその花をわけてもらっただよ」  
「なるほど……外で育てるには弱い種なんだね？」

幽香姉さんは花を強くしたり出来るけど、基本的にはそのままの花を育てるようにしている。

その在り方を力で強引に捻じ曲げるのは嫌だから、温室を用意したのか。

「あと、温室は河童に造らせたわ。あれの技術力は見事なものね」  
知ってはいたけど、凄いな河童。

向こうの河童はまだそこまでの技術は無いのだけど……いつか産業革命でも起きるのかな。

降りた幽香姉さんに続いて、家に入る。

「今お茶を入れてくるから、座って楽に待っててちょうだい」

「うん、そうさせてもらっよ」

「はい！」

椅子に座り、フランがその上に座る。

「やっぱり幽香のお花は、鉢植えでも生き生きしてるね」

「うん、幽香姉さんは花の為に手間暇を惜しまないからだね」

幾ら花の妖怪とはいえ、花が本当に好きでないとここまではいかない。

幽香姉さんにとって花は同族のようなものだけど、人が赤の他人に興味を抱かないように、同族を気にも留めないという事もあり得るはずなのだから。

「クッキーどうぞ。紅茶はお湯を沸かしているから少し待ってね」

「わざわざありがとう幽香姉さん」

「ありがとうー！　そして、いただきまーす」

やっぱりフランは甘いものに目が無いなあ。

小動物のようにクッキーを食べるフランに、僕と幽香姉さんの顔がゆるむ。

「うん、おいしい！」

「そう、よかった。昨日作ったのだけど、一人では食べきれなくて」

「うーん、惜しかったな。昨日幽香姉さんに会えていれば、焼き立てが食べられたのか」

といっても、焼き立てではないけど美味しい物は美味しい。

しばらく幽香姉さん手作りクッキーに舌鼓を打っていると、幽香

姉さんが席を立つ。

少し待つと、洒落たポットとカップを載せたトレイを持ってきた。

「あのメイドと比べると、それほどおいしくは無いだろうけど我慢してね」

「んー……確かに咲夜よりは上手じゃないけど、幽香の紅茶も十分美味しいよ」

フランがそう言うが、寧ろ咲夜さんが飛びぬけすぎているだけだと思っ。

料理に家事、屋敷の修理に侵入者退治となんでもござれ。

まさにパーフェクトメイド、咲夜さんに出来ない事ってあるのだろうか？

「おいしく淹れられていたのなら良かったわ。……と」  
るで、詩音は何も言ってくれないのかしら」

「ん、言いたいことはフランが言ってくれたから、問題無いと思っただけど？」

素でそんな事を言った僕に、ピンツと指を立てて可愛らしく「めっ！」っと言う幽香姉さん。

「それでも言われて喜ぶのが女心よ」

「そっだよーお兄様」

「ははは………」

フランにまで駄目だしされてしまった。

「一応僕の周りは女性ばかりだから、女性への対応は慣れているつもりだったのだけだ。」

「はい、何か言うことは？」

「紅茶美味しかったよ幽香姉さん」

腰に手を当て、僕の言葉にうんうんと頷く幽香姉さん。

「うん、それでよろしい」

「それでよろしいー！」

僕から降りて振り向いたフランも、便乗して同じポーズをとる……可愛いなあ。

「名残惜しいけど、ここでさようならね」

魔法の森上空でそう告げる幽香姉さん。

お互いの予定もあったので昼前にお茶会は終わり、途中まで一緒に飛んできた。

幽香姉さんは幻想郷の花の世話で、僕は他の場所にも行きたいから。

「そうそう、最後に一つプレゼントをあげるわ」

「うん？」

何を貰えるのだろうかと思っていたら、幽香姉さんがずっと近寄ってきて僕の額に唇を当てた。

「ふふっ、詩音はまだまだいい男になれるから、しっかりと男を磨きなさいな」

「あー………精進するよ」

「な、な、な、何してんの幽香ー！？ お兄様は渡さないんだから！」

幽香から守るように抱きついてくるフランを撫でながら、幽香姉さんと苦笑し合う。

「それじゃあ、さようなら」

「うん、さようなら」

「フーー!!」

幽香姉さんは花畑の方へふわわりと花弁のように飛び、僕は紅魔館へ猫のように威嚇するフランを抱えながら飛ぶ。



最後にお互い手を一振りして、幽香姉さんとの邂逅を終えたのだ  
った。

## 第二十八章 似て非なる世界？

(後書き)

フラン可愛いよフラン。

ついに残り三日のうちの半分まで来てしまった……。

自分で書いててあれだけど、最後の時のフランを思つと胃が痛いです。

な、何とかして救済策を考えているので、皆さんもこらえて下さいね？

## 第二十九章 似て非なる世界？

(前書き)

5か月ぶりの流魂記更新。

皆さん、大変お待たせしました、すいません！

いつもより若干短めですが、スランプ気味の今の精一杯ですので、  
容赦を。

## 第二十九章 似て非なる世界？

「さて、次はどこに行こうかな」

「んー」

僕の呟きに、うとうとしながらフランが喉を鳴らす。

幽香姉さんの家から帰ってきた僕とフランは、昼食を取った後に空調の効いた部屋でゆったりとしていた。

ちなみに紅魔館の空調は、パチュリーが魔法を仕込んだようだ。

七曜……日月火水木金土の魔法と、大図書館によって裏付けされた知識があるなら納得である。

肝心の大図書館は、魔導書類に干渉する可能性があるから我慢するしかないらしい（咲夜談）

閑話休題。

それで、今はゆったりしている訳なんだけど、このままでもいいかなと思う自分がある。

無理に出かけて思い出作りをするのは、なんだか違うと思うしね。

といっても、フランがまた案内してくれる時の為に、次の目的地を考えている。

今まで行ったのは……人里、白玉楼、永遠亭だね。

となると、幻想郷の主要な場所で行ってないのは……博麗神社、守矢神社、命蓮寺かな？

地霊殿は残りの時間を考えると少し遠いだろうし。

まあ、その時は転移で帰ればいいんだけど……さて、どこに行こうか。

「僕という要素の無い幻想郷……全部見た回りたいんだけどなあ……」

「んー……れーばていんー」

うとうとから、浅く寝てしまったフランを見ながら、そう呟く。

ただ、残り時間も少ないので、そこは仕方が無い。

「博麗神社……なんか、行っても特に何もなく帰ることになりそうだ……」

「わきみこー……おにみこー……かねのもうじゃー」

フランの寝言に吹きそうになりつつも、体を揺らす事もなく抑えた。

「守矢神社……こっちの諏訪子にも会っておこうかな……早苗にも会いたいしね」

僕の娘だった早苗ではないけど、少し感傷に浸るぐらいなら許してもらえるだろう。

「んー……現人神がどうかしたのー？」

「いや、次は守矢神社に連れて行ってもらおうかなと思ってね」

流れ出る涙を擦るように拭いながら見上げてくるフランに、独り言の趣旨について答える。

ついでにフランの手を抑えて、優しくハンカチで涙を拭きとってあげる。

「ん、ありがとお兄様」

「どういたしまして」

軽く笑み浮かべながら応える。

涼しく空調が効いているのに、仄かに空気が暖かくなった気がする。

「それで、守矢神社に行きたいんだっけ？」

「うん。そういう事だから、また案内お願いするよ」

そう言って、フランを抱きかかえたまま立ち上がり、部屋を出る。

「妹様、詩音様、お出かけですか？」

部屋を出てすぐに咲夜と遭遇した。

咲夜の手には、バスケットと鞆が握られている。

「うん！ 今度は守矢神社だつて」

「そういう訳なんだけど……それは？」

目的地を告げた後、明らかに外出を意識しているバスケットと鞆を指して聞く。

「そろそろお出かけになるころではないかと思ひまして、お菓子とお出かけ道具をお持ちしました」

そう言つて、二つを掲げる咲夜さん。

僕はフランを一旦降ろして、その荷物を受け取つて王の財宝に仕舞つ。

「わざわざありがとう。それと、思い付きで動いてばかりでごめん」

「いえ、お嬢様から命じられた仕事ですし、妹様が楽しそうですので、そのくらいの苦勞は毛玉1匹にもなりません」

にこりと、業務用ではない笑みを浮かべる咲夜さん。

その笑顔に、フランは照れ臭そうに帽子を深く被り直す。

「咲夜……いつもありがとう」

「はい妹様、どういたしまして」

さらに気恥しくなったのが、フランは僕の後ろに「テコテコ」と隠れてしまった。

「くくっ……」

「ふふっ……」

僕と咲夜さん、二人して笑いあう。

「お、お兄様、もう行こ！」

「はいはい。それじゃあ咲夜さん、行ってきます」

「行ってらしゃいませ」

咲夜さんの見送りを受け、僕たちは守矢神社へと向かうのだった。

「そのの二人、止まりなさい！」

山に入ってしばらくしたところで、どこからともなく制止の声をかけられた



「お兄様、ただの犬だから無視しても問題ないよ」

「……そうなんだ」

かけられたのだけど、フランに促されるままに先に進む。

「ちょ……待ちなさい！」

本気で飛んでいなかった僕らの前に、どうにか追いついた白狼天狗が現れる。

「はあ……私とお兄様はあなたにかまってるほどの暇は無いの、天狗のメンツなんかあなたが食べてなさい」

「犬ではないです！ 狼です！」

「あ、文句言うのそこなんだ……」

それにしてもフラン毒舌である。

レミリア弄りからも分かるように、結構Sの気があるみたいだ……  
まあ、僕にそれが向かないなら問題ないね、見ている分には楽しいし。

ああ、そう言えばイリヤもそういうところあったなあ……。

「……あなた達は天狗の領域を侵そうとしています、即刻立ち去りなさい！」

「別に天狗の領域なんかに興味ないわ、私たちは山上の神社に行

きたいだけ」

むっとした顔になる白狼天狗。

自分たちの治める場所なんてまるで興味無いと、ああも言われれば腹に来るのも仕方は無いか。

「ならば参拝用の道があるでしょう！」

「嫌よめんどくさい。どうして天狗に気を使って遠回りしなくちゃいけないのよ」

今回はこつちが悪いと思うけど……面白そうだし黙ってよう。

「そうまで言うのなら仕方ありません……この犬走 椀が、ここであなた達を追い返させてもらいます！」

「あら、たかが下つ端天狗にそれができるのかしら？ ……お兄様、少し遊んでくるね」

犬走への挑発の後、小声で遊んでくると言うフラン。

その笑顔は、新しいおもちゃを手に入れた子供そのものである……「ご愁傷さま、犬走。」

ピチューンという音と共に、一匹の忠犬が森へと墜ちていったのはすぐのことだった。

犬走を撃ち落としたフランを背に乗せ、再び守矢神社を目指す僕が、再び誰かが前に立ちふさがる。

「厄いわ、実に厄いわ」

そんな事を言いながら、赤いドレスの女性がくるくる回っている。女性の周囲には、明らかによくないであろう黒い霧が集まっている。

その特徴に、前世の記憶の鍵山 雛という厄神様を思い出す。

ちなみに犬走は典型的な白狼天狗なので、特徴が無くて分からなかった。

「何がそんなに厄いんだい？」

「それはあなた。大分厄を溜めこんでいるわ……最近、悪い事でも起こったりしていない？」

「お兄様に、そんな不幸は無かったと思うけど……あ、幻想入りかな？」

気になった事を聞いたら、かなり不吉な返答が来た。

いちおう、能力値で言えば幸運は最高ランクなんだけど……ああ、だからそんなに酷い目に会った記憶が無いんだ。

とすると、相殺していた分を超えるかなんかしたのが、今回の並行世界移動な訳か。

世界の穴に巻き込まれるという厄に、並行世界に無事着いて、無事帰れそうであるという幸運。

我ながら、波乱万丈である。

僕は苦笑いし、そんな僕に回転を止めた鍵山さんがにこりと言う。

「私は厄神の鍵山 雛。その厄、私が引き受けて上げるわ」

「僕は十夜 詩音。厄払い、是非にお願いさせてもらうよ」

無事に帰れなかったり、事故が起きたりしたら困るから即答した。

鍵山さんは僕の答えに頷いて、僕へと手を向ける。

すると、僕の周りから薄らと靄が現れ始め、集まって暗雲のような厄が現れた。

「こ、これは予想以上ね……」

「お、お兄様、今までよく無事だったね……」

「僕の幸運値の高さのありがたみがよく分かったよ……」

そのあまりの量に、鍵山さんとフランが頬を引き攣らせる。

僕は暗雲を見て、アルトリアの幸運A+等のありがたみを身にしみて理解した。

しばし呆然としていたが、鍵山さんがどうにか落ち着きを取り戻す。

「ふう……これから浄化に大忙しみたいだから、私はここで失礼させてもらつわね」

そう言つと、再びくるくると回り始める鍵山さん。

その声に、僕とフランもどうにか意識を復帰させて鍵山さんに向き直る。

その時、回転速度が先ほどより遅いのが気になったが、すぐに予想が付いた。

回転が緩いのは、これ以上厄を集めるのは危険だからだろう。

それでも回転しているのは、周りの厄を周囲に留めるためかな？

と、脇に逸れた思考をしていると、鍵山さんが僕らから離れ始める。

「では、さようなら。十夜さん、フランドールさん息災で」

「つと、さようなら鍵山さん。厄払い、本当にありがとついでいきました！」

「じゃあねー厄神様ー！」

鍵山さんを、しばらく手を振って見送り続けた。

今回の事は、感謝しても感謝しきれない。

そう思っていると、突然にフランが背中へと乗っかってくる。

「お兄様、これからきつといい事起こるよ！」

「そうだといいな……いや、絶対そうなるね」

『いいな』では鍵山さんを信頼してないようだったから、言葉を翻して『そうなる』と断言した。

「ふふっ、よかったねお兄様！」

「うん、そうだねフラン」

願わくば、迫る時によってフランを悲しませないための『何か』を手に入れたいな。

背中の中にも、暖かな気持ちで思った。

## 第二十九章 似て非なる世界？

(後書き)

五か月ぶりの……というか、ほとんど六か月ぶりの更新ですいませんでした。

さっと終わるつもりだったえみマギが、予想以上に長くなってしまいそっちにかかりきりに……ホントは、一気に早く終わるつもりでしたけどね。

実際書き始めてしまうと、『適当に』『さっと』なんて言うのはできないものですね。

最初は思いついたネタを形にしようとしたただけなんだけどなあ……。

話は変わりますが、十章も続いた原作世界編もあと二章から四章で終わりそうです……多分。

この原作世界編もちよっとしたネタのつもりだったんですが、例によって例のごとく長々としてしまったし(こっちの方が先だが)。

実質、東方流魂記の半分を占めてるんですね……早く詩音を家族に会わせねば。

フランの今後も、決めてた結末を、今になってこれは無理があるだと駄目だして悩む羽目になつとるし……。

ただ、時間はかかっても完結させる気はあるので、それまでお付き合い頂けると嬉しいです。

では、また次話が別の作品でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1729o/>

---

東方流魂記

2011年10月1日22時09分発行